
とある科学の超電磁砲 ～今を戦うガタック～

霞 空斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の超電磁砲　　～今を戦うガタック～

【Nコード】

N1877Q

【作者名】

霞　空斗

【あらすじ】

学園都市の今を生きる青年の物語

同時期小説「時間を駆ける電王」と微妙にリンクしています

プロローグ

俺には兄みたいな人がいた

その人は尊敬できて

強くて

いつも俺の前を通ってた

俺はいつしかその人を超える事を目標をしていた

…だけどもある日その人はいなくなった

その日から俺は目標を失った

学生としてただ普通に生きて

友達とバカやって

それで満ち足りてた筈だった

変わらない日常

ジャケット
風紀委員としての日常

…俺は何の為に生まれたのだろう

守るべき人も、愛する人もいないのに

この学園都市は

今も変わらなく

時間^{とき}を紡いでいる…

1 電撃使いと戦いの神

学園都市

総勢約250万人が超能力を習う異例の街

そんな日常の中俺は風紀委員^{ジャッジメント}として治安維持を保とうと奮起している

「おっと…」

俺は目の前を走る男の足をかけ転ばす

「わっ…!?!」

そのまま倒れ込み立ち上がるつもりとするが俺はそれを許さない
男の後ろ頭を抑えつけ拘束する

4

「通報にあつた奴らの、一人だな？」

その辺りにあるパイプに手錠で拘束し他のヤツを捕らえる為再び行動する

「こちら鏡祢アラタ、黒子、そっちは？」

>こちらも一人捕らえました、残りは一カ所に集まっていますので、
初春の指示に従ってくださいなく

「りょーかいだ」

おっと。あそこの丁路地か

ちょうど黒子も奥から姿を現した

二人で同時に到着し黒子が腕章を見せて俺は身構える

「風紀委員ですの！通報を受けて参りました、どうぞおとなしくお縄に…」

着いた先には黒こげの暴漢数人がぐったりしていた

その傍らには常盤中の制服を来た女の子…

「…やれやれ。またか」

俺は嘆息した

女の子が「ん？」と声を上げこちらを向く

「あ、黒子にアラタ」

前髪に軽く雷を弾かせてその女の子、御坂美琴は素っ頓狂な声をあげた

「お姉様！！」

白井黒子はいつものように声をあげる

…やれやれ。今日二度めだな

………

「全く。何度申し上げたらわかってくれますの。学園都市の治安維持は、私たち風紀委員のお仕事ですよ。勝手に立ち回られては困りますわ」

御坂は無言で前を歩く

「聞いていますの？お姉様」

「…だからしょうがないでしょ？あんた達が来る前に終わっちゃうんだから」

「相変わらずだな…御坂。権限のない学生が暴れると、女将に睨まれるぜ？」

俺の言葉に御坂は

「だったらもつと早く駆けつけることね」

むちゃくちゃ言いおつたよこの子

「だいたい学園都市も名前負けなのよ。町中にセキュリティ張り巡らしてもあの手の連中は減らないし、最先端科学だなんだ唱つても」

御坂は自販機の前で立ち止まる

いかん

あれをやるつもりだ

「お姉…え」

「ちえいさー！」

気合と共に自販機の上段回し蹴りを繰り返す御坂

女の子でしかもスカート履いてるならやっちゃならない行為だが問

題ない

御坂は短パンを履いているからだ

「ほとんど私たちの生活には関係ないじゃん」

さも当然のように取り出し口から出てきたジュースを取り出してプルタブを開け飲みながらさっきの言葉を紡ぐ

「お姉様…。またスカートの下にそんな無粋なお召し物を…」

その言葉を聞いてむせる御坂

「どこ見とるんだお前は」

俺にとつてはもうこの光景は見慣れている

「あんたねえ…!?!」

黒子に言いかえそうとすると小さなサイレンみたいな音が近づいて来る

警備ロボだ

と思考していると黒子に手を引かれ御坂の口を抑え空間移動する
テレポート

その転移先は付近のビルの屋上

たまたまあつたからだろう

先ほどの自販機には警備ロボが何機かうろついている

「軽率な行動は、慎んだらどうだ？」

俺は手すりにもたれながらぶすつとした御坂に言う

「っと。そっいやお前ら、今日身体検査システムスキャンじゃなかったっけ」

俺の言葉に思い出したように黒子が言う

「あらいけない。急ぎませんと」

「あ、そっか。今日身体検査の日だっけ」

身体検査の為俺は一旦御坂と黒子に別れを告げる

終わったらまた連絡をくれるらしいからそれまでは暇ができた

…身体検査…か

無能力者（レベル0）の俺には関係ないな

コンビニに入り漫画を立ち読みする

ふと考える

…あいつは今何をしているだろう

天道総司

かつて俺が目標としていたあの男

今はどこで何をしているかはわからない…

ある日忽然と姿を消した

理由は不明

何もかもわからずじまいのまま忘れ去られた男

―おばあちゃんが言っていた…。世界は、自分を中心に回っている―

「そう思った方が楽しい、か…」
確かにそうだ

…いやそこまでデカくは考えられないが…

うん、せめて前向きに行こう

改めて考えると先代と同じ位あいつも自分に酔ってたのかも…

と思考していると携帯に連絡が入る

>いつものファミレスですのく

そんな簡単な文

けど理解するには十分な文

時計を見るとだいたいお昼前。

ちょうどいい時間帯だ

俺は漫画を元の場所に戻しコンビニを出た

途中目覚ましの電池が切れてる事を思い出し元来た道を一旦戻り乾電池を数本購入してダッシュで御坂たちの待つファミレスに急いだ

.....

「御坂のファン？」

ファミレスに入り俺は御坂と黒子を見つけると御坂が席をずらす御坂がずらしてくれた場所に座りアイスコーヒーを頼むと黒子がそんな事を言ってきた

「風紀委員の第177支部で私たちのバックアップを担当してくれる子ですの」

「初春か？」

俺がそんな事を聞くと頷き

「一度でいいからお会いしたいと事あることに」

そんな事を聞くと御坂がため息を漏らした

「お姉様が常日頃ファンの方達の無礼な振る舞いに併行しているのはご存知ですよ？けれど初春は分別をわきまえた大人しい子...」

「それに黒子が認めた数少ない友達だしな」

「そうですね。ここは黒子に免じて一つ。もちろん、お姉様のストレスを最小限に抑えるべく、今後の予定は私がバッチリ...あ」

黒子は喋りながら手帳（多分今後の予定表）を見ながら言葉を繋ぐ、が途中で御坂に手帳を奪われた

「ちょ、あ！」

俺は空気を読んで黒子の顔面を抑えつけた

ついでに御坂の持つ手帳の中身も見させてもらう

「なにになに…初春を口実にしたお姉様とお兄様とのツインデイトプランその1、ファミレスで親睦を深め、その2、ランジェリーショップ（勝負下着）購入、その3アロマオイルでショッピング（媚薬購入）、その4初春駆除、その5、お二方とホテルへゴー…」
なんで俺まで入ってんだ

てかこいつ…

「つまり、おとなしくて分別ある友人を口実にして、自分の変態願望を叶えようと…」
御坂が魂胆を見抜く
早い話そう言う事だった

「…いや、その…」
黒子が汗をダラダラと掻く

「読んでるだけで…」

御坂が立ち上がって黒子のほっぺを両側からつまみ

「すんげーストレス溜まるんだけどー!!」

みょーんと伸ばす

「いひゃいれすー…」

みょーんみょーん…ぱちんっ…

…餅みたいな弾力だなあ…

「でも…黒子の友達じゃあ、しょうがないか」
御坂は諦めたようだ

「まあそうだな。俺もそれなりに仲良いし」

「う…」

「ん？」

と御坂が怪訝な顔をする

「おー二方あ！！」

黒子が俺と御坂の間にジャンプしてくる

「お姉様とお兄様がそんなにも黒子の事を思っていてくださったなんてえ…！」

真ん中でじたばたする黒子

「ちょ、こら…！！」

「何時俺がお兄様になったんだ…ん？」

タイミング良く御坂と窓の外を見たら頭に花飾りをした女の子（初春）とその友達であるうロングの女の子が見ていた

…いや見られた

「あの一お客様？」

『はい…？』

御坂と二人で素っ頓狂な声をあげる

ちなみに黒子はまだ騒いでる

「他のお客様のご迷惑になりますので……」

俺達は店員に謝ってファミレスから出た

そして出たら御坂と一緒に黒子の頭をど突いてた

………

「とゆー訳で、とりあえずご紹介しますわ……」
頭を両手でさすりながら

「こちら、柵川中学一年、初春飾利さんですの……」
初春飾利を紹介する

俺は支部で何度も会っているからすっかり顔馴染みだ

「は、はじめまして。柵川中学一年の、初春飾利、です……」
顔を赤くしながら自己紹介をする

「それから……」
初春の隣のロングの女の子は俺も初めてだ

「どーもー。初春のクラスメイトの佐天涙子です。なんだかよくわからないけどついてきちゃいましたー。因みに能力値はレベル0ですっ」

「ちょ、初春さん、何をっ」

佐天さんが軽い自虐をしたので少し慌ててる

「初春さんに、佐天さん…」

そんな二人を尻目に御坂は名前を確認する

「うん。私は御坂美琴、よろしく」

そう言って二人向けて軽く笑う

「俺は鏡祢アラタ。初春は知ってるけど、佐天さんははじめましてだ。よろしくな」

俺も御坂に倣って笑う

そんな二人に呆気にとられたのか佐天さんと初春は

「…よろしく…」

「お願いします」

と軽く挨拶した

「では恙無く紹介も済んだところで…多少予定とは狂いましたが、今日の予定はこの黒子がバッチリと——！」

本日二回目の黒子と突きだった

頭を抑えてうずくまる黒子を尻目に

「ま、こんなところいても仕方ないし。とりあえず…」

うーん考える

そんなに御坂に俺は

「ゲーセン行こうぜ。皆でワイワイと言ったらそこだろう」と提案してみる

御坂は頷いて

「そうね、定番だし。…そんな訳で、ゲーセン行こっか？」

佐天さんと初春に言う

「え…？」

初春はびつくりした様子でそんな事を呟き

「ゲーセン…ですか？」

佐天さんも戸惑っていた

そんな二人を気にせず御坂はカバンを持ち直す

「ほら。黒子行くよ」

そして戸惑ってる二人を見て軽く微笑んでみせた

……………

ゲーセンに向かう途中

「アラタ、私と勝負しない？格闘ゲームで」

と御坂がそんな事を言ってきた

「ふ…いいのか？泣きを見ることになるぜ？」
と俺は返す

御坂はニヤリと笑い

「言ってくれるじゃない…。よし！負けた方は皆になんか奢る事！
！」

御坂がそんな事提案してきた！

く、負ければ今月が…！！

だがあんなこと言った手前後には引けん！！

「いいだろう！！その勝負受けて立あつ！」

「そう言つと思つてたわ…！！」

ヒートアップしてる二人を佐天さんと初春は目をパチパチさせながら、黒子は「まだですよ…」と溜め息をつきながら二人について行った

一時間後

…ふつつーに負けました

「…ふ。ちよつと危なかつたけど。口ほどにもなかつたわね」

「ちよつと危なかつたつて言つてんじゃない！くっそー…さらば今月の金え…」

なんてぶつくさ言っていると

「全くお姉様もお兄様もゲームとか立ち読みではなく。もっとこうお花とかお琴とか、書道とか生け花などもっとご自身ふさわしいにご趣味をお持ちになれませんか？」

なんて黒子が言ってきた

「うっさいわね…だいたいお茶やお琴なんてどこが私らしいのよ」

歩いてるとどこかの店の店員さんがチラシを配ってた

俺は受け取りながら黒子に返す

「お前の中の俺は書道とか生け花に吟じてるのかよ…」

そんな俺なんて想像したくない

御坂もチラシをもらったらしく紙を見る

ふと後ろの二人を見てみる

「なんか…全然お嬢様って感じじゃなくない…?」

佐天さんがそんな感想を漏らす

「上から目線でもないですね…」

至極まともな感想だ

実際俺もそう感じたしね

「結構フレンドリーだろう?あいつは」

「あ、鏡祢さん…」

俺の言葉に初春が気づいて声を出す

「改めまして、初春の同期の、鏡祢アラタだ。よろしく頼むぜ」

俺はそう言っただけで微笑む

「あ、こちらこそ……。よろしくお願いします……」

佐天さんが恐縮気味にお辞儀する

「止めてくれよ。堅苦しいのは苦手なんだ。……いやー……俺も無能力者（レベル0）だから、佐天さんには親近感湧くね」

「え？鏡弥さんって、無能力者（レベル0）なんですか！？」

佐天さんが驚きの声をあげる

「……そんな驚くかな……？」

因みに俺は一人、男の無能力者を知っている

あいつは特例だけだな

いい奴だし

「だ、だって、風紀委員やってるからてっきり異能持ちかなって……」

「けど俺は0さ。レベルにこだわるのなんかアホらしいし、俺は日々友達と遊ぶ毎日が楽しいのさ……」

そう言いながら屈託ない笑みを浮かべる

本心の笑顔だ

「鏡弥さんも、私と似た考えですね……」

佐天さんが呟く

「そうかい？後鏡祢さんなんてのも止めてくれ。アラタでいいよ」
「え、けど…鏡祢さん、初春から聞いたところ…高校生ですよね？」

「うん」

・・・

「アラタさんでいいですか…っ？」
佐天さん最大の譲歩のようだった

「問題ないさ。俺も佐天って呼ぶから」

なんて言いながら歩いてるとどん、と御坂にぶつかった

「と…。悪い御坂…。御坂？」

御坂は先ほどもらったチラシを食い入るように見ている

どうやら新しいクレープ屋が出来たようだからその宣伝みたいだ

先着１００名にゲコ太マスコットプレゼント…

…はっはぁん…

俺がにやっとなると黒子が先に喋る

「あらぁ…クレープ屋さんにご興味が？それとも…」

「もれなく貰えるプレゼントの方か？」

「な！」

真っ赤になりながらそれを否定する

「な、何言ってるのよ！私は別に興味なんて…だってカエルよ？両生類よ！？どこの世界にこんな貰って喜ぶ女の子が…」

とその時にぶらぶらとカバンに付けてあるゲコ太ストラップがゆらゆらしてた

「あ…」

初春と佐天は同時に呟く

…御坂、じばく

御坂はしまったと思うが時既に遅し

俺は黒子と二人笑いを堪える事に専念した

……………

思った以上にクレープ屋は繁盛してた

いや、ちっちゃい子達がわんさかといただけれど

「うわー…すごい人…」

「なんでこんなにちっちゃい子が…」

佐天と初春がそれぞれ率直な意見を述べる

するとそれを裏付けるように

「休憩は、一時間ですー！あまり遠くに行かないでくださいねー！」
ガイドさんとおぼしき女性が注意してた

多分新しく入る子供らに学園都市を説明してたのだろう

「タイミングが悪かったみたいですわねー」
初春が子供達をみながら笑顔まじりで呟く

「先にベンチを確保して参りますわ」

お。黒子が気の利いた事をつ

「あ、じゃあ私も」
初春がついていく

「じゃあ二人の分は俺が買つといてやるよ」

「ありがとうございますー」
と初春の声が後ろから聞こえた

因みに順番は俺、御坂、佐天の順だ

…なんでかな

背後に苛々したものが沸々と…

ちらつと御坂の方を見る

…やっべ。結構イラついてますヨ

その後ろの佐天も軽く汗かいとるし

「…え？なに？」

相手が俺だからかなのかわからないが平静を装いつつも苛々はあまり隠せてない様子だった

「…いや。その…順番変わるうか？」

俺がそう言つと御坂はキラツと笑みを見せたがすぐ表情を戻し

「べ、別に順番なんて…！私は、クレープさえ買えればそれでいいのよ、別にゲコ太なんて…」

とかなんとか言ってるけどちっちゃい子がゲコ太入手するたびにすごい目で追うやんかあなた

俺は御坂の後ろにいる佐天と誰にでもなく溜め息をついた

………

ようやく俺が買う番だ

初春と黒子に何がいいか聞いてそれを注文する

俺はシンプルチョコクリーム系なヤツを頼んだ

シンプルイズベストってヤツですよ

とかなんとか考えてるとクレープが来た

ゲコ太ストラップと共に

「お待たせしました。はい、どうぞ」

クレープを受け取りお金を払う

店員さんはゲコ太ストラップを差し出し

「最後の一個ですよ」

と言ってきた

「ありがとうござ…え？最後？」

俺がそう呟くと御坂ががくつと膝をついてた

…いかん、結構ショックだったみたいだ

うなだれてる御坂に俺は声をかける

「あ、あ…。ほら、俺のやるから、な？」

ゲコ太ストラップを持ってく

「え！？いいの！？ホントにいいの！？後で返せって言っても返さないわよ！？」

「ああ…。あげるあげる」

「ありがとおゝ…!!」

御坂が両手で俺のゲコ太ストラップを持ってた手を包み込んだ

…やれやれ。手間暇かける女の子だなホント…

ストラップ貰ってすっかりご機嫌になった御坂と共にベンチを確保してた初春と黒子のところに戻る

俺は初春と黒子に頼まれたクレープを渡しベンチの後ろ側に回り込む

そして自分のクレープをかじる

…甘い（クレープだから当然）

ベンチには初春と佐天が座っている

御坂と黒子はベンチの前で追い掛けっこ

一方的に御坂が追い掛けられてるだけだが

「お姉様あ、遠慮なさらずにいつ」

「嫌よ！？何をトッピングに納豆と生クリームなんて…!!」

逃げる御坂に追う黒子

飽きないな、ホント

「けど、良かったですね」

初春がそんな光景を見ながら呟いた

「え…？」

佐天が初春に聞き返す

「お嬢様ってイメージとはちょっと違ったけど…思ってたよりずっと親しみやすい人で」

「俺も初めて会った時は少しびっくりしたよ。開口一番ゲーセン行こっか、だからな…」

「あれは…少し驚いちゃいましたねえ…」

佐天が苦笑する

そんな会話をしながら三人で二人を見てると御坂と目があった

すると顔を抑えてた行為を中断しこっちに駆け寄ってくる

「はい」

俺の前に御坂のクレープが差し出される

「…は？」

意味がわからずそんな事を返す俺

「味見でしょ？さっきのお礼。一口あげる」
そう言っって軽く微笑む

「お姉様あ！」

黒子も駆けてきた

「お兄様も混ぜるなら是非この黒子に一声かけていただければ…！」

「あんたの友達にはついていけそうにないかも…」
頬に汗を浮かべながら初春に言う

「あはは…。？」

ふと初春は公園後方にある銀行に目をやる

「どつたの、初春」

怪訝に思った俺はそう聞く

「いえ…あそこの銀行なんですけど…。なんで昼間から防犯シャッター下ろしてるんでしょうか…」

ふと俺も目をやる

確かに他の店が開いてるのにその銀行だけシャッターが下ろしてある

「臨時休業とかかな？」

佐天の最もな意見が耳に入ってくる

…おかしい

俺だって偶にあの銀行には行く

最近だつて一回行つたけど臨時休業なんて情報は…

そう思考していると

シャッターがメキメキと音を立て最後には爆発する

銀行強盗！

「な、何！？」

佐天が耳を押さえながら驚きの声をあげる

「初春、警察に連絡を」
アンチスキル

俺はポケットに入れてある風紀委員の腕章を取り出す

「後怪我人がいないかも確かめておいてくれ。なるべく早く！」

「は、はい！！」

黒子も腕章をつけて隣にやってくる

「黒子！アラタ！」

御坂が叫ぶ

「いけませんわ！お姉様！」

「学園都市の治安維持は俺ら風紀委員の仕事だ」

「ですから、今度こそ、お行儀よくしてくださいな」

御坂に二人して笑いかける

御坂はそんな二人を苦笑して送り出した

.....

銀行から数人の男達が足早に出てくる

「ほら、急げ！！さっさとしねえと……！！」

「お待ちなさいな！」

「！！」

数人の男達が一斉にこちらを向く

ざっと見て6、7人くらいだろうな

「風紀委員ですの！器物破損、及び強盗の現行犯で、拘束します！」
黒子が罪状を声に出して告げる

男達は顔を見合わせる

「？」

こつちも黒子と顔を見合わせる

とその次には男達が大爆笑していた

「なんだこのガキ共！！」

「風紀委員も人手不足かぁ！ひゃっははは……！！」

黒子がむっとした様子でゆっくりと歩き出す

「おらお嬢ちゃん！とつとどつか行かねえと怪我しちゃうぜえ！」

一人の男が前に出て黒子を掴みにかかる

しかし黒子はそれをあつさりとしかも難なく回避して

「そう言う三下のセリフは——」

言うや否や掴みにかかった腕の袖を掴み相手の爪先あたりを踏みつける

遠心力で相手は背中から打ちつけられる

「死亡フラグですわよ？」

相手の男はそれだけで気絶したようだ

「、てめえ……！！！」

そんな様子を見てた佐天は

「すごい……」

と呟く

「もう一人もすごいわよ」

腕組みしながらそんな事を言う

「やっちまえ！！相手は二人だ！数はこっちが勝ってんだ！！」

残りの男らが一斉ににやってくる

「こいつ等は任せな」

「わかりましたわ」

黒子は頷く

俺は一気に接近する

一人一撃

何かしらの力を持つてる筈だから一撃でノックアウトさせなくては

数は3人

残りは銀行付近から動いていない

…問題ない、いける…！！

最初に突出してきた男が俺の顔面を殴ろうとする

しかし直線的な動きだから避けるのは容易

その腕をいなして俺は相手の溝に思い切り膝を叩き込む

その一撃でまず一人

次は気配を消したつもりで俺の後ろにいた奴を思い切り殴りつける

そして二人

最後には…おっとナイフなんて持ってたか

間一髪ナイフの突きを避け手首を手刀で打ちナイフを落とす

手首の痛みに喚く男を俺は

「ラリアットおっ!!」

顔面にラリアットをかました

バタリと気を失う男

これで残りは後二人

………

二人の戦いを見ていた佐天と御坂

御坂は

「流石二人ね…」

と軽く笑いながら見守っている

「す…すごい…」

もう佐天はそれしか言えなかった

図らずも鏡祢の動きに少し見惚れていたのだ

佐天は首を横に振りその考えを飛ばす

…ちょっと自分が恥ずかしいと思ってしまった

そんな時間聞き覚えのある声がした

「ダメですって、今広場から出たら…!!」

「でも…!!」

初春とバスガイドさんが口論をしていた

御坂が「どうしたの？」と聞きながら佐天と共に近づいてくる

「それが…!!」

「男の子が、一人足りないんです!!」

「え!？」

御坂が驚きの声をあげる

「少し前にバスの中に忘れ物したって行っただけ…!!」

御坂は一瞬考え

「じゃあ、私と初春さんで——」

「私も行きます!!」

御坂は佐天の表情を見る

真っ直ぐな真剣な眼差しだった

御坂は頷き

「それじゃ、手分けして探しましょう!!」
御坂の言葉に佐天が「はい!!」と頷いた

.....

残された二人の男の一人は掌から炎を迸らせる

「今更後悔しても遅えぞ」

「パイロキネシスト発火能力者、か」
俺が呟くと

「ここは黒子にお任せくださって」

と言うと道路の方に走っていく

「な!!くそ...逃がすかよっ!!」
男は掌から炎を打ち出す

「誰が——」

炎の方には直前まで居た黒子が消える

「消えた!?!」

「逃げますの?」

もう黒子は男の目の前だった

再び消える黒子

俺はタイミングを計り男の足を払う

「のわ!？」

前のめりで倒れる男の前に現れる黒子

黒子は太もみに仕込んである鉄針を取り出し男の裾、袖などの至る所に縫い付ける

「て、瞬間移動能力者!？」
テレポーター

「これ以上抵抗するなら、鉄針これを、体内に直接瞬間移動させますわよ?」
テレポート

恐ろしいことを真顔で言う黒子

…貴方はホントドSですネ

………

「そっちは!？」

御坂が叫ぶ

「ダメですー!」

初春が返す

皆でバスを隈無く探してはいるのだが一向に見つからない

「どこ行ったのよーもう…!!」

御坂が苛立ちながら呟く

佐天も同じように探してはいるが見つからない

「んあ！？何だお前！」

ふと声がした

佐天が声がした方を振り向く

「丁度いい、一緒に来い!!」

犯人グループの一人だ

近くには目当ての子供が居た

「え、何お兄ちゃんだれ…?」

「いいから来いって…!!」

佐天は戸惑った

これを伝えるべきか否か

「早く!!」

男が強引に子供の手を引っ張る

(…私だって…!!)

不甲斐ない自分に慄を入れ佐天は子供を助けるべく走り出した

.....

「やっぱり、広場をもう一回——」

「ああ！？なんだてめえ！！離せよ！！」

男の声がした

子供を探してた御坂達も縫い付けた男を監視してた俺と黒子も声の方に振り向く

「ダメええ！！」

一向に離す気配が無い佐天に苛立ち遂に男は佐天の頬に蹴りを打ち込んだ

がす、と鈍い音が響く

「っ——！！」

友達が蹴られた

彼女がキレる理由には十分だった

.....

「佐天さん！！」

初春が叫ぶ

「っ！！」

「なるお！！」

「黒子お！！」

構える二人を止ませたのは他でもない御坂の怒鳴り声

「…え？」

黒子が御坂の方を向く

「ここからは私の個人的なケンカだから。悪いけど、手、出させてもらうわよ」

「…あっちゃー…」

俺は頭を掻く

「思い出した！！風紀委員には捕まったが最後。身も心も踏みにじられ再起不能にする、最悪の瞬間移動能力者がいて！！」縫い付けられた男が思い出したように喋りだす

「誰の事ですか？」

多分お前だろう

俺は心の中でツッコミを入れる

男は車に乗り込んでエンジンを蒸かす

御坂を車でひき殺すつもりだろうか

「さらにはその瞬間移動能力者の身も心も虜にする、最強の電撃使い（エレクトロマスター）が……！！」

御坂はスカートのポケットから一枚の硬貨を取り出した

ゲーセンでよく使うメダルだ

車のアクセルを切る音がする

御坂はゆっくりとメダルを構える

「……そう。あの方こそが、学園都市230万人の頂点」
俺がその説明に付け加える

「七人の超度5（レベルファイブ）の第三位」

御坂が親指でメダルを中空に弾く

落ちて来たメダルを電磁波で固定し

音速の三倍で撃ち出す

車の中の男はびっくりしただろう

簡単に言えばたった今ひき殺すつもりだった女の子がレーザーを撃ってきたようなものだ

「超電^{レールガン}磁砲。御坂美琴お姉様」

車は空中を縦回転しながら吹っ飛んでくる

「常盤台中学が誇る、最強無敵の電撃姫ですの!」

.....

しかしまだ危機は去ってはいなかった

「う...ぐああああ!!」

叫び声をあげた方向を見る

そこには捉えた一人の男がワームのサナギ体になっていたのだ

「な、何ですかあれ!？」

初春が驚きの声をあげた

周りはパニックになるばかりだ

犯人グループだってびっくりして逃げ惑う

その犯人グループを黒子は頭からテレポートさせ気絶させた

そんな事をしてる間にサナギ体は羽化し成虫のワームになってしまった

「今度はあんたが、出番みたいね」
御坂が俺を見て言ってきた

「…そのようだ」

軽く御坂に笑いながら俺はワームの前に立つ

「アラタさん！！危ないですよ！！」

「大丈夫ですわ」

黒子が佐天の肩を叩く

「え…！？」

……………

俺は天に手を翳す

どこからともなくクワガタの形をした機械が飛んできて俺の手に収まる

隠してあるベルトにそいつをセットする

「変身」

> H E N S H I N <

俺の体を青い鎧が包み込む

そこにはもう鏡祢アラタの姿は無く

アラタのもう一つの姿

仮面ライダーガタックがそこにいた

.....

「ええ…あれ…!？」

「どうなってるんですか…!？」

初春と佐天が当然の驚きを示す

そんな二人を尻目に黒子は説明をする

「あれが、お兄様のもう一つの姿…。マスクドガタックですわ!!」

「マスクド…?」

「ガタック…?」

「簡単に言えば、ワーム退治の専門家…戦いの神、それがお兄様ですわ!!」

.....

「怪我したくない奴は伏せろ!」

クワガタの角を開く

ガタックを纏う鎧が外れかかる

「キャストオフ」

>CastOff<

>Change Stag Beetle<

「悪いけど、一気に決めるぜ！」

肩のガタツクカリバーを両手に持つ

二刀流の斬撃でワーム成虫体を追い詰める

ワーム成虫体は^{クロックアップ}高速移動の体制を取る

「高速移動は使わせない！！」

プラスカリバー、マイナスカリバーを連結させワームを挟み込む

「ライダーカッティング！！」

>Rider Cutting<

そのままワームを挟み上げ

「はああああ……！！」

ギリギリと挟みを強くする

「だあああああ！！」

ガチン！！とハサミの要領でカリバーを閉じ、ワームを切断する

そのままワームは爆発し消滅した

初春と佐天は今日だけで凄まじいものを見た

一つは御坂美琴の超電磁砲

二つ目は鏡祢アラタもう一つの姿

「す…」

「すごい…」

それ以外の言葉が出なかった

……………

時間はもう夕方

初春が先輩の国法さんに状況を報告をしている

「さ、さっさと歩いてくださあい…」

メガネを掛けた警察の女性が早く乗るよう促す

… あんま怖くない

乗っていくグループの最後の男は、黒子が捕まえた発火能力者だった

「貴方の能力も中々のものでしたわよ」

男がこちらを向く

「超度3、といったところかしら。能力に有頂天になるあまり、道を離れたようですね…」

「しばらく自分を見つめ直して。もう一度出直してくださいな」

黒子は男にそんな事を告げると御坂達の方に歩いていった

.....

「本当に、ありがとうございました!!」

「あ...いや...」

佐天が軽く苦笑する

佐天がバスガイドさんとその少年の母親に感謝されていた

「本当に、なんとお礼を言っているか...。ほら、あなたも」

母親にしがみついていた子供が佐天の方に顔を向けて笑顔でお礼を述べる

「お姉ちゃん、ありがとう!!」

佐天は心が少し暖まるのを感じながら子供に笑顔で返した

.....

ぺたり、と座り込む

「...ふう...」

溜め息をつくと前から誰か来たようだ

御坂美琴と鏡祢アラタだ

「お手柄だったね。佐天さん」

「…え？」

「…とてもかつこよかったぜ？」

二人して微笑む

佐天は頬を赤く染め俯いた

「…御坂さんとアラタさんも…」
言おうとした直後

「おつふたつがたあー！」

御坂とアラタの間にジャンプして抱きついてくる

器用だなおい…

「こら、黒子…！！」

「抱きつくな、ったく…！！」

そんな三人を眺めると

「佐天さあんっ！！」

初春が心配した様子で走って来た

「お怪我、大丈夫ですか！？」

「平気平気」

佐天は笑顔でそれに応える

「本当ですかあ…！？」

それでも心配なようだった

「やめなさいって黒子…！！」

「やっぱりお姉様とお兄様は素晴らしいですわっ…」
とかなんとか言ってる黒子

「いい加減にしろお！！」

電撃を黒子に流した

「ああんっ！！」

御坂さんもアラタさんも…

スッゴく、かつこよかったです

2 狙われた常盤台（前書き）

今回ガタツクにはなりますが全く戦いません

あしからず…

2 狙われた常盤台

とある城

中庭に腰を落ち着けた俺は侍女にもらった茶を受け取りテーブルに置く

茶を口につけると唐突にアイツを思い出す

最近忘れてはいたがどうしているだろうか

「ここにいたのか？天道」

背後から聞き慣れた声がする

冥琳だ

「珍しいな。お前が物思いに耽るなんて」

「俺にだって偶にあるさ。物思いに耽ることぐらい」
そう言つて茶をまた一口飲む

「…友人の事を思い出していた」

「友人？天の世界のか？」

俺は頷き言葉を続ける

「世話のかかる奴でな。弟みたいな奴だ」

「弟？」

「言いかえると、お前と雪蓮みたいな感じだ。まあお前らみたいに、仲は良くないが」

そう言つて軽く笑う

「ほう。会つてみたいな。その男に」

「いつか会わせてやるさ。ハイパーゼクターの調整がすんだらな」

お前は今何をしている？

鏡祢アラタ

.....

「いづくし！」

豪快にくしゃみをする

「あら、お兄様風邪ですの？」

黒子がそんなことを聞いてくる

「風邪なんてことはないと思うけど……」

「しっかりしてくださいませ、今日は初春と佐天さんが遊びに来るのですから」

「そうだったな……。待ち合わせ場所は決まってるのか？」

「常盤台中学です。わかりやすいでしょう？この方が」

確かに。

至極わかりやすいな

「わかった。御坂はどうした？先に行ってるのか？」

俺がそう聞くと

「ええ。それで、私はお姉様に断りを入れて、お兄様を迎えに来たんです」

…瞬間移動能力者って便利ですよネ
テレポーター

「まあいいや。行こうぜさっさと」

黒子に促すと黒子は笑顔で

「はい、お兄様っ」

だからいつお兄様になったんだ…

いや聞くのも面倒だし考えるのもやめよう
今を生きてる

それでいい…

………

「遅い」

常盤台中学に通う女子中学生

御坂美琴はイラっとしている

「まったく…瞬間移動なのに何分掛かってんのよ…」

と御坂が不満を口に出していると

「お待たせしましたー。お姉様っ」

イライラの元がアラタを連れて現れる

「黒子、遅いじゃない…てかアラタ、あんたもしかして寝てた訳じゃないでしょうね？」

御坂が聞くとアラタは

「いやー爆睡っさー」

全く反省の素振りを見せず「はははっ」と笑った

「はあ…。まあいいや、わかりきってたし」

御坂は溜め息を付く

だけど内心安心していた

アラタが早起きなんてしたら槍が降って来るに違いない

「すいませんお姉様…。お兄様の寝顔を見ていたら…ついうつとりしてしまいました…！」

やっぱり遅れた原因はこいつか

「てかてめえ、俺が寝てるとわかってら起こせよ！何見てんだよ！？」

黒子の頭をぐりぐりするアラタ

「あゝあゝいゝだいですのゝゝ…」
声を震わせてる

「ところで、俺がここまで来るの結構時間かったけど、あの二人は？」

ぐりぐりした手を離し黒子を解放する

「はにゅん…」

くた、と膝を付き頭を抑える

「そうね…。私もちよつと心配して…」
と言っていると靴音がした

「お。来たみたいだな…。てあれ？」

確かに初春と佐天は来た

佐天がずぶ濡れで

「…なんなんですよ…？」

黒子が聞くと初春が

「い、いえ…」

苦笑で応え佐天も

「水溜まりで、ちよつと…」

苦笑…

水溜まりで足を滑らして転んでしまったらしい…

………

…この状況下に置いて男性一人はキツイのではなからうか

常盤台中学のシャワールームにて佐天さん着替え中

「急に着替えをと言われても、それぐらいしか用意出来ませんでしたわ」

黒子が用意した着替えとは常盤台の制服だ

どうでもいいけど初春がむすつとしてるのは気のせいかな

「いえ。十分です」

着替えを終えた佐天がシャワールームから出てくる

「サイズはどう？」

御坂が聞くと

「ちょうどいいんですけど…。スカートが短くて、スースーします…」

軽く照れながらもじもじする佐天

まあ柵川中のスカートは長めだからな
対して常盤台のは結構短めだ

けど…

「似合ってるじゃん。佐天」

俺はとりあえず惜しめない世辞をあげた

「そ、そうですね？…へへ」

頭を掻きながらはにかむ佐天

「佐天さんだけです」

初春さん黒い一言

「…は？」

佐天が意味解らず初春に聞き返す

「そっだ！私の制服と交換しましょうっ！っ！それがいいっ！っ！」

と言っや否や佐天に抱きついて胸元に頬ずりする

「ち、小さすぎて無理だっばっ！っ！」

「じゃあ、私も水溜まりでっ！っ！」

「やめなさいってっ！っ！」

ぎゃーぎゃーと騒ぎ出す初春

それを必死に宥める佐天

そんな光景を見ながら俺たちは顔を見合わせて苦笑を浮かべた

………

「汚れた制服はクリーニングに出しておいたから、帰りに寄ってね」
歩きながら軽く佐天の方を向き言っ

「面倒だったら貴女方の寮に届けさせますの」
そんなことが出来るのか

黒子がそんなことを言うと

「うわー…さっすが常盤台」

佐天がそう言うのと再び初春が

「メイドさんですか！？やっぱりメイドさんがやってくれるんですか！？」

「落ち着けっ！！」

佐天さん再び怒鳴る

—ふと視線を感じた

「…ん？」

立ち止まって振り向く

誰もいない

「アラター？どうしたのー？」

御坂が俺を呼ぶ

「あ、悪い…」

俺は軽く謝り御坂達に向かって走り出した

………

とりあえずケーキショップに入店

ショーケースに入れられたケーキを見て悩む初春

「うーん… 苺のクロスタータってやつか、モンテビアンコってやつも美味しそう…。は！！このチョコラータってのも捨てがたい…」

悩んでいます

…だが何となくわかるぞ初春

レンタルビデオショップとか行くと何借りるかで迷うのと同じだよ
きつと

「そんなに悩むような事ですの?」

「選り取り見取りだからな。仕方ないさ」
軽く初春をフォローする

「ま、まあ… 私はチーズケーキって決めてましたから…」

佐天は事前に決めていたらしい

「早くしないと、日が暮れちゃうよ?」

御坂が初春を茶化す

「うあ…！ちょ、ちょっと待ってくださいいー…」
とそんなところで

ピリリと初春の携帯がなる

「わわ…！」

携帯を取り出して電話にでる

「はい…。はい…？えっ…？」

「む…？」

初春の会話内容が少し気になった

「はい。わかりました」

ぴ、と電話を終える

「呼び出しですの？」

黒子が初春に俺も思ってた疑問を投げかける

「はい…」

残念そうに応えた

「マジかよ…タイミング悪いなあ…」
頭を掻く

「はあ…」

初春がショーケースに並べられたケーキを見て溜め息を吐く

「初春さんの分、テイクアウトしておくね」
御坂の優しい言葉

「ありがとうございます…」

初春は御坂に感謝を述べる

「よし、行くぞ二人共」

俺は二人に言つてケーキショップを出す

「了解ですわっ」

「はいっ」

二人共返事して追いかけてくる

さて。仕事するか

.....

三人が慌ただしくドアを出た

「慌ただしいわねえ...」

そんな言葉を何時の間にか口にしていた

ま、いつか

「じゃあ私たちは...」

と私は佐天さんに向き直った

「あ、あの...」

「？」

「わ...私、ちょっとお手洗いに...」

.....

一七七支部

「ったく…。せっかくの休みなのに…」

「ホントですわね…」

俺がボヤくと黒子が同意する

初春は後ろで苦笑を浮かべてる

とりあえず扉の取っ手に手をかけて扉を開ける

といきなり

ぽか、とはたかれた

「あいたっ」

「あたっ」

「いたっ…」

律儀に三人はたかれた

「到着早々ボヤかないの」
注意された…

「すいません、この国法先輩…」
初春が謝罪する

ここであるーくご紹介しよう

この人は国法 美偉

俺たちの上司に当たる人物だ

「で、呼び出した理由はなんですか？」

黒子が要件を聞く

「そうそう。今回はどんな仕事だ、国法」

初春や黒子は先輩とつけるが、俺は歳が近いので呼び捨てで呼んでいる

「ええ。昨日の放課後から夜にかけて、常盤台の生徒ばかりが六人連続して襲われる事件があったの」

俺と黒子、初春は顔を見合わせる

「しかも…」

国法は言葉を続ける

「全て学舎の園の中で」

…一瞬の沈黙

「本当か、国法」

俺は真面目なトーンで聞き返す

国法は頷いて言葉を続ける

「常盤台中学には、超度3以上の能力者しかない…。それを狙い、
いとも簡単に倒していることから…」

「相当の能力者ってことですよ…？」
黒子が言葉を遮る

「可能性は高いわね。ただ、能力は不明、被害者は全員、スタンガ
ンで昏倒させられてるの…」その言葉に背筋に戦慄が疾る

「それで…意識を失った被害者は…」
恐る恐ると言った感じで初春が聞く

「写真があるけど——」
国法はパソコンを操作して写真を表示しているのだろう

パソコンの画面はこちらに向いてないから内容は今はわからない

ちらりと国法は三人に目を向けて

「——ヒドいよ」

その一言が更に俺たちを戦慄を走らせる

「見るんだったら、覚悟しなさい」
国法が眼鏡の奥の瞳を鋭くする

………

お手洗いにいった佐天さんを待っていること数十分

「紅茶冷めちゃうよ…」

さすがに遅いと思った私は佐天さんの様子を伺いにお手洗いに向かうことにした

………

「風紀委員に志願した以上、覚悟は出来ています」
黒子は決意し

「私もです」

初春も同じように告げる

「アラタ。貴方は？」

国法が俺に問いかける

「…愚問だな。今更何を聞く国法」
俺はそう言った

「そう。…だったら」

国法がパソコンの画面をこちらに向ける

『っ！！』

三人は息を呑んだ

その画面に映されたのは——想像を絶する物だったから…

………

がちやりと扉を開ける

「佐天さん？」

左側を見る

いない

扉を更に開き今度は右側を――

「っ！！佐天さん！？」

水道水を出しっぱなしで気絶している佐天がいた

「ち、ちよつと！！」

御坂は駆け寄って佐天を揺する

御坂は偶然佐天の表情を見てそして、驚愕した

「―っ！！」

……………

「常盤台狩りい？」

俺が軽く説明したら御坂がそんな声をあげた

その後

「…そつか…。ウチの制服を着てた所為で…」

少し罪悪感を感じたのか申し訳なさそうに呟いた

俺たちは風紀委員室に集合した

またその時に偶然常盤台の制服を着ていた佐天が襲われたとも聞いた

…何もかもタイミング悪い…

「具合はどうなんですか？」

初春が御坂に聞く

「体の方は大した事無くて、しばらく横になればって大丈夫だろう
って…」

それを聞いて少し安心した

「ただ…」

御坂が呟く

…そうか。やはり佐天にまで…

「…犯人の目星は付いてるの？」

御坂が重要なことを聞いてくる

「まだだ。…ちつとばかり厄介な能力者でな…」

「…厄介？」

御坂が聞き返す

「姿が見えないんですの…」
御坂の言葉に黒子が返す

「…ええ？」

………

>ほんつとうですわ！！私^{わたくし}、何にも見てないんですの！！<

>で、ですけど…。監視カメラの映像ですと…<

>それでも！！本当に見てないんですのお！！<

——ブチンっ

映像の途中で黒子が消した

たまたま婚后光子が映像に出てたからだろうか

「あ…」

初春が声を漏らした

「被害者には見えない犯人、ねえ…」

御坂が手を頬に当てながら呟く

「始めは、光学操作系の能力者を疑ったのですが…」

「姿を完全に消せる能力者は、学園都市に47人います」

初春がパソコンを操作しながら言う

「その全員にアリバイがあるんだよ…」

俺は頭を抱えながら呟いた

「それ以前に監視カメラの映像には移ってるんでしょう？光学操作系ってというのは違うんじゃない？」

そう

仮に犯人が光学操作系の能力者ならば監視カメラには移らない

だけどその能力者47人には全員アリバイがある

それが調査が難航してる理由だった

むうと言いながら何気なく窓を見る

「あ、鳩」

不意に初春が呟いた

「え？」

黒子が聞き返す

「白井さん、見なかったんですか？」

「そんなもの気づきませんでしたわ」

何気ない会話

けど何か引っかかる会話

気づかない…

「気づかない…？」

御坂が同じ考えに至ったようだ

「初春さん、ちょっと、調べて欲しいものがあるんだけど…」

「え？はい…なんですか？」

………

「あ。ありました」

そのファイルを開く

初春は読み上げる

「能力名は視覚^{タミーチエック}障害、対象物を見ているという認識そのものを阻害する能力です」

「該当者は一名。関所中学校二年、重福省帆」

「そいつですわー!!」

黒子が画面を食い入るように見て叫ぶ

「でも、この人超度2です…。自分の存在を完全に消せるほどの力ではない、と実験データにあります」

その情報に再び落胆する

「…良い線行つてると思ってたんだがなあ…」
残念そうに俺が呟く

その時だった

「ん…」

その声に画面を見ていた三人はソファで寝ていた佐天を見る

どうやら起きたのだ

起きた拍子に目に当ててあったタオルが落ちる

「…わ、たし…」

額を抑えながらこちらに顔を向ける

「佐天さん！」

「まだ無理しない方、が…」

言葉が止まる

瞬間笑いを堪えるのに必死になる三人

…いや、だって…くく…

「へ…？」

佐天の当然の反応

………

「あああああああああああああああつ！…！！！」

初春から借りた鏡で自分の顔を確認する佐天

そりゃあまあショックだったろう

自分の眉毛がフェルトペンでなんかもう…イメージするなら両津。
吉みたいになってたら

「佐天さん、気を確かに…。…ぷ、くす…」
初春、慰めにならないからっ

「シヨックだよね…そりゃあ」
御坂が佐天を慰める

「せめて、この位前髪があつたら隠せましたのにね…」
黒子がパソコンに移った重福省帆の画像を見ながら呟く

「確かに。彼女のヘアースタイルも、また個性的だし…」
とりあえず黒子に便乗する

「…前髪？」
佐天が怪訝そうに言った

………

「こ、こいつだあ！！」

パソコン画面に移った重福省帆を見た瞬間佐天は叫んだ

「なに？」

「貴女、犯人を見たんですの…！？」

「はい。あの時…鏡の中に、確かに」

「鏡に監視カメラ…なるほどそういうことか…」
御坂が顎に手を当てる

「ダミィチエック視覚阻害の力は、直接肉眼で見ている相手に限られる訳か」

御坂が頷く

「ふっふっふっ…」

「…ん？」

佐天がなんか笑ってる

「この眉毛の怨み…。晴らさでおくべきかあっ…！」

画面に移った重福省帆を指差しながら決意を露わにする佐天

「やるよ、初春…！」

「…はい？」

………

初春はパソコンを猛烈な速度でキーボードを動かしている

画面に移ってる文字の羅列ははつきりアリがたくさんいるみたいで
意味がわからない

「なんか…すごいわね…」

「俺なんかデジタル酔いしそうだぜ…」

「こうでもしないと、ここにある端末じゃ処理が追い付かないんです。それより学舎の園は一七七支部の管轄じゃないんですけど…大丈夫なんですか？」

「上からの許可、取り付けましたわ」

お。流石黒子

何時の間にか携帯で連絡し許可を取っていたらしい

「よっしゃー！初春、どんどん行ってみようかー！」

許可がおりてテンションが上がった佐天は初春にそんなことを言う

「はいはい。どーん」

言葉と共にキーボードのエンターを押す

途端に三台の画面いっばいに「アクセス中」の表示が次々と浮かび上がった

「学舎の園の監視カメラ、全2458台、接続終えました」

『おおー！』

一斉に感嘆の声をあげる

「待ってるよお、前髪女、必ず見つけだしてやるからなあ…！！」
佐天が拳を握り締め宣言する

…すごい復讐心ですネ

「約束のケーキ、忘れないでくださいよ」
パソコンを操作しながら佐天に確認する

「三個でも四個でも好きなだけ食べて良しっ!!」
佐天承諾

「うわーい」

はしゃぐ初春

俺は画面を見つめながら

「…多すぎるな…」

「そうですか？」

「えー!? 大丈夫ですよー!」

俺の言葉をケーキの数と勘違いした二人

「ケーキじゃなくて」

「へ？」

佐天と初春が二人して素っ頓狂な声をあげる

「初春、エリアEからH、JとNは無視だ」
俺はそう初春に言う

「あ、はい」

言われたエリアを消し監視エリアを狭くする

「なるほど。その辺りは常盤台から一番遠い場所。ですから常盤台^{ウチ}の生徒はほとんどいない、という訳ですわね。お兄様」
黒子が俺を羨望の眼差しで見る

「まあ、そういう事だ」

「へえー…」

佐天が関心したような声をあげる

「じゃあ、人通りが多い所も後回しね」
御坂がそんなことを言った

「え？なんでですか？」

佐天が聞き返す

「服装だな？」

俺がそう聞くと御坂は頷いて

「そう。犯人の服装、学舎の園の中じゃ、目立ちすぎると思わない？」

『あ…確かに！』

佐天と初春が同時に言った

「人目の多い所では、ずっと能力を使っている？」

「多分ね。けど、能力をずっと使う事はできない…」

御坂の言葉に佐天がはっとする

「どこか人目のつかない所で、息を潜めている…？」

「…正解」

御坂は振り向いて微笑む

「と、言う事は…」

御坂の言った言葉を元に更にエリアを絞る

「よし。そうと分かれば善は急げだ」

飛んできたガタックゼクターを掴む

「変身」

> H E N S H I N <

更にすぐガタックゼクターの角を開く

> C h a n g e S t a g B e e t l e <

「お兄様？なんでワームもないのに変身を？」

ガタックは一度背伸びし

「俺は黒子みたいに感覚に自信ないからね。肉眼じゃなければ、いいんだろ？」

「…その為だけに？」

半ば呆れながら御坂が言う

「確実に行く為さね。初春、指示頼む。先に行くっ！」
ガラリと窓を開け飛び降りる

「…あれは完全に無駄遣いじゃないかしら」
御坂は一人呟いた

他三人はとりあえず苦笑を浮かべるしかなかった…

……………

重福省帆は息を忍ばせている

ターゲットはすぐ先を歩く常盤台の生徒…

大丈夫

ダミーチェック

視覚障害は完璧だ

スタンガンのスイッチを入れ何時もの様に意識を――

「みいつけた」

はっとする

後ろを向くと帽子を被った常盤台の制服を来た生徒が立っていた

「あたしの可愛い眉毛のカタキ、キツチリ取らせてもらっからね？」
帽子の鍔を人差し指であげながらニヤリと笑う

「――く…！」

視覚障害を発動させ姿を消す

「え！？…。ホントに消えた…」

> 感心してる場合じゃありません！！追ってください！！<
耳につけた通信機から初春が言ってくる

「おつとそうだった…」

佐天は帽子を被り直し視覚障害で消えた重福省帆を追う事にした

……………

「はあ…はあ…」

何とか帽子の女を振り切って視覚障害を解除する

見つかるなんて誤算だった

早く体制を…！

「みつけ」

背後からまた声

今度は男の声だ

振り向くと頭に角があり朱い複眼の男が立っていた

ベルトにあるクワガタみたいなものを取り外すと姿を現した

「風紀委員だ。おとなしく捕まって…」

省帆は舌打ちをしながら視覚障害を発動しそこから再び逃げることに

にした

「あ……くっそ……。まあ素直に捕まるはずもなし、か……！」
今度は変身せず初春の指示を頼りにその子を追う

………

>初春、次のナビをお願いしますわ<

「はい」

初春は監視カメラを操作し重福省帆の走るルートを完全監視している

「次の路地を出て左、三番街に入ってください」

>了解ですの！<

視覚障害の決定的弱点はカメラなどに移ってしまう事

だから第三者に監視されてしまえばその逃走経路は完全に筒抜けになってしまうのだ

>初春！<

佐天からの声

「はいっ」

………

重福省帆は完全に焦っていた

（なんで…？）

逃げる先々に必ず風紀委員の男か女、帽子の女が待ち伏せしているのだ

（なんで…！？）

視覚障害は完璧な筈

なのにどうして逃走経路がわかってしまう？

（なんで！？）

………

息も絶え絶えで逃げ込んだ公園

ブランコの音が聞こえる

省帆が顔をあげると常盤台の制服を着た女がこっちを向いた

同時に背後から足音も聞こえてくる

右側に佐天、左に黒子、中心にアラタと完全に包囲する

「…鬼ごっこは…終わりよ？」

御坂がブランコを降りて軽く笑みを浮かべた

………

「どうして…？なんで視覚障害が効かないの！？」

「さあね」

御坂が省帆に歩いてくる

「ぐ…！これだから常盤台の連中はあつ…！」
と激昂しながらスタンガンを取り出す

「あつ…！」

佐天が声を出す

しかし俺と黒子はあまり心配した様子はない

御坂は「電撃使い（エレクトロマスター）」だからだ

「うあああああつ…！」

叫びながら御坂にスタンガンを押し当てる

バチィッ！！と音が迸る

「…ふふ…。…へ？」

最初勝ち誇ったような笑みを浮かべていたが全く変化のない御坂を見て不思議がる

試しに何度か電気を流す、が一向に効果がない

「残念。あたしこーゆーの効かないんだよねー」
ずっと両手の人差し指を持っていく

その間に電気が通る

「えっと…」

相手が電撃使いだと言う事を今知った省帆は軽く焦り出す

御坂はゆつくりとスタンガンを伸ばしている二の腕に人差し指でチヨンと触れる

バチィッ

「きゃあっ!!」

電流を流し省帆を気絶させる

「手加減はしたからね」

「それでも十分痛そうなんですが…」
俺がおずおずと言い出す

「あんたも喰らってみる？」

指先からバチリと電気が少量溢れる

「全力で断る…」

「初春、容疑者を拘束したと、アンチスキル警備員に連絡しておいてくださいな」

>はい…ふぁ…<

返事共に欠伸をする声が聞こえた

「お疲れさまー」

御坂が労いの言葉をかけた

「ゆつくり休んでな」
俺もそれに倣う事にする

.....

「さあてと」

手近にあるベンチに寝かせた省帆を見ながら佐天は油性ペンの太い方の蓋を取る

「ふっふっふっふ…。どんな眉毛にしてあげましょう——」

言いながら省帆の前髪に手をかけてどける

「——か…？」

素っ頓狂な声をあげた

重福省帆の眉毛はもう既に変だった…

…いやこの言い方はいくらなんでも失礼…いやけど…

と、重福省帆が意識を取り戻した

一瞬状況が理解できてなかったが自身の前髪があげられていることに気づき

「いや！！見ないで！！」

「…えっと」

流石に状況に思考がついていけずそんなことを言ってしまった

「可笑的いでしょ…?」

「…はい?」

「笑えばいいでしょ!? 笑えばいいわ…。あの人みたいに…!!」

『あの人?』

その場にいた全員が異口同音に声を揃えた

……………

春

私は麗らかな日差しの中で微睡んでいた…

幸せな時間は何時までも続くんだと無邪気に信じていた…

けど…

春は終わった

唐突に…

「どうして!?! そんなに常盤台のお嬢様がいいの!?!」

「別に、そういう訳じゃ…!」

「じゃあなんで!?!」

「だって…。お前の眉毛って…」

——ヘン

絶望の底に叩き落とされた

私を捨てたあの男が憎い…！！

私から大切な彼を奪った常盤台の女が憎い…！！

そして何より…！！

……………

「この世の眉毛全てが憎いつ！！だからっ！！」
ガバツと起き上がり拳を握り締める

「皆面白い眉毛にしてやろうと思ったのよ！！」

…あれ可笑しいな

途中まであの子の言葉が理解できたけど途中からは全く理解できなくなっただぞ？

「…なによ」

「へ？」

いきなり話を降られて佐天が素っ頓狂な声を出す

「どうしたの！？さあ笑いなさいよ！！」

前髪をかきあげ眉毛を見せつける

「えと…」

ちらりと俺を見る佐天

同時に重福もこっちを見る

あ、佐天のヤロー逃げたな！？

佐天が両手を合わせすいませんといったジェスチャーをする

「あ、あー…。なんだ」

重福の頭をポンポンと叩く

「眉毛位で、そう悲観するな」

「なっ！！私にとっては…！！」

びっ、と人差し指を省帆に突きつける

「たかだか眉毛を非難された位でいじけんな。…俺の友達が言ってた、「女の一番の化粧は、笑顔」ってな」

省帆は目を大きく開かせる

「そ、そうだよ。それに、私は好きだなー？」

佐天が助け舟を入れてくれた

「そうそう。だから、自分に自信持ちなっ」

省帆の肩をポンと優しく叩く

「…」

ぼう、と俺と佐天を見て頬を朱く――

て、あれ！？

「罪なお人ですのね……」

『え？』

佐天と同時に素っ頓狂な……て何回素っ頓狂て使ってんねん！！

そんなツツコミも虚しく俺と佐天は重福省帆の好感度を上げていくのでした

……………

遅れて来た警備員のトレーラーに重福省帆が乗り込む

「あの……」

躊躇いがちにこちらを振り向く

「手紙、書いてもいいですか？」

「ああ、いいよ」

俺は開き直ってそう頷いた

「……はい」

ちよっと戸惑いながらも頷いた

「……」

重福省帆は俯いて顔を朱くしながら奥に入っていった

トレーラーが走り去ると同時に御坂が呟いた

「彼女、完璧に姿を消してたよね…？」

そう

データベースには彼女は超度2と表記されていた

「あれは確かに、超度4並の力だよな…」

「そついえばそうですわね…」

「まさか、バンクのデータが間違ってるのか？」

「まさか…流石にありませんわ…」

この時はまだ笑い話で済んだ

後に来る、大きな事件の前フリとも知らずに

………

ちなみに

眉毛を可笑しい眉毛にされた佐天は一週間はあのままだった

これは国法から聞いたのだが、彼女が使用してたフェルトペンは一週間は絶対に消えない代物らしい…

俺は佐天に深く同情の念を込めた…

3 都市伝説

いつものファミレス

四人は黒い風呂敷を頭から被っている

…端から見ればアホみたい集団だがいたって真面目

佐天が都市伝説を喋ってるらしい

どうも佐天はこういうのが好きらしいな

俺は流石にその中には入れない為四人が座ってる席の近くに座り佐天から都市伝説の雑誌を読みふける

…こう見ると色々都市伝説っていっぱいあるな…

脱ぎ女、とか…雪踏ばばあ…百キロばばあ…

そんなんばつかし

ん？あ、多分これ俺か？二本角の男って

…いやわかんないけど

俺がそんなことを考えていると

「って全然怖くないじゃないっ！！」

がたん、と勢いよく立ち上がった御坂

ふわりふわりと黒い風呂敷が佐天と初春にかかった

「御坂ー。他の客に失礼だぞー」

とりあえず注意しておきました

.....

「せっかく雰囲気を作っても、そんな話ではね……」
やや呆れながら喋る

「なんの話？」
初春に聞くと

「脱ぎ女っていう……」
頬をポリポリ掻きながら応えた

「ああ……。あれか……」

「けど実際居たら怖くないですかあ……？いきなり脱ぎ出す都市伝説、
「脱ぎ女」っ！」佐天が力説する

「怖くないっ！」
御坂バツサリ

「つか、んなの居たら変質者の何者でもないだろうが」
俺もバツサリ言っという

「あ、じゃあこんなのはいかがですか？」

初春がノートパソコンをこちらに向ける

全員がデスクトップを覗き込む

「風力発電のプロペラが逆回転する時、街に異変が起きる」

「夕方4時44分に、学区を跨いではいけない、幻の虚数学区に迷い込む…」

「使っただけ能力があがる、レベルアップー！」

佐天と初春が二人して読む

心なしかテンション上がってね？

黒子ははあ、と溜め息混じりに背もたれに寄りかかり

「そんなくだらないサイトを見るのはおよしなさい…」
二人に告げる

「それに都市伝説なんて非科学的な話…。ここは天下の学園都市よ？」

御坂が言う

「もう… ロマンがないなあ」

佐天がぶーたれた感じで言った

「それに本当に起きた出来事が、形を変えて噂になっているんですよ？」

初春が画面を見ながら補足する

「どんな能力も効かない能力を持つ男、とか学園都市ならではないですか！」

「ーぶ！」

俺は佐天の言葉にコーヒーを吹き出した

「うわ、お兄様汚いですわよ…」

「す、すまん…」

あいつ…都市伝説にまでなってやがるのか…

幻想殺し（イマジンブレイカー）

すげーな…

「それにしても、そんな無茶苦茶な能力がある訳ありませんわ。ね、お姉様、お兄様？」

黒子が俺と御坂に言ってくる

御坂は画面を食い入るように見ていた

「…お姉様？」

「へ？」

皆の視線に気がつき軽くしどろもどろする

「そ、そうね。ホントにいるなら一度戦ってみたいものね…。あはは、はは…まあホントにいるならね…」

なんか無理やりな感じだぞ御坂…

とりあえずその場はそれで解散となった

………

ひとえに都市伝説つつつても、色々ある

首無しライダーとか二色の仮面戦士…

いや、後者は俺の知り合いだけど…

にしても噂ってすごいな…

すぐ広まるんだから…

「んー？髪伸びてきたかなー…」

頭の髪をいじる

「…そうだ、風間のところ行くか」

………

バーバラシヨップ

「KAZAMA」

ここは学園都市でもかなり有名な床屋だ

男性の気もさることながら女性の気はハンパなく高い

もちろん風間がカッコイイところもあるけどカットテクニックが素晴らしいのだ

事前に予約してないと散髪できないのだ

だけど俺は友人のコネでそういう面倒なのはスキップして利用するのだ

からんからん

「大介ー。いるかー」

いつも通り扉を開けマスターの名前を呼ぶ

がす、とすねに痛みが走る

「痛え!?!」

すねを抑えうずくまる

「お前、来るなら事前に連絡しろって言ってるだろ!?!」

「だからって蹴るこたねえだろヒロ!?!」

この子はヒロ

初春、佐天と同じ柵川中学に通う一年生だ

置き去り（チャイルドエラー）らしく途方に暮れていたところを大介に保護されたらしく大介にかなり懐いてる

「全く…。大介ー、客だー。バカが来たぞー」

「てめ、さりげなくヒドいなー!!」

可愛げないなこの子!!

「わかった。席に連れてってくれ」

奥の部屋から声がする

「感謝しろよ。大介の友達だから予約とかしないで、散髪出来るんだからな」

ぶんすか言いながら俺を席に案内する

はさつとあのヒラヒラをかける

「わかってるっての。ったく…ホント大介にベツタリだな」

「な!？」

顔が真っ赤になる

「ヒロ、アシストに…。どうした？顔が赤いぞ？」

タイミング悪く奥から大介が歩いてくる

「はひゃ!?!だ、だいすけ!?!?」

「ヒロ、アシストを頼む」

真っ赤にしながら頷く

こいつは風間大介

もちろん彼も先代から名を引き継いだ一人だ

「お前も、来るなら連絡を入れろと何度言ったら分かるんだ」

「面倒じゃなかよ。てか高校通いながら良く床屋経営出来るよなホント」

大介のすごいところは高校に通いながら「KAZAMA」を経営してること

月曜、水曜、金曜の午後と土日

まあ基本俺が来るのは土日のどっちかなんだけど

「どんな髪型がお好みだ？」

「いつも通りの頼む」

「わかった…。ヒロ、ハサミ」

「はいよっ!」

元気よく返事したヒロは大介にハサミを渡す

「ところで最近色々噂が出回っているぞ？」

「噂？」

大介がそんなことを言ってきたから聞き返す

「あ、そういえば学校の友達が「脱ぎ女」を見たって言うたよ」

「ホントかよヒロ」

ヒロが興味深いことを言うてきた

「ホントだよ。なんかを尋ねられたと思ってらいきなり「暑い」って言うて服を脱ぎだしたんだって」

「ほう？最近の都市伝説は珍妙なものが多いな？」
俺の髪を切りながら大介が呟く

「ま、所詮噂に過ぎないしな。実物を見ないと、なんともな…。ほら、できたぞ」

パチンとハサミを閉じ俺の髪を整える

「さんきゅ、大介。いくらだ？」

ヒラヒラを取り財布をポケットから取り出す

「千二百円だ」

財布から千円札と百円玉二枚を取り出して大介に渡す

「確かに。今度来る時は連絡入れるよ。アラタ」

「わかったわかった。また来るぜ」

俺は大介とヒロに礼を言つて「KAZAMA」から出た

.....

「全く…。あのバカはいつつもアポ無しなんだから…」

ヒロがブツブツ文句を言う

「そう言うな。あいつとは、結構付き合い長いからな」

「だいたいあいつは勝手よ。髪切りに来るだけなのに…ブツブツ」

「ふう…。やれやれ」

.....

特に目的もなく歩いていると知った声が聞こえた

「ちょっと、何よ！？この人！！」

「俺だつてさつき知り合ったばかりだし…！！」

ふとその方向を見ると御坂と俺の友人―上条当麻が喋ってた

その背後には…、え！？

何してんのあの人！？下着！？上着脱いでますヨ！？

「当麻、御坂！！」

走る俺

「お、おおアラタ、いい所につ！」

当麻が一瞬笑顔になる

「あ、と、その前にシャツを着て下さいっ！」

女性の腕にかけてたシャツを奪い女性に突き付ける

「うわぁ！」

また声

振り向くと女子高生二人が

「女の人が襲われてる！！」

「あの男の人が脱がしたの！？」

あかん！！

上条当麻の不幸スキルが発動した！！

「ち、ちが…！！」

テンパった当麻はシャツを御坂に押し付けて

「誤解だあああああああああああああつ…！！」
全速力で逃げ出した

「…当麻…。相変わらず不幸だな…」

「ちょっと…！！」

御坂が追う、が

「君、シャツを持って行かれるのは困るんだが…」
至極当然の意見

完全に注目の的だった…

「とにかく！！服着て下さい！！見られてる！！見られてますから
っ！早く！！」

御坂の説得によりなんとかその場は収用した

………

とりあえずオープンカフェテラスに腰を落ち着ける

そこでその女性が飲み物を買ってくるというので俺と御坂は席に座
って女性を待つことにする

「…なんなのあの人…」
御坂が頬ずえをつきながら呟く

「いや俺が聞きたいよ…。何あの人、知り合い？」

「違っわよ…私だって初対面なんだから…人前で突然服脱ぎだして
…」

「…あれが脱ぎ女なんじゃないのか？」

…

一瞬の沈黙

『いやないない』

二人してその結論についた

その時に御坂の携帯がなる

「んー？」

がちゃと携帯を開き耳に当てる

>お姉様？今どちらですの？これから初春達とお茶しに行くのですけど、一緒に如何ですの？あとお兄様は一緒ですか？<

黒子の声だ

「あー…なんか変な人と一緒にさ…」

>変…とは？<

………

「突然服を脱ぎだした！？」

お姉様の言葉に思わず声を大きくする

「えー！？それって、きつと脱ぎ女ですよっ！」

佐天さんが私の電話に口を近づけて喋り出す

「大丈夫ですかっ御坂さあん！！」

今度は初春が私の腰に抱きついて騒ぎ出す

「ちょ、おや、お止めなさい貴女たち！！」

………

>あと、写メ、写メをお願いします!!<

なんか電話の向こうはものすごいギャーギャーしているぞ…

「あのねー…面白がつて都市伝説と繋がらないでよ…ちょっと変わってるけど…普通の人間——」

いや、失礼すぎないか御坂や

「変わってるというのは…。私の事かな？」

あ、帰ってきてた

「うああ!？」

焦りながら電話を切る

「いえー、そんな…。見も知らぬ人を捕まえて、…ねえ？」
携帯を積みながら俺に同意を求めてくる

「…俺に振るなよ…」

ちなみにまた御坂の携帯にかかってきたけど御坂は留守電に速攻で切り替えた

……………

ことん、とテーブルにジュースが置かれる

何故か俺と御坂のジュースが置かれた

「付き合ってくれるお礼だ」

あかん

この人すごい…

「ありがとうございます」

二人してお礼を述べてジュースに手を伸ばし――

「あつっ！」

思わず俺は声を出してしまった

缶を見てみると…

スチール缶な上にしかもホット（この日は炎天下で糞暑い）
更にスープカレー

なんだこの地味な嫌がらせ三連コンボ

…いや、相手の行為は無駄には…

「…なんでスープカレー…？しかもホット」

こいつ言いやがった！

「暑い時には暖かい飲み物の方がいいのだよ。それに、カレーのスパイスには疲労回復を促すものが含まれてる」

「まあ、理屈はわかる気もしますが…気分的には冷たいものの方がいいな…って」

「お前…。結構ズバズバ言うのな…」

俺の言葉は「うっさい！」の一言で返された

しかし目の前の女性は至って冷静に

「なるほど…気分か」

「若い娘や男性はそういう選択の仕方をするものだったな…買い直そう」

すくつと女性は立ち上がる

「あ、いいですいいです！お気持ちだけで、十分です！」
慌てた様子で御坂は女性を引き止める

女性は座り直し

「すまないね。研究ばかりしているものだから、理論的に考える癖がついてしまつてね…」

「研究つていうと、学者なんですか？」

俺はスープカレーを飲みながら聞く

女性はスープカレーを一度飲み

「大脳生理学。主にA I M拡散力場の研究をしてるんだ」

「それって、能力者が無自覚に周囲に発散している微弱な力のことですよ…？」

「ああ。もう授業で習ったかい？」

「ええ…一年の時に」

スープカレーの飲み口を見つめる

…飲もうか飲まないかめっさ悩んでんな

「…んっ！」

あ、飲んだ

一気に飲み干し缶を置く

…結構頑張ったな

俺はそんな御坂を無視して

「確か、人間の五感には感じとれなくて、機械を使用しないと計測できないほどの弱い力、だったかな」

「ああ」

女性は軽く足を組み…少し妖艶なポーズだ…

「私はそれを応用してる研究をしてるんだ」

「へえ…。つことは、能力にも詳しいんですか？」

「何か知りたいことでも？」

すると御坂がおずおずと言った感じで言い出す

「…例えば、…どんな能力も効かない能力…なんてあるんでしょうか？」

「能力と言っても色々あるからね…。例えばどんな力が効かないんだ？」

御坂は手わすらしながら答える

「高超度の電撃を受けてもなにもなかったり…」

女性は少し思案しながら

「電撃、か…。例えば避雷針のようなものを発生させ、電流をそらせるような能力とか」

「お、確かにありそうな能力ですね…」

俺は素直に頷いた

…ありそうなんだもん

「そう言うものとは、また違う感じなんですけど…」

「…それは君の知り合いか？」

女性の鋭い一言

「へっ？」

勢いよく頭を上げる

「い、いえ…。都市伝説です、都市伝説…」
「やっぱり否定する」

「ちよつと、小耳に挟んだもので…」

あはは、と苦笑

「…都市伝説か。最近の若い娘でもそう言う話はするのか？」

「まあ流行つてると言うか色々あるんです。脱ぎ女とか」

「脱ぎ女？」

「あ、いえ…別に…！」

するとそこに男の子が走ってくる

横を通ろうとする

「あっ！」

と勢い余って転んでしまう

べちゃ、という音と共に女性のスカートのボタンにべったりとアイスが付着していた

「あの…。ごめんなさい…」

男の子は素直に謝る

「ああ。大丈夫だ。気にする事はない」

女性は立ち上がりいそいそとスカートのボタンに手をかける

「すぐに洗えば…、大丈夫だ」

そしてスカートを――

『だから脱ぐなって!!』

御坂とシンクロして全力でツッコんだ

その言葉に女性は

「…は？」

気にするでもなく呟いた

………

御坂とその女性がトイレでスカートを乾かしている

当然俺は外で待つことにする

…暇だなあ…

ぼけー…としていると

「鏡祢くんか？」

スーツ姿の人が俺に声をかける

「矢車さん？」

「やっぱり鏡祢くんか。どうしたんだい、こんなところで」

スーツ姿の男は矢車ソウ、という

先代の方は荒れてたらしいけど…

矢車ソウは荒れてなどおらずむしろ結構好印象を与えている

仕事に真面目な方なのだ

「影山さんはいないんですか？」

「今回は工作中だ。君は？」

矢車さんが聞いてくる

「友人待ちです。ちょっと特殊な方でして…？」

「…特殊？」

矢車さんが怪訝な顔をする

「矢車さんは？」

「いや、都市伝説を少し調べてるのさ。レベルアップ…。知っているか？」

「…使用する事で超度を上げるアレですか？」

矢車さんは頷き

「どうもその都市伝説は実在しているらしいんだ」
矢車さんの言葉に俺は啞然とする

「あるんですか、そんな夢物語な代物が」

ああと矢車さんは頷いた

「まだ確定ではないが…。念の為調査している」

俺は腕を組み思考する

…レベルアップー

使用する事で超度を簡単に上げる代物…

「やっぱりあるとは思えません。…そんなもの」

「わかる、だから調べているのさ。…そちらでも視野には入れておいてくれ」

「わかりました。矢車さんも気をつけて」

「ああ。君も無茶はするなよ」

矢車さんは笑顔を作り足早に去っていった

「…レベルアップー…か」

…それを使えば…俺も能力者に…

「!」

がん、と壁を殴り自分を戒める

…懂れているのか？

俺も能力者に…

………

しばらく待っていると女性と御坂がトイレから出てきた

また何かあったが知らないが御坂の顔が赤かった

.....

女性の車は程なくして見つかった

後から御坂に聞いた話だが女性は自分が駐車した場所を忘れていたらしい

...逆にすごいな

「色々ありがとう。それじゃ」

エンジンをつけそのまま走り去っていく

「お氣をつけてー...」

御坂がビジネススマイルで手を振る

「...てか。自分の車止めた駐車場わかんないってどーよ...」

疲れがドツと来たので少し愚痴っておく

「...はあ...。私、帰るね...」

ぐったりした御坂に別れを告げて帰路についた

.....

夕方の道を歩いていく

特に理由はなくただ帰る為

「カ・ガーマンではないか。こんな時間で奇遇だな？」

今日はよく知り合いに会うな…

「なんだよツルギ。お前もこんな時間に珍しいじゃないか」

「何。今朝スーパーの特売があつてだな、二時間も並んで、たまごを購入したのだ…」

悠長に語るこの白服タキシードの男は神代ツルギ。またの名を神に代わって剣を振るう男

人の名前を変わった感じで覚える帰国子女だ

帰国子女と言っても彼も名を継いでいるのだけど

「む。どうした、カ・ガーマン」

「何でもないよ。今日は少し急いでいるから、お前もワームとか出ない内に帰れよ？」

そう言つと神代はニヒルに笑い

「誰に物を言っている。俺は神に代わって剣を振るう男だ。ワームが出てきても、俺が斬り捨てる」

なんて頼もしいことを言ってくれる

「ふ…。そうだったな。そいじゃあな、ツルギ」

「ああ。またな力・ガーマン」

そうしてお互い帰路についた

.....

かちり、パソコンをいじる

「あれが噂の、超度5か…そして、仮面ライダーガタック…。面白
い子達だったな…」

今日の事を思い返しながら女性―木山晴生は呟いた

これから何が鏡祢アラタを待っているのだろうか

3 都市伝説（後書き）

ヒロ

置き去り（チャイルドエラー）

学園都市に来てすぐ親に捨てられた中学二年の女の子

身長は初春よし少し小さい程度で髪は腰まで伸びている

大介に異様に懐いていて他の人（特にアラタ）によく突っかかる

4 とある二人の新人研修

今日は風紀委員^{ジャッジメント}としての見回り

学校の監視カメラの増設を依頼され黒子と初春と共にとある学校に来ている

「あと設置が必要な場所は…あそこ、あそこですね
初春が増設場所を指差しながら呟く

「全く。今の今まで監視カメラの増設を放置していたなんて…この
学校の風紀委員はずいぶんのんびり屋さんですの…」

黒子がそんな愚痴を零す

「ま、被害が出る前で良かったじゃんか。被害が出たら遅いしな
そんな黒子に俺はそう返した

「…お兄様…そういう問題では——」

途端いきなりの警報

『！』

「行きますわよ初春、お兄様！」

「はい！」

「わかった！」

俺は黒子と初春と共に現場に急行した

.....

どうやら車上荒らしのようだ

気づかれていないと思っているのか男は物色している

「全く……！白昼堂々と……。学区内、あまつさえ風紀委員の前で……！」
黒子は飛び出そうとする、が

ぱしっと初春が黒子の手を掴む

「白井さんダメです……！応援が来るまで待ってください……！」
初春が制止する

「そうだぞ黒子、今回は——」

「問題ありませんの。初春とお兄様はここで待機を」

俺達の制止も虚しく黒子は犯人の近くへ移動する

仕方なく俺と初春は黒子の後を追う事にする

途中初春が少しムツとしていたが気づかないフリをした

.....

「はい、そこまでですわ……！」

「ああ!？」

黒子の言葉に犯人の男が振り返る

「風紀委員ですの!! 器物損壊、及び窃盗の現行犯で拘束します!」

「ちい…!」

男が舌打ちする

「気をつけてください、相手が一人とは——」

初春が黒子の背後でそう呟くが黒子は途中で遮って

「相手は何人だろうと車上荒らし如き、ちょちょいのちょいですわ」

「あ、おい黒子…!」

初春の助言を無視し黒子は犯人に近づいていく

「さあ。大人しくしてくださいな、悪いようにはしま——」

ドン、と言う鈍い音

車の中に犯人が潜んでいたのだ

黒子がドアの付近に来たのを見計らい勢い良く車のドアを開き黒子を吹き飛ばしたのだ

「ああっ!？」

「白井さんっ!」

初春が叫ぶ

吹き飛ばされ軽く気を失ってしまったようだ

「おら、ずかるぞ!!」

ドアから出てきた男はもう一人の男に言う

「お、応!!」

逃げようと走り出す

初春は両手を広げ進路を遮りながら

「と、止まってください!!」

「どけえ!!」

男はスタンガンを構え初春に押し付けようとする

「っ!!」

俺は初春を突き飛ばしスタンガンから庇う

体にスタンガンが当たる

バチリと体に電流が疾る

「が——!!?」

流石に電流には勝てなかった

俺は一瞬暗闇に意識を捨てた…

俺は気を失うと二人は一目散に逃げに行った

「アラタさん!？」

「う…お兄様…!？」

黒子が気がついたようだ

「アラタさん!!アラタさん…!!」
俺の体を揺する

「お兄様!!…お兄様あ…!!」
黒子もかけつけ同じように揺する

「う、う…」

俺は意識を取り戻す

むくりと起き上がる

「問題ない…。流石に堪えたがな…」
当てられた箇所を押さえながら呟く

「…良かった…」

初春が胸をなで下ろす

「…やはり、初春はまだまだ半人前ですの。今まで通り、支部で私たちのバックアップをしてればいいのですわ」
黒子が初春に突きつけた現実

しかし初春は怯まない

「…私、だって」

「？」

黒子が初春に向き直る

「私だつて！相手が一人とは限らないって言いました！！それを無視したのは白井さんじゃないですか！！」

初春が言い返す

「それは…」

「だいたい白井さんはいつもそうです！！無茶して独断専行ばかりで…。だから始末書の数が減らないんです…！」

独断専行、の辺りで黒子がピクリとする

「き、聞き捨てなりませんわね…？私がいつ独断専行したと？」

「いつつて、いつもじゃないですか！！今回だつて応援が来るまで待つても良かったのに…！」

「そんな悠長な事！！犯人に逃げられてしまいますの…！」

「少しは反省してください！！そのせいでアラタさんだつて…！！」

「…！！貴女…！！」

少し怒りに表情を染める

「そんなんじゃない私たちの「約束」はどうなるんですか…！」

その言葉に黒子が言い返そうとして

「…「約束」？」

黒子がキョトンとする

「…覚えて、ないんですか…？」

「…はて？」

その言葉に遂に初春が

「——わかりました！！白井さんがそういう考えならもう知りませ
ん…！」

「へ？」

さらにキョトンとする黒子を尻目に

「もう勝手にしてください！！」

………

俺は黒子と初春の「約束」なんてのは知らない

しかし昔とはいえ約束を忘れられたら初春ではなくても怒るだろう

…しかし初春があそこまで怒るなんてな…

初めてだぞ

とあるオープンカフェテラス

「てな事があつたんだよ」

俺は友人、風間大介とヒロを食事に誘って先ほどの経緯を話した

「…ふむ。確かに、それは怒って当然かもな」

大介はコーヒを一口飲みながら呟く

「てか車上荒らし逃がすなんて何してんのよ。相変わらずバカの極みね」

ヒロが毒を吐く

「お前な…スタンガンの痛み知らんだろ？」
ちよつと言い返してみたり

「大介なら避けて車上荒らしなんてボツコボコだもんっ」

ぐ…。確かに、回避出来たかも知れないけどな…

「けどさー…」

再びヒロが口を開く

「そんなことだったろ、いつそのこと風紀委員なんて辞めちゃえばいいじゃん」

『ぶっ！』

ヒロのそんな言葉に大介と二人コーヒを吹き出す

「こらヒロ、無責任な事言っな」

俺はヒロに少し怒った口調で言う

「風紀委員は警備員と並ぶ学園都市の治安維持機関なんだ。勝手に放り出せる仕事じゃない」

「…あんたに怒られるなんて…」

こいつかなり失礼だな！

「けど、だったらほっとくしかないの？その喧嘩した二人」

「そういう訳にもいかないだろう。…どうするんだ？これは風紀委員のお前しか解決出来ないぞ？」

大介が俺に聞いてくる

「…まあ、大丈夫だとは思っぜ？…あいつらなら」

「…そうか。お前が言うなら大丈夫だろう」

大介はコーヒーを飲みながら俺の言葉に頷いた

俺は二人と別れ今日は一七七支部に向かうことにした

………

「うつす」

俺がドアを開けると佐天と国法、そして初春がパソコンを操作している

「あら、アラタ。今から昔話をしようとするんだけど？」

「昔話？」

俺が聞き返すと

「初春と白井さんの事…国法先輩から聞きました」
佐天が言ってくる

「…そうか。てか、国法。昔話つて、アレか？」

「ええ…。アレよ…」

国法がコーヒーを口につけて優しい口調で言った

……………

常盤台学生寮

「んーーーーー」

白井黒子は足をバタバタさせながら唸っている

「んーーーーー」バタバタバタバタ

そんな事がかなり続いたのでその同じ部屋の御坂美琴は痺れを切らし

「ああもう鬱陶しい！！あんだね、そんなに気になるんなら、さつさと仲直りすればいいじゃない！！」

枕に顔を突っ伏していた黒子は顔を上げて

「それは…」

「このままだと、初春さん、ホントにあんたに愛想尽かして、コン
ビ解消しちゃうかもよ」

ばふ、とベッドに腰掛けた御坂

「…それ位で終わるなら、所詮その程度だったということですね…」

御坂は溜め息混じりに

「またそんな強がりを…」

「強がってませんの！」

突っ伏したままの冗談で反論する黒子

「…あんたと初春さんって、そこまで性格違うのに、なんでコンビなんか組んでいるのよ」

因みに昔はアラタもコンビを組んでいたという話を御坂は聞いたことがある

「…私だって」

黒子は起き上がる

「最初はそんなつもりありませんでしたの。あんなにトロくて何も出来ない子…。ですけれど…」

黒子は淡々と語り始める

自分がまだ小学生だった頃の話——

………

「はい。今日の巡回はこれでおしまい。何か気になったこととか質問とかある？」

当時も国法が黒子の教育担当だった

「では…」

当時小学生だった白井黒子はおずおずと言った感じで発言する

「少しお聞きしたいことが…」

「何？」

国法が黒子に聞き返す

「風紀委員にもなつて一年にもなりますのに、なんで私に任わたくしされるのは裏方や雑用、先輩同伴のパトロールばかりですか！？」

その言葉に国法は優しい口調で聞いた

「成績優秀な自分が、半人前扱いされるのが不満？」

「そ、そういう訳ではないですが…」

「やはり、私がまだ小学生だからかと…」
軽く頬を染め俯く黒子

「…年齢だけが問題じゃないわ」
ぼむ、と国法は黒子の頭に手を乗せる

「貴女の場合、なまじポテンシャルが高い分、全てを一人で解決しようという帰来があるからね。…もう少し周りの人間を頼るようにならないと、危なっかしいのよ」

そんな言葉にやっぱり黒子はむすうとしてる

「ほら、そんな顔しないの。沢山頑張つてご褒美に何か甘い物奢つてたげる。お金おろしてくるから、ちょっと待ってて」
一通り撫でた後国法はお金をおろす為に歩き出した

（…やっぱり子ども扱いされてますの）

黒子は心の中で呟いた

……………

俺は銀行にいる

なぜ銀行にいるかと言うと、お金をおろしに来たのだ

…それ以外ないじゃない

そんな銀行に来る以上それ位しかない

強いて言うなら昨日ツルギと遊んで何の気なしに入ったレストランでツルギが異様に食ったせいだ

…美食家な癖にああいう時だけは食べるんだから…

と椅子に座ってぼけっとしてると入口から見知った顔が入ってきた

（国法…）

国法が少し喜々揚々とした感じで入店してきた

国法は俺に気づいてはいないようだ

どうやら国法も金をおろしに来たらしいな

ついて来てるのは…小学生だろうか

それとも最近国法が言っていた風紀委員の子か？

茶髪のツインテールの女の子がポケットに手を入れながらむすうとした表情でついて来ていた

「…今日も平和さね…」

コートを羽織りながらぼそりと呟いた

とそんなことを考えてるとツインテールの女の子が頭にカチューシヤをつけた女の子がツインテールの女の子に話しかけている

イヤホンをつけているので会話の内容はわからないが断片的に聞き取れたのは中学校の話だ

入学とか下見とかそんな単語が聞こえた

そんな内容の会話を微笑ましいと思いつつ見ると入口からバツクを肩にかけてバンダナをつけた男が入ってきた

男は軽く店内を見回した

…ん？見回した？

なんで見回す必要がある

金をおろしに来たなら真っ先にＡＴＭに向かう筈だ

待ち人でもいるのかな

…できればそうあつて欲しいものだ

……………

白井黒子はふと先輩である国法の視線が気になった

「…ちよつと失礼」

黒子は同期の初春に断りを入れて国法に聞いてみる事にした

「…？」

初春は目を開いたままぼけつとした

……………

「どうなさいました？」

黒子がそう聞くと国法は黒子の方に向き直り人差し指を自分の口に当て「しっ」というジェスチャーをした

「あの男」

国法は指差す

あの男、とはバックを肩にかけてバンドナを被っている男
おまけに両手をポケットに手を入れている

「局員の場所や視線ばかりを気にしてる…」

「…え？」

国法は屈み黒子の耳に顔を寄せる

「人の所有物を、無断で透視するのは気が引けるけど——！！」
ギン、と集中し男の所有物を透視する

彼女はの力は超度3の、クレアポイアンス透視能力

——彼女の友人である鏡祢アラタは呼びづらいとの事で「クレアポヤンス」と呼んでいる——

国法が男を透視する

「…妙なものは持っていないようね…。！？」
国法がハツとする

「右ポケットに拳銃…」
その言葉を聞き黒子もハツとする

「強盗ですよ！？」

「局員に伝えてくるわ、貴女は万が一に備えて、利用客の誘導準備を」

「！ 逮捕しませんの！？」
小声で国法に言う黒子

「バカな事言わないの。犯人確保は、アンチスキル警備員に任せなさい」
国法はそう言うと局員にこの事を知らせる為にカウンターに歩いて

いった

「…そんな」

——そんな消極的な！！

黒子は拳を握り締めた

………

国法がカウンターに歩いて言った

多分強盗がいる事を局員に知らせる為に行っただろう

俺の予想は当たってしまった

案の定男は強盗を企てていたようだ

…ま、知らせに行っただから大丈夫——

——パンツ！！

（…先に動いたか）

しかしまあその内警備員が——

と思考すると走る音がする

「…なに？」

よく見ると先ほどのツインテールの女の子が走り強盗犯に接近していた

（何してんだあのガキ！！）

俺がそう思うのも束の間ツインテールの女の子は犯人の爪先を思い切り踏みつけバランスを崩す

更に足で膝の裏を蹴り犯人を転倒させる

「がは！？」

そして駄目押しと言わんばかりに胸部を踏みつけた

男はそれきり気を失ったようだ

「はあ…はあ…はあ…」

ツインテールの女の子は息を吐きながら調子を整える

「なんだ…。簡単ではありませんの…」

「きゃ！」

別の方で声がした

「ったく。何ガキに熨されてんだよ」

茶色のコートを着た男が付近にいた女の子を人質にとっていた

（あの子は…）

ツインテールの友達…

その前にもう一人いたのか……！！

「使えねえ」

ぐ、とナイフを顔に突きつける

「ひ……！！」

女の子は表情を強ばらせる

「初春っ……！！」

ツインテールの子が叫ぶ

「あん？お前の知り合いだったのか。ふうん……」

男なニヤリと笑い

「こりゃ好都合」

………

男がナイフを更に突きつける

「お前風紀委員か？風紀委員が人質見逃す訳ねえよな？ましてや、自分の知り合いを」

「……く……！！」

黒子は唇を噛み締めた

「……最悪」

国法は小さく呟いた

「他にも仲間がいるんじゃないかねえのか？出てくんなら今の内だぞ？」
男がいるであろう風紀委員の仲間に促す

そんな時にジリリリと警報が鳴り響きシャッターが閉まっていく

そんな状況に偶々居合わせた男、鏡祢アラタはイラついた

（バカかこの局員！利用者より金が大事だったのかよ！！）

更に事態は最悪な方に動きだす

>セキュリティ信号ヲ受信シマシタ。侵入者ヲ排除シマス<

警備ロボが警報を聞き起動したのだ

「ち…面倒くせえ…」

初春という子を連れながら下がる
途中ポケットに片方の手を入れた

（…ポケットに何か…）

国法は男の仕草に注目する

警備ロボは完全に臨戦態勢を取っていた

警備ロボが犯人に走りだすのと同時に黒子は走り出す

「っ！！」

国法は何かを感じ取ったのか黒子の手をつかみ黒子を庇う

警備ロボはメキメキと音を立て爆発した

国法は黒子を庇いながらも爆発に吹き飛ばされてしまった

「んーんー!!」

男は逃げ出さないように初春を手で抑える

「…へへ…」

犯人は余裕の笑みを浮かべた

………

「な、なにが…？」

黒子は状況がわからないでいた

国法が自分を庇ってくれたのはわかる…しかし…一体…

ふと自分の前を見る

「!!!」

顔が引きつった

「先輩…!!」

自分を庇った所為で怪我を負った国法がいた

「手の内が、わから、ない間は…、突入、しない…、…覚えておきなさい…」

息も絶え絶えで黒子を優しく叱責する

「ど、どうして…！」

「おい」

声がした方を振り向くと黒子は顔面を蹴られた

「ぐあ！？」

ドサツと倒れ伏す

「っふん。やっぱ仲間がいたか」

「白井さん！！」

初春が駆け寄ろうとするが犯人に腕を捕まれているので阻止される

「あのバカみたいに、俺もやれると思ったのかよ」
男は黒子の踵を踏みつけた

「っあああああああつ！？」

激痛が黒子を襲う

「白井さあん！！！！」

……………

そんな状況の中一人気配を窺う男

（くっそ…。あの男…）

能力がわからない以上迂闊に動けない…

「…何も出来ないなんて…！！」

俺は小さく呟いた

.....

（私の所為ですの……！！）

黒子は心の中で自分を罵った

（私の軽率な判断の所為で……！！初春も……！！国法先輩も……！！）

なんてザマだ

（これじゃ半人前以下ではありませんか……！！）

「ったく、余計な手間を……。ん？」

黒子は手を伸ばす

友達を助けるために

（でも……！！）

男は躊躇なくその手を踏みつける

「つくうううう……！！」

更に激痛が走る

「しつげえな……！！」

「もう止めてください……！！もう……！！」

初春は泣きながら懇願する

その時初春の足が掴まれた

黒子の手だ

（必ず…！！）

「助けてみせますの…！！」

男は訳がわからなかった

「はあ？何のつもりで——」

刹那ブオンという音と共に初春の姿が消えた

「っな！？」

………

初春は何時の間にか外にいた

「え…。え…。！？外？」

——瞬間移動だあ？
テレポート

シャッターの中から声がした

………

——白井さん！？中にいるんですか！？どうして私だけ！——
シャッターの外から初春の声が聞こえた

「ふざけやがって…」

男は舌打ちをした

………

瞬間移動…あの白井って子は瞬間移動能力者なのか…
テレポーター

―白井さんも、早く外へ！―

「そうしたいんですけど…。私まだ自分を、移動とばせませんの…」

「それに…事件はまだ解決してませんから…!!」

…なんて子だ

ボロボロになりながらも友達を逃がし自分はまだ戦う意志が消えていない…

(…肝座ったガキだ…)

心の中で素直に感心した

………

「白井さん…、ひつく、えぐ…！誰か…！お願いします…！助けてください…！中に強盗が…！中にクラスメイトが…！強盗に襲われて…！助けてください…！お願いします…！」

男は立ち止まった

「… 大介？どうしたの？」
隣で手を握ってたヒロが聞く

「… いや。軽い仕事が出来たと思ってな」 風間大介はドレイクグリップを握るとゆっくりと歩を進めた

………

「お前が何考えてるか当ててやろつか」

「… え？」

黒子は聞き返す

「警報が鳴ってだいぶ経つ。そろそろ警備員もくる。人質を取られないよう足止め出来ればこちらの勝ち…」

「… ぐ」

凶星だった

いかに立ち回り人質を取られずに時間を稼げるか

それが今黒子に出来る最大限の事だった

「だがな。ここから出れないと決まった訳じゃねえんだぜ」

男はポケットからパチンコ玉のようなものを取り出しシャッターに投げつける

パチンコ玉はゆっくりと宙を移動しシャッターの方に向かう
パチンコ玉はガラスを突き破り更にシャッターさえも貫いた

「!!!?!」

黒子は驚愕した

「絶対等速。イコールスピード俺が投げたものは、それが壊れるか、能力を解除する
まで前に何があっても進み続ける」
喋ってる途中にも男はパチンコ玉を投げる

あつと言う間に人一人通れるほどの穴がシャッターに空いた

「残念だったな。思惑が外れて」

黒子はその穴を呆然と見ることにしか出来なかった

.....

「.....」

「ひつく...ひつく...!」

「ここだな」

声に顔をあげる

「ふえ...」

「やれやれ...今時銀行強盗とはな」

男性はグリップを前に突き出す

「変身」

そのグリップにトンボのような機械が装着される

> H E N S H I N <

彼はマスクドフォームを介さず直接ライダーフォームに姿を変えた

> C h a n g e D r a g o n f l y <

仮面ライダードレイク

それが今の彼、風間大介の姿だった

.....

「ち、時間がねえな。おい、お前の力で金を取り出せ。俺を手伝え、全員解放してやる」

唐突にそんな事を提案してきた

「...え？」

「そうだな。これからは俺と組まないか？俺とお前が組めば無敵だぜ？」

そんな提案

反吐が出るような提案…

黒子は呟く

「最っ低の初仕事でしたの…」
自分を叱責するように

「勝手に先走って、皆さんを巻き込んで…でも」
決意するように拳を握る

「そうですね…。私…」

ゆっくりと立ち上がる

男は怪訝な顔をする

「絶え対にお断りですの…!!」
真っ直ぐ相手を見て言っただけ

「仲間になる？生憎と、郵便局を狙うチンケなコソ泥はタイプじゃありませんの！…それに私…!!」

「もう心に決めてますの!!」

「自分の信じた正義は、決して曲げないと!!」

………

世の中は面白く変わってんな

あんなカッコイい事を子供、しかも女の子があんなカッコイい啖呵を切るんだ

ガタツクゼクターを取り出す

調整が終わり偶然手にあったもの

だが今回は好都合だ

——おばあちゃんが言っていた——

「子供は未来の宝物。それを傷つける大人は…最早人ではない…！」

だよな天道…！！

………

（あの能力、力があってもスピードはない…！！この足が言う事を聞けば…！！）

「そうか…残念だ…」

「なら——」

男がキラリと目を開ける

「ここで死ね！！」

いっぺんに数十個のパチンコ玉を投げる

「——！！」

黒子は驚いた

まさか、いっぺんに…!?

「一度に一つしか投げられないとは言っていないぞ!」
勝ち誇った男の声

「っ!!」

黒子は死を覚悟した

その時だった

>clockup<

「ライダーシューティング」

>Rider Shooting<

——ズキンっ!!

>clockover<

一筋の閃光が全てのパチンコ玉を焼き尽くした

「…え…」

更に黒子の背後から

>Change Stag Beetle<

「ご苦労さん、かつこ良かったぜ」

黒子の背後から蒼い姿の人物が飛び出した

「っ……しま——」

男はパチンコ玉を投げようとするがそれより先に蒼い人物の拳が顔面にヒットした

………

「大介ってば……お人良し——」
ヒロが愚痴る

「困っている人を放っておく訳にはいかないからな」

「もう……ま、それが大介の良いところ何だけど……」

人混みを避けながら風間大介とヒロは足早にその場を去った

………

初春の治療を受ける黒子

「やっぱり、白井さんはすごいです……」

治療をしながら喋りかける

「ああ……」

黒子は思い返す

突然の閃光

背後からの蒼い人物

… なんだったのだろう…

「私、約束します」

「へ？」

突然の初春の言葉に声をあげる

「己の信念に従い、正しいと感じた行動を取るべし…」

「…え」

「私も、自分の信じた正義は決して曲げません。何があってもへこたれず、きつと、白井さんのような風紀委員になります!!」
そう笑顔ではつきりと言った

少し照れくさくなった黒子は俯いて

「その約束、私にもさせてくださいな」
そう言った

「へ？」

初春の素っ頓狂な声

「今まで何でも一人で出来るつもりでいましたけど…それは飛んだ思い違い。ですから、これからは二人で…一緒に一人前になってくださいます？」

黒子はそう言って手を差し伸べる

初春は少し間を置いて

「はい！」

と元気に頷いて黒子の手を握った

.....

「へえ…良い話じゃない」

黒子の話を聞いた御坂は素直な感想を言った

しかし何故だか黒子は固まったままだ

「…？ どうしたの？」

御坂がそう聞くと

「い、いえ別に」

どこか声が裏返ってる

黒子は何を考えていたのかと言うと

（約束ってあのことでしたの…！？）

そんな事を考えていた

（しかし今更どう謝るって…！）

謝り方を考えてると

ぴりりと黒子の携帯が鳴る

「わわっ…!？」

テンパる黒子を怪訝な表情で見る御坂

「あ、はい、白井ですの…。え？初春が…」

………

「ああ。例の車上荒らしの居場所を特定したっていうから、いきなり飛び出してったぜ」

俺の電話を微笑ましい表情で見守ってる佐天と国法

「初春、あれからずっと探してたんだぜ」

「黒子。俺も行くけど、お前はどっするんだ？」

………

「…わたくしは…」

「…己の信じた信念に従い、正しいと感じた行動を取るべし。だっけ？」

御坂がそんな事を言ってきた

「いいじゃん。それでぶつかりあって、それでも一緒に進んでくれるなら…」

未だ悩む黒子に御坂は助言を与える

「…」

黒子は少し考えた後瞬間移動で寮を飛び出した

.....

初春は特定した車上荒らしの潜伏場所に走っていた

「はあ、はあ、はあ……」

走っていると隣に黒子が現れた

「あ……!!」

初春が声を出す

しばらく無言で走る二人

その沈黙を破ったのは黒子だった

「な、何をグズグズしてますの!!」

その言葉に少しムツとしたが

「そんな事でしたら、何時まで経っても二人で一人前になんてなれ
ませんわよっ!!」

その言葉に初春は笑みを取り戻した

そして安堵が胸を満たす

覚えててくれた……もしくは思い出してくれた……

仲直りの理由はもう充分だった

.....

出ていった方を見ながら御坂は呟く

「あーあ。せわしないなあもう」

.....

支部

「まあでも」
と佐天

「あれはあれで」
と国法

.....

ガタツクエクステンダーで二人を追うアラタ

「青春なのかもしれないな...」
俺は二人を見つけると速度をあげる

「初春ー！後ろ乗りな！」

「お兄様！？」

「アラタさん...！！良いんですか...！！？」

ぜえぜえと息を切らしながら初春が返す

「ああ、いいぜ」

「お兄様、ならば私もっ!!」

「お前には瞬間移動があんだろっが!!」

そんなやりとりを交わしながら俺達は、取り逃がした車上荒らしを初春のサポート、黒子の瞬間移動のおかげで確保することが出来た

…久しぶりに、昔を語ったなあ…

物思いにふけると同時に空を見上げる

夕闇の空には一番星がキラリと輝いていた――

4 とある二人の新人研修（後書き）

相変わらず無理やりです…

5 能力（チカラ）とちから（前書き）

相も変わらずぐだぐだです

5 能力（チカラ）とちから

風紀委員１７７支部

そのミーティングルームにて

「一週間前、初めての犠牲者が出たのを皮切りに、グラヒトン連続重力事件はその威力、及び範囲を拡大させています」
国法美偉はその場の風紀委員メンバーに告げる

モニターには被害が出た場所、更に被害状況が映し出される

「場所も時間も関連性が認められず、遺留品を、サイコメトリー精神感應で調べましたが、以前手がかりが掴めていません。次の犠牲者を出さない為にも、アンチスキル警備員と協力して、一層の警戒強化と事件の開発に全力を」

.....

「ふあ……！」

俺は大きな欠伸をする

それを隣で歩いていたツルギが声を出す

「大丈夫か、カ・ガーミン。タベもかなり遅くまで起きていたのだろつ。例の重力事件」

「ふあ……仕方ないのさ。捜査が全く進まないんだから……経緯に見落としがないくらいしか調べられんのないんだよ……」

「熱心なのは良いことだ、が、あまり根を詰め過ぎるなよ」

「わかってるよ…。そういや当麻は？珍しく一緒じゃないのか？」

その一言にツルギは

「うむ。朝は何やら遅れるとしか聞いていない。…ま。また面倒な事に巻き込まれているのだろう」

「また不幸な事か。…好きだなああいつも」

ははとツルギは笑い

「誰にでも分け隔てなく接するのがあいつの良いところだ。さて、遅刻してしまう前に行くぞ、カ・ガーミン」

「…いいかげん普通に呼んでくれないかな…」

俺は無駄と思いながらも呟いた

……………

柵川中学校

教師がチヨークを走らせながら授業をしている

「AIM拡散力場は、能力者にとっては身近な現象だ。AIMとは

――」

初春飾利は教師の話を聞きながらノートにシャープペンを走らす

それとは対照的に佐天涙子はぼけーと窓の外を眺めている

ふと前の席の初春を見る

佐天はふと思いついたのかペンでつん、と初春の背中を突つついた

「ひゃ!？」

初春は小さい声で驚く

「ど、どうしました？」

初春は小声で聞いて見る

「帰り、セブンスミストに買い物にいかない？」

初春は一瞬顔を綻ばせたがすぐに表情を戻し

「でも、風紀委員のお仕事が…」

「ちょっとくらい大丈夫だって。パトロール中とか言っとけばさっ」

「今回は、そういう訳にはいかないんですよ。事件が事件ですし…」

「…そっかぁ…」

そう言われると何も言えなかった

………

とある高校

男は金をカツアゲされた

今日に限った事ではない

風紀委員なんて名ばかりだ

風紀委員なんて名前だけだ

何が風紀委員だ！！

お前らが来るのが遅いからこんな目に遭うんだ……！！

お前らが無能だから……！！

見てろ……！！風紀委員の無能共……！！

男——介旅初矢は壁を殴りつけた

………

俺が177支部に顔を出すと見知った顔が二人いた

「影山、矢車さん……」

「あら。アラタ、影山さんと矢車さんと知り合いなの？」
国法が少し興味を抱いた

「ええ。知人なんです。……お二人共、今日はどんな要件です？」
俺がそう聞くと影山が口を開く

「巷を騒がせている重力事件は知ってるよな、アラタ」
影山の言葉に俺は頷く

「警備員としてアンチスキルも、やはりほっとけはおけないのでな」

矢車さんが理由を簡潔に言った

この二人は警備員だ

しかもある程度地位が高いので多少強引な捜査が出来るらしい

時に依頼されたりもするらしい

警備員としてもかなり異例だ

「それで、初春に調べ物を頼んでるんですか？」

「ああ。彼女の技術は素晴らしいぞ？」

出されたコーヒーを飲みながら矢車さんは呟く

「ハッカードも充分やっていけるぞ」

同じようにコーヒーを飲み呟く

「ははは…」

俺は苦笑で返した

「あーもう…。せめてもう少し手がかりがあれば…」

黒子が苛立ちを隠さず喋る

「そうですね…。わかってることと言えば、超度4以上の能力者ってこと位ですし…」

初春が軽く今ある情報を整理する

「どうした、二人共？」

俺は二人に一旦断りを入れて黒子と初春に歩み寄る

「…色々キーワードを変えて調べてみたのですけれど、バンクに該当者がいないんですの…」

「むう…。もしかして、短期間で急激に力をつけた能力者とか？」
そんな俺の提案は

「流石にないだろう。こんな短期間で力をつけるのは」
矢車さんの言葉にバツサリと斬られた

「…そうだよなあ…んなこた有り得ないしなあ…」
俺は落胆した

そんな俺の様子を見て元気づけるように

「根気よく！一から遺留品に当たってみましょう！」

「…そうだな！」

「ですの！」

俺と黒子は頷いた

……………

御坂美琴は一人街を歩いていた

その道中御坂は佐天を見つけたので声をかけることにした

「佐天さーん！」

佐天は御坂に気が付いて、笑顔でそれに手を振った

.....

「アラタや黒子と一緒に、初春さんも大変でしょう？」

オープンテラスに腰を落着いて涼む事にした

「そうみたいです…今日も買い物誘ったんですけど、断られちゃって」

へへ、と佐天ははにかんだ笑顔を見せる

「ま、爆弾魔が捕まるまでは、仕方ないかと飲み物を飲もうとすると

「はあ…」

佐天が溜め息をついた

「どうしたの？」

「なんかちよつと…。なんだかなーって感じ何ですよねー…」

佐天がそんな事を呟いた

「え？」

「いや、なんて言うか…。初春や白井さん、アラタさんは風紀委員頑張ってる、御坂さんはすごい人だし…。私はなあ…みたいな」

「……」

御坂は少し黙った

「……あ、ああ、えと！すいません！そんな重い意味じゃないんです！」

佐天は御坂が気を悪くしたと思い空気を繕おうとする

「ただ、私も能力があつたら毎日が変わるかもーって！」
顔を朱に染めながら佐天は言った

御坂はストローに口をつけたまま微笑んだ

「はあ……。レベルアッパーとかあれば、超度5も夢じゃないのになあ……」

佐天が気になる単語を言った

「レベルアッパー？」

「前に話した都市伝説ですよ。能力の超度を、簡単に引き上げてくれる道具なんですって」

「へえ……」

そんなのがあるんだ、と御坂は思った

「脱ぎ女がいるくらいだから、ひよつとしたらーなんて思ってたんですけど、まあある訳ないですよー、はは、ははは」

「ねえ」

「は？」

「皆で行こっか」

唐突にそんな事を言ってきた

「へ？」

……

「買い物？」

>そ。明日非番でしょ？黒子にも誘ったけど、黒子は明日来れない
って言うから…。あんたはどうなの？<

「いや…、珍しいな。誘ってくれるなんて」
そう聞くと慌てた様子で

>ば、馬鹿！捜査ばかりだから、息抜きにどうかなってだけよ！
！<

「わかった。行くよ、ただ知り合いも誘っていいか？」

ついでに俺は俺の友人を紹介しようと考えた

>ええ、それは構わないけど…。誰呼ぶの？<
御坂が電話の奥で聞き返してくる

「会ってからの御楽しみだ。じゃまた明日」

> ええ、また明日ね、バイバイ<

俺は電話を切ってベッドに携帯を投げる

「…ちょうどいいかな…」

流石に俺も少し息抜きしようと思っていた

ただ相手が当麻から御坂達に変わったただけだけど

まあ楽出来るだけマシだ

(…誰誘おうかな…)

ツルギ？ いやダメだ

むー…

………

介旅初矢は自室にいた

暗い部屋の中にパソコンの明かりのみ

(新しい世界が来る…!!)

イヤホンで何かを聞いている

それは音楽と表現していいかわからない雑な音

——翌日

介旅初矢は道を歩く

耳にはイヤホン

聞いている音はやはり表現しようがない音

カバンを下げながらただ歩く

（僕が僕を救う…！！）

彼の目に何人かの人物が視界に入った

それは今日セブンスミストに向かう途中の御坂達

彼の目に偶然初春がつけていた風紀委員の腕章が見えた

彼の中で復讐心が燃え上がった

（僕を救わなかった風紀委員は…！要らない…！！）

………

「にしても遅いわねー…あんのバカアラタ」

苛立ってた

セブンスミスト内で待ち合わせをしていたのだが一向に現れないじゃない…！！

「御坂さん…落ち着いてください…」
初春がフォローを入れる

「そうですね、…あ、来たみたいですよ？」

「悪いー、遅れたー」

「遅いわよ、馬鹿あ…らた？」

驚くのも無理はない

アラタの隣には女性に大人気のメイクアップアーティスト、風間大介が歩いていたからだ

がっし、と御坂はアラタの腕をつかみ一気に引っ張り出す

「ちょ、御坂？」

「アラタさん！！なんで風間さんと一緒にいるんですか！？」

初春がテンション上がった様子でアラタに聞いた

「そうですね！！風間大介さんの経営するバーバラは、予約しないと散髪すらできないんですよ！！？」

「え、そうなの？」

いつも予約なんてしてないからすっかり忘れてた

「てか、俺が友達と居るのがそんなに可笑しいか？」

その言葉に御坂は「はあ！？」と声を出し

「あんだと風間大介が！？…あんだねえ…ウソつくならもちっとま

しな——」

「何時まで内緒話をしてるんだ？」

大介が口を挟んできた

『あ！』

初春、佐天、御坂は声を揃える

「申し遅れたな。私は、鏡祢アラタの友人の、風間だ。よろしく頼む」

「は、はじめまして、御坂…美琴です…」
多少照れた感じで自己紹介する御坂

「初春飾利です、よろしく願いしますっ！」
勢い良く頭を下げる

「佐天涙子です！あの、良かったら握手してもらっていいですか…？」

佐天が大介に近づいておずおずと手を差し出す

「ああ。構わないよ」大介はそれに笑顔で了承し佐天と握手を交わす

「風間大介さんと握手した！…」
とても嬉しそうに顔を綻ばせる

「結構人気者なんだな？大介」

それにヤレヤレといった感じで

「お前は俺を何だと思ってるんだ…」

「ロリコン」

言った瞬間顔面に裏拳が飛んできた

「あつぶね!!何すんじゃあ!!」

「お前が適当な事言うからだ」

とりあえず御坂達と歩いていくことにした

……………

「初春さんは見たいところある？」

エスカレーターに乗って移動している時御坂が初春に聞く

「うーん…特に決めてないんですけど…」

「アラタは？」

「特に俺も決めていないな。大介は？」

「私も。とりあえずついてくさ」

「うーいーはーるー!!ちよつとちよつとー!!」

先に言っていた佐天が手を振り初春を呼ぶ

「なんですかー？」

初春が走って佐天のところに走り寄る

…今気づいたけどあそこ女性下着売場じゃね？

佐天が初春に赤い下着見せてたしっ

初春それを全力で拒否してたし

御坂が歩いてく中俺と大介はちょっと離れた場所で三人を見守ることにした

「たまにはこんなのもいいな。そっぴやヒロはどうしたんだ？」

「家で寝ている。俺に付き合って夜更かしなんかするからな」
頑張って一緒にいようと思ったけど無理だったのか

歩いているとパジャマ売場にやってきた

そして御坂が少々子供っぽいパジャマに見とれていた

「…ん？おい大介、あれ…」

「む。…あれは…！？」

前方から我らが友人、上条当麻が歩いていた

小さい女の子の手を繋ぎながら

「お。アラタに大介。よお…。て、なんだその変なものを見る目は」

「…当麻…。いくつ不幸だからって…、犯罪に走ることはないじゃないかっ！」

「ちよつと待てえ！！お前何か勘違いしてないか！？お前の頭の中で考えてることは一切ないから！！」

上条当麻全力否定

「…違うのか？」

大介が怪訝な表情で聞く

「違うわ！！俺はこの子が洋服店探してるっていつから、連れてきてただけだよ」

良く見ると女の子は以前御坂が風紀委員として間違えられた時に出会った女の子だった

その時の御坂の奮闘記はいずれ語るとしよう

「ねーねー、お兄ちゃん、あっち見たいっ」

女の子が当麻の服の裾を掴む

「お、わかった。じゃあな、アラタ、大介」

当麻は女の子と手を繋ぎながら歩いていった

「…ロリコン？」

また裏拳飛んできたっ！

俺はそれをしゃがんで回避する

.....

俺と大介は御坂と合流する

佐天と初春も合流する

御坂はなんかうなだれていた

「...どうした御坂」

俺が聞くと

「...何でもない」

低い声で返された

何があっただろうか

.....

御坂がトイレに行ってる中

俺は階段付近にて御坂を待っていた

俺も顔を洗いにトイレに行っていた

トイレから出るとイヤホンをした男性が目に入ってきた

カエルのようなぬいぐるみを持っている

「…？」

その時は特に気にしていなかった

その時は

………

177 支部

現場の遺留品を見ながら白井黒子は溜め息をついた

「はぁ…」

「…もしかして、手口は同じだけど、実は同一犯ではない…なんて事はないですか？」

影山がそんな事を言った

「まさか…」

矢車バツサリ

「…言ってみただけです…」

影山しょんぼり

「あまりにも関連性が見えませんかからね…」
国法が影山をフォローする

「急がなければ、また次の犠牲者が出てしまつかも知れないな…」
矢車はカップに残ったコーヒーを飲み干す

「ですけど、せめて手掛かりだけでも欲しいですわね…。」同僚が
九人」も負傷してますもの」

「…九人…？」

しょんぼりしてた影山が顔を上げる

…九人？

いくら何でも風紀委員九人は多すぎないだろうか

仮に相手が愉快犯なら人通りの多いところで爆発させるはず――

「矢車さん！いくら何でも風紀委員九人は多すぎないですか？」

影山は素直に自分の考えを矢車にぶつけてみる

「ん？…。確かにそうだな…。待て、その考えなら…」

その場にいた全員が息を呑む

「まさか、ターゲット目的は…！？」

黒子の言葉に全員が頷く

「多分そうですよ…！！」

その時にパソコンがアラートを告げる

衛星が重力子の加速を確認したのだ

「場所は！？」

全員が画面を覗き込む

.....

ピリリピリリ

誰かの携帯が鳴っている

「初春、携帯鳴ってない？」

初春が携帯を取る

「あ、ホントだ」

初春が携帯を開いて瞬間黒子の怒号が響いた

>初春！^{クラヒトン}重力事件の続報ですの！！<

「…え？」

そいつは興味深いな

>学園都市の監視衛星が重力子の爆発的加速を観測しましたの！！<

「か、観測地点は…？」

初春が聞き返す

>今、近くの警備員を現場に急行するよう手配していますの！！貴女は速やかにこちらに戻りなさい！！<

「ですから！観測地点を！！」

>第七学区の洋服店！！セブンスミストですよ！！<

「セブンスミスト…ちょうどいいです！！私とアラタさんも今そこにいます！！すぐ避難誘導を開始します！！」
そう言って初春は電話を切った

.....

「初春！？もしもし、もしもし！？」

黒子が焦っている

「なんて事…！」

「…白井、どうしたんだ」
矢車が聞いてみた

黒子が真剣な表情でこちらを向いた

.....

電話を切った初春はこちらを向く

「落ち着いて聞いてください。犯人の次の狙いがわかりました。この店です！」

「な、なんですって！？」
御坂が驚愕の声を上げる

「御坂、悪いが避難誘導に協力してくれ」

「わかったわ」

「大介、お前は避難誘導を促しながら佐天を安全な所に」

「任せろ、必ず守り切る」

「……」

そんな中佐天は少し疎外感を感じていた……

「うん。初春もアラタさんも、気をつけてね」

「ああ、よし行くぞ初春、御坂!!」

二人は頷いて駆け出した

………

黒子は空間移動テレポートを駆使しながらセブンスミストを目指している

（今回のターゲットは……!!）

間に合つてと心の中で何度も繰り返しながら黒子は急いだ

………

矢車ソウと影山シユンは同じようにセブンスミストを目指していた

二人は黒子のように瞬間移動は使えない為最短ルートでセブンスミ

ストまで走っている

「相手もずいぶん、回りくどいことしますねっ！」
走りながら影山が言う

「無駄口叩くな、現場につくことを最優先にしろ！」
二人共かなり走っているがあまり息を切らしていない

無心や人命がかかっているからだろうか

「急ぐぞ、影山！！」

「はい、矢車さんっ！」

二人はただ全力でセブンスミストへ走った

.....

セブンスミストの人払いはある程度終わった

利用客は全員外に避難させた

ふう、と一息をつくのも束の間

「一緒じゃなかったの!？」

御坂の声

「どうした、御坂...と、当麻」
当麻を見てふと違和感を感じた

「…あの子は？」

「それがないんだ、外にもいないし…！！もしかして、まだ中に…！！」

「わかった、探してくる！！」

俺は急いでセブンスミスト内に戻った

「あ、ちよつと！！」

「俺も行く！」

御坂と当麻もアラタを追った

………

初春は辺りを見回した

全ての利用客の避難は完了した

初春は報告をする為黒子に電話をすることにした

………

ピリリと電話がかかってくる

黒子は急いで電話を開く

「初春！？」

> 白井さん、全員の避難終わりました！！<

「今すぐそこを離れなさい！！」

.....

「え？」

初春は黒子の言っていることがわからなかった

> 過去の被害の人的被害は、風紀委員だけですの！<

.....

「はぁ！？つまり、今回のターゲットは、初春だつてのか！」

電話で国法の話聞きながら頭の中で情報を整理する

簡潔に表すなら犯人は風紀委員に恨みを抱いている

その腹いせにこんなことを...！？

.....

「お姉ちゃん！」

初春の背後から幼い少女の声が聞こえる

初春は彼女を見ると顔を綻ばせる

幼い少女は初春に歩いていく

同時に御坂とアラタ、当麻も離れたところに合流した

「あれは……!?!」

御坂が目を見開く

少女が持つ「カエルのぬいぐるみ」に

「メガネのお兄ちゃんがお姉ちゃんに渡してってぬいぐるみを受け取ろうとする」

その時ぬいぐるみが急速に内側に捻れていった

「あ!」

初春は爆弾と悟りぬいぐるみを放り投げる

瞬間三人は駆け出した

「逃げてください!あれが爆弾です!」

(超電磁砲で爆弾ごと……!!)

スカートの中のコインに手を伸ばす

が、コインを滑らし落としてしまう

(しまっ——)

「当麻!」

俺はその辺にあった商品を掴みぬいぐるみに投げて少しでも距離を

取る

爆発する瞬間俺は初春と御坂、そして初春が庇っている女の子を守ろうその三人の前に立つ

当麻は右手を突き出し皆を守る

異能ならば全て打ち消すその右手で

.....

——ッドオン——!!

鋭い爆音と共にセブンスミストが爆発した

.....

当麻のおかげで俺達は難を逃れたかに見えた

「——!!」

物影からワームサナギ体が数十体現れる時までは

「ワーム!? 重力に惹かれて集まったのかよ……!!」

「アラタ!!」

後ろから声がする

「矢車さん!! 影山!!」

「無事か、アラタ」

矢車さんが聞いてくる

「大丈夫だ、当麻、御坂！！避難してくれ！！あと多分近くに犯人がいるはずだ！」

「そんだけ聞ければ充分よ、無茶すんじゃないわよ！」

「アラタ、怪我すんなよ！！」

二人は初春と女の子を連れて階段に向かっていった

御坂は当麻の行ったことに驚いていたが今は置いておく

「二人共、すぐ片をつけるぞ」

地面を跳ねてやって来たホッパーゼクターを掴む

「はい、矢車さん」

同じように跳ねてやって来たホッパーゼクターを掴む

「よっし、暴れるか……！！」

飛来してきたガタックゼクターを掴み取る

『変身！』

矢車さんと影山はバックルの開いた台座にゼクターを乗せるようにセットする

俺は隠していたベルトにガタックゼクターをセットした

《HENSHIN》

「キャストオフ！」

ガタツクゼクターの角を開く

>castoff<

>Change Stag Beetle<

>Change Kick hopper<

>Change Punch hopper<

「行くぞ！」

キックホッパーとなった矢車がワームの集団に駆ける

「俺達も行くぞ、影山」

「言わずもがな。わかっている！！」

パンチホッパーは集団に突っ込み一撃一撃鋭いパンチを繰り出す

「よし…やるか！」

両肩にあるカリバーを取りワームに斬り込んだ

………

介旅初矢は確信した

無能な風紀委員を始末できた

そう感じ小さくガッツポーズを取った

(いいぞ…凄い、素晴らしい…!! 徐々に強い力を使いこなせるようになってきた…!!)

笑いをこらえきれず吹き出す

「つくく…もうすぐだ…。あと少し数をこなせば…!!」
言いながら路地裏に入る

「無能な風紀委員も、あの不良共も…!! 皆纏めて吹き飛ば——」

ガス!

誰かに蹴られた

バッグに入っていたアルミ缶の一つが介旅を蹴った人物の足元に転がった

介旅は起き上がる

「要件は言わずとも。わかるな、爆弾魔」

> H E N S H I N <

マスクドフォームのドレイクとその背後に手を後ろに組んだ御坂美琴が立っていた

.....

「な、何のことだか…僕には、さっぱり…」

「まあ、確かに威力は大したもんよね。でも残念、死傷者はどころか、誰一人掠り傷一つ負ってないんだけど？」

介旅は仰天した

「そ、そんな馬鹿な！！僕の最大出力だぞ！？」

「——ほう」

マスクドドレイクは呟く

介旅は下を向く

そこには自分のバッグのファスナーからはみ出たスプーン

「いや、外から見ても爆発だったんで…中の方は、とても助からないんじゃないかってえ！——」

隙を見てバッグからはみ出たスプーンを取り投げつけてこの場から脱出を試みた

しかし御坂は躊躇なく超電磁砲レールガンを使い介旅の手にあったスプーンを焼き尽くした

その爆風に介旅はのけぞった

起き上がりながら介旅を口を開く

「超電磁砲レールガン…今度は常盤台のエース様か…。良く見れば、仮面ライダー様も一緒だっけえ…！！」

マスクドドレイクは首を傾げる

「いつもこうだ。何をやっても…力で地面にねじ伏せられる…!!」

御坂はゆっくりと歩を進める

介旅は構わず続ける

「殺してやる…!!お前らみたいなのが悪いんだよ!!風紀委員だ
って同じだ!!力のある奴は!!皆そうだろうがああ!!」

御坂は立ち止まる

前髪から雷を迸らせて

「力、力って…!!」

御坂が呟く

怒気をはらませて

御坂は介旅の襟首を掴み

「歯を食いしばれえ!!」

思いつきり御坂は介旅の頬を殴りつけた

「…ったく…」

そのまま御坂は後ろを向いてマスクドレイクの横を歩き去った

介旅は殴られた頬に触れて御坂を見る

「殴られて当然だな。君みたいに力を言い訳にする人は、一番許せ

ないだろうからな」

マスクドドレイクは変身を解く

「こんな話を聞いたことはあるか。常盤台の超電磁砲は、もともとは単なる超度1だった。並々ならない努力により、超度5と呼ばれるようになったんだ。だが、たとえ超度1だったとしても。御坂くんは、君の前に立ちふさがっただろうな」

介旅は俯いた

僕は――

.....

「ライダージャンプ！」

> Rider jump <

「ライダージャンプ……！！」

> Rider jump <

パンチホッパーとキックホッパーは跳躍する

> 1 2 3 <

ガタツクゼクターの角を一度戻す

「ライダーキック！」

> Rider Kick <

中空に浮いたパンチホッパーとキックホッパーはそれぞれ体制を整

える

「ライダーキック……!!」

> R i d e r k i c k <

「ライダーパンチ!」

> R i d e r p u n c h <

『はああああ!!』

ガタツクは前方のワームに飛び蹴りを放つ

パンチホッパーとキックホッパーは急降下キックとパンチを繰り返した

ワームを殲滅して警備員が到着したのを確認する

「俺達も戻ろうか」

「ああ。戻るなら先に戻っててくれ。警備員としての仕事があるからな」

矢車がそう言ったのでお言葉に甘えて先にセブンスミストを出ることにした

………

警備員が立ち入り禁止のテープを張っている中黒子は現場を見つめていた

「白井さん」

そんな中後ろから声が聞こえた

初春が佐天と小さい女の子と共に走ってきた

「初春…！もう。心配したのですわよ」

「ごめんなさい…。でも御坂さんとアラタさんのおかげで…ほら、この通り！」

初春はクルリと回り無傷ということをアピールする

「常盤台のお姉ちゃんと、かつこいいお兄ちゃんが助けてくれたの…！」

『ねー！』

初春と女の子は口を揃えてそう言った

（…それにしても）

黒子はそんな光景を微笑ましく見守りながら改めて現場を見る

（初春達が居た場所だけ無傷だなんて…能力をどう使ったらこういう風になりますの…？）

……………

「御坂！」

前から走ってくる

「アラタ…。怪我とかは？」

「問題ない。御坂は？」

「私も大丈夫。ちょっといざこざあったけどね…」

御坂は自身の右手を握り締める

「…そっか」

その仕草で何かを感じたアラタは追求するのを止めた

「おつふたつがたあ！！」

いきなり黒子が叫びながら御坂の背後に抱きついた

「今回は本当にお手柄でしたの！ありがとうございます…！！」

「え…？」

御坂は一瞬戸惑った

助けたのは…私じゃ…

「黒子、今日はお兄様とお姉様の望むこと何でもしてさし上げますわっ！」

「お背中流したり、マッサージしたりい…何でも仰って——」

「それ、あんたの欲望でしょうが」

「だいたい俺は男だし。そもそも黒子俺の家知らんだろうが」

そんな訳で二人の答えは

『遠慮しとく』
バツサリだった

…いやいつもの事だが

「そんなぁ！お兄様ぁ、お姉様ぁっ！」

後ろで叫ぶ黒子を見視し御坂と歩きだす

色々騒がせた重力事件は、やっと終結した

6 幻想御手（レベルアップ） 前編（前書き）

今回あのライダーがです

あと相変わらずくだぐです

6 幻想御手（レベルアップ） 前編

柵川中学校

「以上の事柄から、学園都市で行われている能力開発カリキュラムにおいて、重要なのは、パーソナルリァリティ。つまり、自分だけの現実を獲得することだ。これは超能力と言われるものの基盤に他ならない。そして――」

佐天涙子は先生の話を右から左に受け流しながらペンを弄る

佐天は前方に居るはずの初春の席に目を向ける

今日は初春がお休みなのだ

どうも初春がいないと、調子が出ない

彼女が風邪と知ったのは今朝学校に行く前に本人から電話があつた

.....

「え？風邪？」

>はい……。微熱なんですけど……なかなか下がらなくて……<

「……そっか……ゆっくり休んで。うん」

.....

そんな今朝起きた事を思い返しポケットとしていると

「佐天涙子」

「え？あ、はい！」

教師が自分の名前を名指ししていることに気づいて素早く顔を向ける

「なんだか随分余裕あるな？今のところ、簡単に説明してみろ？」

「は、はいっ！」

教科書を掴み立ち上がる

だがはつきり言ってほとんど聞いちゃいないのでただ教科書に書かれた文字を目で追うばかり

「えと…」

と、タイミング良く授業終了のチャイムが鳴る

「ああ、もういい」

教師の言葉にホッとする、が

「次までに、自分だけの現実バーソナルリアリティについて、勉強しておくように」

「え？」

追い討ちだった

.....

佐天はその日居残りをしていた

（…理論やたとえ話なんかどうでもいいから…手っ取り早くレベルアップする授業…してくれないかな…）

窓の景色を見ながらそんな事を考える

無能力者（レベル0）

彼女のコンプレックスの一つだ…

.....

鏡^{かがみ}祢アラタは特に宛もなく歩いている

今日も炎天下

太陽の光がジリジリと眩しい

「あつちいなあ…チクショー…」

眩いた所で特に暑さが変わる訳でもなく

「…にしても…おかしいなあ…」

未だにアラタは信じ切れていない

グラビトン

重力事件の犯人である介旅初矢が異能力者（レベル2）である事に

「あの破壊力はどう見積もっても大能力者（レベル4）…だがバ
ンクのデータにや異能力者（レベル2）…ああ…わかんねー…！！」
ぐしゃぐしゃと頭を掻く

頭を掻いてると、この暑さを緩和する素晴らしい屋台を見つけた

「そうだ。リフレッシュしようしよう」

とその素晴らしい屋台に歩いていると

「あれ。アラタ」

御坂美琴と白井黒子と遭遇した

「なんだ、お前らもこの素晴らしい屋台に来たのか」

御坂は頷いて

「あんたも少し行き詰まってんでしょ？一回休んで頭切り替えよっ
て」

「お、そいつは賛成だ…俺もあやかろう」

……………

その素晴らしい屋台というのはかき氷の屋台だ

ちりんちりと風鈴が鳴る

「黒子は？」

「お姉様と同じものを」

「アラタは？」

「俺も同じでいーよ」

特に決めてなどいなかったので御坂や黒子と同じものを頼んでおく
「不思議なものですわね…。風鈴の音を聞くと少し涼しく感じます
の」

黒子がそんな事を呟いた

「ああ。共感性ってやつね」

「？ 共感覚？」

御坂の言葉に黒子が聞き返す

「お待たせしました、イチゴ3つですね？」

そこにタイミング良く店員さんがイチゴのかき氷を差し出してくる

俺は1つを受け取りながら御坂の言葉を補足する

「一つの刺激で複数の感覚を得ることだよ」

黒子は俺の言葉に「なるほど…」と頷いている

御坂は財布を取り出して

「あ、ここ、割り勘だからね」

『ええ……』

まさかそんな落とし穴があったなんて……！！

不覚だった

……………

その辺のベンチに腰掛けて先ほどの共感性について御坂と共に黒子に説明する

「つまりさ。赤系の色を見たら暖かく感じたり」

「逆に、青系の色を見たら冷たく感じたりするだろう?。」

「暖色、寒色と言いますものね」

「そ。このかき氷もイチゴの赤」

御坂が自分のかき氷を軽くかき混ぜる

「なるほど。赤いシロップに果物のイメージをプラスしてますものね……」

黒子の呟きを聞きながら御坂がしゃくつと一口かき氷を食べる

「っんー！…！！」

頭きーんっ！な状態になったようだ

「お姉様ったら…」

言いながら黒子も一口

「んー！？」

じたばたじたばた

「お前もやるが…」

言いながら俺も一口

「くーっ！…来るねえ…」

俺も人の事は言えないようだ

と、三人して頭きーんな状態になっていると

「御坂さーん！白井さーん！アラタさーん！」

聞き慣れた声が聞こえた

前方の方から佐天涙子が歩いてきていた

「佐天さん」

御坂が名前を呼ぶ

「美味しそうですね！」

俺たちのかき氷を見ながら呟く

.....

同じように佐天も先ほどのかき氷屋からかき氷を購入してくる

そして一口

「んーーーーっ！」

佐天も頭きーーーーんな状態になったようだ

「それって最早夏の風物詩よね」

佐天のそんな状態を見て御坂が呟く

「確かにな。最低でも一回は見る」

しゃく、と一口食べる

きーーーーんって来たけど気合で耐えた

「わかってても食べたくなっちゃうんですよね」

わかるぞ佐天

「あ、それってイチゴ味ですか？」

御坂のかき氷を見て佐天が言った

「うん。良かったら、一口どう?」

「良いんですか?いただきまーす」

「お、こいつは定番か?」

御坂と佐天の食べ比べを微笑ましく見守る

黒子がなんかすごい表情してたけどとりあえず無視しとく

「んー…ほいひー…、お返しにレモン味食べます?」

佐天が自分のかき氷をつつき一口分御坂に差し出す

「ありがとう」

御坂が口を開け佐天のスプーンが入っていく

「はい、アラタさんも」

「え? いいのか?…じゃあ御言葉に甘えて…」

佐天が俺にも差し出してくれたので素直にいただいた

んー…酸っぱい

しかし美味しい…

「んじゃ、御坂と同じで悪いけど…」

俺も同じように軽やかき氷をつつきながら佐天に差し出す

「いただきまーす」

ぱく、と佐天が俺のを食べた瞬間

「あああああ!？」

黒子が突如絶叫した

『ん?』

御坂と佐天、そして俺は黒子の方に振り向いた

「な、ななな、何をしているのですの…!？」

「え…、食べ比べですけど…」

遠慮がちに佐天が答える

「食べ…くら…くら…」

途中ピクピクとしていたが突如はっ!とした表情になる

(その手があったとは…!!黒子一生の不覚ですわ…!!)

「で、ではー。私とも関節キ——、もとい、食べ比べを…!」

黒子が自分のかき氷のスプーンを差し出す

「あんた私と同じイチゴ味じゃない」

・・・

「な、ならばお兄様…是非私とも、関節キス——、もとい!食べ

比べを…」

「いや、俺も同じイチゴ味なんだが…」

・・・

「バカバカバカバカバカ！！黒子のバカ！！」

なんか知らないけど地面に顔面をぶつけてました

「そっぴや、佐天さん、初春さんは一緒じゃないの？」

「夏風邪で、今日学校休んだんですよ。それで私は、これから薬を届けに」

と佐天は薬が入った袋を見せる

「かなり悪いのか？」

俺が心配になってそう聞くと

「大したことはないらしいんですけど…。やっぱり、心配ですしね」

その時佐天が声をだす

「あの、もし良かったら…」

………

「って事で、お見舞いに来ったよーん！！」

『お邪魔します（いたしますー）』

佐天に初春のお見舞いを頼まれたのだ

無論同僚として断る訳にもいかなかったので俺は了承した

御坂や黒子も異論はなく俺達は初春の自宅へとやってきた

「すいません、わざわざ…」

自分のベッドで寝込んでいた初春はためらいがちに呟いた

「気にすんなって。ちょっと、動かないでね」

佐天は初春の耳に体温計を当てる

測定が終わり佐天が液晶に出た数値を読む

「37度3分…。まあ微熱だけど、今日は一日寝てる事。もうお腹出して寝ちゃダメだよー」

「…佐天さんが私のスカート捲ってばかりいるから冷えたんですよ」

…普段何をしているんだろうか

「いや、そりゃあだって、親友として、初春が毎日ちゃんとパンツ履いてるか、気になるじゃないですか。ねえ？」

佐天が梯子からこちらを向きそんな事を言う

いやんな事言われましてもネ

今まで寝ていた初春がガバツと起き上がった

「ちゃんと履いてます!!毎日っ!!」

初春さん猛講義

「はいはいわかったから。ほら、病人は寝て寝て」

「…つか男がいる中でパンツなんて言うなよな…」

「…アラタ、そういうのはツッコまなくていいから」

初春はまだ納得がいかなかったようだがおとなしくまた横たわる

「冷たいタオル作ってきてあげるね」

佐天が梯子から降りる

そのまま佐天は台所に歩いていった

「あ、そういえば白井さん、アラタさん。重力事件の方は何か進展ありましたか？」

初春がベッドに寝ながら問いかけてきた

「むう…。あるといえばある、ないといえばない…ですわねえ…」

黒子の言葉に初春が「え？」と聞き返す

俺は黒子の言葉に補足する

「だな。わかったのはあの犯人はレベル2だという事だけだし……」

俺の言葉に御坂が続ける

「けど、あれは間違いなくレベル4クラス……」

「それはつまり、更にわからないことが増えたという進展ですか……」

「ま、そういう感じですよ……」

そんな時ふと御坂が思い出したように

「そういえば佐天さん、前にレベルアップがどうのって話、してなかったっけ？」

「はい？」

………

『能力のレベルを上げるう？』

思わず黒子とハモってしまった

「いや、だから噂ですって……。実体も良くわからない代物ですし……」

「実体がわからない？」

それは初耳だ

「そうなんです。噂の中身もバラバラで…。本当、都市伝説みたいなものなんです」

「…そつか…。まあそんなに都合のいい話はないか」

御坂はそう呟いた

しかし黒子は「んー」と唸る

「黒子？」

俺が聞くと黒子は

「実は、バンクに登録されたレベルと、被害状況に食い違いがあるケース、今回が初めてではありませんの」

黒子の言葉に御坂が「え…？」と声をあげる

「そうだ…。思い出した、常盤台狩りのあの子、銀行を襲った発火^{バイロ}能力者^{キネシスト}…。御坂が知っている事件だけでも、もう二件。それ以外でもレベルと状況に差がある事件が多発している…」

「それって…」

「レベルアップって、マジもんなんですか…？」

「佐天、何か他に知っている事はないか？」

急に振られた佐天は少し戸惑いながら

「えっと…。ホントかウソかわからないんですけど…」

「レベルアップを使った人達が、ネット掲示板に書き込みをしてるとか…」

「それ、どこの掲示板かわかる？」

御坂の問い掛けに佐天は必死に思い出そうとするが一向に思い出せない

するとベッドの方から声が聞こえた

「これじゃないですか？」

『へ？』

その場にいた人達が素っ頓狂な声を出す
そのパソコンのディスプレイにはどこかの掲示板が映っている

「あ、そこそこ！」

佐天が思い出したように声を出す

「お手柄ですわ！…。後はその連中の素姓や溜まり場が調べられれば…」

確かに

一気に事件は進展する

… 矢車さんの勘が当たったな

「素姓まではわかりませんが…ほら、よくこのファミレスに集まっているそつですよ」

初春が指差したところにはファミレスの名前が書き込まれていた

………

「ありがとう、初春さん！行ってみるわ！つと、お大事にねー！！」
御坂は勢いよく扉を開けて駆け出す

「御坂、それは俺ら」

ジャッジメント

「風紀委員の仕事ですよー！」

急いで俺らも御坂を追った

取り残された佐天と初春

「大丈夫ですかねー…」

心配そうに声を出す初春に佐天は

「あの三人なら、大丈夫だよ。学園都市が誇るレベル5とレベル4、そして、仮面ライダーだもん…。私たちが行っても…」

「佐天さん…」

言葉に少し曇りがあつた

「ねえ。初春…。もし、レベルアップを使ったら、私たちも、本当にレベルが上がるのかな」

「そうですね…。あ、でもズルはダメですよ」

その言葉に佐天は顔を赤くし

「だ、だからもしもって言ってるじゃんっ！大丈夫、手なんて出さないって」

「あー！そうだ！」

ふと佐天が大声をあげる

初春は頭に？を浮かべながら佐天を見る

「今日さ、学校で先生に当てられて困っちゃって。ちょっと、教えてくれない？」

カバンからノートを取り出し初春に懇願する

「病人に聞かないでくださいよー」

言いながらノートパソコンを閉じる

「お腹減ってない？なんか作ってあげよつか？」

「そーやってモノで釣るのはよくありません」

「ふーん…。じゃあいらないんだ」

初春はポーカーフェイスを気取ろうとしたがタイミング悪くお腹が鳴った

「……」

初春は顔を赤くして

「……いただきます」

………

夜

とあるファミレス

「ここね……。よし、じゃあ行きますか！」

「またお姉様は……」

「やりたい放題だな本当に……」

そんな俺達の言葉に御坂は

「あんた達は風紀委員だから顔知れてるかもしれないでしょう？」

「でも——」

「いいから！ 私に任せておきなさいって。それじゃあんた達は、離れた席で待機ね」

とカバンを俺に押し付けて意気揚々と店の方に入っていた

「……なんなんだろうな、黒子。俺は今とても不安だ」

「お兄様ですか。……私ものです……」

大丈夫だろうか

いろんな意味で

「ほら、行くわよ」

「あ、こら」

「待ってくださいなお姉様っ」

とりあえず御坂を追って俺と黒子は店内に入っていく事にした

.....

鏡祢アラタはいま爆笑をこらえている

「お兄様……。もう少し静かになさってくださいな……」

「だって……。御坂のキャラに合わなくってさ……くく……」

御坂は現在猫をかぶっている

可愛いこぶりっこみたいなキャラだ

——お願い、この通りっ、ね？いいでしょう？

——んなの知らねーよ。とつと帰んな帰んな

——そんな事言わないでー

——しつけーぞ。ガキはもうおねむの時間だろ

「…マズいな。ガキって言われた時少し青筋浮かべたぞ」

なんとか笑いをこらえて黒子と一緒にその様子を見る

「ええ…。早くも頓挫の予感が…」

言いながらちゅーと黒子はクリームソーダを飲む

——えー。私、そんなに子供じゃないよ？

黒子はクリームソーダを吹き出した

「ぶわ！てめ黒子、あぶねえな…！！」

危うく顔にかかるところだった

——確かに、子供じゃねえなあ…。俺はあんた、好みだぜ…？

——ホント！？嬉しいっ！！

皆さーん！ロリコンがいますよー！

ていうかついに俺は笑いをこらえきれず吹き出してしまった

黒子なんかテーブルにガスガスでこをぶつけてるし

故に気づいていたら

何時の間にか話が進んでいたらしく、御坂がレベルアップのこと

を覚えてくれることになった…

…ヤバイ。爆笑してたよ

心の中で

「黒子、目覚めろー」
ゆさゆさ

「…」

「…返事がない。ただのしかばねのようだ」

黒子は少し休ませておこう

………

御坂が三人の男に連れてこられたのは人気のない発電センターの裏

…なるほど

カツアゲするには持ってこいだな

「さてと。ここらでいいだろう。これで邪魔者はいなくなった…」

「じゃあ——」

「まずは、有り金全部出して貰おうか」

「へ?」

「キャッシュカードと暗証番号も忘れずにな」

「あ、あとクレジットカードも。常盤台のお嬢様なら、持ってるよねえ？」

かなり好き放題言ってるな…

「え、えっと…少しなら、持ってきたんですけど…」

御坂は苦笑を浮かべながら言うが相手の男は聞く耳持たずに

「ああ！？話聞きてええんだろ！？ならとつとと払えっての」

「そうそう、とつとと払った方が身のためだよ」

御坂が肩を落とした

あ。あいつかぶるの止めるな…

と俺は気を緩めていると

「ちょっと待ちなさい！」

「へ？」「え？」

場所は違うがその咳きは俺と御坂のもの

「あんた達、恥ずかしいとは思わないの！？こんな女の子によってたかるなんて！！」

それは女の子

年齢は大体一五あたりか

どこの学校かはわからないがセーラー服の上にセーターを重ね着していてスカートは常盤台のよりは少し長い

髪の毛は肩まで伸びてヘアピンで前髪を止めている

「ああ…。んだてめえ」

「質問しているのはこっちよ。その女の子を離しなさい」
その女の子は怯まない

…黒子以来だなああいう子は

「だから…なんなんだっつの…」

一人の男が苛立ちを隠す素振りもなく男は言う

「…そう。なら、痛い目にあってもらうしかないようね」

………

私はそう言い放つとベルトを取り出してそれを腰に巻きつけた

そしてポケットから一枚のメダルを取り出す

それを右手で弾き左手でメダルを取る

「変身」

左側にあるメダル挿入口にメダルを投入する

そして右側のハンドルレバーを回転させて中央のカプセル状のトランサーシールドがカポン！と小気味良い音を立てて開く

私の体をアーマーが包み込む

……………

「！？」

俺は仰天した

仮面…ライダー！？

「…なんなんだ、てめえは…！！」

三人の内一人が呟く

「…バースよ。仮面ライダーバース」

その女の子は自身をバースと名乗った

6 幻想御手（レベルアップ） 前編（後書き）

バースが出ました…

オーズもいずれです

しかしヤミーとかグリードとかは登場予定はないです

あしからず…

7 幻想御手（レベルアップ） 後編

仮面ライダーバースと名乗ったその人物はゆっくりと歩を進める

「あとあなた達。あのファミレスで、レベルアップのこと知ってたみたいけど…。そのことを洗いざらい吐いてもらうわよ」

バースは右手を突き出し指で誘う

「すかしてんじゃねえぞ、パワーアップした俺達の力、見せてやろうぜ!!」

男の言葉を皮切りに他の仲間達がやってくる

（まだ居たのかよ…。てか、御坂は…）

御坂は俺の視線に気付き目で訴えてきた

何よこの人!?

（知らないよ…。俺だって初対面だし…）

とりあえず御坂に近づいて合流する

「（何、あの人…。アラタの知人?）」

「（だから知らないっつ…。バースって言ってたけど…）」

俺達の小声の会議とは裏腹に男達とバースの会話は進んでる

「…やれやれ、ね…」

バースは身構える

「さあ喰らいやがれ！！これがレベル2の――」

男は殴りかかる

が勝負は一瞬で決まった

もうシンプルに言おう

バースが男達をボッコボコにしました

「大丈夫？怪我はない？」

バースは御坂に近づいて安否を聞く

「は、はい…。大丈夫です…」

バースは変身を解除する

「良かった…。最近幻想御手レベルアップバーを使った詐欺が多発してるからね…。あ。貴方、この子の彼氏？ダメじゃない、幻想御手レベルアップバーなんか頼らせちゃ」

彼氏？の辺りで御坂が顔を真っ赤にする

「な！？」

「…あれ、違うの?」

きよとんとする女性

「違う違う。ただの友達だよ。それに、この子は、常盤台のレベル5だぜ?」

「え…?もしかして、あの超電磁砲!?」
レベルガン

その女性が驚愕の表情を浮かべ

「ホントだ…!あう…大それた事しちゃった…」

頭を抱える少女にとりあえず

「んで。君は、誰だ?見たところ中学生のようだけれど」

その言葉にはっとして

「申し遅れました…私、神那賀零って言います、そして、バースドライバーの装着者ですっ」

バースドライバー?

「なんなんだ、そのバースって」

「セルメダルを使用して、ワームと戦うバトルスーツだよ。蒼いライダーとか都市伝説でのさばってるけど…任せてはおけないのよね

「」

あれ、軽く俺バカにされた？

「セルメダルって？」

ようやく落ち着きを取り戻した御坂がそんな事を聞く

「私が変身するのに必要なメダル。毎月千枚単位で振り込んでくれるの」

何それ お給料？

てかメダルはどこから来るんだよ…

俺たちがそんな雑談をしていると

「随分派手にやってくれたじゃないか」

後方に違う女の声がした

「あ、姉御…」

姉御？

「おい。お前たち。あんな嬢ちゃん相手に何やってんだ」
「す、すいません…」

「…女の財布なんか狙いやがって」

「え、でも——」

言うや否や姉御と呼ばれた女性がビンタを喰らわした

パチン！とかなり痛そうな音が響いた

「あたいに口答えかい！埋めるよ！？」

「す、すみません！」

「謝る相手はあたいじゃねえだろ！！」

またパチン！と音が響く

「ほら、お前たちも！！」

姉御は周囲に倒れている自分の舎弟たちにも声をあげる

その光景をただぼけつと見ているだけなのだが…

次第に並び謝る体制に

「ほ、本当に、悪かった」

「そうじゃねえだろ！！」

「ほ、本当に！！さーせんしたあっ！！」

『したあっ！！』

野球部か

俺は心の中でツッコんだ

姉御はすくつと立ち上がる

「これではじめはついたろう？許してやってくれ…。お前ら！！もう帰んなー！」

姉御が一喝すると舎弟たちは「うっす！！」と口々に言って解散した

「…姉御だねえ…」

俺が呟くと

「…誰に言ってるの」
御坂にツッコまれた

姉御がゆつくり歩いてくる

その姉御に御坂が問いかける

「あんた、あいつらのボス？」

「じゃあ幻想御手についても知ってるわよね？」
神那賀雫が便乗して問いかける

「そんな事より、あたいの舎弟を可愛がってくれたんだ…。覚悟は出来てるよな？」

姉御がそう言ってくる

「つて、え！？覚悟！？何故に？さっき謝ってくれたんじゃ…」
俺が慌てて聞く

「あれはあれ、これはこれ…。借りはきっちり返さないかね…。行くよー！」

姉御が地面に手を当てる

瞬間に地面がぐにやりと音を立て海のようにうねりだす

「な、何これ！？」

「地面を！？」

御坂と俺が声を出す

「ちょ…、こんな足場じゃ変身できない…！！」

バランスがかなり取りづらい

「あたいの能力はフラックスコート…。アスファルトの粘性を自在に操る事が出来るのさ…」

言葉と共に姉御の手がアスファルトに沈む

「っ！！」

足がアスファルトにめり込んでくる…！

「御坂！」

「わかってるわ…よ!!」

御坂が姉御に向かって電撃を放つ

その電撃を姉御はアスファルトの粘性の使い自分の前に壁を作る

電撃を凌ぎきり

「こんな攻撃あたいにや…。っ!？」

前を見ると其処には御坂の姿はなかった

しかないのは御坂の姿だけでアラタと雫はその場に残ったままだ

「消えた…!？」

「バカ、壁見てみる」

俺がそう言つと

「やるじゃない」

御坂の声が聞こえる

姉御は辺りを見回して…

壁に張り付いている御坂を見て声をあげた

「なんだそりゃ!?!なんでそんなところに!?!」

「電流ってね、磁場を作るのよ。それを壁の中の電流に向けると…
便利でしょう!!」

再び電撃を姉御に放つ

「くっ…!!」

姉御は再度フラックスコートでアスファルトを操り自分の前に壁を作る

ズドンっ!!

激しい爆音がする

俺は雫という少女を庇うように風を受ける

姉御も同じように目を瞑り風が収まるのを待つ

「っ…なっ!？」

地面には大きな穴が空いていた

「どう?そろそろ大人しく喋ってくれる気になった?」

そんな余裕を見せる御坂に対して

「バカ野郎ー!てめえこっちのことも考えろやー!」

危うくこちらにも怪我をしそうになったので一応文句を言うておく

「ごめーん!この体制だと加減し難いのー!」

そんな事を言っただけで来やがった

「てか、何時までくっ付いてんのよ!!」

神那賀雫に怒られた

「あつと…、悪い」

「全く…ぶつぶつ」

「なるほど…。最初の一撃は本気じゃなかった、て事が…。そして、今の一撃はわざと外してくれたと…」

「そーよ、わかったら大人しく——」

「ふざけんなっ!!」

姉御の怒号が響き渡る

「なんかすごいヒートアップしてるけど…」
俺はとりあえず雫と共に見守る事にする

「あたいはまだ負けちゃいないんだよ!! あんたも能力者なら本気で来な!! あたいの鉄の意志に、そんなチンケな電気如きで、砕けるもんなら砕いてみなあつ!!」

その言葉に御坂は笑い

「よ…、ほっ…」

電流を使い壁から降りてくる

「嫌いじゃないわ。そーゆーの…」

言葉と共に御坂の周囲に電撃が疾る

「じゃあ、お言葉に甘えて——」

御坂が手を天に掲げるとさらに強い電流が御坂を包む

………

「ねえ、いいの？」

俺の隣でその光景を見ていた雫は呟いた

「あ、何が？」

俺がそう聞くと雫は軽く苦笑を浮かべて

「いや…隣が発電センターでしょう？その隣…」

この場所は建物と建物の間

右側が発電センターなのだ

「左側は…？」

ヤバい

なんか嫌な予感がある

「…変電設備施設」

「マジかよ！？」

俺は慌てて御坂の近くに駆け寄る

「御坂あ！！待てってば！！」

「わかってるって…！！」

全くわかってない返事

「ああくそ…！！」

バツと手を翳す

その手の中にガタツクゼクターが飛来する

「変身！」

ガタツクゼクターをベルトに装着と同時にゼクターの角を開く

マスクドフォームを介さずライダーフォームに変身する

>Change Stag Beetle<

「！！」

この人が…都市伝説の蒼いライダー…！？

「クロックアップ！」

>Clockup<

俺はガタツクカリバーを構え御坂が放つ電撃を受け止めて威力を軽減させることにした

プラスカリバーとマイナスカリバーが持ってくれるか

そう祈りながら二つのカリバーを交差させ御坂の電撃をカリバーに受けた――

.....

初春の自宅

「初春はさ、高レベルの能力者になりたいって思わない？」

「へ？」

佐天が初春の体を拭いている中、突如佐天がそんなことを聞いてきた

「御坂さんや、白井さんみたいな」

初春は「んー」と考えて

「そりゃあ、能力は高いに越したことはないし、進学とかも、その方が断然有利ですけど…」

「…やっぱりさ。普通の学校生活なら、「外」の世界でも出来るし、超能力に憧れて、学園都市に来た人もいるでしょ？…私もさ、自分の能力って何だろう、どんな力が秘められているんだろって…ここに来る前の日は、ドキドキして眠れなかったよ…」

言いながらタオルを一旦洗面器に入れてある水に浸ける

「それが…、最初の身体検査システムスキャンの時に、「貴女には全く才能がありません」

せん、無能力者（レベル0）です」「だもん…。あーあつて感じ…」

タオルを絞り再び初春の背中を拭く

「正直…凹んだし…」

優しく初春の背中を拭き始める

「…その気持ち、わかります…。私も、能力レベルは…大したことありませんから…けど、白井さんやアラタさんと仕事したり、佐天さんと遊んだり、毎日楽しいですよ。だって、ここに来なければ、皆さんと会うことも出来なかった訳ですから…」

佐天に優しく背中を拭かれながら言葉を続ける

「それだけでも、学園都市に来た意味は、あると思うんです…」

「初春…」

ぎゅ、と優しく抱きしめてくれた

が

「もうー、可愛い事言ってくれちゃって！！ご褒美に、全身隈無く拭いてあげるからねー！」

一気にシリアスなムードは破壊された

「わわ、ちょ、ちょっと佐天さん…！？手届く場所は、自分でやりますからー！」

とじゃれていると

バズンっ！！

と電気が消えた

「停電…！？」

………

俺達は帰路についている

「だから待てって言ったのに…」

「もう…。お姉様、また何かやらかしたのですか？」

何時の間にか復活してた黒子も合流して四人は歩いている

「仕方がないじゃない…。まさかこんなところに、こんなもの（変電設備施設）があるなんて…！」

「だから言っただろうが…。くっそ…結局あんま効果なかったしな…」

そう

ガタツクカリバーを避雷針の代わりにしようと頑張ったけど結果停電は起きてしまった

まあ周りの被害は最小限に抑えられたし、よしとしよう

あの姉御はあのまま置いてきたけれど…多分大丈夫だろう

「ねえ」

とその時黙っていた神那賀雫が声を出した

「あんたが、都市伝説の蒼いライダーなの？」

直球聞いてきた

「…いずれわかるさ」

俺は雫の肩を叩き

「じゃあな。仮面ライダーバース」

そして俺は先に行った黒子を追って走り出した

………

かなり直球に聞いたのにはぐらかした…

目の前で見てたのだから間違える筈はないのだ

…面白いじゃない

私は戦うわ

仮面ライダーバースとして

いつか隣に立ってやるんだから

.....

今朝開口一番に黒子から電話があった

「なんだ、黒子...」

>問題が発生しましたの!!<

「...問題？」

.....

介旅初矢が意識不明ということだ

「おい黒子、間違いないのか？」

「ええ、詳しい情報はわかりませんが、アンチスキル警備員取り調べ中に突然！」

黒子と御坂と合流し入院している病院に入る

「風紀委員の鏡祢だ」

「同じく白井です。容態は？」

「最善は尽くしていますが、依然意識を取り戻す様子は...」
医者はそう告げた

嘘じゃあないらしいな…

「あ、あの…、私この前、そいつの顔思い切りブン殴っちゃったんですけど…」

御坂が躊躇いがちに報告する

「いや、頭部に損傷は見受けられません。…いさそもそも彼の体には、どこにも異常はないのです」

医者 of 言葉に首を傾げる

「意識だけ、バツサリ失われてるって事ですか？」

俺の言葉に医者が頷く

「原因不明という訳ですね…」

「ただ、おかしい事に、今週になって同じ症状の患者が次々と運ばれてきて…」

医者 of カルテを覗いてみる

そこに貼ってある顔写真には見覚えがある顔が二つ

一つは銀行を襲った発火能力者

もう一つは常盤台狩りを実行した重福省帆

俺は御坂と黒子と顔を見合わせ頷く

「情けない話ですが、当院のスタッフと施設の手に余る事態ですの
で、外部から、大脳生理学の専門家を招きました」

靴音のする方を見る

「お待たせしました…。瑞穂機構病院院長から招聘を受けました…、
木山春生です」

そしてゆっくりと顔をあげる

「あ…」

俺と御坂は声をあげた

「貴女は…」

そこに居たのは白衣に身を包んだ――

「脱ぎ女」だったからだ

………

佐天涙子の自宅アパートにて

佐天はパソコンを操作している

目的は幻想御手^{レベルアップ}

実在すると御坂たちの話から感じ興味本位で探していたのだ

しかしどのサイトを探してもそれらしい掲示板や書き込みは全く無くもついい加減諦めようと思っていた

「なんか新曲でも入れとくか…」

携帯を操作し空き容量を確認する

…ん、大丈夫

サイトを移動しようとした時クリック出来る文を見つけた

「隠しリンク？」

何の気なしにダブルクリックする

そのディスプレイに浮かび上がったのは――

……………

所変わってバーバラ「KAZAMA」

今日は休業日

大介も出かけている

ヒロはパソコンを操作していた

「…はあ…。やっぱりあるわけないか…」

彼女も佐天と同じようにレベルアップを探していた

ヒロの能力は念動力サイコキネシス

レベルは1

しかしレベルが1の為動かせるのは箸と同程度の重さの奴のみ
箸より重いものはピクリとも動かない

大介の力になりたい

大介に捨てられたくない

彼女が幻想御手を求めるのは全て大介の為だ

しかしやっぱり見つからない

「…はあ…」

パソコンをシャットダウンしようとカーソルを動かす

するとクリック出来る箇所を見つけた

「…?」

特に意識せずにダブルクリック

彼女のパソコンのディスプレイに表示された文字は

.....

TITLE : Level Upper
ARTIST : UNKNOWN

「これって…」

佐天は画面の文字をジッと見つめた

.....

「…やっと…見つけた…」

これで大介に捨てられない…

もっと大介の役に立てる…！！

ヒロは躊躇なくDLのボタンをクリックした――

8 マジヨリティ・リポート 「太陽の神」(前書き)

相変わらずグダグダ、そして無理やりです

8 マジヨリティ・リポート 「太陽の神」

病院内のソファに座り木山春生を待つ

ただ一言言えるのは…

「暑い」

手で団扇のように自分の顔を仰ぐ

「暑い…ですの…」

黒子も同じように手で仰いでいる

すると奥から木山春生が歩いてくる

「あ」

黒子が木山春生を見つけ声をあげる

「お姉様、起きてください！お姉様！」

ゆさゆさと揺する

が、起きる気配はない

…てかよく寝れるなおい

「お姉様。お姉様…」
にへら

声が止んだと思ったら

「では…ここは一つ目覚めのキスを…」

俺が拳を振り上げるのと御坂が起きるのは丁度だった

そして久しぶりの二人して黒子どつきだった

がすん！！

「はぶ…！」

『普通に起こせんのか（起こせないの）！？』

「起きなかったではありませんの…」

まあ確かに

「君たち…。まだいたのか」

木山春生はそう言った

「はは…。すみません、少しお聞きしたいことが…」

俺は苦笑を浮かべながらそう聞き返した

………

「それにしても暑いなあ…ここは真夏日でも冷房を入れない主義なのか」

いや、流石にそれはないかと

心の中でツツコミを入れる

「そうすわね…」

黒子が同意する

「申し訳ありません、それが昨夜停電がありまして。まだ、復旧してないんです」

俺はチラッと御坂を見た

あ、逸らしたなこら

しかし御坂の心配は別だった

「そうか…。非常用電源は、手術や重督患者に使われているしな…」

おもむろにネクタイを緩ませる

「へ？」

といけない…目隠し目隠し

俺はいそいそと目に目隠しをつける

「つふうー…」

息を吐くと同時に上着を脱ぐ

「ま、また始まった…」

御坂がぼーぜんと呟く

「やれやれ。またか」

目隠しして俺には全く見えないが

「な、何をいきなりストリップしてますのー!!」

そっか、黒子は初めてだったっけ

「いや、だって暑いから…」

めっさマイペースな木山春生

「殿方の目というものがありますのー!!」

「下着つけててもダメなのか…」

「ダメですー!!」

ガサガサと服を着る音が聞こえる

「御坂、もういい?」

「ええ」

御坂に聞いたら承諾を頂いたので目隠しを取る

「木山先生…、専門家としてご意見を伺いたいんですが…」
御坂が躊躇いがちに質問する

「それはいいんだが…ここは暑すぎる…」

…とりあえず場所を移動しようか

.....

初春飾利は友人である佐天涙子を待っている

しかし今日の佐天は少々遅い

初春は携帯を開き時間を確認する

「遅いなあ…佐天さん…」

とその時ばさあという音がする

それは自分のスカートが捲られた音だと気づいた

「今日は青のストライプかー！」

とりあえず初春はぽかぽかと佐天を叩く事にした

.....

「見せたいものがあるって、メールで言っていましたか…」

そうなのだ

今日佐天にメールで見せたいものがある、と誘われたのだ

「ふふふ…。よくぞ聞いてくれました…」

「…？」

初春はぽーとする

すると佐天はバツと振り向いて

「刮目しなさいっ!!」

「うわ……!?!」

初春は軽くびつくりする

「遂に見つけたの!!!あの噂のアイテム!!」

佐天はくるくると回りながら初春の前にやってきて

「じゃじゃーん!!」

言いながら携帯を見せる

・・・

「えと…、音楽プレイヤーですよね?」

軽い沈黙があつたがとりあえずそう言っておく

「中身が問題なのよね」

佐天は少し歩いて振り返る

「あとで、教えてあげる」

.....

いつものファミレス

「さて、先ほどの話の続きだが…同程度の露出でも、何故水着は良くて下着はダメなのか…」

『いや、そっちではなく』

御坂と黒子の三人でツツコンでしまった

「…レベルアップ幻想御手…。それはどういったシステムなんだ？形状は？どうやって使う？」

流石にそこまでは調べられていない

俺は素直に

「まだわかってないんです」

そう言うておくことにする

「とにかく、君たちは、それが昏睡した学生達に関係しているのではないかと…そう考えてる訳だ」

「はい」

特に否定することはない

黒子がそう答えても異論はない

「で、そんな話を何故私に？」

「能力を向上させるということは、脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われますの」

黒子の言葉に俺が続く

「だから、もし幻想御手が見つかったら、専門家である貴女に是非調べていただきたいんです」

そう言うと木山は表情を陰しくし

「むしろこちらからお願ひしたいね…。大脳生理学者として…興味がある。…ところで」

「？」

「さつきから気になっていたんだが…あの子達は知り合いかね？」
木山に促されて窓を見ると

窓に張り付いている佐天とそれを後方から見てる初春がいた

………

とりあえず中に入れました

「へえ…脳学者さんなんですか…。は！白井さんの脳に何か問題が！？」

「幻想御手の件について相談してましたの」

軽く不機嫌になった黒子がそう返す

プリンを食べていた佐天は一旦その動きを止め

「それなら――」

「実は、幻想御手の所有者を保護するようになったんだ」

アラタの何気ない言葉が佐天の動きを止める

初春がアラタに「どうしてですか？」と聞くとアラタはコーラを一口飲んで言葉を紡ぐ

「まだ調査中だからな。はっきりしたことは言えないけど…使用者に副作用が出る可能性があるんだ」

「それに、レベルが上がったと調子づいて、犯罪に走るバカが良くいる」

その言葉に佐天は少し顔を引きつらせた

「？ どうしたんですか？ 佐天さん」

初春が聞くと佐天はハツとした様子で携帯を戻す

その仕草に近くにあったグラスにぶつかってしまい

がしゃーん

とグラスが倒れ中身が木山のストッキングにかかった

「ああ！！すいません！！」

佐天はすかさず謝る

しかし木山が取った行動はその場にいた人（特に女性）を赤面させることになる

ちなみに俺はすぐに目隠しをしました

「気にしなくていい。かかったのはストッキングだけだから…脱いでしまえば――」

「だあかあらあ！！人前で脱いじゃダメだと言ってますでしょうが！！ええ！？」

珍しく白井黒子が怒る

「しかし、起伏に乏しい私の体を見て、劣情を催す男性がいるとは…」

「趣味、思考は人それぞれですよ！！それに殿方でなくても歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ！！ねえ！！」

まさしく黒子じゃないか…

そう心の中でツツコンでおいた

………

時間は既に夕方

「お忙しい中色々とお教えいただき、ありがとうございます」

黒子がお礼を述べる

「いや、こちらこそ教鞭を振るっていた頃を思い出して、楽しかったな…」

「教師をなさってらしたのですか？」

俺がそう聞くと

「昔、ね」

どこか含みのある言い方だった

木山はそう言つと軽く手を振り歩いていった

「何というか…ちょっと変わった感じの方ですの…」

「白井さんよりですか？」

初春の厭味（？）に黒子は「あ？」と言ったがすぐ表情を戻し

「一度支部に戻らないといけませんわね」

「乏しいけれど、木山先生に渡すデータも揃えておかないと」

初春と黒子が情報を整理する

ふと味音がしたので振り返る

するとそこに佐天はいなかった

御坂もそれに気づいたのか顔を見合わせる

俺は御坂と共に佐天を追いかけた

「とゆー訳で、私達は支部へ戻りますの…て、あれ、お姉様は…お

兄様も…？」

………

（やっぱり手放したくない…）

やっと見つけた幻想御手

（まだ使った訳じゃないし…黙っていれば…いいよね…）

能力には憧れがあった

「…せっかく見つけたんだもん…」

ギュツと携帯を握り締める

「どうした、佐天」

その言葉に振り返る

「御坂さんに…アラタさん…どうしてここに…」

「だって、突然いなくなるんだもん…心配するでしょ？」

アラタと御坂はゆっくりと佐天に歩み寄る

「な…何でもありません…」

佐天は少し拳動不審気味に呟いた

「…けど——」

アラタの言葉は佐天の言葉にかき消された

「だってほら！あたしだけ、事件とかそういうの…関係ないじゃないですか！」

そう言つて笑顔を浮かべる佐天

その笑顔はヒドく無理をしてるように見えてアラタは心が痛んだ

「風紀委員じゃないし！」

元気に言う佐天のポケットから御守りがぽとりと落ちた

「あ…」

佐天が声をあげる

アラタは歩み寄つて御守りを拾う

「これって、いつもカバンに下げてるヤツか？」

俺がそう聞くと「あはは…」と笑い

「そうです…。母に、もらったんです…御守りなんて、科学的根拠、何にもないのに…」

佐天は思い出す

その御守りに込められた思いを

自分が学園都市に行くことを本気で心配してくれた母親

本当はちょっぴり怖かった

黄昏てブランコに乗っている時母がこの御守りをくれたのだ

——貴女の身が、何より一番大事なんだから

「母って本当…迷信深いんです…。こんなもので、身を守る訳ないですよ…バリアじゃないんですから…」

「…優しいお母さんじゃない」

御坂がそんなことを言った

御坂が言わなかったら多分俺が言っていただろう

「佐天さんを気遣って、御守りをくれたんでしょう?」

御坂の言葉に佐天は一度後ろを向いて少し歩く

「わかっています…。でも、その期待が重い時も、あるんですよ…。いつまで経っても…レベル0のままだし…」

佐天が悲しげに俯いた

「…レベルなんて。どうでもいいことじゃない」

その言葉は俺の友達に良く当てはまる

上条当麻

あいつは本当にすごいヤツだ

だが佐天は気づかないように拳を握っていた

その笑みが自嘲気味な感じに見えたのは俺だけだったのだろうか…

………

佐天と別れた後

帰路を御坂と一緒に歩いていた

「…家族、か…」

俺がそう呟くと御坂が

「…どうしたの？」

「…別に。ちよつと佐天が羨ましいって感じたただけだ…。俺には、心配してくれる家族はいないからな…」

自分を嘲るように笑う

御坂にはその笑顔が酷く悲しい笑顔に見えた

「…ここにいないじゃない」

「へ？」

「だから…家族とまではいかないけど…あんたのことを本気で心配してる奴はいるんだから…」

御坂は頬を朱に染めてそんなことを呟いた

その言葉に俺は心が多少救われた

同時に今までであった能力者への憧れがキレイサッパリ振り切れた

友達がいるから

ここに御坂がいて

ここじゃないどこかにも「友達」がいる

「さんきゅ。御坂」

俺は素直な気持ちを御坂に吐露した

「…別に」

御坂は顔を赤くしながら俯いた

.....

翌日

177支部

「どうだ？初春」

「うーん…暗号や仲間内の言葉が多くて、良くわからないんですけど…幻想御手の取引場所と思われる地点は、いくつか判明しました」

「さっすが初春ですわ」

黒子は賞賛を初春に投げる

俺と黒子は初春から各場所がリストアップされた紙を受けとる

「…こんなにあんのか…」

俺は手をぐるぐる回し歩き出す

白井も出かける準備をする

「あ、あの…」

初春が心配そうな声をだす

「この中に必ずあるんでしょう？」

「だったら、一つ一つぶっ潰してくだけさね」

俺と黒子は笑みを浮かべた

………

と、あんなかつこいい事言っただけいきなり問題が発生

リストアップされた紙が…神那賀零に盗られたのだ

しかもあの女…人バイクも奪いやがって…

くっそー…

念のためガタツクゼクターに記録させて良かったぜ

作業効率は落ちるけどね…

……………

佐天涙子は宛無く歩く

（幻想御手か…）

あたしでも能力者になれる夢のようなアイテム

だけど…得体の知れないものは怖いし…良くないよね…

佐天の指は携帯のディスプレイに表示された消去にカーソルを――

―幻想御手！！譲ってくれるんじゃないのか！？

その行動は一つの声により中断させられた

……………

「さっき値上がりしてさ。こいつが欲しかったらもう十万持ってきてよ」

「だ、だったら、金を返してくれ！！」

男はニヤリと笑った後幻想御手を懇願した男の腹を躊躇なく膝蹴り

をかました

幻想御手の取引現場…！？

佐天は偶然居合わせてしまったのだ

そこにリーダー各の男が歩いてくる

「お前らのレベルがどれくらい上がったのか、こいつで試してみるか」

一瞬背後に気配を感じたが、誰もいなかったので視線を戻した

………

佐天は壁に隠れてどうにか難を逃れた

「とりあえず、風紀委員が警備員に…」
アンチスキル

連絡しようとするタイミング悪く携帯の充電が切れてしまった

（やば…！充電切れ！？）

…しょうが、ないよね

あたしが何か…できる訳じゃないし…

あっちは、いかにもな連中が三人…

こっちは…ちょっと前まで小学生やってたんだし…

…それでも

それでも勇気を振り絞って

「…やめなさいよ…!」

「その人…怪我してるし…すぐに、警備員が来るんだから…」
言葉の途中でリーダー各の男が佐天の顔面真横に蹴りを打ち込んだ

「ひ…!?!」

「今、何だった?」

リーダー各が聞く

そのまま頭を鷲掴む

「ガキが生意気言っじゃねえか。何の力もないくせに、ごちゃごちゃ指図する権利はねえんだよ」

佐天は目を見開いた

——ピンとメダルリーダー各の男に当たる

「ズルして手にした力を我が物顔で扱う屑野郎に、その子をとやかく言う権利はないわよ」

奥の道から神那賀雫が歩いてくる

「けっ…何かと思えば…ガキが一匹増えただけじゃねえか」
近づいて肩を掴む

「あら。随分余裕ね。屑野郎。それと、汚い手で私に触らないでくれ…る！」

雫は躊躇なく男の股間に蹴りを入れた

「がば!?!」

激痛にこらえきれずうずくまる男に

「うらあっ!!」

顔の側面に蹴りを叩き込んだ

がす、と鈍い音がして男は気絶した

「貴方みたいに弱い者しか虐げるような奴は地に這いつくばって当然ね」

もう一人の男が念動力で鉄パイプ等を投げつける

ピンと右手でメダルを弾き左手でメダルを掴む

「変身」

左側のメダル挿入口にメダルを入れ右側のハンドルレバーを回し中央のトランサーシールドがカポン!と小気味良い音で開く

雫の体をゆつくりとアーマーが包み込む

「仮面、ライダー…?」

佐天は目の前の光景を疑った

「なに…!？」

飛んでくる鉄パイプを弾き飛ばし念動力を使った男の顔面を殴りつける

「ぐはあ…!」

と体が転がり男は気を失う

「へえ…。仮面ライダーって奴か…始めて見たぜ…」

「あら。なに他人事のように言っているの。次は貴方が熨される番よ。それにね…私はちよつと機嫌悪いの」

アラタから仕事をかつさらい幻想御手の取引現場と思われる所に行つては見たもののほとんどが外れてようやく見つけた取引現場で女の子が虐められているときた

「…俺たちはよお、幻想御手手に入れる前はお前らみたいなや風紀委員にビクビクしてたんだ…。だから、でっけえ力が手に入ったらお前らをギタギタにしてやりたいと思つていたんだ…!!」

微かに聞こえた妙な音

「…?」

その音を聞くとどこかリーダー各の男が一回り大きく見えた

「ふっ…!!」

その場で跳躍して背後に回る

「いいわ、返り討ちに――…え？」

背後に回った筈なのだが目の前にいるリーダー各がい

「…消えた…？」

一瞬惚けていると背後から味音が聞こえた

「！！」

すぐに振り返り防御体制を取る

「ぐ…！！」

リーダー各の蹴りがヒットする

（そんな…後ろから！？）

（一体なんで！？）

軽く身をかがめて距離を取る

（仕方がない、あんまり使いたくなかったけど…！）

メダルを取り出し直撃コースで弾く

が

メダルは自分の予想とは違う方向に飛んでいった

（え！？）

その事実には驚愕していると腹部に強烈な痛みが疾る

「ぐあ!?!」

その衝撃で後ろに吹き飛ば

(落ち着け…冷静に…)

痛みで朦朧とする意識を奮い立たせ立ち上がる

「…はあ…!!」

相手のローキックが襲いかかる

落ち着け…高さから見てこれは腰から上の肩辺り――

バキリ

「うぐ!?!」

しかし予想とはまた違うところに衝撃が疾る

そのまま吹き飛ばされて廃ビルにガラスを叩き割って突っ込んだ

その上その衝撃でバーストライバーが外れ変身が解除される

「ぐ…ごほ…!!ごほ…!!」

胃から逆流する胃液を吐き出す

「はっ…今のはいい感触だったぜえ…肋の二、三本は逝ったかな…
ひやははは…。あん?なんだ…元に戻ってんじゃねえか…」

「ぐ…!!」

雫は振り絞ってメダルを投げつける

だがそのメダルはリーダー各の男を避けるように飛んでいった

「なんだあ…もう終わりって訳じゃねえよなあ…!? こっちはまだ遊びたりねえんだ…よ!!」

言葉に共に腹に蹴りが入る

「ぐ!?!」

間を待たずして背に衝撃が疾る

「がばあ…、ぐ…!!」

「なんだあ…。まさか本当に終わりってかあ!!」

倒れる雫の腹部に蹴りを入れる

がす、と鈍い音が響き雫は地面を転がる

………

さっきの女性が廃ビルに突っ込んだのを見た

私、は…

「なあ君、今の内に、ここから逃げよう!」

先ほどの幻想御手を要求していた中年の男性がそんなことを提案し

てきた

「え…、でも…」

「個々に僕たちがいても、どうせ何もできない！！…いつだって、レベル0は虐げられるんだ…」

そのことはあながち間違っではない

だけど…見ず知らずとは言えあの子を置いて逃げるなんて…

「どうした？」

私が悩んでいると声がした

振り向くと一升瓶を二本持っている男性が立っている

「じ、実は…」

私はその男性にかいつまんで説明した

「そうか…ならば、君はその警備員アンチスキルに通報をしてくれ。それと、知り合いの風紀委員に連絡を頼む」

「は、はい…」

私の携帯は充電が切れていた為彼の携帯を借りて警備員に連絡する
そしてアドレス帳を見ると見知った名前が目に入った

「鏡祢アラタ」

「え…？」

佐天はそんな声しかあげる事しかできなかった

………

「ぐふ…！！」

壁に叩きつけられて意識が飛びそうになる

しかしなんとか意識をつなぎ目を開く

「なんだなんだあ…変身出来なきゃ何にもできねえじゃねえかつ！」

がし、と指を踏みつけられる

「うああああ…！」

痛みに耐えきれず嗚咽をあげる

「ひやははは…！！良い気味だなあ…！！」リーダー各が笑う

くや、しい…！！

アラタになんて言えばいいの…！！

………

「さつて…んじゃ出掛け——」

「もらいつ…！」

ぱつとリストアップされた紙を奪い取る

「あ…！てめ、何しやがる…！」

彼がちよつと怒る

「まあまあ。偶には私に任せなさいって」

「あのなあ…風紀委員でもないのに——」

言ってる傍から近くに停めてあつたバイクに乗り走る

「聞けやあ…！」

私は忠告をスルーしてリストアップされた場所を目指した

………

自惚れが起こした事

全部自分の所為

やっぱり私は…あいつに勝てない…！！

「おばあちゃんが言っていた」

「…え？」

「…んあ…？」

「男がしてはならない事が二つある。食べ物や粗末にすることと、女の子を泣かせる事だ」

ポケットに両手を入れた一人の男性が乱入してくる

それと同時に赤い物体が飛来しライダー各の男を吹き飛ばす

「ぐあ!？」

その物体は男の手に収まる

「変身」

男はそう言いながらベルトにセットする

> H E N S H I N <

ヒビロカネの鎧に身を包んだ

今となつては伝説と言つていい仮面ライダーカブトが現れる
(あれ…は?)

雫はそのライダーを見て気を失つた

「けっ…また来やがったか…」

男はにへらと笑いながら走ってくる

そのままローキックを繰り出す

（単調…。む？）

一瞬男の足が有り得ない方向に曲がる

（なに…！？）

その驚きが判断を鈍らせる

顔面に蹴りがヒットする

「ぐ…」

マスクドカブトはのけぞる

「ひやはは…てめえもバカだよな…自分がどんな能力にやられたのかもわからないまま死んでゆくんだから…」

「ほう。俺が貴様の力に気づかないとでも本気で思ってるのか？」

「はっ、お前こそ何言ってるやがる。まさかたった一撃喰らっただけで、俺の能力を見切ったとでも言うのかよ？」

マスクドカブトは当然のように「ああ」と言った

「貴様の力は所詮単なる目眩まし。自分の周囲の光を曲げるだけという、チンケな貴様にお似合いの力だな」

その言葉にリーダー各が怒りを露わにする

「んだとお…!？」

「足が有り得ない角度に曲がる。…つまりは光を曲げ誤った位置に像を結ばせる…本体の横に焦点を結ばせて、感覚を狂わせた…。違うか？」

リーダー各が笑いながらナイフを取り出す

「トリックアート偏光能力ってんだけどな…。けどよ、だからっててめえに何が出る…自分の目しか頼る事はできないだろうが…」

笑みを崩さず歩いてくる

「ふ…。俺を誰だと思っている」

カプトゼクターの角を弾く

「世界は、俺を中心に回っている。だから、俺が望みさえすれば、絶えず運命は俺に味方する」

ヒイロカネの鎧が浮き上がる

「キャストオフ」

一気に角を左側に持ってくる

瞬間ヒイロカネの鎧が弾け飛ぶ

無論偏光能力の男には当たらない

>Change Beetle<

「はっ！！自惚れんのもいい加減にしやがれえ！！」

一気に走ってくる

ナイフが自身の眼前に迫る瞬間に

「クロックアップ」

>clockup<

すべてがスローになる

「威力は抑えてやる…しばし生き地獄を味わうといい」

そのままライダーキックのように回し蹴りを放つ

>clockover<

「かはあ！！？」

男が訳も解らず吹っ飛んだ

「ば、バカな…！？俺の、偏光能力は、完璧…なはず…！！」

立ち上がり再びナイフで突き刺そうとする

「…そこだ!!」

突き出した拳は確実に偏光能力の腹部を捉える

「力に頼るあまりに、自分の能力が破られた時を考えていなかった
ようだな」

偏光能力

光をねじ曲げ場所を錯覚させるならば

相手の気を感じれば本体を攻撃する事は容易だ

成功するかは完璧に運任せだがな

雪蓮たちといったおかげでそう言うのを読むのは得意だ

俺の一撃に男は沈んだようだ

さて

俺は男の首根っこをつかみ外に出た

ついでに気を失った女性も助けておいた

………

「お兄様も結構抜けてますのね」

「うるさい」

結局俺は黒子と共に現場に向かう事にした

その現場に向かうと…

「あれ？」

「…もう終わってますのね？」

その場にはロープで拘束された男が三人と

雫を治療している一人の赤い――

！？

「おい！」

俺は走る

「…」

赤い人物は一度立ってこちらを見ると

「また会おう。「アラタ」」

> c l o c k u p <

その場から消えてしまった

「赤い仮面ライダーでしたわね…。お兄様のガタツクと雰囲気は似てましたけど…」

「…天道」

俺は呟く

かつて憧れた男の名を

……………

その現場を隠れて見ていた佐天はホッと胸をなで下ろした

（良かった…あの子、無事だった…）

「…やだな…この気持ち」

あたしと同じような年齢で

あたしと同じ中学生で

あたしと同じ女の子なのに

あの子は戦ってくれた

けどそれはあたしと決定的に違う世界にいるという証

能力者とレベル0では…何もかもが違う

佐天は携帯を取り出す

充電が切れている携帯

しかし希望が入ってる携帯

その携帯を握り締める

「るいこー」

その時友人の声が聞こえた

「アケミ、むーちゃん、マコちゃんも…」
彼女たちは佐天と初春の級友だ

………

「一人で何してたの？買い物？」

「まあ…そんなところ。アケミ達は？」

「図書館でべんきょー。能力はどうにもならないけど、勉強位頑張らないとね」

「…そうだね」

アケミの言葉に佐天は同意した

「ああ、でもさ、聞いた？幻想御手っての」

不意にマコちゃんがそんなことを言ってきた為佐天は一瞬ビクツとした

「なにそれ？」

むーちゃんが聞き返す

「あ、知ってる。能力が上がるとかいうやつでしょう?」

「そーそー。噂じゃあ今、高値で取引されてるらしいよ」

「お金なんかないよー」

「あ、あのさ」

佐天の声にアケミ、むーちゃん、マコちゃんが佐天の方を向く

「あたし…それ、持ってるんだけど」

歯車は加速する

………

「しばらくは、あいつに任せて問題ないな」

ハイパーゼクターを自身の前に突き出す

突如目の前にオーロラが現れる

「この世界は任せるぞ。しかし、また来るかもしれないな」

男がオーロラに足を入れる

オーロラが消えるとその男はどこにもいなかった

8 マジヨリティ・リポート 「太陽の神」(後書き)

主人公のアラタを誰と恋仲にさせようかちょっと迷ってる

一応デフォは御坂ですけど

参考までに皆様のご意見を頂きたいです

是非ともご協力をば

一応相手はメインの4人、国法、重福、神那賀雫を予定しています

ただ、アンケートではございません

誰がいいかなーという要望みたいな感じです

あしからず…

9 想い（前書き）

今回はちょっと短いです

9 想い

「ふ…むう…」

アケミは精神を集中させる

幻想御手でアップした念動力を使用してむーちゃんを浮かそうと試みている

数秒力を送っているとふわり、とむーちゃんの体が宙を浮く

「わ、わわわー!？」

いきなり浮いた事でびっくりし声を出す

「うわー…!!」

その光景を見ていたマコちゃんも感嘆の声を出す

「すごいよ涙子!あたし紙コップ持ち上げるのがやっとだったのに!!」

喜び佐天の方を振り向く

その際を集中を切らしてしまいむーちゃんを落としてしまった

しかし佐天はこちらを振り向かず自分の手を眺めるばかりだ

「…涙子？」

佐天涙子は自分の手の上で舞う葉に見とれている

(…ど、どうしよう…能力だ…)

最初は少し信じられなかった
幻想御手を聞いただけでレベルが上がるなんて

「…？」

アケミは頭に？を浮かべる

と、いきなりガバツとむーちゃんがおぶさってきた

「アケミ！よくも落つことしてくれたわね！！」

「わわ！！ごめんって！！」

佐天の後ろがそんな喧騒に包まれる

(白井さんや御坂さんに比べたら、囁かな力だけど…他人から見れば…どうって事ない力だけど…)

嬉しかった

やっと自分が力を持てた

どんなに努力してもダメだった力が

(あたし…能力者に…！！)

——なっ たんだ…！！

………

「完了つと」

初春はとあるデータをダウンロードした

「にしても、こんな聞くだけでレベルアップなんて…出来るのかねえ…」

俺はイヤホンを手に取りジロジロと眺める

「矢車さんが尋問したところによると、間違いないみたいだぜ？」

後ろで机に寄つ掛かりながら影山が缶コーヒーを飲む

重力事件以降よく来るようになった矢車さんと影山

はつきり言つて177支部の準レギュラーだ

「でも正直眉唾ですわねえ…ホント」

黒子もダウンロードした音楽プレーヤーを眺める

「は!!でもこれを使って白井さん以上の能力者になったら…今までの仕返しにあんな事やこんな事…」

にへらーと笑つた初春に俺は冷静に

「思った事が全部口に出てるぞー」

コンビニで購入したおにぎりを食べながらツッコむ

「え」

「そんなに私に恨みを果たしたいなら是非っ」

初春の両耳に幻想御手を流そうとイヤホンを近づける

「うわぁ！？ウソです！！ウソですよー！！」

慌てて黒子の手を抑える初春

ぴりり、と携帯が鳴った

「あ、俺か」

初春と黒子がぎゃーぎゃー騒いでる中俺は携帯に出る

「もしもし…あー、わかりましたー」

とそんな返事を返す

「黒子、また学生が暴れてるって連絡があつた。行くぞ」

「あ、了解しましたの。初春は木山先生に連絡を」

そう言つて足早に二人は扉を出て行った

.....

AIM解析研究所

「ああ。現物は届いているよ」

木山春生は自室に腰を下ろしパソコンを見ながら電話で初春の連絡を聞いていた

>音楽ソフトで能力を上げる…なんて事可能なんでしょうか？<

「ううむ…難しいねえ…」

木山は届けられた音楽プレーヤーのイヤホンを手に取る

「テストメントならいざ知らず…」

>テストメント？<

聞き慣れない単語が出てきたので初春は聞き返した

>そう言う装置があるんですか？<

……………

影山は初春の会話を聞いていた

しかし電話の向こうの声は聞こえない為会話の内容はわからない

「色々、ありがとうございました」

ぴ、と電話を切る

「…やっぱり、音楽ソフトなんて見当違いなんでしょうか…」

「わからないな…。しかし、こういう事実がある以上、この線で行くしかないだろうな…」

初春の問いに影山は冷静に考えて答えた

初春は一瞬思い浮かべた

以前自分に携帯を見せた友人である佐天涙子

もしかして彼女が見せたいものは…

初春はその考えを払拭するべく佐天に電話をかける事にした

自分の携帯を取り出しアドレス帳を開き佐天涙子にカーソルを合わせる

そのまま音声通話で佐天に電話をかける

数コールの後にガチャと音がする

「あ、もしもし佐天さ——」

>おかけになった電話番号は、電波の届かない所にあるか——<

そんな無機質な音声が響く

初春はボタンと携帯を閉じる

大丈夫…きつと…

初春はそう心に思った…

………

「っふ！」

暴れてる学生をとりあえずぶっ飛ばしておく

「…また幻想御手かよ…」

そんなこんなで黒子と共に幻想御手を使用した学生達を凝らしめて
いる

ただ一言言えるのは

面倒だという事

行く先々で暴れてる学生を止める

その学生の力が微々たるもので…

こう言っただけだが張り合いがない

しかしそれでも生傷は耐えないわけで

………

数日後の177支部

「ほら、少し染みるぞ」

二の腕を差し出す黒子にピンセットに挟んだ白い綿（消毒液染みて
ます）を黒子の傷口にチョンと乗せる

「――!?!?!?」

「日に日に生傷が増えてくなくなあ…」

初春が持つてきた救急箱を開き黒子の怪我を治療する

「仕方ありませんわ…幻想御手使用者が増えているのですから…」

「どれくらい広まってんのか、想像できないからな」

箱から湿布を取り出し傷口に貼る

「お兄様が泣き言など。似合わないですわよ…。ともかく、私たちが成さなければならぬ事は三つ」

「幻想御手拡散の阻止、昏睡した使用者の回復…最後に」

俺はかちり、とパソコンのエンターを押す

「幻想御手開発者の検挙…この三つだな」

黒子は頷き

「これを開発し、ネットに広めた何者かを、必ず見つけだして目論見を吐かせてやりますわ」

そんな黒子を微笑ましく見守り

「さて、先に手当てだ。黒子、他に傷口は？」

本来女性の傷を男性である俺が治療するのはなんかヤバい事があり
そうだが

黒子の胸板辺りに包帯を一周するように巻く

「ホントは御坂にやって欲しいんじゃないのか？」

幸いにも黒子がぺたん（失礼）だったからそういう気分にはならなかった

「お姉様に私のこんな姿、見せる訳にはいきませんわ」

包帯に巻かれながらそう答えた

「それに、こんな姿はお兄様にしか見せられませんもの」

「はいはい……」

包帯をぎゅ、と結ぶ

「ほら、終わったぞ」

黒子の背中をパン、と叩く

「ありがとうございます……」

なんか黒子が軽く頬を染めていたが

とそんな時に

「おっすー。なんか私もなんか手伝う事あ——」

黒子の行動は早かった

自分のこんな姿を見せられまいと御坂が来た瞬間俺を御坂の頭の上
に空間移動させた
レポート

その結果

ガインっ

と頭同士ぶつかった

.....

「で、進んでるの？ 捜査の方」

「...それが...」

初春がコーヒーをお盆に乗せて歩いてくる

「木山先生の話では、短期間で大量の電気的情報を脳に入力する為
の、テストメントとという特殊な装置もあるそうです」

黒子の言葉に俺が続く

「だがそれは、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感全てに働きか
けるものでな...」

その言葉に御坂が

「幻想御手はただの音楽ソフト...聴覚作用だけね」

幻想御手は曲

テストメントのように五感全てには働かない

「植物状態になった被害者の部屋を搜索しても、あの曲のデータ以外何にも見つからないんです」

「あ、悪い初春。コーヒーのおかわり頼めるかな？」

「あ、はい」

俺のカップを持ち台所に歩いてく初春

「仮の話だけどき、曲自体に五感全てに働きかける作用がある可能性はないかな？」

御坂の意見に顔をしかめる

「御坂、そいつはどういう…」

「ほら、前にかき氷食べた時の会話、覚えてない？」

黒子はうーんと考えて出した答えは

「…食べ比べ？」

「いや、そつちでなく」
即ツツコミが入る

「あー！」

俺が思い出したと同時に黒子も思い出したようで御坂と三人で声を揃える

『共感性!!』

と台所でコーヒーを入れて持ってきた初春が話についていけず

「…何ですか？それ」

「共感性ですよ！一つの刺激で、複数の感覚を得る事ですわ!!」

「ある種の方法で感覚を刺激することによって、別の感覚も刺激される事よ」

御坂が簡潔に初春に説明する

「つまり、音で五感を刺激し、テストメントと同じような効果を出している…」

……………

>その可能性はあらず

初春は早速木山先生に電話をかけた

>なるほど…見落としていた…<

「その線で、調査をお願いしたいのですが…」

初春がお願いしてみる

> ああ。そういう事なら樹形図ツリーダイアグラムの設計者の許可も下りるだろう<

「樹形図ツリーダイアグラムの設計者！？学園都市が誇るスーパーコンピューターですよね！！」

テンションが上がる初春

> 結果が出たら知らせるよ<

「じゃあ、今からそっちに行ってもいいですか！？樹形図ツリーダイアグラムの設計者を使うところを私も見てみたいんです！！」

> ああ。構わんよ<

木山先生は優しい口調で許可をする

ガチャ、と電話が切れる音

「じゃあ、行ってきますね！」

初春が走って出て行く

「はいはい」偶々支部に残っていたアラタにそう言って初春は出て行った

「テンション上がってんなあ……」

……

「どうよ！！四〇五日練習しただけでもうこれだよ！」

アケミは遂に警備口ボを持ち上げるまでに至った

「あたしだってえ！」むーちゃんも負けじと空き缶を数個浮かべる

「皆すごい！」

その光景を見てマコちゃんが感嘆の声をあげる

「……」

佐天はその光景を少し複雑な表情で眺めていた

（…やっぱ、初春にだけは教えようかな…。…だけど…正直にアラタさんに話そうかな…。…怒られちゃうかな…。）

そんな事を思案しているといきなりドサツと人が倒れるような音がして現実引き戻された

いや事実アケミが倒れたのだ

突然

「ちょ、アケミ！？」

「アケミちゃん！？大丈夫！？」

佐天はその光景をただ見ていた

見ている事しかできなかった

副作用

その言葉が佐天の頭の中で繰り返された

.....

鏡祢アラタが歩いていると突然携帯がなった

プライベートの方だ

余談だが彼は携帯を仕事用とプライベート用の二つを使い分けしている
わかりやすくする為にプライベートはスライド式、仕事用は折り畳
み式、とそんな具合だ

「...？」

携帯をスライドさせディスプレイを見る

佐天だ

「もしもし？佐天か？初春が心配してたぞ、学校でもよそよそしい
って言ってたし...」

>ちよつと...<

電話から聞こえる声は重たいものだ

>私の友達が、急に倒れたんです...<

「なに？」

佐天は続ける

> 幻想御手を使ったら倒れちゃうなんて…私知らなくて…なんで、こんな事に…<

佐天の声は酷く重い

> あたし…そんな、つもりじゃ…!!<

俺は彼女を冷静にさせる事に勤めた

同時にメールで佐天の家の場所を初春に教えてもらう

電話しながらメールを打つというかなりシユールな画だがそんな事気にしてられない

「佐天、落ち着け…、ゆっくり、焦るな…」

> 幻想御手を…手に入れちゃったんですけど…<

「っ!？」

俺は息を呑んだ

> 所有者を捕まえるって言うから…でも捨てられなくて…それで…友達が、幻想御手を欲しいって…<

一旦言葉を切り

> うっん、違う…!!一人でするのが怖かっただけ…<

もう止まってなんかいらなかった

>あたしも、倒れちゃうんでしょうか…そしたら…もう一度と起きられないんですかね…？<

走りながら佐天の話を聞く

途中人にぶつかりそうになるが何とか避けて

転びそうになるけどただ走る

>あたし…。何の力もない自分が嫌で…でも、どうしても憧れは捨てられなくて…<

電話越しでも震えているのがわかる

>…ママ…<

その言葉は良く聞こえなかった

「え？何だって！？」

>無能力者（レベル0）って、欠陥品なのかな…<

「な、に言ってたんだよ…！」

ただ俺は走った

一旦呼吸を整える為立ち止まる

>それがズルして、楽しようとしたから…罰が当たっんですかね…<

次第に声は涙声になってくる

>危ないものに手を出して、皆を巻き込んで…!!あたし…!!<

酷く、震えて

「大丈夫だ」

>えっ…?<

電話越しの声はハツとしたのがわかる

「もし眠ってしまったても、俺や初春が起こしてやる…佐天も、お前の友達も…皆…!!」

再び俺は走りだす

「だから、な?ドーンとしてりゃいい!お前きつと「あと一分」とか言っちまうぜ?」

また人にぶつかりそうになる

それを避けて走る

ただがむしやりに

>アラタ、さん…<

「いいか！？佐天は欠陥品なんかじゃない！！俺が、戦いの神が保証する！！能力なんか無くても、いつもいつも、俺達を引っ張ってくれるだろう！？力があるうがなかるうが！！佐天涙子は佐天涙子だ！！俺の友達なんだから…！！」

言っている自身も気づかなかったが俺の目から何か熱いものが溢れている

…涙だ

「だから…だからよお…！！」

俺は立ち止まり膝を折る

地面には瞳から零れる涙

「そんな…悲しい言葉吐くなよな…、ばか、野郎が…！！」

>…アラタさん…<

……………

嬉しかった

こんな私なんかの為に本気で泣いてくれる人がいたんだ

「…ありがとうございます…アラタさん…。貴方を、頼って…いいですか…？」

私は涙を拭いてそう言った

………

「当たり前だ!!」

そう答える

俺が守れる範囲は、俺が守り抜いていく

ガタツクになった時

俺はそう決めたんだ……!!

………

初春に教えてもらった情報を頼りに佐天の自宅にやってきた

急いで階段を駆け上がって扉を開ける

佐天の部屋の扉を開けると

「……佐天……?」

佐天涙子は

倒れていた

母から貰った御守りを握り締めて

………

バーバラ「KAZAMA」

ヒロが一向に起きる気配がない

「全く…。あれほど夜更かしはするなと言っているのに…」

仕方なく階段を上がりヒロの部屋を目指す

入る場合はノックを忘れずというのが暗黙の了解だ

しかし返事はない

「…ヒロ？」

不安に思い大介はドアノブに手をかける

ガチャリと扉を開くと

「…ヒロ！？」

部屋の中央で横たわるヒロを見つけ駆け寄り抱き起こす

「ヒロ！？どうしたヒロ！？」

一向に目を開ける様子はない

「ヒロ…！！ヒロ…！！目を…開けてくれ…！！」

体を揺する

だが

彼女が目を覚ます事はなかった――

10 友達の為に全てを懸けて（前書き）

相変わらずのぐだぐだですよ

10 友達の為に全てを懸けて

「佐天さんも、レベルアップ幻想御手を…」

病院のソファに腰を落ち着けて御坂美琴は呟く

あの後すぐ佐天は病院に運びこまれた

やはり原因不明

………

少し前に時間は遡る

「…佐天…」

一人無力感に打ち拉がれていると電話がかかってきた

携帯を取り出しスライドさせディスプレイの文字を見る

「…大介…？」

携帯の通話を押し耳を当てる

>アラタあ…！！ヒロが…ヒロが！！…<

尋常ではない声色

…もう嫌だ

止めてくれ…

「…ヒロが…どうしたんだ…？」

>ヒロが倒れて…！！<

最悪の予感当たってしまった

………

俺はヒロの病室の前にいる

ヒロも幻想御手を使ってしまったのだ

「…俺の所為だ…！！」

大介が嘆く

「俺が一番近くに居ながら…俺が一番わかってなかった…！！」

「悲観的になるな。…お前だけの所為じゃない、ジャッジメント風紀委員の俺がし
っかりしてなかったから…」

しかし大介は首を振る

「違う…。俺はわかっていなかった…」

「大介…」

「隣にいるのが当たり前になっただけだ。わかっていたつもりが、俺は全くわかってなかった……！」

「……大介……」

「隣にいるのが当たり前だからこそ、あいつの気持ちを理解してなければいけないのに……！」

大介は心中を吐露する

「……アラタ、すまない。一人にしてくれ」

「わかった……」

俺は頷いて立ち上がり佐天の病室へと足を運んだ

………

「アラタ」

歩いてると前方から御坂と黒子が歩いてくる

「……ちょっといい？」

何か話があるようだ

黒子に目で聞いてみると首を横に振る

黒子も内容は聞いてないみたいだ

………
「お話って何ですか？」

病院の屋上

フェンス越しに見える街並みを背景に黒子が聞く

「佐天さん、御守り持ってたでしょう？」

「ああ、いつもカバンにぶら下げてる……」

黒子がそう言うのと御坂は頷く

「確か、お母さんにもらったやつだって……。学園都市に来る前に」

「……そんな話をお姉様とお兄様に……」

黒子が呟くと御坂に変わり今度は俺が口を開く

「色々話したかったんだろうな……」

俺がそう言うのがしゃん、と御坂がフェンスを掴む

「……私、レベル5とか言ってるけど、そう言う所は全然ダメだよな
……」

そう悔やむように呟く

「御坂……」

「私はさ。目の前にハードルに置かれたら、それを飛び越えなきゃ

気が済まない質だから…。レベル5もその結果なだけで…別に、すごいと思わなかった」

俺と黒子はただ黙る

ただ御坂の言葉に耳を傾けることしか出来ないから

「でも、ハードルの前で立ち止まっちゃう人もいるんだよね…そういう人がいるってこと、考えたこともなかった…。」「レベルなんてどうでもいいんじゃない」…なんて…」

がしり、とフェンスを握る手に力が入る

レベルなんてどうでもいい

あの時御坂が佐天に言った言葉が頭の中で再生される

追い詰めたのは俺達だ…

「…無神経だったな。俺達」

「…」

静かに御坂が頷いた

そして御坂は俺達に向き直って

「だから、捜査に協力させて。佐天さんを助けるために」

「何を今更。…愚問だな」

「ええ…。構いませんわ、お姉様」

その言葉を聞くと御坂は笑みを浮かべて

「ありがとう、よろしくね」

御坂としては軽く黒子の肩に手を置いたつもりだった

「——!?!?」

「…?」

黒子は引きつった笑みを浮かべ

「こ、こちらこそ…」

そう言った

そついや怪我治ってなかったな…

だが言うのは止めておこう

…気づかない御坂じゃない

「さて、御坂が仲間になったけど、少し俺は別行動を取る」

「別行動?」

御坂が聞き返して来たので「ああ」と頷き

「地球の本棚に聞いてくる」

「…ほし？」

黒子や御坂の頭の上で？を浮かべていたけどとりあえず俺は病院を後にした

……………

とある探偵事務所

コアな事件を解決して、俺たちに平穏な時間が戻った

今回は出張探偵って事で学園都市に合った建物を譲り受けそこを今は拠点としている

意外にもこの学園都市に拠点を置いてからと言うものの結構依頼がよくやってくる

フィリップ共々、今日の依頼を終えた後のコーヒーを飲む

ふう…

一仕事終えた後のコーヒーは格別――

「旦那あつ！！」

「ぶは！！」

いきなり来た来訪者によって俺の優雅な時間は終わりを――

「って、アラタじゃねえか。どうした一体」

「あんた達の力を借りたい…。二人で一人の仮面ライダー」

.....

「幻想御手か。それはもちろん耳に入っているよ。実は僕の方でも独自に調べていたんだ」

「フィリップ…。また勝手に…」

地下に隠してあるリボルギャリー内部

アラタはフィリップともう一人の帽子を被った青年、左 翔太郎の元にやってきていた

「しかし翔太郎、この幻想御手事件…放っておく訳にはいかないと君も思っていただろう？」

「まあ…確かにな…」

軽く帽子を被り直す翔太郎

「アラタ、まずこれを見てくれ」

フィリップは数枚の紙を渡す

それには白黒の折れ線グラフが移されていた

「これは？」

アラタが聞くと

「幻想御手使用者の脳波パターンだ。少しハッキングしてプリントアウトした」

さらつと凄まじい事やっているなおい

「それよりパターンを見てくれ。脳波は人それぞれで必ず違う、ほぼ同じなんて有り得ない。だが使用者の脳波パターンにはすべからず共通する点があるんだ」

「…どういう事だ？」

翔太郎が聞くと

「これはつまり、誰か他人の脳波パターンで、無理やり脳が動かされているならば、人体に多大な影響が及ぼす確率が非常に高い」

その言葉にアラタは

「幻想御手に無理やり脳弄られて、植物状態になったってのか…？」

「誰が何のためにこんな事しやがったんだ…」

「僕も独自にまた調べてみる。アラタ、翔太郎」

フィリップは二人を見る

「よっし…、久々に事件の香りがする…。これ以上、この学園都市を泣かす訳にはいかないな…行くぜ、アラタ」

「わかった、左の旦那」

.....

初春は思い返していた

思えば不安な点はあったのだ

アラタからその報告を聞いた時は本当に自分を責めた…

AIM解析研究所

「…そうか、この間の彼女まで…」

その報を初春から聞いた木山春生はそう優しく呟いた

「…私の所為何です…」

「あまり自分を責めるものじゃない。少し休みなさい、コーヒーで
も——」

「悠長な事をしてる暇は——」

初春の言葉は肩に置かれた手に遮られた

「解析結果はまだ出ていないが、お友達が目覚めた時に君が倒れて
は元も子もないだろう」

そう初春に優しく言う

「大丈夫。最後はきつと上手くいくさ」

そう言い残し木山は部屋を出ていった

初春は軽く目尻から出た涙を拭う

その時たまたま引き出しからはみ出た一枚の紙に目がいった

初春はそれを直すために申し訳ないと思いながら引き出しを開け紙を少し取り――

「…え？」

書かれてあることに疑問を抱いた

……………

177支部

「黒子、御坂」

ばん、と扉を開ける

「あ、お兄様…、とそちらの殿方は？」

「知り合い。そっちは？」

翔太郎が軽くうなだれてたが気にしない

お互いの情報を交換するとほとんど一緒だった

…なんだったださっきの別行動は

「だけど特定の人物の脳波パターンがはっきりしてるなら…」

「初春にバンクの検索をしてもらえば…で、初春がいないんですの…」
がつくりする黒子

「なら、相棒に連絡だ」

翔太郎がスタックフォンを取り出す

「念の為、国法にも頼んでみよう」
俺がそう言つと黒子と御坂は頷いた

……………

「なるほど。そう言うことでなら、バンクへのアクセスは認められるでしょうね」

国法がパソコンのキーボードを叩きながら言葉を返す

「バンクにデータがなかったら？」

>問題ないよ。バンクには開発を受ける学生は当然。病院や様々な仕事の適性を受けた大人のデータだって網羅されているんだく

スタックフォンからの声

翔太郎がスタックフォンを手に乗せていたのだ

「…誰？」

国法のもつともな疑問

「紹介は後で。フィリップ、本当か」

> ああ。しかし、理解出来ないのも少しある。幻想御手を使用することでは他人の脳波が組み込まれるのか…そしてレベルがあがるのか。ここの部分が僕でもわからない<

周りの人物は深く考えない事にした

国法は一度こほんと呼吸を整える

「コンピューターだって、あるソフトを使ったからって性能が格段に上がる訳じゃないわよね？ネットワークに繋ぐならいざ知らず」

「ネットワークに繋がると、性能が上がるんですか？」

黒子が国法にそんな事を聞く

「個々の性能が上がる訳じゃないわ。でもいくつものコンピュータを並列に繋がれば、演算能力が上がって——」

「なるほど…。幻想御手を使う事で、脳のネットワークを構築したって訳か…」

翔太郎の言葉にスタッグフォンが頷いた（ような気がした）

> 可能性は無いはない、むしろ高い<

「けど、どうやって脳のネットワークを構築してるんですか？」

御坂がそう聞くと

「…考えられるなら…AIM拡散力場だな」
俺がそう返す

「能力者は、無自覚に周囲に力を放出しているわ。もしそれが繋がったら…」

国法の言葉に御坂が軽い意を唱える

「でも、あれは無意識下のことだし…あたし達の脳は、コンピューターで言えば使ってるOSがバラバラだから、繋がっても意味ないんじゃない…」

その言葉にスタッグフォンが答える

>コンピューターネットワークもOSはバラバラだし、使用してる言語も当然違う。しかし、ネットワークが作れるのは、プロトコルがあるからさく

「特定人物の脳波パターンが、プロトコルの役割をしているって事ですか？」

国法がキーボードを叩いてる姿を見ながら黒子が呟く

「あくまでも可能性だけだ」

「だが、そうして脳を並列に繋がれば、莫大な計算をすることも可能

になるな…」

俺の言葉に国法が頷く

「…どういうことだ？」

左の旦那が聞いてきたので説明することにする

「単体じゃ弱い力でもネットワークで一体化することにより、能力の処理能力が向上する…」

俺の言葉にスタッグフォンが言葉を続ける

>それに加え、同じような能力者の思考パターンが共有されることにより、更に効率よく能力が扱える…そう言う事だよ翔太郎<

「恐らく昏睡患者は脳の活動全てをネットワークに使われてるんじゃないかしら？」

エンターを押す

「出たわよ!」

>脳波パターン一致率、99%…ビンゴだ<

そのファイルを開く

表示された顔写真は――

……………

「これも…これも…」

ファイルを開く

その中に書かれてるものは共感性の論文

その時ガラリと扉が開く

「いけないな」

初春はその言葉にハッとして扉を向ける

「他人の研究成果を勝手に見ては…」

木山春生は目を鋭くし初春を見つめた

………

「…おい、これって…」

俺と黒子、御坂はその写真の顔に見覚えがあった

「登録者名…木山春生…」

『初春が（初春さんが…！）』

言葉に反応し国法が振り向く

「初春さんがどうしたの!？」

「さっき、その木山先生のところに行くって…」

御坂の言葉に国法が声をあげる

「なんですって!？」

黒子が急いで携帯を取り出し初春に連絡をする

しかし

「繋がらないんですの!？」

「アンチスキル警備員に連絡!! 木山春生の身軽確保を!! ただし人質がいる可能性あり!!」

国法がすかさず指示をだす

「はい!!」

「おいアラタ、一体どうなってんだ…?」

翔太郎が流れについていけずアラタに聞く

「簡単に説明するなら…俺の友達がヤバいつてところか…!!」

「マジかよ…!？」

………

木山春生の車内

初春は手錠をかけられ拘束されている

拘束と言っても手錠だけで彼女は助手席に座らされている

「…どうしてこんな事したんですか？眠っている人たちはどうなるんです！？」

沈黙に耐えきれず初春がそんな言葉を投げかける

「…」

「誰かの能力を引き上げて糠喜びさせて、何がそんなに面白いんですか！？…佐天さんだって…」

木山は少し間を置き

「…他人の能力に興味はないよ。私の目的はもっと大きなものだ…」

………

「行くぞ！御坂！」

「ええ！！！」

大きく頷いた御坂に少し訝しげにする国法に

「いいよな？国法！？」

「一般人を巻き込みたくはないけど、レベル5の貴女が手伝ってくれたら…」

よし、国法の許可を取り付けた

「左の旦那」

「ああ。行くぜ、二人共」

翔太郎を筆頭に御坂と俺がついていく

「お姉様!!お兄様!!」

扉を出て外に出ると黒子が追いかけてきた

俺は左の旦那に目配せする

「先に行く、じゃあなっ!」

翔太郎はそう言って走っていった

場所を言っ てなかったけど多分大丈夫だろう

そんなやり取りをしてると黒子が走り寄ってくる

「初春も風紀委員の端くれ、いざとなったら自分の力で……」
数秒の間

「多分、何とか……」
「……」

苦笑するしかなかった

「運が良ければ……」

不安を煽るなーばかり

「それに、一科学者にしか過ぎない木山に、警備員を退ける術はないかと……!」

「馬鹿、何千人以上の能力者の命が握られてるんだ、油断出来ないだろうが」

黒子は一瞬怯む

「それに、何か嫌な予感がするの……」

御坂の言葉に俺は静かに頷く

「ならなおのこと……!ここは風紀委員の私がお兄様と――」

ポンと肩を御坂が叩く

「――!?!?!?」

目尻に涙を浮かべ悶絶する黒子

「そんな体で動こうっての?」

「お姉様、気づかれて……?」

「逆に気づかれないって考えてたお前の神経疑うぞ俺は」

「あう……」

俺の言葉にしょんぼりする黒子

「…あんたは私の後輩なんだから…」
御坂は黒子の額をちゃんと小突く

合わせて俺は黒子の頭を撫でる

「それに、俺は、お兄様、何だろ？」

俺と御坂は屈託のない笑みを作って

『こんな時くらい』

「お姉様と」「お兄様に」

『頼んなさい（頼つとけ）』

黒子はその言葉に本当に感動した

二人にそこまで想われていた事に

「…お二方」

………

「…ヒロ…」

ドレイクグリップを突き出す

「変身」

> H E N S H I N <

マスクド레이크に姿を変えた大介はゼクトロンに跨る

「必ず助けだす…」

エンジンを蒸かしバイクを走らす

たった一人の家族を助け出すために

………

「…」

神那賀雫はセルメダルを弾く

「…もう私は逃げない」

落ちてきたメダルをキャッチする

「…あいつに迷惑ばかりかけてらんないもんね」

「すっかり惚れ込んでんな。雫」

背後から声がする

「ほつといて下さい。霧島さん」

「はっは、良いさ別に」

霧島と呼ばれた男は私に向かって鍵を投げてきた

鍵を受け取り

「なんですか？これ」

「バイクの鍵。あいつのばかり借りられないだろう」

いや、あいつ（アラタ）のはほぼ盗んだに近いんだが

「ま、有り難く頂戴しておくわ。じゃあね」

そう言って走っていく

「…ふ、青春してるねえ…俺も行きますかな」

「幻想御手なんてくだらないもの…。俺が断ち切ってやる」

彼は赤、黄、緑、三枚のメダルを宙に投げキャッチする

「…霧島齋堵、参る」

そう決意し歩きだす

彼の名は霧島齋堵^{きりしま さいと}

またの名を

腰に巻いてあるベルトのメダルスロットであるオースレイトーに三枚のメダルを入れスレイトーを傾ける

そして右側に固定してあるオースキャナーを取り出しスレイトーに向けスキャナーをスライドさせる

「変身」

一度スキャナーを胸の前に持つてくる

>タカ<>トラ<>バッタ<

>T A T O B A ! T A T O B A T A ・ T O ・ B A ! <

「行くか…！」

近くに停めてあるライドベンダーに跨り最大速度で走り出した

それぞれの思いが交差する中

幻想御手事件は集結に近づいていく――

11 多重能力（マルチスキル）（前書き）

やー、今回も無理やりですよー…

11 多重能力（マルチスキル）

「演算装置？」

木山春生の車内

淡々と車を走らせながら木山がそんな事を言った

「あれは、A I M 拡散力場を媒介としてネットワークを構築し、複数の脳に処理を割り振ることで高度な演算を可能とする…。それが^{レベルアップ}幻想御手の正体だ」

木山の言葉を聞きながら初春はスカートをギュツと握り締める

「…どうして…！」

言葉に怒気を軽く宿らせて木山に言う

「あるシミュレーションを行う為に、^{ツリーダイアグラム}樹形図の設計者の使用申請をしたんだが、どういう訳か却下されてね。代わりになる演算装置が必要だった…」

初春がハツとする

「…そんな事の為に能力者を…？」

「一万人ほど集まった…充分代用してくれる筈だ」

その言葉に初春は怒りを込めた視線で睨む

「…そんな怖い顔をしないでくれ」

言いながら木山は白衣のポケットに手を入れる

「そうすれば皆解放する」

ポケットから取り出したのは一つの音楽プレイヤー

もう一つ小さいカード状のメモリースティックがある

それを初春に差し出した

「幻想御手をアンインストールする為の治癒プログラムだ」

「…！」

「君に預ける」

「え？」

初春はキョトンとした表情でアンインストールプログラムを受け取る

「後遺症はない。全て元に戻り、誰も犠牲にはならない」

「信用できません！輪唱研究が充分でないものを、安全だと言われ
ても、気休めにもならないじゃですか！」

木山はそれに軽く笑みを浮かべ

「…手厳しいな…」

その時カーナビが反応する

「…もう踏み込まれたのか…君との連絡が途絶えてから、動き出したにしては早過ぎるな…。別ルートでたどり着いたか…」

「…?」

初春が意味は解らず木山を見る

「所定の手続きを践まずに機材を起動させると、セキュリティが作動するようにプログラムしてあった…。これで幻想御手に関するデータは全て失われた…。その使用者を起こせるのはもう、君が持つそれだけだ」

「え…!?!」

初春は手元にあるアンインストールプログラムを見つめた

「大切にしまえ」

……………

しばらく走らせると木山は急にブレーキを踏む

目の前には警備員アンチスキルの集団

一斉に銃を構える

「> 木山春生だなく」

前に出た矢車が声をあげる

「警備員か…」

ハンドルによっかかりながら木山は呟いた

「上から命令があつた時だけは、動きが早い奴らだな…」

「>幻想御手頒布の被疑者として、貴様を拘留する。直ちに降車しろ<」

影山が続きを言う

「どうするんです？年貢の納め時みたいですよ？」

助手席の初春が木山に言う

「…幻想御手は、人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ」

唐突にそんな事を呟いた

「だが同時に、使用者に「ある副産物」をもたらしてくれるんだよ」

「…え？」

「…面白いものを見せてやろう…」

そう言つて木山は不適に微笑んだ

.....

木山が車から降りてくる

「両手を頭の後ろに組んで、その場でうつぶせになれ」

矢車の指示に大人しく従う木山

「人質の少女は無事です」

状況を双眼鏡で観察していた鉄装綴里が報告する

「よし……。黄泉川」

「はい。…>確保じゃん!!<」

矢車の指示に黄泉川愛穂が号令を出す

じりじりと他の警備員が警備ロボットと共に距離を縮める

しかし

——タァンっ!!

突如として警備員が仲間の警備員を撃つ

「貴様!?!」

「一体何を!?!」

「ちがう！！俺の意志じゃない！！」

徐々にパニックに陥る警備員達

そのまま木山は手を前に突き出す

次第に風が巻き起こる

「黄泉川、一体どういう事だ！！」

「私に聞かれてもわからないじゃん！！能力者だって報告は……！」

「ぐ……！！鉄装、黄泉川二人はここで俺と影山の援護に回れ！」

「は、はい！！」

「了解じゃん！！」

影山と矢車はホッパーゼクターを掴む

「行くぞ、影山！！」

「はい！！矢車さん！！」

ベルトの台座にセットし

『変身！！』

《HENSHIN》

>Change Kick hopper<
>Change Punch hopper<

パンチホッパーとキックホッパーは前進する

「はあああつー!」

パンチホッパーは一気接近し殴りかかるうとするが

突如巻き起こる水の渦に阻害される

「何!?!」

キックホッパーは驚愕の声をあげる

「デュアルスキル二重能力者だと!」

「ぐあああああつー!」

壁に叩きつけられるパンチホッパー
その衝撃で変身が解除され気を失う

「影山!!--く...!!--」

小さく屈みゼクターのレバーを傾ける

「ライダージャンプ...!!--」

>Rider jump<

「ふっ!!--」

大きく跳躍しレバーを戻す

「ライダーキック!!」

> Rider kick <

「はああああっ!!」

生身である木山にライダーキックを放つ事に少し抵抗があったが今はそんなことを言っではいけない

しかし木山にライダーキックは通らなかった

「な…!？」

見えない壁のようなものにライダーキックが止められていた

「…流石に威力は高いな。…だが、許容範囲だ」

キックホッパーの下から水の渦が巻き起こりキックホッパーが天高く宙にあがる

そしてそのまま地面に叩きつけられ変身が解除された

「ぐ…、が…」

矢車の全身に激痛が疾る

「君に戦う力はもうない…危ないからどいてくれ」

木山は風を操作し矢車を右側の壁に吹き飛ばす

「うわああああっ!!」

そのまま壁に叩きつけられて気を失った

.....

俺は御坂を後ろに乗せてバイクを走らせる

「もっとスピードでないの!」

「これが最高速度だ!!急かすな馬鹿!!」

走らせていると徐々に車の数が減っていく

間違いなく近づいているという事だ

「アラタ!!」

バイクを走らせていると隣に大介が変身したドレイクが走ってきた

「大介!!」

「風間さん、どうして...!!」

「俺にも、ヒロを助け出すという使命がある...!!アラタ、今回は
かりはお前にいい格好はさせない...!!」

珍しく熱い大介

「へ...、わかったよ、遅れんな大介!!」

「お前こそな…！」

一気にアクセルを切る

「御坂、しっかり掴まってるよ…！」

俺は御坂にそう言うつと御坂は静かに頷いて俺の腰に手を回しギュッと握る

(…)

御坂は軽く頬を朱に染めながらアラタの後ろに乗っていた

……………

「っ、どうなってやがんだ…こいつは…」

一足先に現場についた翔太郎は愕然とした

「ひでえ…。警備員がめっちゃくちゃじゃねえか…」

その場をぐるりと見回しながら翔太郎は木山を探す

「…いた…」

翔太郎はダブルドライバーを取り出し腰に巻きつける

木山に近付く翔太郎を見つけると鉄装は驚いた声を出す

「ちょっと…!!一般人がなんでこのフロアにいるのよ…!!」

鉄装の言葉にびくつと翔太郎は肩を震わせる

「つと…警備員か…、待ってろ、ちよつと時間稼いでやる…」

翔太郎は歩みを止めない

「あ、ちよつとお！」

………

「あんたが、木山春生か…」

「…君は、左 翔太郎、だね…」

「…知ってもらえるとは、光荣だね」

翔太郎は帽子を被り直す

「…どうして幻想御手なんてのをばらまいたんだ…」

「…私には目的がある…。だが安心してくれ、誰も犠牲はでないさ
…」

その言葉に翔太郎は憤慨する

「フザケンな！！犠牲は出ないとか言っつけど、もう怪我人は出
てんだろうが！！目的が何だか知らねえが…、邪魔させてもらっぜ
…！！」

翔太郎が服の内ポケットから一本のUSBメモリを取り出す

> J O K E R <

「フィリップ」

> 了解だ、翔太郎<

> C Y C L O N E <

『変身!』

フィリップが右側にメモリをセットする

するとメモリが転送され翔太郎のベルトに現れる

翔太郎はそのメモリを押し込み完全にドライバーにセットする

そして左側に自分のメモリをセットしドライバーを開く

> C Y C L O N E J O K E R ! <

軽快な音楽と共に強風が吹き荒れる

翔太郎はその姿を仮面ライダーWに変える

「…さあ」

Wは木山を左手で指差しながら

「お前の罪を数えろっ!」

Wは身構えて木山に駆けて行った

.....

ガタツクエクステンダーを停めて階段をのぼる

のぼりながら黒子に電話をしていた御坂が声を荒げる

「そんな！！能力は一人に一つだけ！！例外はない筈でしょう!？」

「御坂!？」

一通りの話を聞いた御坂は電話を切り

「...今の木山は、実現不可能と言われてる多重能力者...そう黒子が言ってたわ...」

「つくそ...！！これも幻想御手の副産物ってヤツかよ...!!」

「く...!!」

俺とドレイク（大介）、御坂は階段をのぼり終える

「...全滅...」

ドレイクが呟く

「警備員が...全滅...!？」

御坂がさらに声をあげる

「は、初春さん!!」

御坂は停めてあった車の中に初春が倒れている事に気づき歩み寄る

「…見た感じ怪我はなさそうだな…」

俺は御坂の隣に立ち冷静に分析する

「、アラタ、あれ…!!」

御坂は煙を指差す

そこにはWと木山が戦っていたのだ

メモリを巧みに変えながら木山の猛攻を凌ぐ

「左の旦那!!」

Wは風を受けてこちらに飛ばされる

「つく…、なんなんだちくしょー…」

「旦那」

俺の言葉に気がついてWがこちらを向く

「やっと来たか…おせえぞ…」

「すまない、色々あってな…」

御坂とドレイクは俺の近くに移動し木山を見る

「…御坂美琴…。学園都市に七人しかいないレベル5…、そして、
仮面ライダー…流石の君たちも、私のような相手と戦った事はある
まい」

「君たちに、一万の脳を統べる私を止められるかな」

嘲るように言ってきた

「止められるかな、だと…!?!」

俺が怒りを含ませて言い返す

「当たり前だろうが!!」

飛来するガタックゼクターを掴む

ドレイクはゼクターの尾を引きキャストオフの体制を取る

「変身!!」

「キャストオフ」

アラタはベルトにゼクターをセットし直接ライダーフォームに変身
しドレイクはマスクドアーマーを弾き飛ばしライダーフォームに姿
を変える

>Change Stag Beetle<
>Change Dragonfly<

御坂が走ると木山は目を細くする

その時地面に穴が開きさらに強風が吹き荒れた

「デュアルスキル二重能力者って、本当らしいな…!!」

風をかくぐり御坂と二人木山の前に対峙する

「ええ…楽しませてくれるじゃない…!!」

木山は煙が舞う中手をゆつくりとあげながら

「私の能力は、理論上不可能と言われるアレとは方式が違う…。言わば^{マルチスキル}多重能力」

ぐ、と木山はその手を握る

刹那地面を這うように水の刃が襲いかかった

御坂は左、俺は右側に飛び退きその刃を避ける

「方式なんてどうでもいいっ!!」

「そうよ!!こっちがやることに変わりはないんだからっ!!」
俺はガタツクカリバーを連結させそれをブーメランのように投げつける

それに御坂が雷を纏わせ雷を付加させる

しかしそのブーメランはバリアのようなものに防がれる

「なに!？」

これには流石に驚いた

「どうした？複数の能力を同時に使うことは出来ないと踏んでいたのかね…？」

木山の足から波動が出る

瞬間足場が瓦解し崩落する

「ちっ…!!」

落下する中俺は橋の柱のコンクリートにガタツクカリバーを突き立て体制を保つ

御坂は磁場を使い壁に立っている

こついう時便利だな…と俺は思ってしまう

………

「やべ、出遅れちまった…!!」

木山の強風に煽られてWとドレイクは完全に遅れてしまった

「すぐに追えば問題はない筈だ…!!」

ドレイクの言葉にWは頷く

> 待て翔太郎… 付近にワームの気配がする… <

「何だつて!？」

フィリップの言葉に呼応してかワームのサナギ体が何体も現れてくる

「…ぐ…こんなところで止まってなどいられないのに…!!」

ドレイクは拳を握り締めながらワームに向かって引き金を引いた

……………

「なんてヤツ…自分を巻き込むのをお構いなしに能力を使ってくるなんて…!!」

御坂が呟く

「拍子抜けだな…。超電磁砲（レベル5）とガタック（戦いの神）というものはこの程度のものなのか」

その言葉にカチンときた

「たかだか数撃防いだくらいで…!!」

「勝ったと思うなあっ!!」

御坂は磁場で柱から岩を取り出し木山に投げつける

しかし木山は何かレーザーブレードのようなものを作り出しその岩

を斬る

「マジか…!!」

俺がそんな声をあげてると木山はピッとこちらに指を向ける
何かくるのかと身構えているといきなりボコツとこちらの足場が円
形のようにくり抜かれる

「しま——」

「くつそ…!!」

御坂を抱き寄せてその場から飛び地面に着地する

「なる…!!」

「…もう止めにしないか。私はある事柄について調べただけなん
だ…。それが終われば全員解放する…誰も犠牲にはしない」

『ふざけんじゃないわよ（ふざけんじゃねえよ）!!』

「誰も犠牲にしない？あれだけの人間を巻き込んでおいて…」
御坂の言葉に俺が続ける

「人の心を弄んでおきながら!!そんなの見過ごせる訳ないだろう
がつ…!!」

その言葉を聞いて木山は

「…やれやれ…。レベル5や仮面ライダーとはいえ、所詮は世間知
らずのお嬢様か…」

なんで俺がお嬢様なんだよ!!

しかし突っ込んだら負けな気がする為敢えて突っ込まない事にする

「あんたにだけは言われたくないわっ!!」

御坂が木山に言い返す

しかし木山は全く怯まず

「君たちが日常的に受けている能力開発…あれが安全で人道的なものだとも思っているのか…?」

俺たちは再び身構える

「学園都市の上層部は、能力に関する重大な何かを隠している…。それを知らずにこの街の教師たちは、学生の脳を日々、「開発」してるんだ。それがどんなに危険な事か、わかるだろう?」

「…」

俺は拳を握り直す

「なかなか面白い話じゃない…」

御坂は地面に手を当てて磁力で砂鉄を操る

「あんたを捕まえた後でゆっくり、調べさせてもらうわっ!!」

砂鉄の槍となった砂鉄が木山に襲いかかった

しかし木山は瓦解した橋の瓦礫を操り全てを防ぐ

「残念だが、まだ捕まる訳にはいかない」

木山は付近に落ちていたゴミ箱を浮かすと中に入っていた空き缶をバラまく

「御坂、アレって…」

「ええ…！！重力子^{グラビトン}…！！」

「さあ、どうする…？」

「（私があので缶を吹き飛ばす…。あんたは木山を…）」

「（わかった…）」

俺はカリバーを構え一気に走る

御坂は雷を迸らせ宙に舞う空き缶を吹き飛ばす

「…すごいな…だが」

木山は手の中にある空き缶を移動させる

「はあっ…！！」

俺はガタツクカリバーで斬りつける

木山はそれをレーザーブレードで斬り結ぶ

「ち…、結構やるな…！」

一度バックステップし距離を取る

一方全て空き缶を破壊した御坂は一度息を吐き

「はあ…はあ…、どう？ザッとこんなもんよ…！！もうお仕舞いなの——」

言い終わるや否やガタツクの背後に空き缶が出現し捻れているのに気がついた

「アラタ、後ろお…！」

御坂は全力で叫んで雷を放つ

間に合つてと念じながら

「…、何！？しまっ——」

俺が振り向くのと空き缶が爆発するのはほぼ同時

御坂の目にはいつかの事件の時以上の爆発に巻き込まれるガタツクの姿が映っていた

——っドオン…！！

激しい爆音が響き渡る

ガラガラと大地が振動し瓦礫がパラパラと降り注ぐ中爆発の跡には

跡形もなかった

「…あら、た…？」

「…もつと手こずるかと思ったが…こんなものか…ガタツク（戦いの神）」

御坂はただ立ち尽くすしかなかった

「あら…、たあ…！」

11 多重能力（マルチスキル）（後書き）

いきなりですけど我が主人公、鏡祢アラタの決め台詞を募集したいと思います

もう一つの方でも募集しましたけど

僕ではいいの思ひ浮かばないので、読者様のお力をお願いこんな事書きました

暇な方で構いません

是非とも

12 木山せんせい

「あら…た…」

ただ呆然と立ち尽くす

「恨んでもらって構わんよ…」

木山は踵を返して歩きだす

御坂はもう一度爆発跡を見る

そして冷静に考えた

「跡形もない」？

あの爆発が仮に直撃したなら変身が強制解除されて人間のアラタが横たわっているはず

跡形もないということは有り得ない…

アラタは居る…

私は、アラタを信じるだけだ…！！

>R i d e r k i c k<

その電子音を聞いた瞬間木山は

「何!？」

目を開けるとそこには木山に向かって跳び蹴りを放ってくるのが見える

「ぐっ！」なんとかバリアを形成しライダーキックは防げたが衝撃が強くバリアが破壊される

その破壊の衝撃で大きく後ろに下がる

がばっ！

下がった木山の腰に何かが抱きついた

と言ってもわかりきっている

「つかまーえた…」

「バカな…！！どうやって…！！」

クロックアップ
「高速移動さ」

驚愕する木山に俺は少し得意げに喋りだす

「流星に焦ったけどな。俺がクロックアップしたのと爆発するのは本当に同時だった」

本当にヤバかった

クロックアップしても痛いのは痛いのだ

「さて木山春生…。いくらあんたでも零距离の電撃を防ぐ術はないだろうよ」

「ええ… あいつみたいなら、あんなトンデモ能力まで持ってないわよね…!!」

その言葉に木山は焦り能力で鉄の針を作るが

「おせえよ」

>clockup<

クロックアップしその針を全て叩き落とす

「今だ！御坂！」

「言われなくても!!」

言葉と共に木山に電撃を流す

「うわあああああ!!」

バチバチと雷が迸る

数秒間雷を流され放電を止めると木山はぐったりとうなだれた

それを支える御坂

「一応、手加減はしといたからね」

「…へ、相変わらずだな…」

「うっさいわよ。まったく…心配して——」

——木山せんせい——

「え…！」

「…どうした」御坂が変な声をあげたから少し気になって聞き返してみる

「頭の中に…、直接…」

御坂の頭に何かが語りかけているのか？

迂闊には動けないな…

俺はそのまま見守る事にする

その時俺の頭の中に何故か妙なビジョンが流れた

頭に黄色いカチューシャをつけた小さい女の子が満面の笑顔で

——木山せんせい——

……………

断片的に流れる

とある学者は教鞭をとることになった

置き去り（チャイルドエラー）と呼ばれる子供達の教師

何らかの理由で学園都市に捨てられた身よりのない子供達

その子供達はその時ね実験の被験者で、その学者の生徒でもあった

その時は教授に勧められ結局子供達の先生になった

……

教鞭する時に内心彼女は厄介な事になったと思っていた

だけど

それと同時に何かが満たされた

いつも研究ばかりで疲れていた心のどこかが安らいだ気がした

—子供はキライだ—

デリカシーがない

失礼だし…

イタズラするし…

論理的じゃない…

馴れ馴れしいしすぐに懐いてくる…

だけど

とても充実した日々だった

自分でも気付かない内に子供が好きになっていた

子供が大切に

「この町の役に立てるようになりたいな」

彼女の生徒、枝先がそう言った

いつか、なれるさ

心の中で気付かない内にそう思った

そんな日常の日々が楽しかった

……

子供達の実験当日

「怖くないか？」

何の気なしに枝先に聞いてみた

「全然！だって木山せんせいの実験なんですよ？」

そう言った後満面の笑顔で

「せんせいの事信じてるもんっ！」

そう言い切った

その言葉に軽い笑顔で返した

（これで先生ごっこもおしまいかな…）

解放感と同時に少し寂しい感じがした

………

アラートが鳴り響く

警告を知らせるアラートが

何が何だかわからなかった

絶望に暮れる中肩を叩かれる

「き…まくん…。よくやってくれた…彼らには気の毒だが」

その時の顔は

「科学の発展には付き物だよ——」

悪魔のような反吐が出る笑顔で言い切った

そう、言い放った

「今回の「事故」は気にしないでいい…」

それまで激しく動いた警告のアラートが

何の色もない無機質な一本の音に変わった

………

「は…！..」

木山がドサツと倒れた事で現実に戻される

「何…？今は…」

御坂も現実に戻ったようだ

「…ゼクター…今はお前が見せたのか…？」

何の気なしにベルトのガタツクゼクターを見る

「う…、み、見られ、た…のか…、うぐ…」

木山は頭を抑えながらヨロヨロと立ち上がる

………

> METAL! MAXIMUM DRIVE <

「メタルブランディング！」

炎を纏ったメタルシャフトでワームのサナギを尻ぎ払う

「ライダーシューティング」

> Rider shooting <

集まったサナギを一気に撃ち貫く

「ドラゴンフライ、そっちは終わったか」

Wヒートメタルは駆け寄り状況を確認める

「問題ない……」

ドレイクは辺りを見回し安全を確認する

その時頭に花飾りをした女性が車から降りてきた

「初春くん……？」

大介には彼女の顔に見覚えがあった

——う、ああああ！——

刹那橋の下から女の苦痛な叫びが聞こえた

初春が橋の断片から下を覗く

「御坂さん、アラタさん……！」

「何？」

Wヒートメタルも走り寄り下を見る

ドレイクもそれに倣い下の状況を見る

.....

「なんで…なんであんな事…」

御坂が問いかける

「…あれは表向き、「AIM拡散力場」を制御する為の実験とされていた…」

木山がゆっくりと口を開く

「が、実際は…「暴走能力の法則解析用誘爆実験」だ…!!」

「何…!？」

俺は思わず声を出していた

「AIM拡散力場を刺激して、暴走の条件を知るのが本当の目的だったという訳さ…」

「じゃ、じゃあ…」

嫌な予感が俺を襲う

「暴走は意図的に仕込まれていたのさ…。最も気づいたのは後になつてからだがね…」

意図的

つまりそれは…

「人体実験…」

御坂が咳く

「あの子たちは、一度も目覚める事もないまま未だに起きる事なく
今なお眠り続けている…。私たちはあの子たちを、使い捨ての実験
材料にしたんだ!!」
モルト

叫ぶ木山の声色は少し怒りが込められていた

その怒りは誰に向けられたものなのか

その光景を見ていた初春は何かを決意した様子で下に行く為に走っ
ていった

「あ、おいっ!」

Wヒートメタルは初春を追った

「初春くん、そっちは危険だ!!」

ドレイクも彼女を追う

「そんな事があつたんなら、
アンチスキル警備員に連絡して——」

「二十三回だ…」

御坂の言葉は木山の言葉に遮られる

「…何の回数だよ…それ…」

俺の言葉に木山が返す

「あの子たちの回復手段を探る為に、そして事故の原因を究明する
シミュレーションを行う為に…、ツリーダイアグラム樹形図の設計者に使用を申請した
回数だ…」

なんて…努力…

「樹形図の設計者の演算能力を持ってすれば、あの子たちを助けられる筈だった…もう一度太陽の下を走らせる事も出来ただろう…」

そこで一度言葉を切り

「だが却下された！！二十三回とも全てっ！！」

『！？』

俺と御坂が同時に声をあげる

「統括理事会がグルなんだ！！警備員が動く訳がないっ！！」

「だ、だがらってこんなやり方——」

「君たちに何がわかるっ！！」

木山のその怒鳴りにゾクツとした

その迫力に思わずのけぞった

「あの子たちを救う為なら、私は何だってする……！！この都市^{まち}の全てを敵に回しても！！止める訳にはいかないんだあつ……！！」
その時

木山の体がドクンと波打った

「ぐ、あああああつ……！！」

頭を抑えて苦しみだす

「おい、様子がおかしいぞ……！！？」

「ネットワーク、の……暴走……！！……い、や……これは……」

言葉が聞き取れないまま木山がドサリと倒れた

「お、おい……！！」

変身を解除し駆け寄ろうとする

その刹那木山の体から何かが出た

「……！！」

「な……！！」

下に降りた初春たちもあの「何か」に呆気にとられる

「何、あれ……!!」

「おい、フィリップ!! なんなんだありゃあ!!」

Wヒートメタルの右の複眼が点滅しフィリップの音がする

>わからないよ!!……なんだあれは……、全くわからない……!!<
あのフィリップが焦っている……

「なんだ……あれは……胎児……!?!」

その「何か」は胎児のような形をしていて

その目がギョロリと睨が開かれる

「……!!」

背筋が震えた

その化け物はとても形容しがたい叫びを発した

……

177支部

カチカチと忙しくキーボードを叩く音が響く

「ダメですわ……!! どのカメラも死んでしまっていますの……!! 電話も繋がらない……!!」

白井黒子はもう居ても立ってもいられなかった

白井黒子は立ち上がり出掛けようとするが

「待ちなさい！」

国法が黒子の手を掴む

「お姉様とお兄様を放っておけませんわ……ぐ……」

ズキリ、と怪我が痛み黒子は表情を歪める

「その怪我で何が出来るっていうの……！」

「でも……！」

「御坂さんとアラタを信じなさい。彼女たちならきつと……」

黒子は憎々しげに砂嵐となったパソコンの監視カメラの映像を睨み付けた

「……カ・ガーミンがどうしたのだ？」

その時177支部の扉が開き男の声がした

「あ、貴方……、神代くん！？」

「クオ・ノーリ……！カ・ガーミンがどうしたのだ……！答えろ……！今すぐに……！」

ツルギは国法の肩を掴み問い質す

.....

国法から一通りの顛末を聞いたツルギは表情を怒りに染めた

「カ・ガーミンめ…俺が一般人だと気を使い、何も言わなかったのか…!!」

「…神代さん…」

黒子がツルギを心配そうに見る

「こうしてはおれん…」

ツルギは差し入れに持つてきたコンビ二袋を机に置き踵を返す

「神代くん!? 貴方どこ行くつもり!?」

「決まっている! カ・ガーミンの所だ!!」

「何馬鹿な事言ってるの!! 貴方は一般人なのよ!! …て、こちら、待ちなさいっ!」

国法の言葉を見殺し歩くツルギを国法と黒子は追った

177支部の外に出てツルギは一度背伸びする

「神代くん!! 待ちなさいって言っているでしょう!!」

「クオ・ノーリ。男には、やらねばならない時があるのだ」

「それでも!! 一般人でしかもレベル0の貴方にあんな危険な場所

に行かせる訳には行かないわ!!」

「…クオ・ノーリ。俺を誰だと思っている」

一通り準備運動を終えたツルギはおもむろにサソードヤイバーを取り出す

「俺は神に代わって剣を振るう男だ。そしていまこの剣は、親友^{とも}の為に振るう…!!」

言葉が言い終わると同時に地面を突き出てサソリのような機械が現れる

「ひゃ!?!」

「さ、サソリですよ!?!」

国法と黒子は突然出てきたサソードゼクターに驚く

ツルギはそれを左手に持ち

「変身!!」

言葉と共にヤイバーにセットする

> HENSHIN <

「…え…!?!」

「お兄様と…同じ…!?!」

マスクドサソードはゼクターの尾部を押し込みヤイバーにサソード
ニードルをセットする

「伏せていろ、二人共…。キャストオフ!!」

>Castoff<

マスクドアーマーが弾け飛ぶ

>Change Scorpion<

「神代くん…」

サソードは国法に振り向いて

「男は燃えるもの。火薬に火をつけなければ、花火は上がらない」

そして黒子の頭を撫でる

「カ・ガミンの事は、俺に任せておけ…」

そして手を離す

「…お兄様の事、宜しくお願いしますわ…!」

サソードはそれに力強く頷き

「ああ。…クロックアップ!!」

>clockup<

そしてその場から姿を消した

「…全く…私の知り合いはあんなのしかいないのかしら…」

国法は軽く微笑んで見送った

………

「なんだあれ…」

オーズ「霧島齋堵はそんな声をあげた

その現場にはかなり遅くついた

と言っても特にやることはないと思い現れるワームのサナギを狩っていたのだが…

突然変な叫びが聞こえて下を覗くと胎児のようなものが現出していた

「…マズいかもな…」

オーズは一度深呼吸し落ち着いた後下に降り立った

………

「…何アレ…胎児なの…!？」

オーズより少し先に来ていた神那賀雫「バースは遠目から現れた胎児を見つめていた

戦いに加勢しようと思っていたがほとんどが終わっていた為ちよつとがっかりしたが現れた胎児に驚愕していた

「私…勝てるかな…」

少し不安に駆られた

トリックアート
偏光能力に敗北した記憶が蘇る

「…！！」

頭を横に振り心を強く保つ

「私は、逃げない…！！どんな相手でも、絶対に…！！」

バースドライバーを腰に巻きつけて私は走った

幻想御手編

次回完結

12 木山せんせい（後書き）

次回、幻想御手編

完結（多分）

13 守りたいもの（前書き）

幻想御手編最終回

ミスをいくつか修正しました

13 守りたいもの

「胎児…！？」

ギョロリと赤い瞳が見開かれる

「メタモルフォーゼ肉体変化…！？だがあんなのは聞いた事は…！！」

俺たちが呆然とその化け物を見ていると再び化け物が叫びをあげる

「うわっ！」

俺は波動に多少のけぞった

「アラタっ！…くそっ！」

御坂は化け物に雷撃を放つ

雷撃は化け物に当たったが

「うえ！？」

化け物に当たった場所が徐々に再生していく

「マジかよ…てか、なんか大きくなってねえか…！？」

破壊と同時にその化け物は一回り大きくなっていた

化け物は俺たちを一瞥すると中空に氷の刃を形成してきた

「御坂、一旦逃げんぞ!!」

「言われなくてもっ!」

俺たちは氷の刃をかくぐり反対方向に逃げることにする

「御坂さんっ!アラタさんっ!」

「え!?!」

その声の方を向くと初春がいたのだ

Wヒートメタルとドレイクと一緒に

「初春さん!?!」

「なんで降りて...!?!」

御坂は一度反転し周囲に雷撃を振りまく

その雷撃は氷の刃を破碎する

破碎した衝撃で風が巻き起こる

「やべ...!!」

Wヒートメタルは初春を庇うように立ち風から初春を守る

また瓦礫の破片が飛んできた

「く...!!」

ドレイクは破片を撃ち落とし被害を最小限に抑える

「初春さん！大丈夫！？」

御坂の声に初春は

「は、はいっ！」

と返事がした

「ダメだろ！！なんで来た！！」

「ご、ごめんなさいっ！でも…！！」

「初春、そこから出んな！！」

俺はガタツクゼクターを構え化け物の方を振り向く

「…アラタ、あれ…」

「何…！？。追って来ない…だと！？」

「何かに暴れてるだけなの…？」

俺と御坂は疑問を口にする

「まるで…何かに苦しんでるみたい…」
初春が不意に呟いた

……………

橋の上にいる警備員アンチスキルの生き残り達

「お、おい何だよありゃあ!?!」

他の警備員が声をあげた

「知るかよ…生物兵器か…!?!」

「ひ…!?!」

鉄装が怯えたような声をあげる

「動けるものだけでも、やるしかないじゃんよ!?!」

黄泉川が激を飛ばす

「実弾の使用を許可する!!撃てえ!!」

黄泉川の号令と共に他の警備員が化け物に向かって発砲する

しかしその化け物にはあまり効果がなく

しかも

「な、なんか…大きくなってる…!?!」

鉄装が呟く

………

「ぐ…、や、矢車さん…!」

影山は意識を取り戻した

「あ、ああ…、無事か、影山…!!」

ヨロヨロと傷ついた体を起こす

「影山…戦えるか…!？」

「勿論ですよ…矢車さん…!!」

矢車の言葉に力強く頷く

「今まで寝ていた分、しっかりと働くぞ…!!」

再びホッパーゼクターを掴む

「はい…!!」

『変身!!』

影山と矢車はベルトの台座にホッパーゼクターをセットした

………

>ブレストキャノン<

バースはその化け物に向かってブレストキャノンを発砲する

「アラタ!!」

「神那賀!!?なんでここに!？」

「あんたを手伝いに来たに決まってるでしょう!!」

「待つて、神那賀さんっ！下手に攻撃すると…!!」

御坂の言葉にバースが頷く

「ええ…今理解したわ…!!」

再び化け物が氷の刃を放ってくる

「マズい…!!」

> Riderslash<

一筋の一閃が氷の刃を断ち切る

「カ・ガ・ミン!!」

サソードが走ってくる

「ツルギ…!!お前なんで…!!」

俺がそんな事を言つとサソードは怒った様子で

「お前こそ、なんで俺に言わなかった！親友ともの危機を助けるのは、
当たり前のことだろう!!」

どうやら本当に怒ってるらしい…

「悪い…」

「分かればいい…うむ」

………

「…ははは…すごいな…」

木山春生は壁にもたれながら呟いた

「まさかあんな化け物が生まれるとは…」

「学会に発表すれば表彰ものだ…」

ちらりとその化け物に目をやる

「もはやネットワークは私の手を離れ、あの子たちを取り戻すことも回復させることも叶わなくなったか…お終いだな」

「諦めるなよ」

声がした方を振り向く

そこには一人の青年が立っていた

「聞かせてくれ。あいつはなんなんだ？」

「…A I M 拡散力場の…恐らく集合体だ…そうだな…仮にA I M バーストとでも呼んでおこうか…」

青年は考える

それに気にすることなく木山は言葉が続ける

「幻想御手^{レベルアップ}によって構築されたネットワークに束ねられた万人のA I M 拡散力場… それらが触媒となつて生まれた潜在意識の怪物… 言い換えれば、あれは一人の子供達の思念の塊だ…」
青年はA I M バーストを見た

攻撃をかいくぐり打撃を与えるガタツクや御坂美琴

初春を守りながら戦うWとドレイク

それを援護するバースとサソード

………

「思念の塊…！？」

> ああ。幻想御手使用者のね…<

フィリップが木山と似た説明をする

戦いながら頭脳をフル回転させ考えうる限りの事柄を引き当てた

頭の中に声が響く

——この街で、俺は夢を叶える筈だった…能力者になるという夢を…
…だけど…夢は夢でしかなかった…！——

——どんなに努力を続けようと…この街では才能という壁が邪魔をする…！！惨めな日常だけが残った…！！…踏みにじられ、利用されるだけという…日常だけが…！！——

——だったら…手に入れるしかないじゃないか…！！…どんな事をしても、力を手に入れるしかないじゃないか…！！——

悲痛な、叫び

心が痛む…

「…なんか、可哀想…」
ポツリと初春が呟いた

「…フィリップ、あれを止めるにはどうしたらいい…？」
俺は御坂と共に真剣な表情でWを見つめた

……………

「どうすればあの化け物を止められる？」

青年は木山に問うた

「…それを私に聞くのかい？」

木山は自嘲気味に笑った

「今の私が、何を言っても君らが信用——」

「あの子の手錠、貴女が外したんでしょう？」

青年はWの付近にいる初春を指差す

「…ただの気紛れさ」

「嘘だ。本当に悪意があつたなら、あの子を放っておくだろうし…
それにさ」

青年は清々しい笑みを浮かべ

「子供達を助けるのに、貴女が嘘つく筈がないと思ってね…」

木山は驚いた表情を浮かべて

「聞いていたのか、君も…」

「悪いね…盗み聞きするつもりはなかったんだが…」

「だけど、信じれる。あんたを信じる」

——せんせいのこと信じてるもんっ——

脳裏に焼き付いたあの子のそんな言葉が響いてきた

「…全く…」

木山は一つ溜め息を吐くと

「AIMバーストは、幻想御手のネットワークが生み出した怪物だ…
ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない…」

「…破壊は、どうやって？」

「あの子がアンインストールプログラムを持っている。…試す価値はある筈だ…」

………

「幻想御手の治療プログラム…」

フィリップから説明を受けたアラタ達

ちなみに全員一度変身を解いている

説明を一通り聞いた初春は幻想御手治療プログラムを取り出す

「…」

俺はAIMバーストを見る

アンチスキル
警備員が懸命にマシンガンを撃っているが全く効果がない

矢車さんと影山も戦っているが触手のようなものに払われ吹き飛ばされている

「…あの化け物は俺たちが食い止めよう」

俺の言葉に御坂達が頷く

「その隙に初春さんはそれを持って、警備員の所へ」

「わかりました！」

御坂の言葉に深く頷いた

「ならば、護衛はこの神代ツルギが仕ろう」

ツルギが初春の護衛を買って出た

「頼むぜ、ツルギ」

「任せろ。必ず守りきる」

全員一度頷く

そしてAIMバーストの方に向き直る

「行くぜ、フィリップ」

> TRIGGER! <

リボルギャリー内にいるフィリップが一本のメモリを取り出す

> ああ。終わりにしよう <

> LUNA <

翔太郎とフィリップは場所こそ違うがそれぞれ構えてWの文字をイメージしたポーズを取る

『変身!!』

> LUNA TRIGGER! <

翔太郎はWルナトリガーへと姿を変える

「止めてやるよ…、俺が、いや…」

俺たちが

………

「行くぞ、ウィ・ハール、準備しておけ」
サソードゼクターをキャッチする

「…う、ウィ・ハール？」

初春はかなり怪訝な顔をしたがツルギは構わずサソードゼクターを
サソードヤイバーにセットし尾部も同時にセットする
「変身！」

> HENSHIN <

> Change Scorpion <

「よし、行くぞ！」

「はい！」

サソードは初春を連れて走り出した

………

「…待っている。ヒロ…必ず助け出す…変身…！」

突き出したドレイクグリップにトンボの形をしたドレイクゼクターがセツトされる

> H E N S H I N <

> C h a n g e D r a g o n f l y <

ドレイクライダーフォームとなった大介はA I Mバーストに向かって駆け出した

.....

「よっし…行くか」

俺は軽く手を動かしながら天に手を翳す

その手にガタツクゼクターが飛来する

その隣で神那賀雫は右手でメダルを弾き左手でキャッチする

二人の声は同時だった

『変身!』

> H E N S H I N <

> C h a n g e S t a g B e e t l e <

「絶対に食い止めんぞ…、御坂、神那賀!」

「当たり前じゃない…!」

御坂は手のひらに雷を迸らせる

「援護は任せなさい」

セルメダルを挿入口に入れハンドルレバーを回す

>プレストキャノン<

その電子音と共にバースの胸部にプレストキャノンが出現する

「行くぜ!!」

『応!!』

.....

「よっし...俺も手伝うとしますか」

懐から三枚のメダルを取り出す

「...ふ。根拠もなく人を信頼する人間が多くて困る」
木山が呟く

「良いんじゃないか。そんな根拠ばっかだったら、人生やってけないぜ」

青年は木山にそう言って笑った

「...君は、どうしてここまでするんだ？ガタックや超電磁砲レールガンのように、君と私は直接面識はなかった筈だが...」

木山のその言葉に青年は少し間を開けて

「助けられる命が、そこにあるから」

迷いなく言い切った

「助けられる保証もないのか？」

「あつても無くても、俺は行動するだろうよ。…目の前で消し去られそうな光があるなら、助けたいって思うだろう？」

「それは君だけかもしれないぞ…？」

「別にいいさ…。手を伸ばせるのに手を伸ばさなかったら、間違いなく後悔しちまうだろうから」

青年はそう言つてメダルを腰に巻いてあるベルトにセットする

そして横にあるスキャナーのようなものを取り出しメダルが入った部分を傾ける

傾けた部分にスキャナーをなぞらせる

「変身！」

>タカ<>トラ<>バツタ<

>TATOB A!TATOB A T A・T O・B A!<

木山の目の前で姿を変える

「…君は、何者だい？」

「オーズ…、仮面ライダーオーズ」

オーズと名乗った青年はAIMバーストに向かって一直線に走った

………

ひたすらにマシンガンを撃つ

効果がないと知っていても守るべきものがある

「ぐあー!!」

黄泉川がAIMバーストの触手によって吹き飛ばされた

「黄泉川先輩!!」

黄泉川を目で追った

刹那不気味な音がる

先ほどの触手

ぎちぎちと不快な音を立て寄ってくる

「い、いや…!!来ないでえ!!」

鉄装はマシンガンをありったけ発砲する

かちり

「え……!!」

かちりともう一度引き金を引く

しかし何も出ない

弾切れ

途端に鉄装の表情が恐怖に染まる

「い……いや……!!」

がくがくと足が震える

恐怖で動けない

触手の先がギョロリと見開き更に恐怖を募らせる

「はぁっ!!」

何かの音がする

その言葉と共に触手が両断される

「一旦退くぞ、鉄装!!」

「矢車隊長……!!」

そう言つて鉄装を抱きかかえると橋の端に移動する

「矢車さん!!」

そこにガタツクとバース、御坂がやってくる

「影山は!？」

「下でお前の仲間と一緒に戦ってる…ぐ…」
片膝をつく

同時に矢車の変身が解除された

「矢車隊長!!」鉄装が駆け寄る

「すまない…、私は、ここでリタイアだ…!!」

木山と戦ったダメージがかなり大きかったのだろう

「わかった、休んでくれ、矢車さん…、早く避難を!!」

「あいつはこっちが攻撃しなきゃ寄ってこないわ!」
御坂が俺の言葉に続く

「それでも、撤退する訳には行かないじゃんよ…」

黄泉川の呟きにバースが「え…?」と怪訝な声をあげる

「あれがなんだか解るか…?」

黄泉川の言葉に矢車が続く

「原子力実験炉だ…」

「なっ！」

一気に顔が青ざめた

「何やってるの！？あの子！！」

突然鉄装が叫ぶ

「あれは…木山の人質になっていた…！！」

視線の先には階段を上って来ている初春とサソードがいた

「この混乱で逃げ遅れてるじゃん…」

黄泉川の言葉を俺は否定し

「違う。あの子はもう、人質でも、逃げ遅れた訳でもない…」
俺は下を見る

ガタックエクステンダーが停めてある

俺は一旦下に飛び降りてガタックエクステンダーに乗り込む

「キャストオフ」

>castoff<

ガタックエクステンダーをキャストオフさせる

パージしたガタツクエクステンダーはクワガタのような形をしたサ
ーフボードタイプだ

俺はそれに飛び乗り意思を伝え動かす

そのまま再び橋の上の皆に戻って

「御坂、神那賀、乗れ!!」

二人は頷いてエクステンダーに乗った

俺は矢車さんたちを見て

「頼みがあるんだ」

.....

ザンッ!

触手を切り裂くがすぐに再生する

「くっそ...!!キリがねえ...!!」

トリガーマグナムを放ちながら距離を取る

「ライダーパンチ...!!」

上空から急降下パンチを繰り出すがやはり効果はない

「くっそお...!!」

パンチホッパーは呟く

「諦めんな!!」

襲いかかる触手を再び斬り裂く音がする

パンチホッパーが顔をあげると新たなライダーが立っていた

「あんたは…」

「齋堵。仮面ライダーオーズだ…援護する…!」

「ありがてえ…!ドラゴンフライ!!」

「わかっている!」

Wルナトリガーとドレイクは一斉射撃し足止めする

その空中

「…ふ!」

エクステンダーに乗ったバースがブレストキャノンを放つ

「頼む、御坂あ!」

ガタックがカリバーをブーメランのように投げつける

「りょう…かいっ!」

そのカリバーに雷を纏わせる

しかしその攻撃もすぐに再生する

「くそ…！」

バースが憎々しげに呟く

「諦めんなよ、神那賀…！」

「誰が…！」

………

ただ階段を上がる初春とサソード

時折AIMバーストの触手が襲いかかるがその度にサソードが触手をたたつ斬り初春をガードする

しかし

「…！」

AIMバーストが波動を放ってきた

流石にあれは斬れない…！

「くっ…！」

考えるより先に体が動いた

初春を庇うように抱きかかえる

刹那激しい爆音

「きゃああああっ！」

爆音が収まるとそこには波動の直撃を受け変身が解除されたツルギがいた

「神代さん!!」

初春はすぐに駆け寄るが

「来るな!! ウィ・ハール!!」

その声に一瞬怯みながらも

「で、でも!!」

「こんな所で止まるな!! 友を助けるのだろっ! なら、ここで止まるな! 走れえっ!」

全身傷だらけになりながらも先に促すツルギ

「...!!」

初春は一瞬渋ったが意を決して再び階段を上り始める

ツルギはボロボロになりながらも立ち上がる

「来い!! この神代ツルギ、この身に代えても守ってみせよう!!」

サソードヤイバーを構え少し階段を上がりA I Mバーストに剣先を向けた

.....

初春は階段を登る

（あたしだって、ジャツジメント風紀委員なんだから…！）

ゆっくりと歩を進める

（あたしを庇ってくれた神代さんの為にも…！皆を…！）

——佐天さんを…！

再びの閃光

「っ！」

「はああああ！」

その閃光もツルギが防ぐ

変身していない生身で

サソードヤイバーで防いだが完全には防げずに右手が血だらけだ

「神代さ——」

「振り向くな！…行けえっ！」

初春は齒を食いしぱり再び走る

「ったく…最近の若い奴は無茶するじゃん!!」

神代に向かって鉄装が「大丈夫ですか？」と声をかけている

「君、幻想御手治療プログラムは？」

矢車が聞く

「あ…無事です!!」

「よし、鉄装！神代を連れて車両に！」

鉄装は頷いて神代を連れて車両に歩き出した

………

御坂はしつこく初春達を狙うAIMバーストに痺れを切らし雷を放ち注意を逸らす

その隣にはバースもいる

「…何シカトしてんのよ」

「全く。やんなるわよね…」

御坂とバースは喋り出す

「あんたの相手は」

「私たちだって言ってるでしょう」

御坂はAIMバーストを一瞥し

「みつともなく泣き叫んでないで…」

御坂とバースが同時に叫ぶ

『真っ直ぐ私に向かってきなさい!!』

………

（ワクチンソフトを学園都市中に流すことで、ネットワークを破壊する…）

木山は傷だらけの体に鞭打ちながら歩き出した

（花飾りの少女が上手くやれば、AIMバーストの暴走を抑えることができる筈だ…だが…）

………

「おおおおあああっ!!」

Wルナトリガーが叫びながらトリガーマグナムの追尾弾を乱射する
しかしいくら当たってもすぐに再生する為無駄な足掻きに近かった

（だけど…!!）

「諦める訳には行かねえ！！」

言葉と共に再びトリガーマグナムを乱射した

「メダルチェンジだ！！」

真ん中のメダルを変える

再度スキャンする

>タカ<>ゴリラ<>バツタ<

タカゴリバとなってオーズは両手にあるバゴーンプレッシャーを撃ち出す

しかし

「くそ……！！これも駄目か……！！」

放って来る波動を手で弾きながら構え直す

「だが、諦め悪いよ……。ライダーは助け合いなんだからな……！！」
オーズに諦める気など毛頭なかった

ドレイクは射撃をしながらパンチホッパーを援護する

「ぐ……！！」

襲いかかる触手を手刀で断ち切り反撃の機会を窺う

「影山！」

ドレイクはパンチホッパーの名前を叫ぶ

「気にするな！！お前は前だけを見ている！！」

「…影山…くっ…！！」

ドレイクは

風間大介は決して逃げない

それはこの場で戦ってる全ての人物に言えることだ

「ヒロ…！！」

たった一人の家族を助ける為に

空中

エクステンダーに乗ったガタツクは軽く苛立っていた

いくらカリバーで斬っても再生するし大きくなるのを止めない

「つくそ…、なんで原子力実験炉なんて狙うんだ…！！ウルトラマンかつつの…！！」

放つて来る氷の刃を避けながらカリバーを構える

頭にフィリップの言葉が蘇る

>あれは一万人の子供達の思念…<

「く…!!」

一瞬躊躇いが生まれる

その隙を逃さないAIMバーストではない

触手がガタツクを掴み地面へ投げ飛ばす

「しま——」

一気に地面へ落下する

だがエクステンダーが助けてくれた

「つくそ…サンキュー、テンダー…!!」

俺はAIMバーストをただ見つめた

……………

「ああそつじゃん!!時間がない、これから転送する音声ファイル
をあらゆる手段を使って学園都市中に流せ!!」

「黄泉川、俺の名前を出せ!!その方がスムーズだ!!」

「了解じゃん！！…ああそくだ！！矢車隊長からの許可も出てる！！」

その時初春の作業も完了したようで

「転送、完了しました！！」

その言葉に矢車と鉄装、黄泉川は頷き

「黄泉川、責任は全て俺、矢車ソウが持つと伝える！！」

「はいじゃん！！ああもう！！責任は全て矢車隊長が持つと言ってくださってるじゃん！！とにかく流すじゃん！！」

……………

一度俺達は集合する

だが全員疲労で完全に疲れている

「大丈夫か、影山…」

「はあ…あ、ああ…大丈夫だ…」

おまけに影山は木山と戦ってその傷がまだ癒えてない

「御坂…まだ行けるか？」

「アラタこそ…！大丈夫なの…」

その時だった

曲とは形容し難い音楽が流れた

一本の音に乱雑なノイズが混じったような音

「なんだ…この音…」

「聞いた感じ…ノイズ…か？」

少し油断した刹那

AIMバーストの触手が飛んでくる

「な…!」

俺は完全に油断していた為絡めとられる

「ぐ、ああ…!」

ギリギリと締め付ける

「アラタ!」

御坂の電撃が触手を裂く

「駄目よ、いくらやってもすぐに…あれ!？」

バースが声をあげる

「再生してないぞ!？」

オーズの声に全員が驚く

「じゃあもしかしてこの曲が…」

> 治療プログラムだ…！！<

フィリップが声を出す

初春…やったのか！！

触手を払い地上に着地する

「御坂、トドメだ！！」

「ええ…これでゲームオーバーよ！！」

御坂の全力放電

その放電が直撃しAIMバーストが黒コゲになる

黒コゲになった事に安堵し全員が胸をなで下ろした

「これで終わったのか…」

俺が呟く、が

「気を抜くな！！まだ終わってはいない！！」

木山の声が全員を再び身構えさせる

「おい、なんでここに……!!」

Wの言葉の途中でA I Mバーストが蠢いてるのが見えた

「何!!?」

触手がパンチホッパーとWを吹き飛ばし壁に激突する

「影山!?!左の旦那あつ!?!」

Wはかろうじて受け身をとったがパンチホッパーはそのまま変身が解除され気を失ってしまった

しかしWも動けない

激突した衝撃でかなりのダメージを追ってしまった

「そんな!?!ネットワークは破壊したのに!?!」

バースが悲鳴にも似た声を出す

「ネットワークの破壊には成功しても、あれはA I M拡散力場が生んだ一万人の思念の塊、普通の生物の常識は通用しない!!」

「話が違っじゃない!?!」

御坂が声を荒げる

「だったらどうしろって……」

「核が……!!力場を固定させている核のようなものがどこかにある筈だ……!!それを破壊すれば……」

木山が叫ぶ

その時

エコーがかかった声がする

——本当は……——

それは聞き覚えのある声

「……佐天……!!」

——レベル0って……欠陥品——

それは幻想御手使用者の悲痛な想い

——貴方達には、わからないでしょうけど——

——その気概が……重い時もあるんですよ——

その言葉に御坂は少し俯いた

「木山、貴女は下がってくれ。危ないから」

俺は木山にそう告げるとガタツクカリバーを肩に戻す

「構うものか。私にはあれを生み出した責任が——」

「貴女が良くても、貴女の教え子はどうする気だ!!」

その言葉に木山がたじろぐ

「その子達が目覚めた時、その子達が見たいのは他ならない貴女の笑顔なんじゃないのか!!」

木山は少し俯いた

「…こんなやり方しないなら、私も協力する。そう簡単に諦めないで」

御坂は木山をフォローする

無論その言葉には俺も同意だ

「あとは、任せておいて」

御坂は前に歩き出す

その時AIMバーストは尖らせた触手を繰り出す

「御坂」

「ええ…」

俺が促すと御坂は雷を繰り出し触手を殲滅する

「大介!!」

「あぁっ!!」

「神那賀!!」

「あいよ!!」

挿入歌

Regret nothing
(Tighten Up)

《あの時ああ してなければアレをやれてたら…「もしも」は仮定の話現実は何も 変わらない》

「行くぞ、まず俺が、奴の表面を叩き斬る、その隙を見て、射撃組は最大出力で撃って核を摘出、その核をお前が破壊しろ」

オーズは俺に言う

「わかった」

オーズに頷くとゆっくりとAIMバーストに歩き出す

メダジャリバーに三枚のセルメダルを挿入しレバーを倒す

そしてオースキャナーでスキャンする

>スキヤニングチャージ!!<

《「俺は弱い」あきらめたら、取り返しつかない。ほど後悔溜まって、身動きさえも取れなくなる》

「…大丈夫、お前たちは、欠陥品なんかじゃないから…」

そして次元ごとAIMバーストの表面をぶった斬る

「見えた!!」

オーズが叫ぶ

「…ごめんね」

襲いかかる触手を雷で叩き斬る

「気づいてあげられなくて…」

バースはメダル挿入口に二枚メダルを入れハンドルレバーを回す

>セルバースト!!<

「お前たちは、頑張りたかったんだな…」

ドレイクはドレイクゼクターをシューティングモードにする

「ライダー…シューティング」

>Ridershooting<

《見ないフリ 後ずさり 通り過ぎ That's too bad
人として? 俺として それはしたくないひとつだけ 破れな

い 約束

御坂は一枚のコインを取り出す

その際に俺はエクステンダーで天高く飛ぶ

「でもさ、もう一度だけ…頑張ってみよう？」

一枚のコインを弾く

「こんなところで、クヨクヨしてないの。あたしが言える事じゃないけどさ…」

御坂が隣でコインを弾く中バースはブレストキャノンにエネルギーを溜める

「ああ…お前たちには未来がある…」

ドレイクはゆっくりと狙いを定める

《目の前で 消し去られそうな 光が、あるのなら この手で 守りたい。I can go nowhere 逃げ出せる場所はないんだ。向き合って 戦うべき Regret nothing!》

『もう一度!!』

三人の言葉が重なり御坂の超電磁砲、バースのブレストキャノンセルバースト、ドレイクのライダーシューティングが同時に放たれる

三つの閃光が混ざりあい核を外に押し出す

それを俺は確認する

「あれか…!!」

> 1 2 3 <

「皆…明日があるから…やまない雨なんて、ないから!!」

角を閉じ開く

> R i d e r k i c k <

「悩んだら、俺が相談に乗ってやる!!道間違えたら、俺が前に立ちふさがってやる!!だから…!!」

《誰のため なんて言うつもりもなく、最大限 努力したしるしを。I c a n g o n o w h e r e 残すしかないと信じてる。自分はもう 欺くな R e g r e t n o t h i n g!》

俺は心に溜め込んだ想いを全て吐き出すように

「いい加減…!!目を覚ませえええええつ!!」

俺はエクステンダーを蹴りつけてエクステンダーごと落下する

否

エクステンダーごと核にぶつける

名付けて

「エクステンダー落としいいいいいいっ!!」

その速さは

全てを凌駕する

エクステンダーが核にぶち当たる

刹那核が粉々に砕け散る

その光景を木山は呆然と眺めていた

(す…すごい…これが…!!)

超電磁砲(レベル5)

そして、仮面、ライダー…

同じように橋の上でそれを見ていた初春は緊張の糸が解けたのかくたりと倒れてしまった…

………

時間はいつの間にか夕方

木山が連行される前に御坂が聞いた

「…これから、どうするの？…子供達の事」

御坂が遠慮がちに聞く

木山はそれにふ、と微笑み

「もちろん諦めるつもりもない。もう一度やり直ささ…刑務所だろうと世界の果てだろうと。私の頭脳はここにあるのだから」

それに笑顔を浮かべた初春と御坂

「ただし、今後も手段を選ぶつもりはない…気にいらなければまた、その時に邪魔しに来たまえ」

「…はあ…やれやれ」

俺はもう呆れるしかなかった

そのまま木山は警備員の車に乗り走り去っていった

「やれやれ…懲りない先生だわ…」

御坂が呆れがちに呟く

「いいじゃないか。…また、邪魔してやろうぜ。道が間違ってたらな」

俺がそう言つと御坂は少し間を開けて「そうね」と呟いた

その時目の前からタクシーがやってきた

がちやりとドアを開けた瞬間聞き慣れた声がした

「お姉様っ！お兄様あつ！」

空間移動していきなり抱きついてきた

「うわ！？」

「危な——！」

そのまま黒子に押し倒される形で倒れた

「黒子は心配しましたのよ！！心を痛めましたのよ！！ああ、お身体に無数の擦り傷が……。ひひ……。どうやら電撃を放つ体力も、風呂ぎ払う余力も残ってない様子……。ここは、黒子が隅々まで……！」

と、一旦そこで言葉を切る

「あ、そうですわ」

初春に向き直り

「先ほど病院から連絡がありましたの」

「ほえ？」

「幻想御手の使用者達が、次々と意識を取り戻していると」

その言葉を聞き初春が笑顔になる

「貴女のおかげですわよ。初春」

その言葉に初春は心から喜んだ

「さ、という訳でお二方あ…ふふふふ…!!」

「わ、バカ、黒子!!やめなさいって!!」

「ちょ、怖い!!AIMバーストより怖いって!!」

……

神那賀雫は遠目からそんな光景を眺めていた

「…はあ…お気楽ね」

だけど、楽しそうだな…

ふとそう思った

「雫」

後ろから声がした

「霧島さん…」

「俺は先に戻るぜ?後は自由だ。好きにするといいさ」
軽く笑いながらそう言った

「言われなくても」

それに私は笑顔で返した

.....

とある病院の個室

「.....」

ヒロはベッドから上半身を起こし窓を眺めてた

「.....大介.....怒るだろうな.....」

しょんぼりと呟いた

「はぁ.....」

溜め息を一つ吐くとバン、とドアが開く

風間大介が息を切らして入ってきた

所々に擦り傷があり服もボロボロだった

「.....ヒロ.....」

「だ、大介.....」

大介は無言で歩いてくる

「…、」

叩かれる

怒られる…

言いようのない不安が込み上げてくる

しかし大介は

ギュッと

私を抱き締めてくれた

「…え？」

「良かった…！！本当、に…！！」

背中を回す手が強くなってくる

とても強く抱き締めてくれてる

「だい、…すけ…」

目頭が熱くなる

込み上げてくる感情を抑えきれない

ごめんなさい

心配かけて…本当にごめんなさいと

「う、うええ…!!」

もう抑えられない

大介の体温が伝わる中

私は大声を上げてないた

そして心からの言葉を紡いだ

「ごめんなさい…!!」

大介…本当に…

ごめんなさい…

………

同病院の屋上

佐天涙子は立っていた

御守りを握り締めながら

「佐天さん!!」

扉を勢いよく開けて初春がやってきた

「よ、初春」

佐天は気楽に返す

いつもと同じように

「よ、じゃないですよ！！病室にいないから探したじゃないですか！！起き上がって大丈夫なんですか！まだどうか具合が悪いとか――」

「ははは……ちよつと眠ってたただけだもん……すっかり元通り。能力が使えない所までねー」

何気なく言った言葉に初春はたじろぐ

佐天は初春を見る

所々に傷がある

本当に、ボロボロで

「……」

軽い沈黙

その沈黙を破ったのは佐天だった

ガバッと初春に抱きついた

「…佐天さん？」

「ごめん…。つまないことにこだわって、内緒で、ズルして…初春やアラタさんに、迷惑かけて…」

「…そんな事…」

「私、もう少しで能力なんかより、ずっと大切なものを無くす所だった…!!」

初春は少し目を伏せる

「そうだ…。忘れてた…」

初春がキョトンとする

「たっだいまーっ!!」

言葉と共にばさあっ！とスカートを捲った

初春は一瞬理解出来なかったが
途端顔を真っ赤にし

「ひゃあああああっ!？」

そんな日常を出入り口で見守る人影

「これにて、一件落着ですわね」

「…そうね…」

御坂は少しうつむき加減で呟いた

「どうかしたか？御坂」

「ううん。別に…」

そう言う御坂に対して俺は

「幻想御手を使った人って、間違っていたのか。結局あの人達の気持ちに気づいてやれなかった我々能力者が今回の事件を招いた張本人なんじゃないか…。大方、そんな事で悩んでたんだろう」

「…」

御坂は顔を赤くしてそっぽを向いた

「…お姉様らしい優しさですね。…優しさついでにもう一つ…気づいて欲しい気持ちがありますの」

「…？」

二人して一瞬呆けていると

「それは、黒子の…気・持・ち…」

言いながら唇を突き出している黒子が視界に入った

「はいはい、相変わらざるの変態ぶりに、やっと調子が戻って来たぜ…。なあ御坂」

「ええ…。とりあえずいい加減に…しろーっ!!」

とりあえず黒子に雷を落とす

更に御坂がホールドし微弱の電流を流す

「あう！！お兄様の言葉責めに！！お姉様の愛の電流っ！黒子はっ！黒子はもうっ！」

…ダメだこいつ…早くなんとかしないと

「アラタさんっ！」

俺が御坂と黒子を眺めていると佐天がやってきていた

「…貴方を信じて、良かったです！！」

「…だろう？」

俺は佐天の頭を撫でる

佐天は軽く顔を赤くしてはにかんだ

屋上に続く階段

「ふむ。流石は力・ガージン…。フォローを忘れてはいないな」
神代ツルギは右腕に包帯を巻いている

初春を庇った時に出来た傷だ

矢車も影山も警備員の事務所で治療を受けているらしい

「しかし、これでよしとしよう……」

「そうだな……。雨振って、地固まる……。か。ハッピーエンドは嫌いじやねえぜ」

左翔太郎は帽子を軽く被り直して階段を降りた

………

自宅に帰宅途中

御坂を寮に送ることになった

流石に疲れただろうから送ろうと思ったのだ

「ねえ、アラタ……」

「何だ？「美琴」」

「え？……今、名前で……！？」

慌てる御坂を尻目に曲がり角を曲がる

「……なんで、さ。戦いの神ガタックになったの？他にもあったばいけど……」

俺は少し間を開けて答えた

「……守りたいものを護る為だよ」

そう真顔で御坂に言った

幻想御手編

完結

14 鏡祢アラタの受難（前書き）

今回吹寄が出てきますがキャラ変わってる感じがします…

14 鏡祢アラタの受難

幻想御手事件を解決して数日

「…暑い」

鏡祢アラタは暑さに負けております

「あつちい…なんでこんなに暑いんだあ…」

と、嘆いた所で暑さが和らぐ筈もなし

「うがー」

学生寮でゴロゴロするのも限界だ

「…そっいゃ」

何の気なしに呟いて台所に設置してある冷蔵庫を開き中を見る

「…食材がピンチだな…」

言いつつ財布の中身とご相談

「…仕方ない。買い足しに行くか…」

立ち上がり背伸びして軽く着替える

特に悩むこともなく結局学生服

アラタはあんまりファッションには拘らないタイプだ

それ故に学生服をチョイスしたのだ

「何買うかなー」

呟きながらドアを開け店を目指して歩き出す

.....

「乾パンでも買っておこうか。非常食に」

とあるスーパーにて

食材を吟味する俺

「む。玉ねぎかぁ...焼くとウマいんだよな」

いけない

趣旨が変わっている気がする

ああ...けどこういってお手頃価格な食材に人間は弱いのですっ！

8円って値段の最後にある（198円等）となんか安いつて感じちゃうじゃないっ！

誰に言ってるんだ俺は、と心の中で呟きながら玉ねぎに手を伸ばす

とそんな時だ

「鏡祢アラタ？」

ぴた、と玉ねぎに伸びた手が止まる

「…吹寄制理。奇遇だなこんなところで」

俺が声した方に振り向くと買い物カゴを下げていた吹寄が立っていた

吹寄は俺や当麻のクラスメイトだ

背が高く（俺よりはちょっち低い）スタイルも良い上に巨乳だが色
気がない残念な――

がす、と頭を掴まれる

「今失礼なモノローグが聞こえたのだけねど？貴様の体に足りてないのは乳酸菌あたり？」

ギリギリと頭を掴む手が強くなっていく

「なはは。冗談ですヨ吹寄せ…。地味に痛いんで、そろそろ外してもらえませんか？」

俺がそう言うつとふんって感じで乱暴に手を外す

「で、こんなところで何やっているの？」

「君は俺がスーパーでプラモを買うとでも？」

俺がそう言つと吹寄は「う」と言葉を詰まらせ

「そ、そうね。スーパーに来た以上買うものは決まっているもの…」

「そう言つあんたは？やっぱり食材関係か？」

「ええ。常日頃の栄養補給も大事なのよ」

そう言つてふふんと言わんばかりに胸を張る

「その栄養が全部胸に行つてんだな」

俺の何気ない一言に吹寄の周りになんかオーラが出ていた

やべ。地雷踏んだ

…いや、ワザとだけど

「そこに直りなさい！！鏡祢アラタっ！！今日という今日はそのすぐ冗談を喋る口を矯正してやるわっ！！」

「わわっ！？バカ吹寄、ここ店内！！暴れちゃダメだって！！」

俺の講義も虚しく

「黙りなさい！！貴様にはブルーベリーを接種させてやるわ！！」

「それ視力じゃなかったっけえ！？」

吹寄から逃げながらなんとか買い物を終えスーパーから出る

出る頃には二人共体力を大いに使い切つてぜえはあ言ってます

二人してその辺のベンチに腰掛けて息を整える

「はあ…はあ…。粘るなあ…吹寄」

「うるさいわよ鏡祢…」

言いながらスーパ―の袋から購入した紙パックの牛乳を取り出してストローを差し飲み始める

イライラしたからカルシウムが不足したのか

…いや、俺の所為だけど

なんか後味が悪いのでとりあえずフォローをしておく

「まあ悪かったよ吹寄」

「む！今更謝ったって——」

ぼむ、と頭に手を乗せる

「っ！！？」

「黙ってりゃ素直に綺麗で可愛いんだからさ。そいじゃあな」

とさりげなく吹寄が飲み終えた紙パックの牛乳を取りゴミ箱に投入し俺は自宅に帰る

今日は何もなしな

.....

「黙ってりや素直に綺麗で可愛いんだからさ。そいじゃあな」

そう言つて鏡祢アラタは立ち去ろうとする

さりげなく私が飲み終えた紙パックの牛乳を取ってゴミ箱に捨ててくれた

「……全く……。何よその地味な優しさ……」

鏡祢アラタは入学当初から度々からかわれている

からかわれては私が追つての繰り返し

だけど私はそこまで鏡祢アラタが嫌いではない

普段は上条当麻らクラスの三バカとバカやっているが一度本気を出したりやると言い出しら必ず完遂しているのだ

体育の時間の時だつて他の生徒が教室に帰る中一人残つて体育に使用した機材を片付けたりしていた

そんな姿を何度か見かけたからか鏡祢にだけは本気で怒れない

「……はあ……」

どことなく溜息を吐く

……無自覚なのかな。鏡祢アラタは

.....

今日も今日とてなかなか素晴らしい

寮に戻ってもはつきり言っでやることがない為その辺をぶらついでいる

まあぶらついても暇なのですけど

だけど

「何もないって、平和だねえ……」

確かに何もないと暇だ

だが何もないからこそ俺たちは平和を噛み締めることができる

「……？」

何気なく歩いていると何でか相談のようなものが聞こえる

ゆっくりと耳を済ます

「神裂。手筈は？」

「ええ、ステイル、まず貴方には人払いのルーンを張って貰います」
「……ルーン？」

蒼崎燈子からいくらか話は聞いた事はあったけれど……

ちらりと横目で相談している二人を見る

一人は身長約二メートル弱、赤い髪に神父のような格好で煙草をくわえている

もう一人は女性でYシャツを胸元辺りで縛りジーンズはなんか左足の太ももを露出している

(…露出狂?)

一瞬考えたけどそんな事はなかったぜ

てかいたらヤバいな

「…ま、どうでもいいか。俺の「守るべきモノ(テリトリー)」に手を出さなければ、魔術側がのさばっても文句はない」

鏡祢アラタは自分が守るべき対象をテリトリーと呼んでいる

美琴や黒子、初春や佐天もテリトリーに入っている

当麻や吹寄も当然テリトリーの内だ

普段は温厚なアラタだがそのテリトリーの誰かが傷付けられたなら、アラタは「許さない」

俺は視線を前に戻して立ち上がる

「さて…。本当にやることはないな…」

と考えた所で携帯が鳴る

「…美琴？」

俺は携帯に出る

>あ。アラタ？<

電話から聞こえる美琴の声

>実はね…<

………

「水着のモデルう…？」

>そ。どうせあんた暇でしょ？明後日なんだけど、
|< んで場所は――

…なんか話がポンポン進んでるけどまあいいか

今の時期は暑いし丁度涼みたいと思ってたのだ

絶好の機会だな

………

そんな訳で数日後

『うわあゝ…』

初春と佐天のそんな呟きから始まりました

「なんか企業って感じ!!」

佐天が感想を言う

現在その水着のモデルをするであろうビルにやってきていた

「（…美琴）」

俺的にはかなり予想外

「（ん？何？）」

「（佐天と初春がいるなんて聞いてないぞ）」

「（当たり前じゃない。言っていないもん）」

全く悪びれた様子もなく言い切りおってん

「ちょっと、ときどきしちやいますよねゝ!!」

初春もテンション上がっている

美琴の隣にいた常盤台の制服を来た軽く青みがあったストレートの女性が美琴に向き直り

「お友達まで呼んでいただいて、ありがとうございます」

そう言つて軽く礼をする

「気にしないで。どうせなら皆で楽しくやった方がいいしね」

もれなく俺は楽しくないんだが

「それに、御坂様が認めたという殿方とも出会えて感激です…」

そう言つて今度は俺に向き直つて再び一礼する

「ああ、俺は鏡祢アラタ。気軽にアラタと呼んでくれ」

俺がそう言つと彼女（泡浮というらしい）は顔を真っ赤にし

「そんな…！！御坂様の「恋人」の名前を呼ぶなんて…！！」

…恋人？

「ちょ、泡浮さん違うわよ！！私とアラタは友達よ、ただの友達！
！」

「へ…？違つんですか？」

「そ、そうよ！！そりゃ、仲はなまじ男子と比べて良いけど、ね…」

美琴は顔を真っ赤にしながら明後日の方向を向いた

「でも、良いんですか？私たちが水着のモデルなんて」
初春がショートボブな女性（湾内さん）に聞く

「大丈夫ですの。どんな幼児体系でも、科学の力でちょちよつと処理してくれますの」

黒子のそんな毒舌に初春はがーんっ！とし

「ヒドいです白井さん…」

初春がしょぼんとする

「黒子もどっこいどっこいだろっ」

俺の一言がグサツと来た黒子

「…ヒドいですわお兄様あゝ」

軽く初春の敵を討ったよ

「お待たせしましたー」

そんな時奥の通路から一人の女性が歩いてきた

「…メーカーの担当さんかな？」

俺の呟きに湾内がこくん、と頷く

「今日よろしくお願いしますね。…あれ？あとの二人は？」

担当さんが首を傾げる

「二人？」

黒子がそんな事を呟くと

「あら白井さん？」

「ぬが。…この声は…」

声が出た方向を振り向くとそこには和服をきた女性とジャンパーに両手を突っ込んだ――

「国法！？」

「え、…え！？アラタ、貴方なんで…！？」

俺の存在を認識すると国法は顔を赤くする

「あらまあ皆でゾロゾロと。社会科学見学か何かかしら？」

そんな様子を気にすることなく黒子の友人（？）婚后光子は歩いてきて皆を見渡す

「婚后光子…」

黒子が憎々しげに名前を呟く

「なんで国法がここにいてっ！？」

俺が国法に近づいて聞くと

「わ、私はいつも通ってるジムで、風紀委員の先輩に頼まれて…」

「貴女はなんですか？それに、休みの日も制服で外出する規則。お忘れですか？」

一方黒子は婚后光子にその和服の意味を問いただしていた

「今日のわたくしは常盤台の生徒ではなく、一人のモデルとして馳せ参じましたのよ」

言葉と共にばさつと扇子を開く

「モデル？…貴女も…？」

「え？という事は…貴女も…」

つまりここにいる人達は全員水着のモデルでやってきたという事が…

「そういや、美琴はなんでここに呼ばれたんだ？」

俺は根本的な事を聞いてなかった

「ああ。私は水泳部の子達に頼まれて」

そう言っただけでちやうど湾内さんと泡浮さんを見る

二人は軽く一礼

「見た所、皆さん初めてのようですから、色々と教えて差し上げますわ。わたくし、子供の頃からモデルをやっていましたのよ？」

そう言っただけで回想する婚后

「我が家のホールに響き渡るオーディエンスの拍手喝采…今でもこの胸に響いてきますわ…」

・・・

「お前のクラスメイトは多芸だな…」

「…言わないでくださいな…」

「さ、早く行きましょう。試着室に案内してくださる？」

「あ、はい」

婚后は担当さんに聞いて歩き始める

「…お知り合いなんですか？」

初春の素朴な疑問

「知り合いたくありませんでしたけど…」

………

流石に更衣室は別々だ

てか別々じゃないと困るわボケえ

仮にも俺は健全な男子なのだよ

「それでは、どれでも好きなものを選んでください」

「了解です。着替え終わったらどこに向かいます?」

「はい。着替え終わったら係員に指示に従ってください」

「わかりましたー」

担当さんが去っていく

「…」

さてどうしたもんか

ぶつちやけ水着なんて興味ないけど

あ、そだ。ライダーベルトは絶対につけないと

んーと…

お、私服をイメージした水着か…

こんなんでもいいか

短パンにYシャツをイメージしたウェットスーツ（上だけ）

…水着?

とりあえず一人だからささっと制服を脱いでライダーベルトを取る

そして水着を着てその上からライダーベルトを装着する

「ん、これでよし……」

とりあえず係員の指示に従って女性陣を待つ

………

なんなんだここ

「真っ白だな……」

とぶつくさ待っているとそれぞれ個性に溢れた水着を着た女性陣が入ってきた

美琴はシンプルなスク水

初春は花柄ワンピース

佐天はビキニに下半身に布を巻いている

俗に言うパレオみたいものだ

湾内さんもビキニで泡浮さんも模様が入ったスク水

今更だがスク水という表現は合ってるのかな

黒子は……

「…黒子。お前のそれは水着か？」

「あらまお兄様。御言葉ですがしつかりとした水着ですよ？」

何もかもがきわどい水着だった

婚后光子とやらは体のラインを強調した赤いレオタード

国法は

「…相変わらずダイナミックだなお前」

「仕方ないじゃない…これ以上のサイズないんだもの…」
一言で表すならボンキュボンなのだ

「てか、このフロアって何にもないけど？」

俺が素朴な疑問を口にする

「ここで撮影するんですか？」

担当さんに初春が聞くと担当さんはリモコンを取り出して操作する

途端にフロアが南国のビーチに変化する

『おおおおおお！！』

担当さんがリモコンを操作する度に景色が変わる

「このスタジオは、色々なシチュエーションを作り出せるんですよ」

佐天が一本の木に近づいて触れる

「わ、すごい！！触れる！！」

「学園都市の最新技術です」

すげーな学園都市

「あの、やっぱりカメラマンって男の人ですかね……？」

初春がそんな疑問を口にした

「……」

体育座りする俺

「ああ！あ、アラタさんは別に……その……！！」

必死にフォローする初春

「全て自動撮影です」

その一言に『へ？』と全員が口を揃える

「カメラが視界に入るのはまずありませんので、自然体でお願いしますね」

その言葉にもう一回皆が口を揃えて

『へ？』

そんな声しか言えなかった

.....

自然体

人間自然体が一番良いとかどこかの誰かが言っていた

「お姉様、私たち達もやりますわよ！！」

後ろで声がしたので見ると美琴が黒子と会話している

「？ やるって何を？」

「もちろん、自然体でサンオイルの塗りあいっこですよ……！！」

「ってまたそれか！！やらないっての！！」

言葉と共に黒子から逃亡する美琴

さっそく自然体なお二人だ

「なるほど。あれが自然体ね」

国法がそんな二人を見て呟く

「流石御坂様……。素晴らしいお手本ですわ……」
湾内さんが感嘆の声をあげる

「私たちも見習いましょう」

泡浮さんの言葉に皆が頷く

…この中で男一人で何をしろと

とりあえず俺は国法と共に行動する事にした

ビーチにてハンモックで寝る国法に俺は執事宜しく

「お嬢様。フルーツとトロピカルドリンクをお持ちしました…なんてな」

軽くその冗談に笑い

「似合ってるわよアラタ。風紀委員辞めたら執事でもやってみる？
177支部限定の」

「結局お前の隣か。…悪くはないかもしれないね」

「あら。冗談で言ったのに…」

二人して顔を見合わせる

「…くす」

「…はは」

何の気なしにお互い笑い合う

国法とは俺が風紀委員になった当初から世話になっている

なんだかんだで頼りになる先輩なのだ国法は

団欒していると再び背景が変わる

広いプールタイプだ

もういいや

今日は執事で通そう

丸テーブルに座っている佐天と初春、そして国法にドリンクを持ってくる

気分を出す為に私服タイプの水着からもう執事服に着替えた

「アラタさん執事服似合いすぎですよー」

佐天の軽口に笑顔で

「ありがとうございます、お嬢様」

「はははっ、なんか照れちゃいますよ」

佐天がはにかみながらも嬉しそうに頭を掻く

「アラタさん、かつこいいです、その執事服っ！ー！」

初春がテンション上がってる

「ありがとう、初春」

とりあえず頭を撫でておく

嬉しそうに目を細める初春

そして今度はクルーザー

執事として様々なサポートを欠かさない

フォーマルな守護者ってどこかの誰かが言っていましたよ

「似合ってるじゃない。…その服」

美琴にジューズを持っていったらそんな事を言われた

現在執事服的なのを着用してます

よくあったなと自分でもびっくりだ

「言ってるお前は水着だけだな」

「な！いい、良いじゃない！！別に！！てか、水着のモデルなんだから当たり前じゃないっ！！」

顔を赤くして怒号を言う美琴

「どーどー、落ち着きな。お前だって似合ってたんぜ、その水着」

「そ、そう？…むー」

>すみませーん、ちょっと調整しますので、景色変えますね<

担当さんの声が聞こえると同時に景色がキャンプ場に切り替わる

担当さんが言うにはカメラのシステムにエラーが出てしまったようだ

「すぐ直ると思いますので、少し休憩してください」

「休憩…」

何の気なしにキャンプ場に切り替わった時機に置いてあった玉ねぎ
を手に取る

…あれ、触れるよこれ

「あ、その材料本物ですからー、ご自由にどうぞー」

そう言い残し担当さんは帰っていった

もう一回言おう

すげーな学園都市

「ご自由について言われても…」

佐天が半合を手に持ち呟く

「…このシチュエーションにこれだけの材料…となれば」

『カレーしかないでしょう（だろっ）！！』

俺と国法がハモる

…いらんところで意識が合うな…

………

屋根がある小屋に入る

窓がない為よく見えるな

「それじゃ、ご飯とカレーの担当に別れよう」

佐天が拳手し

「私、カレーやりますー!!」

「私もー」

佐天と初春はカレー、と

「じゃあ、ご飯やるわ」

「お姉様がやるならわたくしも」

美琴と黒子のご飯、つと

「ふん。カレーなんて、そんな庶民の食べ物…」
なんか婚后は不満のようだ

「えー！？美味しいじゃないですかー!」

佐天がプチ抗議

「カレー嫌いなんですかー？」

「——実は作れないんじゃないありませんの？」

黒子の言葉に婚后はぴく、とし

「何を言っていますの！」

ばさつと扇子を広げ

「もちろん作れますわ。婚后家に代々伝わる究極のカレーを」

「へー！どんなカレーなの？」

純粹に興味を抱いた美琴が聞く

「う……」

…あれ？

「なんか美味しそう！！食べてみたい！！」

「ぜひ作ってください！！」

佐天と初春が期待の眼差しで婚后を見る

「い、いえ、せっかくですから今日は、庶民のカレーを食べて差し上げますわ」

「両方作ればいいんじゃない？材料あるし」

国法まさかのキラーパス

「それ良いですねっ!!」

「さんせーい!!ね?」

婚后に確認を取る佐天

「ま、まあどうしても言うなら…」

『やったー!』

そんなこんなでカレー作りは始まった

………

俺は婚后が気になって仕方がないので婚后を見守ることにした

まず玉ねぎを剥く事になったようなのだが…

向き過ぎてニンニクみたいに小さくなっていた

…はあ

声に出さず心の中で溜め息をついた

彼女のプライドが本当のことを言えなくしているのだ

話を簡単に聞く限り泡浮さんも湾内さんもカレーを作った事がない
ようで純粹に婚后に感謝しているのだ

…とりあえずまだ見守ろう

トマトの皮を剥こうとしてる

皮ごと食べやとツツコミたくなった

………

なぜワカメを切っている

…いや、味噌汁とかなら…まだわかるけれど…

………

ミカンを皮ごと!?

デザートか!?!デザートなのか!?

………

ごぼうを切っている中

泡浮さんと湾内さんの会話が聞こえる

「どんなカレーができるのかしら?」

「初めて作ったカレー…。楽しみですわ…」

「食材もとってもユニーク!ごぼうが合うなんて初めて知りました
…」

婚后の顔が曇っていく

純粹に楽しみにしている二人に罪悪感を感じてしまったのだろう

「婚后さん？」

湾内さんが聞く

「あの…」

「？」

婚后が重い口を開く

「実は…そのわたくし…本当はカレー作った事ないんですの…」

「え？」

「カレーは愚か、お料理なんて…。ごめんなさい、行きがかり上、引っ込みがつかなくなっただけ…」

湾内さんと泡浮さんは顔を見合わせ

「それなら、作り方を教えていただきますよう」

「そうですわね」

「…あの？」

二人は微笑んだ

優しい笑みで

婚后は俺に気がつく

「…あの…」

俺はそれに笑顔で答え

「ああ。いいぜ。皆で楽しく作るつか」

……………

その後のカレー作りはスムーズだった

婚后は俺や国法に手取り足取り教えてもらいながらも着実に調理した

時折手付きが危なっかしいがそこはしっかりと教えてあげましたよ

そしてつつがなくカレーは完成

『できたあーっ！！』

お。佐天らはチキンカレーか

シンプル！

婚后らはシーフードカレー

頑張ったな婚后

「さつて、では、いただきます」

『いただきます』

俺の言葉に皆が続く

「あむ…。んー！美味しいっ！！」

美琴が嬉しそうに言う

黒子と国法がシーフードカレーを食べる

その光景を婚后が不安げに見つめる

「これもなかなか美味しいですわね！！」

「ホント！美味しい！」

その言葉を聞くと本当に

—— 本当に嬉しそうに少し笑みを浮かべた

「良かったな、婚后」

ぼむ、と婚后の頭を撫でる

「…はい」

軽く頬を赤くしながら自分のシーフードカレーを食べる

そして美味しそうに顔を綻ばす

「な。皆で作るカレーも、なかなかオツだろう?」

「そう。より美味しく感じるわよねー! アラタ、あんたは食べないの?」

「もう食べた」

「早…」

「…貴女達、良い人ですわね…。お名前を聞かせてもらって良いかしら?」

その言葉に全員がはつとなり押し黙る

「御坂…美琴…で」

「鏡祢アラタだが…?」

「御坂…鏡祢…はてどこかで…。まあいいですわっ!」

ばさっ、と扇子を広げて

「これを機にお友達になって差し上げても宜しくてよ? 御坂さん。鏡祢さん」

…

「そう…」

「ありがとうな…」

俺と美琴は苦笑を浮かべ肯定した

…いやそれ以外何が

>お待たせしましたー。システムが復帰したので、撮影を再開しますー<

「え、もう!？」

>あ、食べてて大丈夫です。とりあえず、一枚行きまーす<

かしや

皆で取った記念写真のようなもの

男は俺一人だけねど…

中心に写った婚后はとても良い笑顔をしていた

偶にはこんな日常も…悪くないかもしれないな

15 特別講習（前書き）

今回はゲストが出演しています

15 特別講習

いつものファミレス

「ねーお姉様、やっぱり今日は映画にしましょうよ」

美琴と黒子は何かの雑誌を読み漁り今日の予定を吟味している

「映画ねー」

対する美琴は視線を雑誌に向けたまま素っ気ない返事

「ほら、これなんかどうですか？」

黒子が雑誌を見せてきた

「んー…何々、「愛と青春の戸惑い」い…？」

…パスだ俺は

「んー…そだねー」

対する美琴はやっぱり素っ気ない返事

「恋愛物は嫌いじゃないんだけどねー…」

「なんだ。今日の美琴はノリが悪いな」

「そんな事言われてもー…。っ！！」

突然美琴が声をあげる

「せっかくのお休みですのにお姉様ったら…」

「ね、ねえ！？セブンスミストの屋上、夏祭りイベントやってるみたいよ！？」

声が裏返ってる状態で美琴がそんな提案をしてきた

「…どうした突然」

「そうですね。どーせ子供相手のお寒いイベントですよ…」

黒子の言葉に美琴は

「む。そんなの行ってみないとわからないじゃないっ！」

美琴の意外な反論

「…なるほど…美琴が行きたがってたのは…こいつだな」
美琴の隣に移動し見ていた雑誌の一角を指差す

そこには着ぐるみゲコ太シヨーと書かれていた

「うゝ…違っわよ！！そんな事全然思ってた…」

「暇になったら行ってみようか？」

「え！？良いの！？」

パアッと笑顔になるけどすぐに表情を戻し

「だ、だから違うつて!!」

その光景を見て黒子はくすくす笑っていた

「すみませーん」

突如耳に入ってくる初春の声

「バス一本乗り遅れちゃって。お待たせしましたー」

「ああ、大丈夫大丈夫。私たちも来たばかりだから」

「あら？佐天さんは一緒ではありませんの？」

黒子の一言ではて、と気づく

いつも初春の隣にいる佐天がいないのだ

「ああ…それが…」

………

「補習？」

佐天はどうやら補習授業なようなのだ

「休みの日なのに補習なんて…学校も意地悪だね」

美琴の言葉に同意だ

「学校っていうかウチの中学だけじゃなくてあちこちから生徒を集

めてやる特別な補習授業なんですよ」

「特別？」

美琴が聞くと

「はい。よくわからないんですけど……」

初春が首を傾げる

「まあ何にしてもツいてませんわね……こんな良いお天気なのに……」

そう言つて窓の外空を見る

白い雲がまばらの青い空

………

佐天は一枚の紙を眺めながらぼーとする

特別講習

紙にはそう書かれている

そして隣に書かれたミニマップを確かめる

「……だよね」

場所を確認

合っているみたいだ

坂を上り階段を登る

そして出入り口に足を運ぶ

そこで佐天は一旦止まり辺りを見回す

誰もいないまばらな校舎

「えっと…」

ミニマップを確認し場所を調べようとした所で

「るいこー!」

見知った声が聞こえた

後ろを振り向くと

「アケミ、ムーちゃん、マコちゃん」

三人も今階段を上ってきたようだ

「はぁ… 朝から何なんだよこの階段」
ムーちゃんが愚痴を零した

「疲れた…」

マコちゃんもぐったりだ

「なんだよ二人共来た早々…」

そんな光景を見て佐天は少し顔を綻ばす

………

「こっちみたい」

柱に貼り付けた紙を見てアケミが声を出す

そのまま道なりに歩き出す四人

「全くさー…最悪だよねー。わざわざ休みの日に余所の学校まで来てさー…」

アケミの愚痴に

「特別講習でレベルが上がれば、苦労しないよなー…あーあ、本当だったらプールに行く筈だったのになー」

「涙子もさ、初春と遊びに行く予定だったんでしょ？」

アケミの問に佐天は

「…まあ、しょうがないよ…」

その言葉に押し黙る三人

「あーもー。諦めいいなー涙子はー！」

「そうそう。そう言う女は幸せになれんぞ？」

ムーちゃんとマコちゃんがフォローをしてくれる

「もう…やなこと言わないでよー」

その言葉に少し元気になった佐天だった

……………

一つの教室に集められたいろいろな学校の生徒

「ホントにいろんな学校の生徒が来てるんだねー」

「そうみたいだね…」

マコちんの言葉に佐天は頷く

「にしてもさー、侘びしい人数だねえ…」

「これじゃあ講習始まっても、居眠りできそうにないねー」

アケミとムーちゃんが愚痴る

その時ガラリとドアが開く

「どいつもこいつもしけたツラしてんなあ…」

スケバン風の女性が何人かの舎弟と共にやってくる

「やっぱり帰りましょうぜ姉御。だるいっす」

その言葉が頭に來た姉御はその舎弟の胸ぐらをつかみ

「ここまで来てつべこべ言ってるじゃないよ!!」

「す、すいません…」

「あの人たち、高校生だよね…」

マコちんの言葉に佐天が頷く

「ま、まあまあ姉御、落ち着いて」

「はいはい。席についてくださいな」

その高校生を仲裁したのは一見優しそうな好青年

年齢はその高校生達の一〜二歳位年上か

「あ、なんだてめえは？」

「先生だよ」

『先生え!?!』

「始めまして。午前中の講習を受け持つ事になりました皇カイトです。舐めた口抜かしていると、講習期間伸ばしちゃうぞ?」

そう言つて笑みを作る

拒否を許さない笑みだった

………
かつかつと黒板にチョークで書く音が響く

「能力開発において大事なものは、これ」

こつ、と黒板を叩く

「パーソナルリアリティの獲得なんだけど……。今日はそれについて、初心に戻って考えてみよう」

カイトは一度辺りを見回しながら言葉を続ける

「パーソナルリアリティ。いわゆる自分だけの現実を理解する上で、避けて通れないのは、ハイゼンベルクが提唱した不確定性原理を……」

佐天はその言葉を聞きながら軽く溜め息を吐く

………

授業を聞き流しているとチャイムが鳴る

「はい。それじゃあこれにて午前中の講習はおしまいだよ。昼休みを挟んで午後の講習に遅れないように、気をつけてね」

そう言い残して皇カイトは去っていった

なんか後ろで「揉んでー」と声が聞こえたがカイトは無視し歩いていった

人気がいないのを確認し

「…終わった…」

カイトは本気で脱力した

カイトはなんか士さんに頼まれてこの学園都市にやって来た

だがデンライナーは故障している為士さんと共にオーロラで来たのだ

「はぁ…午後が終わるまで、暇だな…」

………

「…全く。弁当忘れるなんて、ウツカリか佐天」

なんやいきなり電話来たと思ったら「お弁当忘れたんです」から始まった

まあその高校は俺や当麻も通ってる高校だったからすぐに行けた

「ほら。サンドイッチだけど文句ないな」

俺はコンビニで購入したサンドイッチを佐天に渡す

「ありがとうございます。アラタさん」

「まったく…頼れとは言ったけど、食事位は用意しろよな」

佐天の頭をぐしぐしと撫でる

「えへへ…すみません…」

頬を赤くしながら目を細める

「あ、あの、佐天さん…鏡祢さん」

不意に横で声がした

「ん？おお、重福…。久しぶりだな」

佐天はなんか軽く引きつってたが

「あれ、重福さんもこの講習一緒に受けてたの？」

「なんだ佐天。気付かなかったのか」

「は、はい…。恥ずかしながら…」

佐天は軽く頭を掻く

「私の能力、タミーチエック視覚阻害タミーチエックって、対象物を見ているという認識そのものを阻害する能力じゃないですか」

うん、と佐天が頷く

「なるほど、それで存在感を少し消していたのか」

アラタの言葉に重福は頷く

「あのっ…！いつも私の手紙にお返事くださって、ありがとっ！」

います」

言いながら軽く一礼する

「当然だ。約束したしな。な？」

俺が佐天に聞くと佐天は「あはは…」と苦笑を浮かべた

「で、でも、今度は佐天さんや鏡祢さんの方から先に、お手紙出してほしいな…、なんて…。きや…」

俺でさえ多少ビックリだ

「…」

俺は一枚の紙を重福に握らせる

「…？これは？」

「講習が終わったら読んでいいぜ」

「…？」

重福はそれを大事そうにポケットに仕舞うと

「だけど今日は本当に来て良かったです…。まさか佐天さんと鏡祢さんと再会できるなんて…」

「佐天。俺はもう帰るぞ？」

一人舞い上がる重福を尻目に俺は帰るを選択した

「え？行っちゃうんですか？」

佐天が軽く寂しそうな表情をしたので頭を撫でる

「大丈夫。また会えるって。じゃあな」

俺は佐天に別れを告げて美琴達と合流するべく急いだ

.....

午後

この暑い中黒いコートを着てる男性がトラックに白線を引く

「この暑い中体力テストなんて... たっりいなあ...」

「つべこべ言ってるんじゃないよ。文句言ったら涼しくなんのか？」
姉御が文句を言った舎弟に答をいれる

「ほら、注目だ。注目」

ごと、とライン引きを自分の足元に置く

「午後の体力トレーニング講習を受け持つ、門矢士だ。よろしく」

よろしくという言葉にまばらによりしくお願いしまーすと帰ってくる

「おし。早速持久走行くか」

その言葉に生徒たちがざわつき始める

「お前たちの限界に挑んでもらう」

.....

ホイッスルの音が響く

内容は走れなくなるまで走るという拷問のような内容

しかし士は黄泉川からそう言われているので普通に実行に移す

「ん。ほらそこ。ダラダラしてんな！走れ走れ！」

士が一喝すると「ひいゝ！！」みたいな声と共に頑張っ走

「もうダメだと思ったら手え挙げな！」

.....

「はは...。やってるな、士さん」

窓からその光景を眺めているカイト

「士さんって結構スパルタだからな。皆頑張っほしいね...」

言いながらおにぎりをかじる

「そうすれば、超えられるかもしれないよ？」

そう言って皇カイトは微笑んだ

.....

しばらく時間が経つと流石に過半数の生徒がダウンする

士の目の前で一人の男子生徒でダウンする

「立て。立ち上がれ」

士が言つと懸命に立とうとするが体力の限界で遂にダウンする

「ふむ……」

一度辺りを見回す

佐天涙子が目に入った

あいつはここまで真面目によく走つたな

士は内心關心していた

佐天がもう限界と言わないばかりに手をあげる

「ギブアップか？」

「はい……」

「よし。ラスト一周ダッシュだ」

「ええ！？」

佐天が声をあげる

「ダッシュ！」

士の声と共に佐天が「は、はいっ！」と言ってダッシュする

その様子を見ていた姉御は小さく舌打ちをした

……

佐天は律儀に後一周走りきった

「いいぜ。もう少しだ」

佐天は本当にバテてくたり、と座る

「よし。それじゃあ、もう一周行くか」
士の追い討ち

「む、無理です……」

佐天は言うが

「立て」

士の声は凜としている

「あと一周頑張んな」

「——こんなのトレーニングじゃねえ!!」

声がした方に振り向くと姉御が士を睨みつけている

「トレーニングだろう?」

士は特に悪びれた様子無くいつもの調子で応える

「どこがだ!!ただのシゴキだろうが!!ああ!?!」

言いながら士の胸ぐらをつかみ睨む

「ホントの事言ったらどうだよ!!罰なんだろ!?!この講習はあたいらに罰を与える為のものなんだろう!?!」

「…は。勘違いも甚だしいな」

「じゃあこの持久走にどんな意味があるか説明してみろ!!」

「…限界を超えるって事に意味があんのさ。ほら、あいつを見てみな」

士が指差した方を見ると一人の男子生徒がまだ走っていた

「あいつなんて、真っ先に手え挙げた癖に、まだ走ってる。もう無理だって諦めたら、そこで終わっちゃうのさ。自分自身知らない力があるかもしれないのに、限界を決めつけたら、それが自分の限界なんだって自覚してそこで止まっちゃうからな。この子だって」

士は佐天に向き直り

「もうダメだっと思ってから一周走ったろう？その一周した力は、
一体何だろうな」

士の口調は徐々に優しくなっていく

「能力開発だっつて、同じことさ。自分で自分の限界を決めるなって
事さ」

「屁理屈、言ってんじゃねえっ！！」

姉御は士に向かってパンチを繰り出す

が士は片手で軽々と受け止めると足を払い地面に転がす

一応パンチを受け止め手は掴んだままなので痛みは軽減されている

「ぐあ…！？」

「あ、姉御！？」

「てめえ！！教師だからって容赦しねえぞ！！」

「講習はお終いだ」

「逃げんのか！！」

姉御の声に士は特に気にするでもなく

「時間なんだよ」

土がそう言つと地面にポツポツと雨が降ってきた

「ほら。急いで校舎に戻んなー！」

土に促され佐天達は校舎に戻っていった

.....

「土さん、スパルタすぎませんか？」

校舎に戻ってきた土をカイトは軽く茶化す

「スパルタなもんか。黄泉川って奴に言われた通りにやったぜ？」

「やり方がエグいつて言ってるんです。だけど、これってホントにあの人たちに対しての罰なのかな」

カイトは呟く

「それはないだろうな。…多分お前が考えてるの一緒だぜ。話は掻い摘んでしか聞いてないけどな」

その言葉にカイトは「…そうですね」と頷き

「じゃあ、最後の講習に行ってきます」

.....

教室に入ったカイトはまだ疑念が残っている生徒達に言う

佐天という女性は一と皮向けたように少し成長しているように見えた

「皆は勘違いしてる人たちが多みたいだから、念押ししておくよ」

佐天は聞きながらノートに罰、と一つ書いてみる

「この講習は、幻想御手使用者を罰するものじゃない」

その言葉に佐天はカイトの方を見る

「確かに、レベルをあげる為に安易に幻想御手に手を出したのは、
誉められる事じゃあない。だけど、その事を必要以上に悔やんだり、
自分を責めたりする必要はない。それに罰なら皆もう、意識不明の
重体に陥るっていうとても辛い経験をしてるでしょう？既にその身
で贖ってるんだよ」

次第に皆がカイトの言葉を真面目に聞き始める

「だから今度は、その経験を生かすべきだって思わない？皆は幻想
御手を使った事で一度は本来の力よりも上の力を手に入れたよね。
つまりは、士さんが言うところの「自分が思う限界を超えた」って
事なんだ。…さあ。最後の講習を始めよう？その感覚を思い出して
瞳を閉じて、集中して、出来るだけ細かく力を使った時の事をイメ
ージしてみて」

その言葉と共に生徒が目を閉じて集中する

「皆、それぞれの「自分だけの現実」バーチャルリアリティを獲得、もしくは強固にする
足掛かりになる筈だ。…？」

佐天と目が合った

カイトは一瞬考えたが彼女に向かって僅かに微笑んでみる

佐天はそれに答えるように軽く笑う

そしてノートに目を向ける

中心に罰と書かれているノート

（私の…私だけの…現実）

佐天は考えながら目を閉じた

色々な記憶が蘇ってくる

いつも一緒にいてからかうと面白い初春

ちょっと特殊だけれど頼りになる白井

いつも周りの事を考えてくれている御坂

…そして

自分の為に本気で涙を流してくれた

誰にでも優しいけれど

誰にでも厳しいあの人

アラタさん…

心の中で名前を呟き目を開く

佐天の心が現れたように雨が上がった

佐天はその陽に向かって微笑んだ

「それじゃあ皆、最後に能力テストを行いまーす」

「俺たちの後についてきな」

カイトと士の言葉に生徒達が立ち上がる

…

帰ろうとした時に下駄箱を開くと一枚の手紙が入っていた

「あ、ごめん…。先帰ってて。あたしちょっと用あるから」

友達を帰らして自分少し汚れた階段に腰を下ろす

「やつぱり、重福さんか」

それにちよつと微笑ましい気分になりながら手紙を読む

「今日は佐天さんと鏡祢さんに再会できて、本当に良かったと思います。黙々と持久走を走る姿や、怖い不良の方々に意見する姿を見て、なにやら勇気付けられたと思います。今後は佐天さんや鏡祢さんを見習って、ウジウジ後悔ばかりせず強く生きていこうと思います」

「…強くなんでないよ」

その手紙にそう返す

ポケットから能力テストの結果の記された紙を取り出す

そこにはレベル0と書かれてる

「…そんなに上手く行く訳ないよね…」
自嘲気味に笑ってしまう

「でも」

悩んだら相談に乗ってやる

道を間違えたら俺が立ちふさがってやる

昏睡していた時頭に響いてきたあの人の言葉

私は、また頑張れる

だから――

『また頑張ろう』

「え？」

「へ？」

誰かとハモっていた

ふと隣を見ると持久走の時走っていたあの男子生徒だ

「あ、ど、どうも……」

「どうも……」

そう言った佐天の口元は少し笑みを浮かべていた

……

「さつて…帰りますかー！」
ぐー、と背伸びする

ふと視界を前に向けると

「佐天さーん」

御坂と白井、初春とアラタが待っていてくれたのだ

「お迎えに来ましたよー」
初春の声が耳に入ってくる

「全く。なかなか出てこないからもう帰ってしまったのかと思って
しまいましたわー」

「佐天ー。お前がいないと、話がちつとも進まないんだー。早くこ
ーい」

白井とアラタがそう言ってきてくれた

佐天はそれに口元を綻ばせ

「えー！？一体何があつたんですかー！？」

佐天は走つて四人に合流する

佐天涙子の

「自分だけの現実」は

バーチャルリアリティ

すぐ隣にあつたんだ――

.....

重福省帆は鏡祢から貰った紙を広げてみる

そこには数字の羅列と一つのアドレス

「これって…鏡祢さんの…！！」

重福は本当に嬉しくなりその紙を愛おしく抱き締めた

「鏡祢さん…」

重福省帆の鏡祢アラタに対する好感度はうなぎ上りだった

.....

「…この世界は、任せて問題ないですね」

カイトが土に向き直る

「だな。…さて、帰るか」

士が手を突き出すとそこにオーロラが広がる

「…この世界を頼みましたよ。鏡祢アラタくん」

オーロラが二人を通り過ぎる

そこには例のごとく

もう誰もいなかった

15 特別講習（後書き）

ゲストのカイトと土は十二話直後の状態です

16 スキルアウト 前編（前書き）

予想以上に長くなりました

そしてグダグダです

16 スキルアウト 前編

路地裏にて

そこに男性が幾人が集まり一人の女生徒を囲んでいる

「…あなた方。わたくしを、常盤台の婚后光子と知っての狼藉ですの？」

ばさ、と扇子を開き男たちを見渡す

「狼藉？、流石お嬢様は、俺たちとは違うお言葉をおつかいだ。な？」

仲間に目配せすると嘲るように婚后を笑い出す

その態度に婚后はピクリとこめかみを震わせて

「どうやら日本語が通じない方の方ですわね…。ならば、お相手いたしましょう」

婚后は少し身構える

「…ふ」

男がニヤリと笑うと同時

「…！？」

キーンと言つ耳障りな音共に激しい頭痛が婚后を襲った

「どうした？頭がいてえのか？」

男の声など耳に入らない

「こ、これは…！？」

能力を使用しようとしてもその感覚が呼び起こす事が出来ない

遂に婚后は扇子を落とし膝をついてしまった

男は勝利を確信し――

「だ、誰だてめえ！！ぐあー！！」

ばき、と殴る音がした

「んあ？」

男の目線の先には二人の男性

「おいおい。女の子にちょっかい出すつてのは、いただけねえな」

皮ジャンに髑髏のネックレスをした男性

もう一人は青いジーンズに同じく皮ジャンを着た男性

「…黒妻。齋堵さんの助けはいるかい？」

「だな。手が疲れるから、ちょっと手伝ってくれ」

「了解」

そんな会話が婚后の耳に入ってきた

「…だ、れ…？」

それを最後に婚后光子の意識は途絶えた

………

「このところ頻発して行っていたスキルアウトによる能力者狩りも、
どうやらこれで打ち止めですわね」

俺は通報現場に到着すると辺りを見回し被害を確認する

「まさか婚后光子を狙うとは。どれだけ怒涛を組もうとも、レベル
0のはぐれ者達が、レベル4の能力者に適うはずがないとこの連中
も骨身に染みて——」

「それが違うらしいの」

黒子の言葉は国法の言葉に遮られた

「違っつてどういっつた？ 国法」

「彼女の話では、自分は何故か、能力が上手く使えなかった…そこに謎の人物が現れて…」

言葉の途中タンカでスキルアウトが運ばれていく

国法はタンカで運ばれていく人物を横目で見ながら

「タメゾウ…？」

誰か名前を呟いた

「？ 国法先輩？」

その態度を怪訝に思った黒子は名前を呼んでみる

「あ、ああ、ごめん…えと…、初春さんの聞き取り、上手くいってるかな？」

…逃げたな。国法

婚后光子の話を纏めると

自分は突然頭が痛くなり何時の間にか気を失ってしまった

そして次に気がついた時には既に全員倒されていたという

婚后が覚えているのは黒い皮ジャンを持ち背中に大きな蜘蛛の刺青があっただけらしい

背中に蜘蛛の刺青、の辺りで国法がハッとする

「…国法、お前今日は珍しく挙動不審じゃんか。どうした？」

俺の言葉に国法は

「ううん。何でもない…」

変な国法だな

「その皮ジャンに黒蜘蛛刺青の男が、こいつらをやっつけたんでし
ようかね？」

「…話を聞く限りでは、その線が高いだろうな」

ちらりと国法を見る

その時の国法の顔はどこか、遠い思い出を思い出すような

そんな表情だった

……………

「ビッグスパイダー？」

その日俺は珍しく国法に食事に誘われてファミレスにお互い向き合
って座っている

「そいつが一連の能力者狩りを行っていた組織の名前なのか？」

国法にそう聞くと頷き

「ビッグスパイダーは、スキルアウトの中でもちよつとは名の知れ
た組織なの。かつてはそれなりのプライドを持って、一世を弁えて
ただけど、最近は単なる無法者の集団になってしまった…」

そう言つて国法はスパゲティをフォークに絡ませてパク、と頂く

「プライド、ねえ…」

どうも実感が湧かない

俺もレベルは0なんだが

「…アラタがそう顔をしかめるのも分かるわ。でも、彼らの中にくすぶる不満。憤り、それでも消せない能力者への憧れ…」

「国法、やけに詳しいな」

俺がそう聞くと一瞬のけぞつたが

「ま、まあね」

「流石は、先輩、という訳か…」
ちよつと感心

「…ありがと。アラタ」

そう言つてまたスパゲティを食べる

どうでもいいが国法に誘われてなければ今日は美琴らとカフェでラ
ンチだったな―

「…俺も、さ」

不意に口が開いた

「アラタ？」

「…もし道を間違えていたら、スキルアウトになってたのかねえ」

そんなことを国法に言っていた

「…もしそうだったとしても、貴方の友達が止めてくれたでしょう？」

「…だな。ツルギ辺りはブン殴ってきそうだな」

「…ねえ。どうしていきなりそんな事聞いたの？貴方らしくない」

「…さあな。…自分でもわかんねーや…」

ガタンとテーブルに突っ伏す

「…たまに考えんだよ。俺が能力を持ったらどんな感じになるのか。もちろん能力はあるけど、はつきり言って微妙だし…」

「え？貴方、能力があるの？」

国法は俺が能力を持っていることに驚いたようだ

「ああ。あるよ。レベル不明の「イーヴルアイズ直死魔眼」…けど、俺には上手く使えないからさ」

「…レベル不明…？そんなのってあるの？」

「自分でもよくわからない。ただはつきり言えるのは、俺は上手く使えないって事だけさ……」

そう言っ て俺は自嘲気味に笑う

「アラタ……」

「すまない。辛気臭くなったな、今言っ た事は忘れてくれ」

そう言っ て俺は顔をあげて笑みを浮かべた

「……アラタ」

「お前も今日は誘っ てくれてありがとな。珍しい事もあるもんだ、暇が出来たら、また誘っ てくれな」

そう言っ て俺は卓上に500円玉を置いて歩いていった

………

「……」

アラタの話も気になっ たけれど、今は現状確認

「……まさか。……先輩なんですか？」

過去の記憶が蘇っ てくる

かつて自分が、ビッグスパイダーにいた時期を

.....

「またビッグスパイダーが？」

「今週だけでもう三件目……」

何時の間にか美琴にも情報が回っていたらしく美琴が怒りの声をあげていた

「連中ピッチをあげてきてますわ……」

「やっぱここは一発ドカンと——」

「美琴。お前のドカンはハンパないから、ダメだ」

軽くツッコむ

「ビッグスパイダーが勢力を伸ばしてきたのは、二年くらい前のようですな」

初春が手元の携帯端末を見ながら呟く

その言葉に国法が顔を一瞬あげる

「武器を手にして犯罪行為を繰り返すようになったのも、ちょうどその頃……」

「なるほど。武器を手に入れ調子づいたって訳ね」

美琴が腕を組む

「でもそんなものを学園都市の外から、どうやって持ち込むんだろ
う?。」

美琴の疑問も最もだ

持ってくるにはそれなりの苦労があるはずだが…

「物資の流通は厳重に管理されてるし…」

「非合理的な物に至っては、当然シャットアウトされてる筈だしな」

俺の言葉に美琴が頷く

「蛇の道は蛇…と言いますから…」

黒子が呟く

「なるほど。その道を作った奴がいるって訳か…」

「つまり、バックがいる、ということですか?お兄様」

「ああ。わからないけど、その線で一度調べてみる価値はあると思
う」

その言葉に黒子がむう、と考える

「あの…」

初春が手元の携帯端末を見ながら声をあげる

「それからもう一つ。ビッグスパイダーのリーダーがわかりました。名前は黒妻綿流^{くろつまわたる}。かなりあくどい男のようです」

国法はまたハツとし唇を噛み締めている

「仲間も平気で裏切るような人ですね…グループから抜けるなんて言うものなら、背中から撃ちかねないと言われています」

「つまり、最低のクソ野郎って所か…」

その言葉を聞いた国法はギュツと見えないように拳を握り締めた

「あ、背中と言えばその人、背中に蜘蛛の刺青の入れてるらしいですよ」

「蜘蛛の？」

「あれ？婚後を助けた奴も蜘蛛の刺青入れてなかったっけ？」

なんかこんがらがってきたな…

「その男が黒妻綿流…？どついう事ですの？」

黒子がまた考える

「結局、助けたんじゃないくて。単なる仲間割れだったとか」

「確かに、今のところなら美琴の意見も有力だが…」

「彼らは、第十学区の、通称「ストレンジ」と言われる所を根城に

しているようです」

「…むう…」

「行くの？」

美琴の問いに俺は

「管轄外ではあるけれど…第七学区内で発生した事件の調査と言えば筋は通る。国法」

俺は国法に許可を取ろうとして――

「…ゴメン。私、今日じゅうに報告書纏めなきゃなんなくて…」

国法が？

「じゃあ、行こっか！」

「ちょ、行くつてお姉様…」

「…悪い。美琴。黒子と一緒に先行つててくれ。俺も寄る所が出来た」

「えー…。まあしゃあない。黒子、行くわよ！」

がし、と黒子の手を掴み走っていく

「あ、ちょっと、お姉様！あゝれゝ…、ごむたいなゝ」

一瞬残念そうな美琴と連れられて嬉しそうな黒子であった

.....

俺はエクステンダーを走らせて一つの事務所にやってきた

幻想御手事件でお世話になったあの事務所

「左の旦那」

ばん、と扉を開けるとタイプライターを打っていた翔太郎が顔をあげる

「お？アラタじゃねえか。どうした一体」

「ああ。ちょっと調べて欲しい事があるんだ」

.....

フィリップは地球の本棚を展開する

「検索を始めよう。まずキーワードは？」

聞いてくるフィリップに俺は

「キーワードは、スキルアウト。ビッグスパイダー。そして、黒妻綿流」

三つのキーワードを告げる

フィリップはその言葉を聞き情報を絞る

「ビンゴ。黒妻綿流は、半年前に刑務所を出所している」

「半年前？」

「理由はわからないが彼は二年前仲間を助ける為に自ら罠に飛び込んでいくほどの仲間思いだ。多分その時に捕まったのだろう」

その言葉を聞いて俺は考える

黒妻綿流は話で聞いた限りだと最低の人物

しかしフィリップの検索結果によると黒妻綿流は捕らえられた仲間の為に罠の地に飛び込んでいくほどの好人物だと言う

「…アラタから聞いた話によると、黒妻ってのは最低最悪の野郎かと思ってたが…」

翔太郎が顎に手を乗せながら進言する

「なら、情報に誤りがあるのか、今のビッグスパイダーのリーダーが、黒妻綿流の名前を使っている、という事かな」

フィリップの一つの仮定

「…念のため確認をとるか」

俺が呟くと

「そうしてくれ。事情を話せば照井竜也も協力してくれる筈だ」

「ありがとうフィリップ。左の旦那、悪いけど旦那は第十学区に行ってくれないか？俺の知り合いがいるんだ。助けてあげてくれ」

俺がそう頼むと

「OK。任しときな」

そう言って出口に向かい歩き出し――

「あ、待ってくれ翔太郎」

翔太郎をフィリップが引き留める

「ん？どうしたフィリップ」

「翔太郎のダブルドライバーは調整中なんだ。すまないが今回は口ストドライバーで戦ってくれ」

「マジか。…ま、しゃあないな…。っし！行くぜ、アラタ！」

「あいよ、旦那」

俺は旦那に促されて事務所を出た

……………

学園都市にある警備員アンチスキルの事務所

早い話が警察署だ

「スイマセン。照井警視、居ますか？」

「はい。少々お待ちください」

受付の人はそう言つと電話をかける

しばらく待っていると

「鏡祢か。どうした？」

奥の通路から青いライダースジャケットを着た男性が歩いてくる

彼は照井竜

かつては超常犯罪捜査課に属しドーパント絡みの事件を解決していた敏腕刑事だ

「照井さん。ご結婚おめでとございます」

とりあえずまずそう言った

「なんだ。知っていたのか…。教えたのは左か？」

左の旦那から聞いた情報によると前旦那の事務所にいた鳴海亜希子という女性と結婚したらしいのだ

…経緯は全く知りませんけどねっ！！

「それで。わざわざそんなことを言う為に来たのか？」

「まさか。最近頻繁に行われてるスキルアウトによる能力者狩りは知ってますよね？」

そう言つと照井さんは頷き

「ああ。警備員も警備を強化しているんだが…。どうもな」

照井さんが顔をしかめる

どうやら警備員でも難航しているらしい…

「実は風紀委員^{ジャッジメント}の仕事の時、友人が襲われてしまったんです。ですが、その友人を助けた一般男性がいたらしくて…」

「ほう。なかなか肝の座った奴だな…。名前や顔はわかっていないのか？」

「ここからが聞きたいことなんです。友人の目撃情報によると、背中に蜘蛛と、蜘蛛の巣をあしらった刺青がある男性が、俺の友人を助けたらしいんですが…」

その言葉を聞いた照井さんが反応する

「蜘蛛の刺青…？鏡祢。そいつは黒い皮ジャンを持っているという情報は聞いてないか？」

「聞きました」

そう答えると「そうか…」と頷き

「そいつは黒妻だな。確か半年前に出所した記録が残っている筈だ」

「黒妻綿流…」

「フルネームを知っているのか？」

「いえ…、今能力者狩りを行っているビッグスパイダーのリーダーも、黒妻綿流って言って…」

「なんだと！？」

それを聞いた照井さんの表情が変わる

「それは本当か！？」

俺はこく、と頷く

「どういつ事だ…？」

照井さんは腕を組んで考える

「…照井さん？」

「鏡祢、捜査に俺も協力する」

急にそんなことを提案してきた

「はい…。それは構わないですけど…なんで？」

「…黒妻はな。能力者狩りなんか行つような男ではない。少なくとも俺が世話していた時はそんなことなど考えている素振りなどなかった。…俺は黒妻の真意を確かめたい…」

…なるほど

そういうことなら大歓迎だ

「わかりました。俺はこのまま第十学区に向かいます。照井さんは？」

「準備してから俺も行こう。先に行っていてくれ」

その言葉に俺は「わかりました」と頷き警備員事務所を後にした

……………

左翔太郎は第十学区に到着した

「…見ただけで治安悪いってわかるわな…こりゃ」

どこもかしこも軽く破壊され壁中グラフィティアート（カラスプレー）などで壁に落書きする事…だっけ）だらけ

「アラタの友達はどこにいった？…短髪の女の子は幻想御手ん時一緒に戦ったからわかんだけど…」

はつきり言つてここの地形は全くわからない

「…ん？」

ふと横を見ると男が数人集まって女の子にちよつかい出しているではないか

（つぶ…こいつは、ハードボイルドに、レディを助けるって感じが…）

ちよつと翔太郎は調子にのり

「待ち——」

「待ちな」

な、と続こうとした時別の男の声が遮った

（…あら…？）

翔太郎は出鼻を挫かれその状況を見守ることにした

「女の子にちよつかいだすのは、いただけねえな」

そう言いながら紙パック（ちよつと大きいあのタイプ）の牛乳を軽く飲む

「ああ、何だてめえは」

チンピラの一人が苛立った声をあげる

「ちよつと待つてな」

癖のある赤い髪の男性はチンピラ達に詰め寄る

「女の前だからって格好つけてんじゃねえぞ」

「まあまあ」

「良いからてめえはとつと消えろ」

言葉と共にチンピラの一人がばす、と赤い髪の男の手にある牛乳（ムサシノ牛乳）を叩き落とす

赤い髪の男は一度地面に落ちた牛乳を見て

それからチンピラを睨みつけた

それ以降は赤い髪の男の独壇場だった

赤い髪の男の喧嘩の腕がハンパないのだ

例えるならあれだ

武装した警官隊に素手で挑むみたいな

そんな感じ

「……すげーなおい」

翔太郎はもう自分はいらないんじゃないか、と考えその場を去ろうとしたその時

>ICEAGE<

聞き慣れた電子音が耳に入ってきた

「てめえ……！！もつぶっ殺す……！！」

首筋のメモリコネクタにメモリを挿入する

（ガイアメモリ！？）

そんなバカな、と翔太郎は思う

学園都市には照井が完全監視の元そういうものが流通されないようにしていた筈だ

いやそもそも現存のメモリは全てブレイクした筈

ミュージアムも今は機能していない

それを継ぐものとしてエグゼ、と呼ばれるストリートギャングがいたがこれも照井と協力し阻止した筈……

どちらにせよガイアメモリが絡むのなら

「待ちな」

アイスエイジドーパントは「ああ！？」と言った様子で翔太郎の方を向く

「そんなもん使ってんなら、こっからは俺が相手だ」

翔太郎はロストドライバーを腰に巻き懷から一本のメモリを取り出す

そしてスイッチを押しガイアウイスパーを起動させる

> J O K E R ! <

「変身」

ロストドライバーに挿入し開く

> J O K E R ! <

再び音声が響き渡り翔太郎の体を変える

アイスエイジと対峙していた赤い髪の男は目を見開き

赤い髪の男の後ろにいた御坂と黒子は驚きを隠せない

翔太郎がいた場所にはもう翔太郎の姿はなく

「誰だ、てめえは…!!」

アイスエイジの問いかけに

「俺の名前は…仮面ライダー…ジョーカー」

ジョーカーはその問いかけにあくまでクールに答えた

.....

アイスエイジが殴りかかってくる

しかし中身がチンピラなので、攻撃は単調で読みやすい

ジョーカーは軽く攻撃をいなし腹部にパンチの乱打を打ち込む

「ぐあ！？…このー！」

アイスエイジが冷気を放ってくる

その冷気に合わせジョーカーは跳躍しアイスエイジの背後に回りその背後に蹴りを叩き込む

よろめくアイスエイジに蹴りの乱舞をお見舞いし最後の蹴りでアイスエイジを吹っ飛ばす

「メモリブレイクだ」

ロストドライバーからメモリを抜いてマキシマムスロットにメモリをセットする

> JOKER! MAXIMUM DRIVE<

「ライダーパンチ…！」

ジョーカーの右手に紫色のエネルギーが纏わり一気にアイスエイジに向かって走る

「はああああー！」

そしてそのままアイスエイジの顔面にパンチを打ち込んだ

「うあああああ!!」

叫びをあげて爆発する

爆発が収まるとチンピラはバタリ、と倒れる

その傍らにガイアメモリが落ちメモリが破壊される

「…つくそ…!! ずらかるぞ!!」

チンピラのリーダー各のような男が倒れたチンピラを抱え早々に退散していく

「…ふう…。なんでガイアメモリなんか…」

「悪いな。わざわざ」

赤い髪の男が翔太郎に声をかける

「気にすんな。ほら、飲む予定だったけど、あんたにやるぜ」

翔太郎は第十学区に来る前に購入したムサシノ牛乳を投げ渡す

「お。悪いねえ」

紙パックの口を開けて

「んぐんぐ…。ふはあ… やっぱ牛乳は、ムサシノ牛乳だな」

ここにもムサシノ牛乳愛飲者がいたぜ

「…助けてくれなんて言った覚えないけど？」

今まで沈黙を保っていた短髪の女の子が口をだす

横のツインテの子は緑色の腕章をいそいそとスカートのポケットにしまう

「はっは、そりゃあ悪かった。昔の知り合いに君達くらいの胸の女の子がいてさ。ほっとけなかったんだ」

さらっと言い切る

「…殿方に胸のことを言われたのに」

ツインテの子は自分の胸に手をやり

「不思議と、いやらしくない…」

短髪の子は自分の胸に目をやる

「まあ安心しな。女性の価値は、胸だけじゃ決まらないぜ…」

一瞬の沈黙

いや、無論翔太郎的には自然かつハードボイルドっぽく言ってたつもりだったが

「…あの帽子の殿方のはものすごくいやらしく聞こえますわ」

「…ね」

「なんでだよ!!」

翔太郎がツツコンでるところとつとつと赤い髪の男が去ろうとしていたのだ

「あ、ちょっと待ちなさいよ!!」

「あ、お姉様っ」

その後を追う短髪とツインテ

「ちょ、待てよ!!」

このままではアラタに怒られる為翔太郎もその後を追った

………

国法は自室のクローゼットを開く

数々の衣服に加え一つの赤いジャンパー

「…」

「あれ、美偉…もう帰ってるの?」

突如扉が開きルームメイトが姿を現す

「珍しいわね。こんなに早く。風紀委員の仕事は？」

「やってるわよちゃんと。あんたこそ偶には支部に顔出しなさいよ？」

「校内だけで充分よ。私は恋に青春に忙しいの」

「ったく…あんたはいつもそうやって——」

「ねえ」

ルームメイトが声を低くする

「——なんかあつた？」

「っ！…別に」

ルームメイトは一瞬顔をしかめたが

「そう」

それ以上追求するのは止めておいた

「ま、たまに早く帰ってきたんだから、今日の晩御飯は美偉の番ね」

「え！？ちよつと碧美あおみ！！」

………

俺らは赤い髪の子についていっていくとあるビルの上についた

「ほおー…綺麗な場所だな」

「ちょっとした秘密の場所さ」

赤い髪の男が手すりに寄りかかり呟く

「…ここは風が気持ちいいんだ。ここから見るストレンジは、二年前と変わらねーな」

「二年前？」

短髪が聞き返す

「ま。色々とな」

「…それにしても、何故スキルアウトの方々は…こんな地区に集ま
つて…」

「あんた達にはわからないさ」

ツインテの言葉赤い髪の男は遮る

「…」

翔太郎は黙ってその光景を見守る

「何もかも投げ出しちまったんだよ。俺たちは。全てが能力で判断
される学園都市を捨てたのさ…」

「俺たちには、能力は手の届かない青空なのさ…この都市まちの狭い路
地から見上げるような…」

そう言って赤い髪の男は短髪に向き直る

「でも、スキルアウトはスキルアウトでしょう？群れてやることは、
るくでもないことばっか…」

短髪の言葉に赤い髪の男は清々しく笑い

「はは。手厳しいな…。ところであんた達は何しに来たんだ？」

「あゝ、そうです。私たち——」

「ビッグスパイダーって組織、あんた知らないかい？」

ツインテの言葉を遮り翔太郎が聞く

「…ここでその名前、あんま出さない方が賢明だぜ？」

「…ご忠告傷み入るぜ…。最後に、黒妻綿流って名前に心当たりは
？」

「知らないね。ま、気をつけてな」

そう言って赤い髪の男は階段を下りていった

「貴方。風紀委員でもないのになんで能力者狩りについて調べてる
んですの!？」

「おっと。悪かったなツインテ」

「ツインテではございません！！わたくしには白井黒子という名前がありますの！！」

ツインテ、もとい白井はプンプンし始めた

「まあ気にすんな。ちょっとあの男の言葉ば引っかけたな」

「二年前って言葉？」

「お。なかなか慧眼だな嬢ちゃん」

「嬢ちゃんじゃない。私には御坂美琴って名前があるのよ」

「つと悪い悪い。俺は左翔太郎、探偵だ」

翔太郎の言葉に「ふーん」と頷くと話を戻す

「ビッグスパイダーが勢力を強めたのも二年前。こりゃ他も回って見た方がいいかもな……」

翔太郎はそう言って翔太郎は歩き出した

……

「照井さん。ここは？」

第十学区についたのはその日の夕方

照井さんに連れられてとあるビルの屋上にやってきていた

「黒妻綿流が出所した時、黒妻に連れられて俺もこのビルに来たんだ。ここから見るストレンジは、絶景だろう?」

照井さんに言われて俺は景色を見る

時間が夕方にさしかかり夕陽が第十学区「ストレンジ」を包み込んでいく

確かにとても綺麗な景色だ

「…確かに。幻想的な景色ですね」

「だろう。ここで軽く雑談を交わした。…あいつと言葉を交わしたのはこれが最初で最後だった。が気さくな奴だった。だから俺は…あいつはもうそんなことはしないと確信している」

そう言う照井さんはとてもいい表情をしている

「…どんな人なんですかね。黒妻綿流っていう人は」

「…良い奴だ。…あいつが出所した後も黒妻がいないビッグスパイダーの犯罪を止めたことがあったが、やはり黒妻の存在は大きいな」

つまりカリスマ性を兼ね備えた人なのか…

「さて、今日は帰るぞ。また明日からだ」

「はい、了解です」

俺は照井さんに同意しストレンジを後にした

.....

「何にも集まらない」

あれから数日あったが全く情報が入らない

単独行動をしている所為か最近美琴や黒子と会ってない

…やべ

なんか寂しいや

ここまで俺の中ではあいつらの存在は大きいものになっていたと再認識できた

「だけど、今は仕事だな。…終わったら水族館にでも連れてってやろうか」

その時携帯に電話がかかってきた

名前を見ると左翔太郎とある

俺は携帯に出る

「旦那？」

>アラター！！今すぐストレンジにいけ！！<

旦那の怒号が響く

「だ、旦那？どうしたんだよ」

> 白井と御坂がストレンジのビッグスパイダーの本拠地に勝手に向かいやがった！！<

「なに！？」

> 俺は止めたんだが、場所を照井に報告してる隙に空間移動テレポートで行きやがった！！<

電話を聞きながら俺は外に出てガツクエクステンダーに乗り込む

「場所は！？」

> 今からその座標を送る！後はGPSで調べてくれ！<

「くそ…仕方ないか…！！」

携帯を閉じ急いでバイクを走らす

間に合ってくれよ…！！

そっ心に念じながら

………

「風紀委員ですの」

先ほど翔太郎と共に捕まえたビッグスパイダーのメンバーから場所

を聞き出し黒子のテレポートでこの場所へとやってきた

「なんだあこいつら!?!」

「餓鬼がふざけてんじゃねえぞ!!」

建物の奥から黒い皮ジャンを着て軽くリーゼント気味な男が歩いてくる

「ああ?風紀委員だあ?一体何のようだ」

「黒妻綿流ですわね?」

黒子の言葉に「ああ?」と眉をひそめ

「能力者を対象した暴行事件の首謀者として拘束します」

「…ほう。拘束ねえ…。悪いがおままごとに付き合ってる暇はねえんだ…帰りな」

「——言ってくれるわね」

黒妻の言葉に御坂は怒りを込めながら返す

「親切で言っただけなのに、わからねえなら体で分からせてやるよ…」

黒妻の言葉と共に御坂と黒子を包囲する

御坂は身構えるが

「お姉様。この程度の連中、わたくし一人で充分ですよ」

黒子は余裕の態度をとる

空間移動のレベル4である黒子はこの程度の人数差ならアラタなしでも充分捌く自信がある

「充分かどうか、俺らの実力見てからにしろよなあ!!」

言葉と共にキーンという耳障りな音が響く

同時に御坂と黒子に激しい頭痛が襲い始める

「なに…この音!？」

「頭に、直接響くみたいですよ…!!」

黒妻は余裕の笑みを浮かべながら

「どうした？」

「く…!!」

黒子は空間移動を図る、が

「跳べない…!？」

全く演算に集中できない

音が邪魔しているのだろうか…

「どうしたお嬢ちゃん。一人で充分じゃなかったのかあつ!!」

言いながら黒子の腹に蹴りを叩き込む

「うぐ!？」

軽く後ろに吹っ飛ばされる

「黒子!!…この…!!」

御坂は辺りに雷を撒き散らす

しかし狙いも威力もまるつきり違うのだ

「そんな…!!」

「はっ!!コントロールできねえか。お前はもちろん知らねえだろうが、こいつは「キャパシティダウン」ってシステムでな。詳しいことは知らねえが要するに音が脳の演算を邪魔するんだってよ。ま、俺たちスキルアウトにはただの甲高い音にしか聞こえないけどな」

「…く…!!」

御坂は唇を噛み締める

「こんなもの…、一体どうやって…!？」
耳を押さえながら黒子が立ち上がる

「へ…。「黒妻さん許してください」って言うんなら…考えてやってもいいけどな…」

「ほう。今は貴様が黒妻か」

「!？」

黒妻が声の方向を振り向く

そこには大剣を引きずっている青いライダーズジャケットを着た男がいる

さらにその後ろには

「蛇谷…久しぶりだな」

「黒妻、さん…!？」

「え!？」

「どう言う、事ですの…」

赤いライダーズジャケットの男はそばにある車を見る

スピーカーのような機械に

「はあああああっ!！」

エンジンブレードでぶった斬った

途端に音が止む

「音が――」

「――消えた…！？」

「大丈夫か。御坂美琴。白井黒子も」

「え、は、はい…」

「大丈夫、ですの…」

「これ、持ってて」

歩いてきた赤い髪の男はムサシノ牛乳の紙パックを預ける

「え、あ、あの…！！」

そして「黒妻」が黒妻を見る

「う、嘘だ…。あんた死んだはずだ…あれだけの事があって、生きてるはずがねえんだ！！」

「じゃあ、ユーレイって事で良いんじゃない？」

また別の所からの声

「霧島齋堵…」

赤いライダースジャケットの男が呟く

「…ユーレイ…ユーレイ…！！だったら墓の下に戻したらあ…！！おら！やっちまええ…！！」

黒妻の言葉に全員が武器を構える

「相手はたかだか三人だ…！！こつちには武器もあるだろうが…！！」

「はあああつ…！！」

一つの怒号が響き渡る

一人の男が殴り倒している

「美琴、黒子…！！無事か…！！」

「アラタ…！！」「お兄様…！！」

二人の叫びが重なる

「てめえ…！！俺のダチに何してくれてんだあ…！！」

> H E N S H I N <

アラタは純粹にぶん殴る為敢えてマスクドフォームのままで構える

「やるか。照井竜」

オーズドライバーを取り出し巻き付ける

「コンボなんていないね」

オースキャナーでスキャンする

>タカ<>ウナギ<>チーター<

オースタカウターとなった齋堵はウナギの鞭で相手の連中を蹴散らしていく

「…さて」

エンジンブレードを地面に突き立てアクセルドライバーを取り出し巻き付ける

>ACCEL<

「変…！身…！」

ドライバーにメモリをセットし右のハンドルを吹かすように捻る

バイクのような音と共に照井の姿が変化する

「さあ！！振り切るぜ！！」

アクセルとなった照井はチンピラ相手にエンジンブレードは不要と判断し徒手空拳で戦い始めた

「…ふ…じゃあ俺も行きますか…！」

「黒妻」は一息入れた後戦いに加わった

…

マスクドガタツクは重い一撃を一人一人に叩き込む

「俺の「大切なモノ（テリトリー）」に、手え出してんじゃねえぞ
こらあぁっ！！」

怒りに近い声を上げながら蹴り飛ばす

…

タカウーターはウナギムチで武器を払い落とし

「おいたはダメだぜ！まどろっこしいのは、嫌われるぞ！！」
ウナギムチに電気を宿らせながら周囲を風ぎ払っていった

…

アクセルはノーガード戦法を取る

武器が体に当たってもはつきり言っとうんともすんとも言わないのだ

「はぁ！！」

純粹な蹴りを叩き込み相手を昏倒させる

「絶望がお前達のゴールだ…」

とりあえず決め台詞を言う照井

「…やはり締まらん」

襲いかかる相手を裏拳で殴り飛ばした

…

「蛇谷。…お前変わったな」

呟きながら襲いかかる相手を流れるような動きで一人一人をぶん殴る

一人が銃を「黒妻」に構える

「黒妻」は構える手を押さえつけ

「——やめとけ。お前らの腕じゃ同士討ちが関の山だ…ぜ！」

そのまま引き寄せ顔を思い切り殴りつけた

………

黒妻、いや蛇谷は恐怖した

黒妻綿流の戦いぶりは決してユーレイなんかではない

こらえようのない現実が蛇谷を襲う

黒妻綿流は、生きていた…！！

「う、うわあああ！！」

蛇谷を声を上げながら逃げていった

「く、黒妻さあん！！待ってくださいよお！！」

まだ生き残っていたチンピラが蛇谷を追って逃げていった

………

「美琴、黒子、痛いとは！？怪我とかしてないか…！？」

終わった瞬間変身を解除し速攻で二人の元に駆け寄った

「ちょ、アラタ、心配し過ぎよ！」

「お兄様…、ぜひ、わたくしも…！！」

言われてサラッと一目みたあと

「ぱつと見、問題ないね」

「ちょ！酷いですよお兄様あつ！！」

そこで美琴は一度呼吸をついて

「ねえ。あいつは黒妻じゃないの？」

「昔は蛇谷って言ってな。今は黒妻って呼ばれてるらしい」

「で、本物の黒妻綿流は、あなたですね？」

「そう呼ばれた時期があつたな」

そう言つて黒妻は美琴の手にあるムサシノ牛乳を受け取り口に流し込む

「相変わらず、大好きだな。黒妻」

齋堵の声に黒妻は

「ああ。やっぱ牛乳は――」

「ムサシノ牛乳」

不意に誰かの声が聞こえた

「ん……？」

照井が振り向く

それに釣られて皆が見る

「……国法？」

俺の呟きに美琴と黒子が？マークを頭にあげる

「久しぶりだな。……美偉」

え？

黒妻を見る

国法を見る

もっかい黒妻

もっかい国法

「
…」

『ええええええええええ！？』

その絶叫は俺と美琴と黒子のもだった

…
つつく！！

16 スキルアウト 前編（後書き）

アラタの能力について少し

イーヴルアイズ
直死魔眼

レベル不明

目で見た死の線を「斬る」と対象を犯す事が出来る

しかし力が強過ぎる為全く使えない

はい。完全に志貴や式と変わりません

しかもこの力は最終回寸前でしか使う予定はないです

あしからず…

17 スキルアウト 後編（前書き）

微妙な出来です

ですが後悔はしてません

それではどうぞ

17 スキルアウト 後編

「久しぶりだな。美偉」

「…先輩…」

国法が緊張した様子で呟く

「生きてたんですね…」

「みたいだな」

俺と美琴、黒子は訳が分からずただ顔を見合わせるばかりだ

「…なんで、なんで！何の連絡もくれなかったんです！？私、てつきり…！！」

俺たちの戸惑いを余所に話は進んでいく

「…ん？」

黒妻が国法の腕にしてある腕章に目がいく

ジャケット
風紀委員腕章に

「…あ…！！」

思わず左手で腕章を隠す

焦る国法に黒妻は

「安心しろ。すぐに消えるさ」

と優しい声色でそんな言葉をかけ国法の横を通り過ぎる

「先輩!!」

国法は振り向いて黒妻を見る

黒妻は振り向かずただ歩く

国法はその背中をただ黙って見送る

「先輩」

国法はそう寂しげに呟いた

「訳ありか？」

照井は静かな声で俺に聞いてきたが

「俺に聞かないでください」

そう返した

…そう返すしかなかった

その光景を霧島齋堵は軽く溜め息を吐き

「やれやれ」

そう呟いた

.....

「国法先輩と黒妻が知り合い！？」

いつものファミレス

開口一番佐天の大声から始まった

「佐天。ここ店内」

俺が注意すると「す、すいません…」と謝罪しながら座り直す

「…はつきりとしたことは、言っていないけど…」

美琴はオレンジジュースをストローで中をかき回す

「でも、黒妻って言うたら…」

「ビッグスパイダーのボスですよね！？」

初春が佐天の言葉に続く

「…そうなんだけど…」

美琴が苦虫を噛み潰したような顔をする

「その黒妻と国法先輩がどうして！？」

「そんな寄ってたかって女の子を襲うようなヤツと！」

「あー。佐天、初春…。その黒妻じゃないんだ…んと…、…ん？」

ふと黒子を見るとしれっと紅茶を飲んでやがった

「ちよつと黒子、あんたからも説明しなさいよ！」

「…縁はいなもの、味なもの」

「はあ？」

黒子が突然そんな事を言ってきた

「この件に関しては、わたくし静観させていただきますの」

こいつ…。一体何考えてやがるんだ…

「あー！気になるモヤモヤするー！」

佐天が両手で頭を掻きながら叫ぶ

だから店内だつて

言つても無駄と思つたので心の中でツツコんでおく

「こうなつたら、国法先輩に直接聞いてみよー！！」

「佐天さん。それが…、ここ数日、先輩支部に顔を出してないんです」

「え？」

「そうなの？」

美琴が少し身を乗り出して聞いてくる

「事実だ。携帯も繋がらなくなてな。例の能力者狩りだってまだ未解決だつてのに…」

「むしろ問題はそっちですわね。気を揉んでいても仕方ありませんし、この際足を運んだ方が…」

足を運ぶ？

「…どこに？」

………

俺はインターホンを鳴らす

後ろにはいつもの四人が立ったまま待っている

「はい」

扉の奥から声が聞こえる

がちやり、とドアが開く

そこには軽くブラウンがかった女性が応対する

「どちらさま？」

俺たちは固まった

まさかルームメイトと住んでいるとは思わなかった…

固まってる四人に代わり俺は口を開く

「あの、こちらは国法美偉、さんのお部屋ですよね？」

俺がそう聞くと女性は微笑みながら

「ああ、美偉の「彼氏」とその後輩？」

そんな事を言ってきたので

「ち、違いますよ！！俺は国法の知り合いで、こいつらは、まあ確かに国法の後輩です、はい」

俺の言葉にうんうんと頷く美琴たち

「なんだ…。けどごめんね、今あいつ出かけてるの」

「…あ、そうですか」

どうやら国法は不在らしい

「うー。黒妻の事が聞きたかったのにー」

佐天がそうばやいたので

「こら、なんて事言うんだ佐天」

ばかり、と頭を軽く拳骨する

「あいたっ」

「仕方ないですよ、佐天さん…」

「それでは、失礼します」

俺たちは女性にお辞儀をしてその場を去ろうと――

「ああ、ちよつと待つて!!」

急に呼び止められたので俺たちは振り向いた

………

「全くもつ。しょうがないわね。後輩や友達にまで心配かけて」

そう言いながら女性はコップに麦茶を注いでくれた

「なんか、すいません。部屋にまであがってしまった上に、麦茶までご馳走になってしまいました…」

俺は頭を掻きながらコップを持ち麦茶を飲む

「気にしないで。…それで、黒妻が戻ってきたのね」

女性の言葉にその場の全員が息を呑む

初春に至ってはむせてしまっくらいだ

「まさか生きてたとはねえ……」

「黒妻をご存知なんですか!？」

「先輩と黒妻は、一体どういう関係なんですかっ!!」

ヒートアップしてる美琴と佐天を俺はなだめて座らせる

「まず、俺たちが知る情報を話そう」

「……え？」

美琴と佐天がそんな事を言う中黒子は涼しい顔で麦茶を呑んでいた

………

「そっか。どうりでね……」

俺たちから一通りの話を聞いた後女性は静かに微笑んだ

「あの、それで国法先輩はどうして黒妻の事を知ってたんですか？
ひょっとして先輩が前に黒妻を捕まえた事があったとか」

「あはは。違う違う」

女性は美琴の言葉を受け流し

「美偉はね、昔ビッグスパイダーのメンバーだったの」

笑いを崩さずサラッと云った

沈黙

そして数秒後

『えええええ！？』

全員の絶叫が響き渡る

俺も言葉には出さないが内心ではかなり驚いている

「有り得ないっ！！いくらなんでもそれはないっ！！」

「だって、先輩は風紀委員ですよ！？それがどうして…！？」

佐天と初春の言葉にも女性は笑みを崩さず

「ああ見えて、昔はやんちゃだったのよ」

「やんちゃって…！？」

「…人様の過去をどうこう言っつもりはありませんが、仮にも国法先輩はレベル3の能力者。寄り道なら他にいくらでもあったでしょうに」

黒子の言葉に同意する

「確かに…。よりにもよってなんでスキルアウトに…」

「あなたにはない？能力の壁にぶつかった事。それがなかなか乗り越えられず、暗い気持ちを持て余した事…」

「…え？」

「あの頃の美偉は、どこにいても居場所がないって感じだった…。そんな時…輝いて見える人たちと出会った…。スキルアウトと言っても、連中はただ気のおけない仲間達とバカやってただけ…。そりゃあ、最初は私も心配したわ。わざわざ自分が能力者だって事、隠してまできるところなのって…」

そこで一度言葉を区切り

「でも、ビッグスパイダーは私が私でいられる場所…って、美偉はそう言ってたわ…」

話を聞いた佐天は

「居場所、か…」

言いながら初春とアラタを見る

俺と初春は軽く笑って返した

「疎外感。自分探し。学園都市にいと必ずかかるはしかみたいなものに、あの時の美偉もかかってたのかも」

懐かしいものを見るように女性は天井を見上げる

「でもはしかにかかるのは一度だけです」

不意に美琴が呟いた

「お姉様……」

「美琴……」

………

第十学区

とあるビルの屋上

そこに国法美偉は立っていた

しばらく景色を眺めた後手すりに視線を移す

そこにはぐしゃぐしゃに消されている相合い傘があった

自分がビッグスパイダーにいた頃に書いたものだ

かつての記憶が蘇ってくる

………

手すりに相合い傘を書く

自分の名前と相手の名前を

その時ドアが開いて黒妻が入ってきた

「よ」

「わ…!？」

国法はびっくりしてその落書きを隠すように立ち回る

「あの、これは…!？」

黒妻は歩いてきて手すりによりかかる

「お前。レベル2なんだって？」

——え!？

「…だったらこんなところに——」

「いさせてっ!！」

黒妻の言葉を遮って国法が叫ぶ

「…ここしか、居場所がないんです…!!お願いです!!」

黒妻は言葉を聞くと一度景色を見やって

「能力者つてのも面倒くせーなあ…」

その言葉に国法が少し俯く

「ま、いいけどよ」

その言葉に国法が安堵する

自分は居場所を失わない

そう安心できたから

「でもよ、来年も再来年も、「ここ」にいるつもりか？」

「え…？」

「ま、決めるのはお前だ」

黒妻はそう言って去っていった

………

「…先輩」

手すりに書いてあるぐしゃぐしゃの相合い傘を見つめながら呟いた

………

「わからない」

国法のルームメイトに礼を言って帰路についたその道中

唐突に美琴が呟いた

「美琴？」

他の三人も美琴が気になったのか立ち止まる

「国法先輩がスキルアウトだったってのもショックだけど、だからってなんで風紀委員を休んでるの？なんか関係あるわけ…？」

「だからな、そいつは――」

「昔は昔じゃないっ！！今は先輩、風紀委員で頑張ってる訳じゃない…。私たちにも優しく、たまに厳しくて、頼りになって…。そんな先輩が好きなのに…。なのに…。なんで今更…」

「…そんな簡単に、割り切れないんじゃないかな」

佐天が呟く

「だろうな。過去の自分がいて、現在の自分がいる訳だから。それでいて、その過去が特別なものとしたらなおさらな…。美琴、分かるか？」

自分なりにわかりやすくしたつもりだが

「…やっぱりわかんないよ…」

美琴が理解するには足りなかったようだ

………

「なんだよ、集まりわりいな」

「しょうがねえだろう。あんなことがあった後じゃ」

「まあな」

第十学区のG地区

通称「ストレンジ」のビッグスパイダーのアジト

そこに仲間が集まっていた

「なあ、黒妻さんって、偽物だったのかな」

不意に一人がそんな事を呟く

「んな訳ねえだろ！！黒妻さんは黒妻さんだよっ！！」

即座に否定する

しかし

「でもよ、あの人、「蛇谷」っ呼ばれてビビってなかったか？」

「お前も見たのか」

「やっぱ…ビビってたよな…」

そんな言葉を言うと突如場に緊張が疾る

「誰が、ビビってたって？」

「く、黒妻さん!？」

「この俺を疑ってる暇があったら、今すぐあの偽物野郎を探し出してぶち殺せえ!! 学園都市に黒妻綿流は二人もいらねえんだあつ!」

蛇谷は叫ぶ

その不安を消すように

……

仲間達が去った後蛇谷はソファにどつかと腰を下ろす

突然携帯が鳴る

一瞬蛇谷はびっくりしたがすぐに冷静さを取り戻し電話に出る

「もしもし。ああ俺だ。ああ? 「キャパシティダウン」? ああ、ちゃんと使ってるよ……っせえなあ!! こっちもゴタゴタしてんだよ! ……何だと?」

電話の声に蛇谷は息を潜める

……

177支部の国法の席を美琴は見つめている

「御坂さん、あれからずっとあんななんですか?」

「ええ。まあ」

黒子は書類に目をやったまま答える

「あれ、アンチスキル警備員からメールだ……」

パソコンを操作していた初春はメールを読む

「えっと……警備員本部は、スキルアウトの能力者狩りに対抗し明朝十時より、第十学区、エリアG、通称「ストレンジ」の一斉摘発を行う……!?!」

全員に戦慄が疾った

……………

第十学区エリアG
通称「ストレンジ」

そこに国法は来ていた

「やっぱここにいたのか。国法」

後ろから声がした

そこには自分と同学年で風紀委員としては後輩の鏡祢アラタが立っていた

「ぼーっとしてどうしたのさ。お前らしくないぜ。迷ってるのか？明日の一斉摘発の事」

国法は俯く

「国法の居場所を教えてくれたのは、黒妻だろっ？」

「…ええ」

国法は空を見上げる

国法は語ってくれた
二年前のあの事件を

………

「先輩！行かないでくださいっ！！」

「つつても、蛇谷を見捨てる訳にはいかねえだろ」

携帯を閉じゆつくりと歩きだす

「そんなの、罨に決まってるじゃないですか！！」

黒妻はふ、と笑うと

「そっついや、こないだの話だけど」

「え…？」

突然話題を変えられた事に驚く国法

「やっぱりここは、お前の名前を刻む場所じゃないと…俺は思うぜ」

ハッとして相合い傘を書いた手すりに目を向ける

相合い傘はぐしゃぐしゃにかき消されていた

その事に気を取られてる隙に黒妻は向かってしまった…

……

「私が駆けつけた時には…もう」

「そして…。今の私がいる…」

「…そっか」

国法は自分が責められると思った

風紀委員である自分が犯罪者を逃がすような事に荷担しているのだから

だけど

「いいんじゃないか。別に」

「…え？」

「たった一度きりの人生なんだ。好きなようにやればいい」

そう言って笑ってくれる

「…確かに。風紀委員の出番はなさそうだな」

「ああ…。そうだ」

アラタの言葉に見知った声が続く

それは黒妻綿流だった

「…先輩…」

「あの後。目を覚ましたら病院でさ。そのまま施設に送られて、出てこれたのが、ほんの半年前。照井のダンナにやそんとき世話なつてな」

そうだったのか…

と一人で納得するアラタ

「先輩、私…!!」

「この景色も、もう二度と見る事はないと思ってたんだけどなあ…
お前にも、会わない方がいいと思ってた。…会えばまた」

「また、一人で乗り込むつもりですか」

黒妻の言葉を国法は遮る

「あの時みたいに」

「…ビッグスパイダーを作ったのは俺だ。だから潰すのも俺、警備員じゃない」

国法は遂に我慢できなくなった

押し寄せる不安を払うように

「行かないで!!」

黒妻の腕を掴み叫ぶ

「貴方はいつだってそう!!自分勝手に人を思いやって、自分勝手に行動して!!貴方がそんなだから、私は——!!」

「お前だってそうじゃねえか…」

その言葉に国法は顔をあげる

「だからここに来てるんだろ?じゃ、もういいから帰れ…。ほら、あいつもさっきから困ってるじゃねえか」

そう言つて黒妻はアラタを見る

アラタは苦笑をしながら頬を掻く

「私も行きます…!もう、あんな思いはしたくない…!」

国法に背を向けて歩き出した黒妻に国法はそう言つ

「…いい加減にしろよ美偉。昔と今じゃ違つたろう。俺とお前じゃ

…」

「今とか昔とか！！関係ありません！！居場所が変わっても、私の、
気持ちは…！！」

国法美偉は揺れていた

アラタと出会って、少し気持ちが揺れてしまったのだろうか…

アラタはその光景をただ見守る事しかできなかった

……………

その日の夜

学生寮のベッドで眠っていると携帯がなった

美琴だ

「…なんだ？」

>…時間が経っても、立場が変わっても…変わらない思いってある
のかな？<

美琴の言葉はどこか沈んだ声色だった

「さあな。だけど、誰かが誰かを思いやるって事は、そういうこと
なのかもしれないな」

>…<

電話の先の美琴が黙る

「そして、そんな気持ちの積み重ねが、その人の今を輝かせている……そう捉える事は出来ないか？」

> 積み重ね……<

「口幅つたいけど、俺と美琴にだって、短いけれども積み重ねてきたものがあるだろ？」

> ……そっか。そしてそれは、これからも積み重なっていくんだね……<

美琴の声色がいつもの調子を取り戻す

> 私、黒子に頼んでみるわ!!<

「ああ。頼むぜ」

ぴ、と電源ボタンを押して携帯を閉じる

何を頼むか知らないが、まあ大丈夫だろう

俺はまた携帯を開いてとある一人に電話をかけた

だがその人は留守電にしていた為に電話には出なかった

俺はメッセージを残し明日に備えて就寝した

となりの当麻の部屋が少しうるさかったがまあ問題なく寝れた

.....

翌日

国法はかつて所属していた赤いジャンパーを羽織り部屋を出る

ふと何気なく携帯を覗くと

「…アラタ？」

留守電メッセージが一件来ていた

国法はそのメッセージを聞く為携帯を耳に当てる

> 国法？俺だ、アラタ。迷いは吹っ切れたか？どっちに言っても俺は文句は言わないよ<

「…アラタ」

少し間が開き

> だけど後悔だけはするな。やって後悔するタイプならいいけど、やらないで後悔するタイプなら危ないからね。…最後に一つ<

「…最後？」

その言葉が気になり耳を済ませる

> …何があっても、俺はお前の味方だから<

留守電メッセージはそこで終わった

「…ありがとう。アラタ」

心から感謝を述べて国法は歩き出す

同時に自分の気持ちにも区切りがついた

けど今は

黒妻綿流を…

………

第十学区に向かう途中

ヴォン、という音と共に黒子と美琴、アラタが現れる

「貴方たち…？どうして」

黒子は美琴に触れると国法の右側に空間移動させる

レポート

すると美琴は国法の右腕に腕章をつける

「ちょ、なんなの！？これ…」

「うん。やっぱりこうでなくっちゃ」

国法が自分の腕を見る

そこには自分の腕章がつけられていた

自分の風紀委員の腕章が

「これ、私の…どうやって」

美琴は黒子を見る

「…、」

黒子はそれに軽くウィンクして答えた

「悪いな。国法…」

「アラタ…貴方もなんで…」

「だけど国法。…格好いいぜ」

国法は自分の腕章を見る

そして軽く、微笑んだ

………

ビッグスパイダーアジト

出入り口が唐突にぶち破られた

「朝っぱらから勇ましそうだなあ」

黒妻は辺りを見回す

「終わらせにきたぜ」

「こいつ、この前の!？」

「…てめえ…!!」

蛇谷は黒妻を睨む

「わかってるだろうけど、…俺は強えぞ？」

………

照井竜は警備員とは別に行動している

一斉摘発の件も照井は承諾している

「…ビッグスパイダー、か」

俺はそれを見届けよう

黒妻の覚悟を

………

バキリ、と鈍い音がする

その一撃は相手を殴り倒した音だ

「ああ…、確かにあんたは強え！！だがなあ、そんなのは能力者と一緒だあ！！」

蛇谷の号令と共に後ろにいる仲間達が黒妻に向かって銃を構える

「数と武器には適いつこないんだあ！！」

「待ちなさい！！」

耳に声が聞こえた

黒妻は振り向く

「美偉…！」

国法の右腕には風紀委員の腕章がある

今度は隠すような素振りはない

凜とした視線

「…格好いいじゃねえか」

黒妻は微笑みながら国法に言った

国法はそれに笑顔で返す

「…、国法さん…！？」

蛇谷はたじろぐ

「蛇谷くん。貴方、随分下衆な男に成り下がったわね…。数にものを言わせて、その上武器…」

「う、うるせえ！！俺達を裏切って風紀委員になった奴に何がわかる！！おらあ！こいつらに俺達の力を見せてやれえ！！」

蛇谷がそう怒鳴ると蛇谷の仲間達が銃を構える、が

ヴオン、という音と共に鉄針が拳銃に空間移動する

「今度は、体内に直接お見舞いしましょうか？」

現れた黒子は鉄針を指の間に挟み進言する

「な、だが…俺達にはあれが——」

「あれって」

言葉と共にコインが弾かれそのまま音速の三倍で放たれる

超電磁砲は壁の向こうにある「キャパシティダウン」を完璧に破壊しつくした

「この事？…まさか、同じ罠に二度引っかかるなんて…思ってたいわよね」

蛇谷の切り札は完璧に玉砕された

「や、や…やれえ！！やつちまええ！！」

「だ、ただどあいっ常盤台の超電磁砲…!!」

超電磁砲、という単語に辺りがざわつき始める

「やるんだよ!! やらないなら俺がお前らをやっちまうぞお!!」

恐怖政治だなホント

俺は内心呟きながらガタツクゼクターを手元にとっていく

美琴と黒子もそれぞれ構える

「貴方たちは手を出さないで」

「え？」

俺が振り向くと国法が軽く微笑み

「偶には先輩を立てなさい」

言葉の意味がわかってない美琴と黒子はお互いを見て国法を見る

「…へいへい」

俺は苦笑で国法に返した

黒妻はにっと笑うと一気に走り出す

「おらぁ!! 行けよっ!!」

蛇谷は自分の前にいる仲間を蹴飛ばす

蛇谷の圧力に圧され蛇谷の仲間達が一斉に襲いかかる

黒妻は身をかがめ相手の鉄パイプの攻撃を回避し腹部を殴りつける

そして勢いをつけ殴りかかってきた相手の顔面を拳を叩き込む

「おいおい、もちつと気合入れてかかってこねえと、張り合いがねえぞこらあつ!!」

その言葉に一人の男がゆつくりとポケットに手を入れる

「……!!」

国法は意識を集中させ自身の力、クレアポイアンス「透視能力」を発動させる

男が手を入れてポケットに一丁の拳銃

もう片方のポケットにはスタンガンまで忍ばせている

国法は駆け出し今にもポケットから拳銃を取り出そうとしている手を掴みひねり挙げる

「ぐあ……!?!」

「これは没収ね!それから……このスタンガンもね!」

言いながら片方のポケットに手をつ突っ込みスタンガンを奪う

「な、なんで…!!ぎゃあああ!!」

国法はスタンガンを首筋に押し当て相手を気絶させる

その光景を見ていた俺は美琴と黒子の二人と顔を見合わせて微笑む

「ふう…」

国法が一息つくと

「それがお前の能力か」

黒妻の言葉が耳に入ってくる

「すげえじゃねえか」

「…でしょ?」

国法はそれに微笑んで返した

「…へ、俺も負けてられねえなあ!!」

相手の攻撃を回避し決るようにパンチを繰り出す

これは完全に出番はないな、と思っていると

「…出番はなさそうだな」

入口に照井さんが立っていた

その顔はどこか誇らしそうだ

「…照井さん」

「…やはり、黒妻は黒妻だな…。半年前と変わらない」

「…みたいです」

次第に戦いはほとんどが倒れ蛇谷一人になっていた

「ち…ちくしょお…！」

蛇谷は一本のメモリを取り出しスイッチを押す

>ARMS<

「何…！？」

照井さんが声を挙げる

蛇谷は腕にメモリを差し込んだ

蛇谷はアームズドローパントに姿を変えた

「あれって…！」

「新しいワームですよ…！」

美琴と黒子が驚きの声をあげる

「蛇谷…！？お前…！」

「照井さん」

「ああ」

俺は照井さんと共に黒妻さんと国法の前に庇うように立つ

「国法、こつからは手、出させてもらっぜ」

「アラタ…」

「黒妻。任せてもらっぞ」

「照井のダンナ…」

>ACCEL<

「変身！」「変…！身…！」

俺はガタックゼクターをベルトにセットし

照井さんはアクセルドライバーにメモリを挿入し左のハンドルを切る

>HENSHIN< >ACCEL<

>Change Stag Beetle<

アラタは姿をガタツクライダーフォームに変え

照井は仮面ライダーアクセルへと姿を変えた

「>何…だと…!?!<」

アームズドールパントⅡ蛇谷は現れた二人の仮面ライダーに驚きを隠せない

「さあ贖^{あがな}いの時間だ。自分の罪は数えたか？」

「さあ!!振り切るぜ!!」

ガタツクとアクセルはそれぞれ決め台詞を言いながらアームズに向かって走り出した

「><…くそがああああ!!<」

アームズは右手を銃に左手を剣に変える

アームズは銃を乱射する

アクセルはエンジンブレードで弾を防ぎながら接近しアームズを斬りつける

「>ぐああ!!<」

その隙を間髪入れずガタツクがカリバーで乱舞する

「>ぐはああ!!<」

アームズが吹っ飛び地面を転がる

「戦い方がなっていないな」

アクセルは左側のクラッチレバーを切りハンドルをフルスロットルにする

>ACCEL MAXIMUM DRIVE<

アクセルを赤き炎を包み込んでいく

>1 2 3<

俺は開いたガタックゼクターの角を一度閉じボタンを押して再び角を開く

「ライダーキック」

>Riderkick<

「行くぞ、鏡祢」

「了解。照井さん…！」

ヨロヨロと立ち上がるアームズにアクセルとガタックは一気に走り出した

「はあああああ…！」

「たあああああ…！」

アクセルグランツァーとライダーキックのダブル攻撃がアームズド
ーパントを捉える

「うわあああああああ！！！」

爆発するアームズを背に

「……絶望がお前の」

「ゴールだ……てね」

「……俺の台詞を取るな」

実は言ってみたかったアラタなのだ

………

アームズがいた場所に蛇谷は跪いていた

黒妻は歩いて蛇谷の元に近寄る

「……どうしちゃったよ。蛇谷」

「……しょうがなかった……しょうがなかったんだ……！！俺達の居場所
は「此处」しかなかったんだ……！！ビッグスパイダーを纏めるには、
俺が「黒妻」じゃなきゃダメだったんだあ……！！！」

蛇谷は、自分なりにビッグスパイダーを守ろうとしていた

ただ、方法を間違えてしまっただけで…

あいつもビッグスパイダーをとて大事にしていたんだ

黒妻は少し沈黙する

「だから…！！今更てめえなんかいらねえんだあああああ…！！」

言うやいなや蛇谷は懷からナイフを取り出し黒妻を突き刺そうとした

俺は体が勝手に動いていた

「アラタ！？」

「お兄様！？」

美琴と黒子の叫びが聞こえたが無視した

ぞぶり、と鈍い音がする

ナイフが貫いたのは黒妻でなく

鏡祢アラタの右掌だった

ぽたり、ぽたりと血が滴り落ちる

黒妻は目を見開いて

国法は何が起こったか理解出来ていなくて

「…やめろよ。それ以上は…!!」

ナイフが掌に更に突き刺さる

激痛がするがそんなことは言ってられない

「あんたは!! 自分達の、ビッグスパイダーを守りたかったんじゃないのかよ!!」

そのまま壁に叩きつける

蛇谷の顔は涙で歪んでいる

「あんたは、方法を間違えちまったただけなんだよ!! なのに…!! んなもの持ち出して、思い出までぶち壊す気かあ!!」

アラタは叫ぶ

こんなことは無意味だとわかっていても

アラタは思いを吐き出す

「…居場所って言うのは…自分が自分でいられる場所を言うんだ。

…俺が言う権利なんてないのはわかってるけど、ね」

俺は右掌に突き刺さったナイフを引き抜き後ろを振り向いた

………

その後やってきた警備員にビッグスパイダーは拘束された

「はあ、終わった終わった。…ほら」

黒妻は両手を国法の前に差し出した

自首しようとしてるのだ

「…、」

国法は一瞬躊躇ったが

「美偉」

黒妻本人に後押しされて決意し

「黒妻綿流。貴方を、暴行傷害の容疑で拘束します」

がちやり、と黒妻の手に手錠がかかる

「…似合ってるぜ」

国法は腕章を見る

「いたたた！！痛いってば！！」

「いけません！ちゃんと消毒しないとばい菌入りますから！」

眼鏡の警備員、鉄装にナイフが刺さった右掌の治療を受けるアラタ

本気でいたそうだ

「…見つけたか？新しい気持ち」

黒妻はアラタを見ながら国法に聞く

「…はい！」

国法は黒妻に笑顔で返す

美琴と黒子はアラタの治療を微笑みながら見ていた

「…でもよ。その皮ジャン、やっぱり胸キツくねえか？」

黒妻は国法の胸元を見ながら言う

国法は流石に頬を赤らめたがすぐ笑みを取り戻し

「そりゃあ毎日アレ、飲んでましたから」

アレ、という言葉に黒妻が反応し二人は同時に言う

『やっぱり牛乳は、ムサシノ牛乳！！』

少し二人は沈黙した後可笑しくなり笑い始める

「…やっぱり胸のことをお話になっても…」

「不思議と嫌らしくない…」

黒子と美琴は笑い合う二人を見ながら呟いた

鏡祢アラタは笑い合う二人を見る

アラタは染みる痛みに耐えながら思う

(…やっぱり、国法はああでないとな)

「ああ！…痛いってばあ！！」

「動かないで下さいってば！！次動くと、直に消毒液ふっかけますよー！」

さらっと恐ろしい発言してきやがった

「いや！やめて、それだけは！！！」

「また世話んなるぜ、照井のダンナ」

「ああ。きつちり世話してやるよ」

照井は黒妻を連れて車に乗る

走り去る車を見ながら国法は思う

(先輩。…ありがとう)

本心からの感謝を

こうして

ビッグスパイダーを中心とした能力者狩りは幕を下ろした

18 夏休みのつづり（前書き）

今回は短めです

18 夏休みのつづり

「新人研修？」

ある日177支部に顔を出すと開口一番国法からそんな言葉を聞いた

「おいおい国法。夏休みが始まったのに、なんで俺がそんなを
…」

「仕方ないじゃない。ジャッジメント風紀委員の通るべき道だと思いなさい」

国法がやれやれと言った感じで言う

こっちは以前怪我した（右掌をナイフにてグサツと）右掌が痛いのだ
さっさと終わらそう

そう心に誓い俺は国法に待ち合わせに関する情報を貰い待ち合わせ
場所に向かった

………

「…来ない」

待ち合わせ場所についたはいいが一向に現れる気配はぬあい

「…たく。先輩待たせるたあい度胸してんじゃねえか…。こんち
くしょー」

ぱたぱたと足先を地面につけたり離したりをしばらく繰り返してると

「遅れましたあ！」

そんな声と共に俺の背後から走ってくる音がした

「やっと来やがった…か」

俺が振り向いてその子を見ると

見覚えのあるロングな髪

よく見ると

「…神那賀？」

そう

神那賀…だったのだ

「へ？あ。アラタ。同伴の先輩ってあんただったの？」

当の本人はさほど遅れた事に反省の色は見せずそんな事を言ってきた

「神那賀…最近見ないと思ったら、何やってやがったんだ。まさかずっと…」

「ええそうよ！私はね、貴方と同じ舞台に立つ為に地味にシンドい

練習を必死になって耐えてきたのよ！そして遂につ！」

そこで一旦言葉を切り大きく息を吸い込んで

「風紀委員になったのだあつ！」

瞳の奥をキラキラさせながら俺を見る

「一回言ってみたかったのよ……風紀委員だつ！、てね……うふふ、うふふふ」

「……そんな難しいのって風紀委員になる為に必要だったかね……。ま、本人が喜んでるからいいか」

意気揚々としてる神那賀を連れて俺は歩きだした

………

その光景を偶然見てしまった人物

「……な、何？アラタの奴……で、デート？」

御坂美琴だ

しかも相手は

「か、神那賀さん？」

美琴と神那賀は気さくな友達だ

本編では明確に描写されてないが結構仲は良かったりする

「…むう…」

美琴は胸の中のモヤモヤは何だろうと考えながら尾行するのだった

………

「てな訳で、軽く見回りをするんだが…」

アラタは神那賀を見る

「…」

よつぼど風紀委員になれた事が嬉しいのだろうか先ほどから鼻歌をやめてくれない

「聞けよ神那賀」

ばす、と神那賀の頭を叩く

神那賀は「あいたつ」という呻きをあげながら軽く涙目になりながらアラタを睨む

「なにすんのさー」

「いつまでも浮かれんな。風紀委員になった、て事は、同時にこの学園都市の治安維持という使命を負った、て事だ」

「…むう」

神那賀が耳を傾ける

「第一お前は仮面ライダーだろうが。そのお前がいつまでも浮ついてたら、守れるものも守れないぞ」

そう言われて神那賀は黙る

「…よっし。じゃ軽く見回るか、行くぞ、神那賀」

ぽむ、と神那賀の頭を撫でる

神那賀は「はにゅ」と声を漏らしたが

「…」

若干顔がにやけてる神那賀だった

……………

「…むむむう…」

御坂美琴はそんな光景を見ながらイライラしていた

「何よ、アラタの奴…。私らという時はあんな顔なんて…」

とりあえず茂みに身を隠し息を潜める

「…神那賀さん、嬉しそうだな」

アラタという神那賀を見る

その表情は本当に楽しそうだ

「…私も素直になれたならなあ…」

そう呟きながら移動する神那賀とアラタを追うのだった

………

見回りと言ってもはつきり言って名ばかりだ

夏休みという事もあって警備員アンチスキルの人たちも巡回に出ているので苦労はしない

とりあえずほうきでゴミを集めるといふ雑用みたいな事をやってる

「…ねえアラタ」

ほうきでゴミを集める作業に飽きたのかつまらなそうに神那賀は声を出す

「風紀委員の仕事ってこんななんばっかなの？」

「だな。後は探し物したり、道で迷ってる人を案内したり…」

なんか自分で言ってみると左の旦那みたいな事やってんなー

…風紀委員でなんなんやらなー

「ふうん…風紀委員って結構パシられてんのね…風紀委員って」

返す言葉もございません

「よっし、おわった。アラタ、次は？」

そんなやりとりを交わす内に神那賀はほうきを置く

「あいよ。じゃ次行くか」

俺はほうきをことり、と地面に置き次の目的地に向かった

………

「…はあ…」

美琴は溜め息をついた

思えば黒子の次に友好関係が長いのはアラタなのだ

初めて出会ったのは黒子経由で

いつものファミレスで出会ったのだ

黒子経由と言っても先にファミレスにいたアラタを黒子が見つけたのが出会いだっただ

美琴にとっても異性に普通に会話したのはあれが初めてだ

最初はあんまり興味はなかったが話していく内にとっても話しやすい人で

結構優しくて

黒子が慕うのもわかる気がする

「…気さくな好青年って、ああいう感じなのかしらね…」

隠れながら観察する御坂美琴

なんかシユールな画だ

「あ、移動する…」

場所を移動するとわかったら美琴はそそくさと移動体制を取り二人を追った

………

「んーと…」

現在スーパーにて

唐突に国法から電話が入ってきて「悪いけどムサシノ牛乳買ってきてくれないかしら？」なんて事を言っただけで来やがってん

ついでにいくつかのお菓子を購入していいと許可をもらったので遠慮なく買うことにする

「あ、アラタ。こんなのが良いんじゃない？」

神那賀もすっかりノリノリだ

「何？生姜チップってなんだよ…。てか、そんなの食うのかお前は」

「私は意外に辛党なの」

「生姜って辛かったっけ…」

俺のツッコミも虚しく神那賀はポンポンとカゴにお菓子をぶっこんでいる

「てか入れすぎじゃね！？おい！支部の予算を考えろやちよつと！」

「いざとなったらあんたの財布から出せば…」

「嫌じゃー！！」

………

その光景を見るのがご存知御坂美琴だ

美琴は商品を並べ変えて万引きGメンよろしく二人を眺めてる

「…」

胸がモヤモヤする

なんなのよこれわっ！とか心の中で叫びながら美琴は仲良く（？）カゴに入れる（神那賀が一方的に）様子を見つめる

しばらく眺めてると新たな展開が起きた

.....

「何をやってるの鏡祢」

吹寄制理がやってきたのだ

「あれ、吹寄じゃんか。奇遇だね」

「…、す、スツゴい大きい…」

神那賀は吹寄を見ながら（主に胸）絶望してる

「いや、最近よく会うね。偶然？」

「だったらすごい不運ね。嫌になるわ」

そう言ってお菓子に目をやり

「あ、どうせならこっちにしなさいよ」

と俺が持つてる菓子を奪うとまた何か吹寄のお薦め菓子を持たせてくる

「…何これ」

「ごまスティックよ。安くて美味しいし、牛乳と合うのよ」

軽くふふん、と笑うと胸を張る

「…、」

神那賀は吹寄の胸を見て顔を赤らめる

「まあいいか。さんきゅ吹寄」

「べ、別に礼を言われる筋合いなんてないわ。ま、全く」

軽くたじろいでいる吹寄を置いて俺はなんか顔を赤くしてる神那賀を連れて会計を行った

……………

「アラタの知り合いには胸が大きい人ばかりなの…？」

現れた吹寄に美琴は驚愕する

どうも胸が大きいのだ

「…」

ペタペタと自分の胸を触ってみる

発展途上（と信じた）な胸を触る

「…や、やっぱり、大きい方がいいのかな…」

胸の大きい小さいは流石に人の好みに分かれるがアラタはどっちだかわからない

あんまり明言しないしよく考えれば好みの女性も聞いた事がない

「…どんな女の人タイプなんだろうな…」

ポツリと呟いてみる

自分はどうかろう

そもそも何でアラタが他の女性といるとこんなに胸がモヤモヤするのだろう

「…わからない…。あ、と…」

アラタと神那賀がスーパ―を出たので気づかれないように後を追った

………

白いシスターさんと出会いました

「…あのー。一体どうしたのかなー？どこの生徒？」

「むー！生徒じゃないんだよー！！シスターなんだよっー！！」

なんか清掃ロボットにしがみついてそんな事を言ってきた

………

「なるほど。落としたドーナツを、清掃ロボットに回収されてしまった、と」

俺が軽く事情を聞くと落としたドーナツを回収されてしまったらしいのだ

「この国には三秒ルールという偉大な決まり事があるって」とうま「が言ってたんだよっ」

「道路は流石にルールの適用外じゃないかしら…」

神那賀の冷静なツツコミ

それ以前に俺は引つかかる単語を聞いた

「…とうま？とうまって、上条当麻か？」

俺が疑問を聞くと

「うん？そくだよ。とうまの知り合い？」

「ああ。当麻の友達か…。一応自己紹介しておこうか。俺は鏡祢アラタ、よろしく」

「私はね、インデックスって言うんだよ。よろしくね」

そう言って手を差し出してきたので握手する

…凄まじい名前だな

心の中で呟いておいた

すると清掃ロボットが動きだし俺たちとは反対方向に走る

「ああー！！こらあー、私のどーなつ返せえー！！」

インデックスはちょこちょこ清掃ロボットを追い掛けながら振り向いて

「またねー！」

と手を振りながら走っていった

「…当麻も案外抜け目がないというか」

彼女、無条件で当麻を信じているのだろう

何かあったかは、知らないけれどね

それに、心の中ではどこかで彼女とまた会いそうな気がしていた

上条当麻と一緒に

「アラタ。何ボーっとしているの？」

神那賀の声で現実に取り戻される

「あ、ああ…、悪い」

神那賀に軽く謝罪してから俺たちは再び歩きだした

.....

「...?」

御坂美琴は隠れながらその光景を観察していた

今更になって冷静に考えるとこれはストーカーではないか?と自問自答するけれどもうこの際開き直る事にする

「...て言うか、何あの銀髪フードの女の子...暑くないのかしら」

そんな疑問を考えながら再び美琴はストーカー（尾行）に専念するのだった

.....

「どうしたの?」

神那賀が女の子に聞く

歩いていると手すりに女の子が体を預け寄りかかっていたのだ

女の子は俺たちの視線に気づき

「...ペンダントを落とした...」

簡潔に理由を述べる

「ペンダント?どんな形だ?」

俺が訪ねると

「…写真が入ってるの」

なるほど。ロケットタイプのペンダントか

「落としたのはこの辺か？」

「そう、かな…？」

「ようし。一緒に探してあげましようつ。いいよね、アラタ」

「お前が軽く上から目線なのはイラッとするが、まあそのつもりだし、まあいいだろう」

そんな訳で俺と神那賀は女の子のペンダントを探すべく手当たり次第に見て回った

車の下

自販機の下

落ちそうなところ頑張って探したけれど一向に見つからない

「…ないな」

自販機の下を調べ終えた俺は立ち上がって辺りを見回す

すると自販機の横にある空き缶がかたかたと揺れ始める

「…地震？」

だがその揺れはとてつもなく微細な揺れだった

「…気のせいかな？」

「アラター！ みつけたよー！」

茂みから顔を出した神那賀がこちらに向かって手を振っている

手が何かを握ってるので見つけた事実だろう

いや、疑ってはいないけど

…ホントだぞっ

………

「はい、ペンダント」

ちやりん、と音を立てながら女の子の手に渡す神那賀

「ありがとうなの……」

女の子はペンダントを見つめ蓋をずらして中の写真を見る

そしてそれを大事そうに両手で包む

「…よかったなの」

そう言うとき女の子は踵を返して歩いて行ってしまった

「…行っちゃった」
神那賀が呟く

「まあいいじゃんか。見つけてあげられたんだし」

「それもそうね…」

そう言って歩き出す神那賀

俺はさつきからずつとついてくる変な気配に気を配りながら後を追った

………

「お帰りなさい。研修ご苦労さま」

支部に戻ってこれたのはすっかり陽が落ちた夕方

いや、まだ落ちてないか夕方なら

「ほら、買って来たぞ。ムサシノ牛乳」

がさり、と机の上にビニール袋を置く

「悪いわね。わざわざ」

国法はビニール袋からムサシノ牛乳を取り出すと冷蔵庫の中に仕舞う

「んじゃ、俺は帰るぜ？国法」

「ええ。後の事は全部やっておくわ。神那賀さんもお疲れさま、どうだった？」

「楽しかったですっ！」

そう言つて純粋な笑顔を国法に見せた

.....

支部から出て数歩歩く

「...んで、いつから尾行してたんだ？美琴」

壁に寄りかかっている美琴に声をかける

「...気づいてたの？アラタ」

美琴は顔を俯きながらそう聞いてくる

「...スーパー辺りからかな」

「結構前からね...」

それでも俯き加減は変わらない

「...どうした？美琴」

「...別に。何でもないわよ」

どうも美琴の様子がおかしい

…むう

…仕方ないな

俺はそつと美琴の手を握る

「…え？」

美琴は顔を赤くしながら俺を見る

「夕方暇か？散歩しようぜ。門限には間に合わすから」

遠回しに美琴をデートに誘う

俺だって恥ずかしいのだ

ただどこうでもしないと美琴の機嫌が治りそうにないのだ

「…アラタが、迷惑じゃないなら」

きゅ、と美琴が手を握り返す

「…さて、どこに行くよ？」

「…そおねー…やっぱり」

『ゲーセンか？（かしら？）』

その日は美琴にとって

一番楽しい時間だった

19 あすなる園（前書き）

予想以上に長い上に微妙です

19 あすなる園

女性は市街地を歩いている

彼女が今いる国はイギリス…

橙色のコートを着てほんのり赤みがかつた髪を結い煙草を口にして
いる

時折煙をふう、と吐き出しながらイギリスの街を歩く

「…あまり魔術とは関わりたくはないのだから」

「そう言う貴女も、魔術師ではなくて？」

突如として声がする

女性が振り返ると日笠を差した金髪の女性がこちらを向く

「…最大主教。アイクヒショップ君ほどの人物が、私になんの用だい」

「私としては、何故貴女がイギリスに滞在しているかが理解できない
事につき、よ？」

微妙な喋り方で最大主教は女性に聞く

「…随分奇怪な喋り方だな。最大主教というものは喋り方も独特だ
な」

「な！こ、これは、別に貴女にとやかく言われる筋合いはなしにつき！私の喋り方に関しては無視した方が賢明の事よ」

奇抜な喋り方に軽く女性は苦笑しつつ

「で。私になんの用かな？」

「特に用はなしにつき、よ。珍しい人がいたけりから声をかけたことにつきよ」

「単なる暇潰し、か。まあそれもいいかな」

ふう、とまた煙を吐く

「念の為、聞いておくが戦いの神はまだ関わってはいないだろうな」

「安心することよ。「まだ」関わってはないことにつきよ。「まだ」、「だけでも」

最大主教が薄く笑う

「…ならまだいいさ。「あいつ」が関わった時は、「伽藍の堂」が関わる時だ」

「ふふ…。貴女ほどの魔術師が関わったら、どう動くかわからないことにつき、ね」

「まあ関わるにしても、直接関わる気はないさ。私は面倒事は嫌いだからな」

そう言って女性は歩き出す

「…楽しみにつき、よ。…アオザキ」

歩きながら最大主教は呟いた

「…は。ローラ＝スチュアートめ…変わってはいないな。喋り方は、奇抜だったか」

魔術師、蒼崎燈子はそう言いながら箱から二本目の煙草を取り出した

……………

「全く！！口を開けば規則規則規則！！」

いつものファミレスで開口一番そんな声をあげたのは黒子だった

「それが寮監の仕事だろうが」

俺がやんわりとツツコむと美琴がやれやれ、と言った感じで頷く

何があつたのか聞くと

いつものように黒子がじゃれついて（？）能力を使用した際に寮監に見つかり、コキリ、とやられたらしい

「どうにかありませんの！？あの女！昨日だってほんのちょっとお姉様と戯れていたただけと言うのに…。何故いつもわたくしばかりがあのような目に…いけずごけのヒステリーですわ」

よく世話になつてゐる寮監さんをそこまでボロクソに言えんなおい

「いけずごけて…」

美琴がストローでオレンジジュースを突つつきながらツツコむ

「ホントーの事ではありませんの！！だいたい女子寮の寮監なんて男っ気のない仕事をしているから行き遅れになるんですの…その鬱屈をわたくし達で晴らそうなんていーめーわくですわ」

「…よくまあそこまで罵詈雑言が出てくるな、おい」

俺が呆れた様子で何気なく窓を見る

「…え？」

そこに寮監が歩いていたので

美琴と黒子はバツと机に突っ伏すし俺はそのまま自然な様子で水を飲む

「…噂をすれば」

美琴が静かに口を開く

「おかしいですわ…」

黒子がそんな事を言ってきた

「…は？」

訳わからず俺は聞き返す

「あの寮監がおめかしして出掛けるなんて…」

「そ、そう言えば最近、休み毎にどこかに出かけてるらしいよ?」

「な、そうなのか美琴?」

俺が美琴に聞くとうんうんと美琴が頷く

「オトコですわっ!」

ガバツと机から顔をあげた途端そんな事言った

『…はあ?』

俺と美琴の声が重なる

「こうしてはいられませんわお姉様っ!お兄様あっ!」

そう言うとき黒子は走りだした

「え、ちよつと黒子!?」

「…やれやれ」

俺は累計何回目かわからない言葉を言うと美琴と共に黒子を追った

………

寮監を追いかけてつ身隠す

「…ねえ、どうするつもりよ?」

「あの女の弱みを握るチャンスですよ…」

「弱みって…お前なあ」

俺は黒子に若干呆れながらも寮監を追う

「きつとお見合いですわ。あんな血も涙もないひとでなしのいけずごけに、デートする相手なんているわけありませんもの。最も、見合い相手も相当なギャンブラーですわよねー、よりにもよって賞味期限ギリギリの女なんかと…罰ゲームじゃあるまいし」

黒子は寮監を追いながら淡々と寮監に対してポンポンポン悪口が飛び出してくる

「…お前よくそんなにボロクソ言えるよな…」

しばらく寮監を追うとその寮監はピザ屋に入ってしまった

「…ピザ屋でお見合い？」

「いや、どんなだよ」

そんな言葉を交わしていると寮監さんがピザ屋から出てきた

両手にはだいたい十箱のピザ箱をそれぞれ五個ずつ分けて持っていた

「…なるほど、見合いの相手はイタリア人…。名前はマルコですわ
！！」

「…なんでそこまでわかるのよ」

美琴が突っ込んで隣で俺は盛大に溜め息を吐いた

寮監さんが電車に乗ったので俺たちも電車に乗る

いくらか離れて座席を確保し寮監を見る

その間特に様子は変わらなかった

降りた場所は…

「…十三学区？」

………

「…こんな所に一体なんのようが…」

言いながらも追跡を止めない俺たち

「…なあ。どこまでついてく気だ？」

「マルコをこの目で確かめるまでですわ」

「マルコねえ…」

実際にたら俺は吹き出すと思うが

と寮監さん右に曲がったので俺たちも後を追って身を潜める

耳に入ってくるのは小さい子供たちの喧騒

寮監はその喧騒のする建物に入っていた

看板を読むと

児童養護施設

「あすなる園」

「…あすなる園？」

「…ここ置き去り（チャイルドエラー）の施設ですわ」

寮監さんは置き去りの子供たちに大人気のようだ

「え？置き去り（チャイルドエラー）って、あの身よりのない子達
の…」

ひょこ、と黒子が携帯から目を離しあすなる園にいる寮監さんを見る

一言二言交わしている

あすなる園の園長さんらしいおばあさん（？）が寮監さんといくら
か言葉を交わす

「寮監のあんな顔、初めて見た…」

美琴がそんな事を呟く

「なかなか良い笑顔してるじゃんか」

「わたくしもですわ…まさかこんな所でボランティアなさっていた
なんて…」

俺と美琴はしばらく寮監さんを見る

子供たちと戯れる寮監さんは本当に楽しそうだ

「…ちつとも知りませんでしたわ…。寮監「様」がこんなにも心根のお優しい方だったなんて…」

『…様？』

急に手のひら返した黒子に美琴と二人してツッコむ

「それに比べてわたくし達は…っ！…いけずごけなどひとでなしな
どっ！自分が恥ずかしいのですのっ！黒子のっ あかつ！…っ、うう
…！…！」

つい数分前はあんなにボロクソ言うつとったやないかお前

「…あれ？」

美琴が何かに気づいた

「どった、美琴」

「あれ」

美琴が指差した先には――

………

「はあゝあ、いくらテストの点数が悪かったからって、ボランティ
アだなんてなー」

ほうきで地面を掃きながら佐天涙子がぼやく

「何事も経験ですよ佐天さん。それに、子供たちと遊べて楽しいじゃないですか」

そんな佐天を初春が言葉を紡ぐ

「ま、それもそうね」

佐天が笑顔でそれに返す

「あ、二人共。ちよつといいかな？」

奥からエプロンをつけ眼鏡をかけた男性が歩いてくる

「まだ、挨拶してなかったね。こちらが、園長の重野守和子さん」

「この子たちが、大園先生の生徒さん？」

「はい」

大園、と呼ばれた先生が「はい」と頷く

「今日1日、よろしくお願いしますね」

園長先生が頭を下げると同時に佐天と初春が

『よろしく願いしまーす』

と返した

「ところで、あちらの人達はお友達？」

『はい?』

言われて振り向くとそこには御坂と黒子、アラタがいたのだ

.....

「こんな所でなんて、奇遇ですわね」

「皆さんも、ボランティアですか?」

「い、いや...、まあそんなところだにゃー... あはは」

となんか土御門みたいな口調になりながらも美琴と二人あはは、と苦笑する

...寮監さんを尾行してました、なんて死んでも言えなかった

「あの、あれって、白井さんとこの寮監さんじゃないですか?」

佐天が中で遊んでいる寮監さんを見ながら呟く

「一緒に来たんですか?」

初春の純粋な問いかけ

「いや。これにはよんごころのない事情がありますのよ」

黒子め...白々しいなあ

「へえ…寮監さんもボランティアやってるんですね」

「大園だいこのボランティア仲間か…」

「あの先生、大園つてのか？」

「あ、はい…。私達の担任で」
初春が答える

「…お相手はあの方だったんですね…」

「…へ？お相手って？」
きよとんとした美琴が黒子に聞く

「寮監様はあのお方に恋をしているんですよ！」

・・・

『こ、恋いいいい！？』

皆さん大絶叫

「その恋、わたくしが実らせて差し上げますわっ！寮監様っ！」
さつきまでボロクソ言ってたのが嘘みたいに寮監さん応援体制

「ち、ちよつと黒子…」

「うわー、なんか楽しそうですねー！」

「私も手伝いますよ！！白井さんっ！」

二人共すっかり悪ノリしている

「…つか、んな簡単に行く訳ないだろう」

「そこを強引にやっつけてしまつのが、白井さんの恐ろしい——」

がす、と初春の頭が殴られた

殴ったのは黒子だが

「殴られたいんですの？」

もう殴ってる

「さー！こうしてはいられませんわっ！作戦会議ですのっ！」

…はあ

胸の中で俺は溜め息をつく

決まったら連絡して、と美琴に言つと今日は素直に学生寮に帰った

………

「…はあ」

特に意味なく息を吐く

「寮監さんが恋、ねえ……」

たまに女子寮には行くが…（主にお菓子をお裾分けするために）

そんな様子は今のところ見たことはない

あの眼鏡の奥には一体何が…

「…何言ってんだ俺は」

意味解らない事を呟きながら俺は帰路についた

……………

その夜

「…結局手伝う事になったのか…」

美琴から電話がきた

>うん。…それが…<

……………

「一生いけずごけでも構わないと言っのですのっ!？」

そう言われて自室に向かおうとしていた寮監は足を止める

「く、黒子…!！」

黒子が寮監に向かって禁忌に近い言葉を言い放つ

「…なるほど。そんな事が」

>…うん。そんな訳で、明日手伝って欲しい事があるのく

「…手伝って欲しい事？」

……………

「今日一日、皆さんと一緒に遊んでくれるボランティアのお姉さん、お兄さんたちですよ」

園長先生が俺たちを紹介する

「（…アラタ）」

エプロンを着た神那賀が俺に小声で聞いてくる

「（なんだ）」

「（なんで私がこんな所でボランティアしなきゃならないのよ）」

「（そんな嫌そうな顔すんな。ほら笑顔笑顔）」

『よろしくお願いしまーす！』

園児達の元気な挨拶に俺たちも挨拶を返す

一人一人に俺が笑顔で交流していると

寮監さんと黒子が密談している

…何を企んでいるんだ黒子…

「では早速、作戦を実行しますわよっ！！」

黒子の言葉に佐天と初春が『うんっ！』と頷いた

「…なんだよ美琴、作戦って」

「さ、さあ…？」

知らねえのかよー！

………

「寮監さん、厨房に連れていきましたよ」

「ご苦労様ですの。これで第一段階は完了しましたわ…。後は…」

窓の外に視線をやる

大園先生が初春に連れられている姿が見えた

「これで寮監さんと大園は二人つきりっ！」

ぐっ！、と佐天がガッツポーズを取る

「共同作業をする事で、おのずと距離も近づきますわ…これぞ名付けて「愛の結晶作戦」っ！」

その言葉を聞いた佐天がなんか顔を赤くして

「あ、愛の血漿って…な、なんか、いやらしいですね…はう…」

佐天や。何を考えているのや

「…本当に上手くいくのかな」

美琴の不安も最もだ

「…黒子だからな」

神那賀なんてすっかり園児達と打ち解けて遊んでいる

…子供に好かれやすいタイプなんだな

「おねーさん、おにーさん。あそぼー？」

思考していると園児達が何人かやってきて俺と美琴のエプロンを小さい手で握っていた

「アラタ、何サボってんのよ。そもそも私を誘ったのはあんたでしようが」

神那賀の愚痴が耳に入ってくる

それにタイミングを合わせ

「ではお姉様、お兄様。お願いしますわ」

「え？」

美琴がきよんとする

「打ち合わせしたではありませんの」

いや俺はしてないんだけど

「…まあ行くか。美琴」

俺美琴を見ながら近くの子の頭をなでくりなでくりする

「…そうね」

それに返しながら美琴も近くの園児の頭をなでる

「じゃ皆、行こうか」

美琴がそう言うと

『わあーいっ!』

と喜ぶ声が耳に聞こえた

………

園児達と今外で遊んでいる

（なにやってんだろ…私）

苦笑を浮かべながらそんな事を考えていると

「つかまーえた」

ばふ、と腰に何かが捕まった

「ようし、よくやった」

そう言いながらアラタが美琴に抱きついた女の子を撫でる

「さあ、今度は御坂さんが鬼よー」

アラタの隣にいた神那賀が美琴に向かってそう言った

「ああ…今度はお姉さんが鬼かー。ほうら、早く逃げないと鬼になっちゃうぞー！」

美琴がそう言っていると園児達は『わー！』と散る

その楽しそうに遊ぶ姿は

木山春生の置き去り（チャイルドエラー）が脳裏をかすめた

——あの子たちを救うためなら、私は何だってする……この都市^{まち}の全てを敵に回しても……止める訳にはいかないんだあ……

「…置き去り（チャイルドエラー）、か…」

美琴がそんな事を呟くと

「…美琴？」

アラタが歩いてきた

「アラタ…」

「木山春生の事か？」

アラタの言葉に美琴は「うん」と頷く

「…あの子たちも、あんな風に、遊んでたんだよね…」

少し美琴が俯いた

「…そうだな」

「…なのに、今は昏睡状態なんだよね」

「…ああ」

「…」

そう言ってまた俯いた

「…、」

アラタはかける言葉が見当たらず頭をぼむ、と優しく手を乗せた

「…アラタ」

「何も言うな。…俺たちは、今を生きるしかないんだ」

そう言うアラタの手は微弱だが震えていた

それに少しだけ救われた美琴はアラタに突然ガバツと抱きついた

「み、美琴！？」

アラタはいきなりの事で戸惑いながら美琴に聞く

「…つつかまーえた」

そう言つて顔をあげる美琴

「へ？」

「今度はアラタが鬼よっ！」

そう言つて笑顔を見せた美琴は足早に逃げていく

「あのやろ…！まで、美琴…！」

そう言つてアラタは園児達と再び鬼ごっこを再開した

……………

『おたんじょーび、おめでとー！』

縦に繋げたテーブルに白く大きいテーブルクロスを敷いて数々の料理が並べられている

今日は園児の数人が誕生日らしい

「もう大変でしたよ…」

ケーキを寮監さんと大園先生と一緒に買いに行っていた初春と佐天がその惨状を語る

「道は間違えるわ、犬に追いかけられるわ、川に落ちそうになるわ……」

「……ケーキ買いに行くだけなのに、なんでそんな大冒険になってんだ……」

俺がそんな言葉を言うと

「ま、でも結果オーライですわね」

「さあ。じゃあいただきますよね」

園長先生の言葉に園児達が『わーいっ！』と喜びながら料理に手を伸ばす

「……良かったですね。皆、喜んでくれて」
寮監さんの隣にいた大園先生が寮監さんに呟く

「すみません……。私……ちつともお役に立てなくて……」
寮監さんが眼鏡を取り眼鏡を拭く

「……あれ？」

「はい……？」

「ないほうがいいですね。眼鏡」

突然の一言に顔を赤らめる寮監さん

「あ、もちろん、眼鏡も似合ってるけどかけてない先生も、素敵だ

なつて」

そう言われて寮監さんは更に顔を赤くする

「あー！おねーさんと大園先生、らぶらぶだあー！」

園児の言葉にハッと我に返った寮監さん

『らぶらぶー！！』

容赦ない園児達

それに笑いが漏れる

「こ、こらー！！大人をからかわないの！！」

「そ、そくだよ！それに僕なんかが相手じゃ先生に申し訳ないよ…」

「では、大園先生はどんな方が理想でいらっしゃいますの？」

唐突に黒子が聞く

「え？うーん…そくだな。尊敬出来る人、かな」

「尊敬と言いますと、具体的には？」

黒子は持つてるフォークをマイクのように大園に向ける

「うーん…。自分の事より他人のために行動出来る人、かな…」

寮監さんは後ろを向きながら顔を赤くしていた

その時

カタカタ、と揺れる音がした

「地震？」

その言葉を皮きりに一斉にパニックに陥ってしまう

「み、皆、落ち着いて――」

「動くな――」

寮監さんの言葉に静寂する

「落ち着いてテーブルの下に――」

寮監さんの言葉に園児達がゆっくりとテーブルの下に隠れる

その時一人の園児が泣きながら走っていく姿が目に入った

「危ない――」

そう言い終わる前に寮監の体は動いていた

自分の体を盾にして子供を庇う

ぐらついて倒れたポットが落ちてきた

……

「収まった…のか？」

俺の呟きに初春が

「最近多いですよ…。良かったですね、小さくて」

全くだ、と俺が初春に同意すると

「先生！！先生！！大丈夫ですか！？」

大園先生が寮監さんに駆け寄る

「こら！！だから落ち着けて言ったでしょう！！」

寮監さんが園児に向かって怒る

「う、ごめんなさい…」

しゅん、とする園児に寮監は微笑んで

「どこか痛いところはないか？」

その言葉に園児は元気よく「うんっ！」と頷いた

と、安心するのも束の間

ガシャーン！！と大きい音がしてガラスが割れる

一斉にその方向を見る

そこにはガラスを叩き割り内部に侵入しているワームがいたのだ

「ワーム!？」

神那賀の叫びにまた園児達がパニックになる

「皆はそのままテーブルの下に隠れて!!」

寮監さんは皆を庇うように前に立つ

「…先、生…」

「…来るなら来なさい! 化け物! 私の生徒や大園先生の生徒、そして、子供達には指一本触れさせない!!」

寮監さんは叫んだ

「…お前の寮監さん、すげー正義感強いじゃないか」

黒子に言つと黒子は寮監を見ながら頬を掻く

ワームは羽化し成虫体となりアラクネアへと姿を変える

ゆっくりと近づいてくるワームに寮監は恐怖を覚えながらも一歩も退かなかった

「後は任せてください。寮監さん」

テーブルの下から出てきたアラタと神那賀に寮監は驚き

「お前ら！隠れてるって——」

「大丈夫です。寮監さん」

「皆は、私たちが守ります。あの子を、寮監さんが守ったように」

「な、そんな事——」

「寮監様！」

黒子の言葉に寮監が黒子の方を向く

「お兄様と神那賀さんに任せてください……」
真剣な表情で寮監を見つめる

神那賀はバーストライバーを腰に巻きポケットからメダルを取り出すと軽く弾く

アラタは手をかざし飛来するガタックゼクターを掴み取り

『変身！』

メダルを挿入しハンドルレバーを回す

ベルトにゼクターをセットする

> HENSHIN <

アラタは電子音が響くと同時に姿をガタツクマスクドフォームに変える

神那賀がハンドルレバーを回すとドライバーの中心にあるトランサーシールドがカポン！と小気味よい音を立てると仮面ライダーバースへと姿を変える

「…ら、いだー…？」

寮監が驚いている

「寮監さんは子供達の安全を」

「わ、わかった！」

寮監さんが園児達の元に走っていく

「神那賀」

「ん？」

バースはマスクドガタツクに顔を向ける

「今回はお前が戦え」

「ええ！？ちょ、なんで！？」

慌てふためくバースにマスクドガタツクは

「常に俺がいる訳ないだろう。援護位はしてやるから、行ってこい」

バースの背中を叩く

「むう…わかったわよ…！」

バースは走り出し

「やあああああっ！」

アラクネアを一気に外に押し出しパンチを入れて吹き飛ばす

「覚悟しなさい…！私は今、トサカに来てるんだから…！」

バースは拳を構え直しアラクネアワームと対峙した

………

「やあっ！」

バースは接近しパンチを叩き込む

多少アラクネアワームがのけぞるがアラクネアワームも黙ってはいない

両手を組み風ぐようにバースの腹を叩く

「うぐっ！」

バースは多少ダメージを喰らいたじろぐがそのままアラクネアワームの腰に抱きつき

「やあぁっ！」

そのまま後ろに投げ飛ばした

投げ飛ばされたアラクネアワームは転がりながら体勢を立て直し手から蜘蛛の糸のようなものを飛ばしバースを拘束する

「わ！？」

拘束されたバースはなんとか糸を千切ろうと力を入れる、が

（堅…！！なんて強度なのよ…！！）

千切ろうとする作業に没頭するあまりアラクネアワームの接近を失念していた

「しまっ——」

がす、と腹に拳を喰らいそのまま倒れ蹴りを入れられる

「うわっ！」

ゴロゴロと地面を転がるバースにアラクネアワームは追い打ちと言わないばかりに顔を踏みつける

「う、ああ…！！」

その光景を見ていたマスクドガタックは

「…流石にヤバいか…！」

左手でゼクターの角を弾く

マスクドアーマーが浮き上がり

「キャストオフ」

言葉と共にゼクターの角を開く

>CastOff<

マスクドアーマーが弾け飛んで本当のガタックが姿を現す

>Change Stag Beetle<

ガタックは一気に駆けカリバーでアラクネアワームを切り裂く

ガキン、と火花が飛びアラクネアワームがのけぞる

その隙を逃さず蹴りを入れてアラクネアワームを吹き飛ばす

「立てるか。神那賀」

「ったり前よ…！拘束とか、舐めた真似してくれるわね…！」

一枚のセルメダルを挿入しハンドルレバーを回す

>ドリルアーム<

右手にドリルアームが装着される

「…タイミングを合わせな」

ガタツクカリバーを連結させる

「はあ!!」

ガタツクは跳躍しアラクネアワームの背後に廻ると背中からガタツクカリバーで挟み込み

「ライダーカッティング!!」

>R i d e r c u t t i n g<

カリバーにタキオン粒子がチャージされギリギリと挟み上げる

「神那賀あつ!」

「わかってるわよ!!」

走りながら二枚セルメダルをドライバーに挿入し器用に左手でハンドルレバーを回す

>セルバースト!!<

「でやあああつ!!」

挟み上げられるアラクネアワームの腹に堂々とドリルアームを突き入れる

ドリルが一気に廻り出し確実にアラクネアワームを貫いていく

カリバーがアラクネアワームを両断するとドリルアームがアラクネアワームを貫くのは同時だった

直後爆発するアラクネアワーム

「よし、やるな、神那賀」

「はあ…はあ…。どういたしまして…」

神那賀は仮面の下で笑みを浮かべながら返した

またその時あすなる園の園児達が駆け寄ってきた

「ありがとう！らいだー！」

そう言ってきた

「はは、ありがとうな」

アラタはガタツクのまま子供を撫でる

寮監はその光景を見ながら笑みを浮かべる

「先生、流石です…尊敬します」

大園先生が笑顔を見せながらそう寮監に言った

「大園…先生…」

寮監は顔を赤くしながら大園を見つめた…

.....

これは後日、美琴から聞いた事だ

あの後寮監さんにその先生から電話が入ったらしい

その後レストランで寮監は相談を受けたらしい

付き合うのに、年齢の差は関係するのだろうか、というものだったらしい

寮監はその相談を自分のものと勘違いしてしまったらしく
実際はその先生はあすなる園の園長に恋をしていたらしく...

「...んで、寮監さんの恋は散ってしまった訳、か」

バーバラ「KAZAMA」にて俺は風間と雑談していた

「らしい、な。その寮監さんには、ちょっと可哀想だなんて思ってたよ...」

風間はコップに水を入れそれを飲む

「だが、年齢の差など関係ない、は響いたな」

「...は？」

俺がキョトンとしていると

「ふふ。アラタにはまだ教えてないから教えてしんぜよー」

奥からヒロが出てきた

「私たちは、付き合っているのだあつ!!」

ヒロの大胆発言

風間はそれに驚きもせず涼しい顔で水を飲んでいる

「…へ？」

俺が目をはちくりさせて少し時間が経ったその刹那

「ええええええええええ!!」

俺絶叫

「いつ!?!いやそもそもマジ!?!」

「マジだ」

大介の口から聞いた

「マジかよ!!てゆかいつから!?!マジで!!」

「幻想御手が解決した数日後だ。ヒロから告白されてな」

マジかよ…!と今日何回目かわからない呻きをあげる

「歳の差なんて関係ないの!!愛し合う二人が良ければっ!!」

ヒロが風間に抱きつく

抵抗しない辺りを見ると本当らしい

「今日は、とりあえず、帰る」

なんか気まずくなり俺はKAZAMAを出た

「風間…。あいつ本気でロリコン…!？」

見方を変えればアラタもロリコンである

「やれやれ、仲良き事は美しき事、か」

だがこれからも付き合いは変わらない

それが友達だ、と

俺はあいつに習ったんだ

そう心に考えながら今日も美琴たちがいるファミレスに足を運ぶの
だった

19 あすなろ園（後書き）

ローラの喋り方は難しいです…

20 盛夏祭

今日は常盤台中女子寮盛夏祭

基本一般解放されていない女子寮が年に一度門下を開く日

まあ文化祭みたいなものか

俺は律儀に美琴本人から招待状を頂いているので堂々と正門から入れる

とりあえずぱつと着替えて俺は常盤台中女子寮に向かう事した

.....

「お。当麻じゃん」

ちょうど入場しようとした級友、上条当麻と遭遇した

あの白いシスターさんと一緒に

「あー、あらたなんだよっ」

「うつす、ちびっ子シスター、元気かいっ」

「なんだ。インデックス、アラタと知り合いだったのか？」

フランクに会話するインデックスとアラタを見て当麻がそんな事を聞く

「ああ。俺が風紀委員の新人研修してる時に、な」

ジャッジメント

「なるほど。その時インデックスが世話になったな」

「何。気にすんな、当麻」

ふと気付く

なんか少し当麻の様子がおかしい

まるで記憶喪失のような…

いや、気のせいか

「んじゃ当麻、また後でな。インデックスも」

「おお。またな。ほら、行くぞインデックス」

「うん！とうまとうま！あれ食べたいっ！」

「わかったわかった。だから引つ張るなよ」

インデックスに引つ張られて当麻は去っていった

「…やれやれ。インデックスはよほど当麻が大好きなんだな」

微笑ましいな

そう思って俺は寮の中に入っていった

.....

「いらつしゃいませー、こちら、本日のパンフレットになりまーす」

見慣れた短髪が俺にパンフレットを差し出してくる

「...美琴？」

「...えゝ？...あ、アラタ！？いつここに！？」

「ついさっきだけど...。メイド服か。やるな盛夏祭っ」

「あ、あんまジロジロ見ないでよ。...恥ずかしいんだから...」

頬を赤くしながら目を逸らす

「いいじゃん。なかなか似合ってたぜ。...写真撮ろうか」

そう言つて携帯を取り出そうとする

「ダメよ。寮生の撮影は禁止されてるんだから」
むう。残念だ

ばしゃばしゃ

「だから、ダメだつて言つてるでしょう！...」

「俺じゃねえよ！...」

俺がそう返すと美琴が「え？」と呟き辺りを少し見回すと

「はあい…おう、イエス、イエス…。いいねえ…」

白井黒子がバシャバシャ写真を撮っていました

「いいねじゃないわよ！！なんであんたが撮ってたのよ！！」

「誤解なさないでくださいな。今日の黒子は盛夏祭の記録係。来
年以降の開催に向けて、こうして参考写真を撮っていますのよ…？」

お前が撮ると美琴オンリーだろうが

「…黒子に記録係任せたの間違いじゃないのか…？」

「アラタに激しく同意ね…」

「ですがお姉様…。このお召し物にまで短パンと言うのは流石に
かがかと…せめてドルマーズをお履きになるとか…」

「だからどこ見てんだお前は…」

美琴からバチリ、と雷が迸り黒子のカメラをショートさせた

「おわ！！」

「あのさ黒子。来年以降の開催に向けてどうして私のそんな写真が
参考になるのか教えてくれないかしら…！！」

ぎゅむー、と黒子のほっぺをつねる美琴

あ、なんか久しぶりに見たなこのやり取り

「こんにちはー」

そのやり取りを見てるとまた聞き慣れた声が入ってきた

「相変わらずやってますねー」

初春と佐天が私服に身を包み初春が飾りを見回して

「うわー……！！白井さん、ご招待ありがとうございます！盛夏祭っ！
！なんと言っても、常盤台中学の寮祭ですからね！」

初春はものっそいいい笑顔で

「これはきつと、私たちの想像を遥かに越えたものが待ち受けているに違いありませんっ！」

「どういたしまして。その期待に賜わぬ素晴らしい催し物もご用意されておりますから、どうぞ楽しんでいってくださいな」

黒子がそれに笑顔で返し

「では、早速ご案内を——」

「ちょっとまってー」

また別の声が聞こえた

「白井ー。ビュッフェの手伝いはどうするつもりだー」

土御門舞夏だ

「なんだ。舞夏もいたのか」

俺がそう言つと「おー」と声を出し

「アラター。お前も来ていたのかー」

「あの一…」

そう言えば舞夏の紹介はしてなかった

「こちらは、繚乱花聖女学校の、土御門舞夏、今回の寮祭の料理も彼女の学校に指導してもらったのよ」

と美琴が説明してくれた

「繚乱つて、あのメイドのスペシャリストを育成するって言つて…！」

初春が軽くテンションが上がった様子で言う

「土御門舞夏であるー」

舞夏はメイド服のスカートを両手で軽く持ち優雅に自己紹介

「んで、こちらが俺たちの友達の、初春飾利さんと、佐天涙子さん」

美琴に倣い俺も二人を紹介する

「よろしくー」

「よろしくお願いしますー」

「困ったことがあれば何なりと申すがよいー」

佐天と初春が挨拶し舞夏が笑みでそれに答えたあと

むんず、と黒子の襟を掴む

「へ？」

「さあ白井ー。来るのだ」

「え、あ、ちょ、待ってくださいな、初春たちを放り出す訳には……」

「仕事を放り出してもいいのかー」

「いえ、決してそう言う訳では……」

そんな訳で黒子は舞夏に連れられてどっか行った

「代わりに、私が案内するわ」

美琴の案内で盛夏祭を廻る事になった

………

場所を変え少し落ち着く

「さてと。どこから廻ろうか」

「どっか行きたいとことかは――」

「はいっ!!」

俺の言葉は初春の全力挙手に遮られた

「はいはいはいっ!! ありますっ! 行きたいとこ、ありますっ!!」

俺、ちょっと驚いた

「ここと、こことここと、あと、ここからここまでを…」

パンフレットを差し出しながら行きたい所を指差す

「それ全部じゃん」

苦笑しながら佐天がツッコむ

「佐天さんっ。今だけはいつもの初春飾利ではありませんっ。もう宣言しておきますっ。リミッター解除ですからっ!!」

初春が燃えている

…バーニングだな

「…じゃあまあ、順番に巡るか」

美琴にそう言つと

「そうね」

軽く微笑んで同意した

.....

シュガーアートな部屋

な、というのは正式な名称は俺もわからないから

初春が目をキラキラさせて展示品を見ている

佐天はどうもこれがシュガーということが信じられず展示品をぱりっ、と一枚取り口に運んでた

あれ、いいのかあれ

「おい、美琴。あれって…、て」

美琴が下級生に砂糖アートを勧められていた

「…大人気だな美琴は」

微笑ましく俺は見守った

.....

歩いていると壁に貼られたアートの初春が走ってく

「へえ…スッゴい細かいなあ…」

佐天も歩みよって感想を漏らす

初春が看板に目をやる

どうやら体験できるらしい

「佐天さん佐天さんっ。体験できるみたいですよっ！」

今日の初春はテンション高いな

「わかったわかった」

佐天は苦笑しながら答える

「御坂さんとアラタさんも、一緒にどうですか？」

急に話を降られた

「いや、俺は……」

「うん、私も——」

「はいっ！決まりです！四名お願いしまーす！！」

拒否権はなかった

………

ステッチアートというのは裁縫針に色のある糸を入れて、縫い物の要領で作品を作る……みたいな感じだ（俺が見た限りでは）

とりあえず俺は…ガタツクゼクターをアートで作ってみる

む。難しいな

お、こんな感じが

ふと視線を上にあげると初春が佐天と美琴の作品を見て固まっていた

俺も佐天の作品を見る

…上手いな。車か

次美琴

…めっちゃ上手いなこんちくしょー

ゲコ太＋花のアートだとっ！

…勝てない

……………

その後美琴と初春、佐天と共に様々な場所を見てまわった

生け花とか、時折休憩をはさみながら歩いてまわる

茶道なんかもあった時は素直にびっくりしたね

図書室に入り再度休憩をはさむ

色々な本を興味深そうに見る初春

また疲れているのか佐天はと机に寄っ掛かりぐっすりと寝ている

そんな光景を美琴と一緒に眺めていた

「…やるな。盛夏祭」

「それ、来た時と言ってなかった？」

そう言って顔を向けてくる

「すごいって意味さ」

ぼむ、と頭に手を乗せる

「…そ」

言いながら顔を少し赤くしながら再び初春たちの方を向いた

………

「V i k i n g っ!？」

食堂に来た瞬間開口一番俺の叫びが木霊する

食堂がバイキング形式なのだ

「なんなんだちくしょー…俺が通ってる高校なんて…うう…!!」

泣きたくなった

とりあえず下に降りて好きな食べ物を確保しに行く

…んー悩むなー

とりあえずさらっと軽く食べ物を決めて席に移動しようとする

「う、うう。うう…。ぐ、くるしい…」

アンチスキル
警備員の鉄装さんがぐだー、と椅子に寄りかかった

眼鏡がトレードマークなのだ

「取りすぎだろう。全く…」

向かい合って座っていた矢車さんがざらりとツッコミながら自分のパンをかじる

「だ、だって、食べ放題なんですよ…」

「はあ…生徒や影山には見せられん姿だな…」

もうガッツリ見てますぜ、矢車さん

「ほら。立った立った」

自分のパンを食べ終えて立ち上がると鉄装の襟を掴む

「ひあ、ら、乱暴にすると逆流しますー…」

そのままずると引きずられていった

美琴と共に少し先にお昼を採る

「…はあ…」

皿の上に乗せてある食べ物をフォークで突つつきながら美琴が溜め息をついた

そんな美琴をパンをかじりながら眺める俺
すると

「あらたお兄ちゃん」

はふ、と腰に何かが抱きついた

「えへへー」

それは以前あすなる園でお世話した子供だったのだ

「あれ？あすなる園の…」

「なんでこんなところに？」

美琴と二人首を捻っている

子供を何人が連れた寮監さんが立っていた

「私が招待した…」

軽く視線を逸らしながら呟いた

「ビーズで指輪作ったり、お絵かきしたりしたんだよ」

そう楽しそうに言う子供に俺は頭を撫でながら

「そうかそうか。良かったねー」

笑みを浮かべながらなでくりなでくりする

「でもね、一番楽しみなのはー」

「うんうん、楽しみなのは？」

「美琴お姉ちゃんのステージー!!」

世界が凍った

一瞬（実際は数秒の）の沈黙

「…え!?!」

ばっ!!と今まで振り返った中では最高速度で美琴の方を向く

対して美琴は「この子言ってしまった!?!」みたいな表情で絶句していた

「だ、ただだ誰に、きき聞いたのかなぁー…？」

言った瞬間寮監さんの眼鏡がキラっ！！と鋭く光った

「いーっぱい応援するから、頑張つてねっ！！」

その言葉を聞いたあと寮監さんが美琴の耳元でなんか呟いた

美琴はそれに引きつった笑みで「は、はい…」と答える

そして寮監さんは子供たちを引き連れて去っていった

「…美琴、ステージでなんかするの？」

「え？…」

「そーですよ、なんで言ってくれなかったんですかー…あ！！わか
りました、サプライズですね！！」

何時の間にか合流していた佐天と初春のテンションがあがる

「え、あ、いや…」

「わかりました、じゃあもう何も聞きません！！」

しゅば、と佐天が言う

「い、いや…」

「あー！！ダメですダメです！！何も言っちゃいけません！！」

と手をばっ、と前に突き出し言葉を遮る佐天

「そーですよ！！サプライズなんですからっ！！」

めちゃくちゃ期待してる二人に美琴は軽くプレッシャーを感じる

「御坂ーアラター」

唐突に俺たちを呼ぶ声がする

「んあ、なんだ舞夏」

両手に料理を持っている舞夏は

「白井を見なかったかー？」

「は？いや、黒子はお前が連行してっただろ？」

「それが厨房にもいない…。さては逃げられたか…今日招待した友人の中に、前代未聞の大食らいがいて、てんてこまいなのに…。いめーわくなのだー…」

そう言ってまた歩き出した

「あ、そっだー」

そう言って立ち止まると美琴の方を振り返って

「今日のステージ、楽しみにしているぞー？」

そんな言葉を残して舞夏は去っていった

.....

俺はとりあえず黒子を探すため美琴たちと一旦別行動を取る

するとふと舞台に目がいった

「…オークション…。なんでもありだな常盤台」

良く見るとオークションに出されてる品はレア物のブランド品

たまに大介やヒロに付き合わされるから多少は詳しいつもりだ

「…やるな盛夏祭ー」

本日三回目のやるな盛夏祭

そう言って売店で購入した飲み物を口に含み

「ぶふう！？」

盛大に吹き出した

何故吹き出したかと言うと舞台に上がっていった人物が良く知っている人物だったからだ

「国法！？」

……

「…ふ、ふふふふ…」

なんか不敵な笑みを浮かべてる国法に俺は声をかける

「国法」

「ひゃあ!？」

国法がびっくりした様子で振り向く

「あ、アラタ!？」

「…意外にミィハーなんだな…」

国法は「へ？」と素っ頓狂な声をあげ自分が持っている鞆（レア物ブランド品）に目がいく

「ふ、普段は、こういうものには興味ないのよ!？これはチャリテイーなの!…この収益は、全額置き去り（チャイルドエラー）の子供たちに寄付されるのよ!…風紀委員としては、参加しない訳にはいかないわっ!…」

「…国法。めっさ言い訳がましいぞ」

「そ、そうだ、アラタも参加してみたら？」

唐突に話変えやがった…

「いや、てか俺今月ピンチだし…」

「大丈夫よ。ほら」

「>さて、次の出品は…<」

進行係の生徒がガサガサと箱の中を漁る

取り出したのは

「>キルグマーの文具セットー！まずは百円からー<」

すると辺りのざわめきから「二百円」「やら」「三百円」などの声が聞こえる

「…なるほど」

「ね？」

「じゃあ少し——」

「一万円ー！」

有り得ない額を聞いた気がする

すると舞台に歩いていくのは…

「黒子…」

あいつ今までどこにいたんだ…

国法が呆れた様子で黒子を見る

………

「黒子。てめえ今までどこにいやがった…」

「ただの文具セットに一万円って…」

すると黒子はキルグマーの文具セット（一万円落札）を見ながら

「いえ、お兄様、国法先輩。ただの文具セットではありませんの。

何故ならばこれは、お姉様がお出品なさったものなのですから…この下敷きも、ノートも…。言うなればお姉様の分身…。あぁん、黒子の家宝物っ！」

…ダメだこいつ。早くなんとかしないと…

「ところで、御坂さんは？」

国法が唐突にそんな事を聞いてきた

「は…！そうすわ、こんなことをしている場合ではありませんの…！」

その言葉に国法は首をかしげ

「御坂さん、ステージで何かやるの？」

「さあ。佐天らが予想するにはサプライズって言ってたけど…」

「そうですね！！急いで良い席を確保してお姉様の勇姿をカメラに収めねば…！！」

…大丈夫かな。あいつ

過度なプレッシャーに潰されなきゃいいけど…

「悪い。少しトイレ行ってくるな」

そう言っただけで国法たちと別行動する

美琴に何か言っただけでやりたかったから

余計なお世話かもしれないけれど

………

辺りを歩いていると

「お！アラタじゃなかった！」

ばっさばっさと羽ばたくコウモリと出会った

「キバット、何してんのさ…。あ、アラタ」

「ワタル…お前なんで盛夏祭に？」

彼の名前は紅刃ワタル^{くれなは}

ヴァイオリンの修理屋を営んでいるらしいのだ

「今日、誰かがステージで演奏するらしいから、このヴァイオリンのチューニングとかもろもろ頼まれちゃってね。ついでに、ニスも塗り直しておいてんだ。見て、この輝き！いい素材を使ってるよー…流石常盤台だよー…」

そう言っヴァイオリンを見てウットリしているワタル

「…おいおいワタル。お前が演奏する訳じゃあないんだぜ？」

こいつはキバツト

…ぶっちゃけ良く知らないぜ

だけど、何だろ？

風呂好きだったのは良く知ってる

「あ、そうだった…。じゃあねアラタ」

「ああ。またな、ワタル」

ワタルと別れ歩きまわる

と、

「…居た」

てか舞台裏に来てしまった…

「美琴」

「へ！？…な、なんであんなところにいんのよ！？」

顔を真っ赤にして睨む

美琴の今の格好は白いワンピースのようなドレス

「な、なに！？笑いに來た訳！？慣れない衣装を茶化しにきたわけ！？」

「なんで俺がそんな陰湿な事せにやなんのだ」

「じゃあ何しに——」

ぼむ、と俺は頭に手を乗せる

美琴や黒子がヒートアップしてる時はこれをやると大抵落ち着く

「…似合ってんぞ。その格好」

「…え…！？」

「お前らしくやりゃいいさ。万が一間違えても、俺は誉めてやるから。な」

ぐりぐりと髪の毛が乱れないように頭を撫でる

「…あれ？」

俺が手を離すと美琴は自分の胸に手を当てる

「…落ち着いたか？」

俺が聞くと美琴は「ええ」と頷いた

手にはワタルが持っていたヴァイオリン

届いたんだな

「よし。行つて来い。御坂美琴」

俺が笑顔で送ると美琴がそれに最高の笑みで返し舞台に出て行つた

……………

拍手が響きわたる

見えるのは黒子や佐天、初春、国法…

そして舞台袖にはアラタが見ている

（全く…人の気も知らないで）

そう思いながらヴァイオリンを構える

（…だけど）

ヴァイオリンを奏でる

独奏のその音色は美しく舞台に響き渡っていく

（やっぱり…。あいつが…）

奏でる音は観客を魅力する

とても、綺麗で…

（…告白、してみようかな）

ヴァイオリンを奏でながらそんなことを考えていた

だが今はそんなことよりも

このヴァイオリンを聴きに来てくれている人たちに

最高の音を届けよう――

21 乱雑解放（ポルターガイスト）（前書き）

短い上に微妙な出来です…

21 乱雑解放（ポルターガイスト）

学園都市内に位置している第二左探偵事務所

「ポルターガイスト
乱雑解放？」

「ああ。このところ頻発に起こっている地震の正体だ。そしてそれは、超常現象じゃなく、その原因は、RSPK症候群の同時多発によるものだ」

淡々とフィリップが喋る

「RSPK症候群の同時多発……」

俺こと鏡祢アラタは壁に寄りかかりながら腕を組んで考える
最近頻発している地震について俺は調べている

本来ならアンチスキル警備員と合同会議があつたのだが俺はそれをパス

神那賀や国法に任せて俺はフィリップを頼りに探偵事務所にやってきたのだ

「なんだよ、その、なんとか症候群ってのは」

翔太郎がフィリップに聞く

正直俺もわかってなかったのでありがたい

「RSPK症候群というのは、能力者が一時的に自立を失い、自ら

の能力を無自覚に暴走させる事を指す。ここの現象は様々だが、これが同時に起きた時、暴走した能力は互いに融合し合い、一律に乱^{ボル}雑解放現象として発現するという訳さ」

フィリップは一度言葉を区切って

「さらに、この乱^{ボル}雑解放現象がその規模を拡大した場合に、体感的には地震と見分けることが出来ないんだ」

つまり、とフィリップは続ける

「これが地震の真相だ」

なるほど…、と俺は納得する

「だけど、学生達に噂が広まって変なオカルトに結ばれちまうと、厄介な話になるな…」

左の旦那がそう呟く

「だな。俺や旦那が注意しないといけないな…」

「…だが、アラタ。この情報は警備員と風紀委員の合同会議で使われる資料をハッキングしたものだ。正直、僕でも引かかる部分があるんだが…」

「そんなのはきつと専門家が調べるさ。今考えても仕方ないよ」

「…確かにそうなんだが…」

「ま、悩んでも仕方ない。行動だ行動」

俺がそう言っただけで背伸びすると携帯が鳴る

初春だ

「もしも――」

>アラタさんっ！今どこですかっ！<

いきなり初春の大声が耳に響いた

「……はあ？」

………

ゲームセンター

そう言えば初春、転校生が来たから紹介したいって言ってたな

だけど俺は最初左探偵事務所にいたからそれにはいけなかったんだな

と、なると初春達の合同会議が早く終わったのか

「あ、アラタさん！！」

初春が走って来て俺の手を掴み引く張る

「ちょ、初春、引っ張るなって、自分で歩けるからっ」

引つ張られると美琴、黒子、佐天、神那賀とそして見知らぬ…あれ？

「君はいつぞやの…」

「あ。貴方は…。この前は、ありがとうなの…」

そう言つて丁寧にぺこりとお辞儀する

初春が紹介したいと言つていた転校生は数日前ロケットタイプのペ
ンダントを探してあげた娘なのだ

「アラタさん知り合いなんですか？神那賀さんも知ってたみたいなん
ですけど…」

初春の言葉に俺は

「ああ。神那賀の研修の時に少し、な」

神那賀に目をやると軽く頷く

「俺は、鏡祢アラタ。よろしく」

「春上衿衣はるうええりいなの…。よろしく願いしますなの…」

「おお。よろしくな」

そう言つてばむ、と頭を撫でる

…あれ。癖になつてんな、撫でるの

とりあえず入店です

.....

「さあ春上さんっ。次は何をやりましょうか。あ、あれなんてどうですかっ!？」

すっかり仲良くなってるな

いや、見てる限りだと春上を初春が連れまわしてるみたいな感じだけど

言い方悪いな…これ

だがお互い楽しんでいるから、よしとしよう

「初春ったら張り切っちゃって」

佐天が楽しそうにはしゃぐ二人を見て呟く

「お姉様も随分と…」

そう言つて黒子は美琴が持つてるカップを見る

中にはメダルがジャラジャラ入っていた

レールガン
超電磁砲の弾丸補充か？

「い、いや…」

ちよつと焦る美琴

……

モグラ叩きゲーム

「お。モグラ叩きか」

皆で初春と春上のところに歩いていく

「懐かしいですわねー」

「…私、こういうの初めてなの…。ピコピコ出てきて可愛い…」

可愛いときたか…

だけど眺めてるだけじゃゲームにならない…

モグラ「叩き」なのに叩かなかったら本末転倒だ

「で、でも、見てるだけじゃなく、叩いてみたら？」

佐天が指摘したみる

「…叩く？」

春上はそう言ってピコピコ出てくるモグラをじっと見つめてもっかい佐天の方に顔を見て

「かわいいそう…」

ぐはっ。そうきたか

「そ、そうだよね……」

佐天折れる

「そ、そうですね！！楽しみ方は人それぞれですし……」

と初春が春上をフォローしているとモグラが出て来なくなった

時間切れだ

「あ……」

春上は機械を見て悲しそうに顔を伏せると

「もう一回」

「は、春上さんっ、流石に四回目は……」

四回？

凄まじいなおい……

「ね、ねえ！皆で、あれ撮らない！？」

空気を変えようと美琴が言う

美琴が言うあれとは

「…プリクラか」

………

「じゃあいくぞー」

真ん中に春上を置き美琴、黒子、佐天、初春、神那賀が場所を決める

俺は…スツゴい気まずいから外で待ってようとしたら

「逃げるな馬鹿アラタ」

神那賀にヘッドロックされた

「痛い！痛いっつの！」

そのまま何回かパシャ、と音がした

…変な顔してないだろうな？

最後の一枚を撮る時にさりげなく美琴が見えないところで手を握ってきた

神那賀なんか腕を組んできやがった

…何も出来ないからそのままパシャ、と撮られました

因みに美琴には軽く握り返しておいた

……

ゲームセンター内の休憩所

ソファに腰掛けた初春と春上が先ほどのプリクラを春上の携帯に送っていた

「何というか。不思議な子ですわね…」

黒子が自販機で購入したジュースを飲みながら呟く

「そう？可愛いじゃない。ね？アラタ」

「なんで俺に話を振るんだ。否定しないけどな」

「そうねえ。守ってあげたくなる感じ？」

神那賀が自販機の取り出し口からジュースを取り出す

「なんか…。昔の初春を思い出すな」

不意に佐天が呟く

「…昔？」

俺が聞き返す

「いや…入学したあの頃に…。ん？」

佐天が言葉を詰まらせる

佐天の視線を辿ると春上が目に入る

何故か春上は歩き出していて…

ごちん、とガラスにぶつかった

「どうした？」

俺が近づいてどうしたか聞いてみる

「あれ…」

と指差す

指差した方には花火大会のポスターが貼ってあったのだ

「あ、そついや今日じゃないかしら、花火大会」

神那賀が呟く

「ねえ、皆で行こつか！！」

「ああ！いいですねそれ！！」

「名案ですわ！お姉様、浴衣なんか着て！」

ヒートアップしている美琴、佐天、黒子、神那賀

「…行くか？初春。春上」

初春は「はい！」と頷き春上に聞く

「春上さんは？」

春上は俺と初春の顔を見て元気な笑顔を見せて

「うん！」

元気に頷いた

.....

花火大会か…

久しぶりだなあホント

「で、花火大会には浴衣は着ていくのか？カ・ガーミン」

たまたま街で出会ったツルギにその事を話した

「いや。制服だ」

それを聞いたツルギは絶句したような表情をし

「カ・ガーミン！花火だぞ！夏だぞ！この二つが揃っているのに、何故浴衣を着ない！！」

なんか怒られた

「いいじゃんか。別に…。第一俺んち浴衣なんかないし」

「カ・ガ・ミン！お前は人生が十あるとしたら十分の九損をしているぞ！」

ほぼ損しとるやないか！！

「ああもうわかったわかった。またな、ツルギ」

一向に話が進まないのて話を切り上げてさっさと去る事にした

………

浴衣、かあ

美琴の浴衣か…

…可愛いかもね

「は！！」

いかん！何を考えているんだ鏡祢アラタ！

だけど一緒にいると楽しいしな…

…やめやめ！

俺は思考を放棄する

考えたって時間の無駄だ

.....

次第に時間は過ぎて待ち合わせ場所に先に来る

既にそこには全員揃っていた

春上は白い浴衣

初春は桃色の浴衣

佐天は水色

黒子は紫色の浴衣

神那賀は青色

美琴は黄色っぽい色だ

「皆似合ってんなあ」

「アラタは何？結局制服？」

美琴が俺の服を見る

悩んだが結局制服を着たのだ

「ま、いいか」

美琴は軽く苦笑する

… なんかがっかりさせたのか俺は

「あー！夜店だあ！！」

佐天が叫ぶ

視線をやるとそこには夜店がたくさん並んでいたのだ

「んー、いい匂い！たまらんっ！」

佐天は草の坂を走って降っていく

「あ、私もっ！」

美琴もそれに倣い走っていく

「お姉様！そんなに走っては…。もう！」

黒子は空間移動で美琴を追った
テレポート

「… 春上さん、私たちもっ」

「うん！」

そう言って二人して降っていく

「… 行るか、神那賀」

「そうね。楽しみましょう」

俺は神那賀と共に皆を後を追った

……

流石は花火大会

結構な夜店が並んでいる

まずはたこ焼き

シンプルなソースが食欲をそそる

次は定番金魚すくい

…皆が何匹かすくう中俺は一匹もすくえなかった…

なんだろう、泣きたくなってきた

美琴が立ち止まりある一点を見つめている

その視線の先にはゲコ太のお面があった

「…買ってやるよ」

「え、いいの!？」

目をキラッとさせる

「偶には奢ってやらないとな。ゲコ太な」

俺がそう言つと「なあ!？」と言った感じで美琴はびっくりした

よく見るとそれはゲコ太じゃなくて普通のカエルでした

.....

一通り遊んで合流する

「全くもうお姉様は...」

「な！いいでしょ、別に。お祭りなんだから、雰囲気よ、雰囲気」

「はあ... 全く」

黒子が盛大な溜め息を吐く

その時佐天が「ん？」と声を出す

「何？あの車」

「MAR...。精神状況救助隊のトレーラーだな」

俺が簡潔に説明する

「例の乱雑解放対策かしらね？」
ボルトガイスト

「乱雑解放!？」
ボルトガイスト

神那賀の呟きに佐天が食いつく

「じゃあ、あの噂マジなんだ!」

「こんな人通りが多い場所で、万が一乱雑解放ボルターガイストが起きたら、大変だからな……」

テンション上がる佐天にやりわりと答える

「それにしても、あんな警備下で花火見物だなんて……風情もへったくれもありませんの」

確かに、と黒子の言葉に頷く

こんな他の人がいる中で花火なんか見てもなんだかなあとなってしまふ

「あ、だったら、いい所があるんですよっ!」

……………

佐天に連れられた場所にて花火を見る

階段を下り広い場所に出る

手すりに寄りかかり花火を見る

「ここ、穴場なんですよ!」

「あ、また上がりますわよ!」

「見てりゃわかるから」

珍しく黒子がテンション上がってる

それに軽くツッコむ

しばらく見ていると何故か佐天と初春、春上が階段を上っていた

「…どうしたんだろ、あの子たち」

美琴が階段を上っていく初春たちを見つめる

「白井さん、こっちからの花火も綺麗だよー」

「ホントですよー!？」

パタパタと黒子は神那賀の方に走っていく

…気がつけば美琴と二人きりだ

………

…あれ

気がつけばアラタと二人っきりだ

アラタは隣で花火を見ている

先に言葉を紡いだのは――

「ね、ねえ。アラタって、今付き合ってる人、いるの?」

美琴だった

「んあ？なんだよ突然」

「い、いいじゃない！！で、いるの！？いないの！？」

聞いている本人が一番恥ずかしいのだ

幸い夜な為美琴の頬が赤くなっているのは気にならない（はず）

「むー…。いないな。今は」

その言葉にどこかホツとする自分がいた

「じゃあ、気になってる人とかは？」

少し近づいて聞いてみた

さりげなく服の袖を握ってみる

アラタは軽く驚いたが特に気にするまでもなく質問に答える

「…気になってる人…は…微妙だな…」

「何よ、微妙って」

「まあ微妙なんだよ。…俺はその子が好きなのかわからないからさ
…」

微妙という言葉に多少違和感を抱いたが気になってる人はいるような素振りだ

…シチュエーション的には最高の状態だ

言い出すなら

伝えるなら、今しかない――

「あ、アラタっ！」

「ん？なんだよ改まって」

アラタが美琴に向き直る

美琴の頬をほんのりと赤くなつて

「わ、私…、アラタの事が――」

ピリリ、と携帯が鳴る

「あつと、すまん、携帯だ」

美琴はがつくりとうなだれた

（タイミング悪いのよぉ…！）

………

なんか美琴ががつくりとうなだれてるけども気にしない

「もしもし？フィリップか？」

>新しい速報だ！アラタ！RSPK症候群の同時多発の原因は、AIM拡散力場への人為的干渉という可能性があるらしいんだ！<

「AIM拡散力場への…人為的干渉だと？」

うなだれていた美琴が顔をあげる

>つまり、一連の乱雑解放は、ボルターガイスト偶発的な事故ではなくて！<

「誰かが意図的に起こしていると言っても言っのか！？」

美琴が立ち上がって話を聞こうとする

その刹那

地面が揺れた

………

第二左探偵事務所

唐突にブツつ、と切れた

ツー、ツー、と無機質な音が耳に入ってくる

「アラタ！？アラタ！どうした！」

「フィリップ、どうした！？」

「わからない！突然電話が切れてしまっ……」

その言葉に翔太郎は顔を青くし

「マジかよ！？」

「たしか、花火大会に行くって言っていたから、そこにいると思うのだが……」

それを聞いた翔太郎は壁に掛けてある黒いソフト帽を手にとり

「こうしちゃいられねえ、フィリップ、俺は行くぜ……」

「わかった、僕は連絡をもう一度試みる！いざとなったら僕もリボルギャリーで向かう！」

「頼んだぜ、相棒……」

翔太郎はそう言って事務所の外に停めてあるハードボイルダーに跨りエンジンをかける

「無事でいてくれよ……」

翔太郎はハンドルを切りその会場に向けて走り出した

……

激しい揺れが襲う

「じ、これは……」

「ボルトーガイスト乱雑解放だ！、くっそ…！！」

寄りかかりながら手をかざす

どこからともなく飛来したガタツクゼクターをキャッチして美琴を抱きかかえる

「ひゃ！？」

一瞬美琴はびつくりしたが体をアラタに預ける

「変身！」

> H E N S H I N <

> C h a n g e S t a g B e e t l e <

マスクドを介さず直接ライダーフォームに変身する

というかマスクドフォームになんかなったら確実に美琴を怪我させてしまう

それだけは嫌だった

「はあっ！」

そのまま美琴を抱きかかえて跳躍する

安全を確認し着地する

すると近くに空中から黒子を抱えバースが着地した

「お姉様！お兄様！」

俺は美琴を下ろし美琴に怪我がないか確かめると

「すまん、後は頼んだ！」

>clockup<

そのままクロックアップし初春、佐天、春上の元に急いだ

.....

突然来た地震に驚き佐天は手すりを掴む

だが揺れはかなり激しく立つこともままならない

初春と一緒にいる春上が不安になり名前を呼ぶ

「初春ー！！！」

その方向を見ると倒れた春上に覆い被さるように庇う初春の姿があった

良かった、と安心したのも束の間近くに立っていた街灯が地震により初春たちの方に倒れてきた

「初春うー！！！！」

より力を込めて名前を叫ぶ

初春が街灯に気づく、が間に合わない――！

初春は観念しせめて春上だけは守りきろうとしよりぎゅ、と強く抱き目を瞑る

・・・

全身に来るであろう衝撃は来ない

恐る恐る目をあけると街灯を支えて自分たちを守るように立っていたガタツクの姿があった

「間に合ったみたいだな……！！」

ゆつくりと街灯を下ろす

「アラタさんっ！」

佐天が叫ぶ

その後ろに黒子の空間移動テレポートの力で御坂と神那賀、黒子が現れる

「佐天さん大丈夫！？」

「御坂さん、はい……。アラタさんが来てくれたおかげで……」

「あなたたち！！」

奥から声がした

視線をやると白衣を着た女性が走ってきた

「あの方は…！」

「テレステイナーさん…」

眩きは黒子と神那賀によるものだ

「春上、大丈夫か？春上」

ガタツクは春上を軽く揺する

初春も心配そうに眺めている

「う、うん…」

春上はゆっくりと起き上がる

「…どこ…？」

不意に呟いた

「え…？」

「どこに…いるの…？」

「春上…？」

ガタツクはその意味が分からずただ立ち尽くすだけだった

——歯車は廻る

確実に

今、疾り出している——

22 声 〱ゼロからのスタート〱（前書き）

今回はファントムさんの作品とプチコラボしています

キャラが生かせるかどうか不安です

22 声　くゼロからのスタートく

「ええ。幸い負傷者は。それより、パニックが広がらないように、表向きのアナウンスを。…ええ。実際にはこれは地震ではなく、タイガイスト乱ボル雑解放です。…では」

テレステイナーさんはそう言って無線を切った

そして神那賀たちに向き直る

「大事にならなくてなによりでした…」
そう言つて笑みを浮かべる

「ところであれば、この場におけるAIM拡散力場を計測している
つしゃいますの？」

黒子がテレステイナーに尋ねる

地震により割れた地面に目を向けながらMARのジャケットを着た
人が手に何らかの端末を持ち何かを計測していた

「MARでは、事前に力場の異常を探知出来るんですか？」

神那賀が尋ねると一瞬沈黙が流れる

「あ、その…。対応があまりにも早かったものですから…」
それに気まづくなつた神那賀が補足する

「あなた達、名前は？」

不意にテレステイナが聞いてきた

「ジャッジメント風紀委員第一七七支部の白井と申しますの。こちらは…」

「同じく一七七支部の神那賀です」

「なるほど。一七七支部には、優秀な人材が揃っているみたいね」

テレステイナは笑みを作り眼鏡を整える

「RSPKとAIM拡散力場の関係について、もう把握しているなんて」

「RSPKは、何者かによるAIM拡散力場への干渉が原因。その同時多発が、ボルターガイスト乱雑解放を引き起こしている…でしたっけ」

別の声がする

声の方を見るとガタックが翔太郎と共に歩いてきていた

翔太郎はつい先ほど現場に到着しガタック「アラタと合流したのだ

「…貴方達は？」

テレステイナはガタックたちに問いかける

ガタックは変身を解き普段の姿に戻る

「初めまして、黒子と神那賀と同じく、一七七支部に属している、鏡祢アラタと申します」

「ああ、貴方が…。そちらの帽子の方は…」

顔を向かれ翔太郎は軽く帽子を整えて簡潔に名乗る

「俺は左翔太郎。探偵だ」

「貴方があの探偵…そして戦いの神、私はテレスティーナです、以後、お見知り置きを…」

テレスティーナは礼儀正しく自分を紹介する

「よろしくお願いします。…話を戻しますけれど」

アラタはこほん、と息を整え

「何故合同会議の時に、黒子達に教えてくれなかったんですか？教えて頂ければ、風紀委員としても、不審者の割り出しなど、手伝えることがあつたかもしれないのに」

「そちらは警備員アンチスキルの管轄…。風紀委員には、風貌被害対策や、日頃の安全活動に専念して欲しかったのよ」

アラタの言葉にテレスティーナはやりわりと返す

そう言われてしまうと何も言えない

「AIM拡散力場への干渉…。そんなこと出来る人が他にもいるんでしょうか…？」

今まで黙っていた美琴がふと呟く

「…他にも？」

テレスティーナが何かに疑問を抱いた時

「御坂さーん！アラタさーん！」

階段上の救急車両で春上を看病していた佐天と初春が手を振っていた

「ちょっと病院まで付き添ってきますねー！」

「あ、じゃあ私たちも——」

「いけませんわお姉様。そろそろ寮監の巡回が…」

「ああ…そっか」

がつくりと肩を落とす美琴

思えば告白もたまたま来た地震により雲散霧消してしまった

（最悪な一日よ…）

「俺も行きたいけど、女の子だけの方がいいかな…」

俺も心配だが、女の子だけの方が春上も安心するだろう

そう思いアラタは帰路についた

.....

その夜

美琴から電話がかかってきた

「なんだ？」

> ちよつと気になった事があつて……。ほら、前の幻想御手事件と、
今回の乱雑解放事件ポルターガイストってなんか似てるでしょ？それに、木山だつて
気に食わない時は邪魔しに來いって言つてたし……

「つまり、この乱雑解放事件ポルターガイストにも、木山春生が関係してるんじゃないか、と。美琴はそう思つてる訳か……」

電話の向こうから>うん<と声がする

確かにその可能性も無くはない

「だが美琴。肝心なところを忘れてるぞ」

> え？<

「木山春生は現在一七学区の特別拘置所に拘留中だ。あれだけのこ
としてかして、易々と出てこれないさ」

> それもそつか……<

電話の向こうのトーンが下がる

「…そういや、あの時の春上の様子…少しおかしくなかったか？」

俺は気になる点を美琴にぶつけてみる

> そうですね…まるで…そこにいない誰かに、話しかけてるような…<

「おまけに今回ののは、AIM拡散力場への人為的干渉が原因らしいじゃんか…。つまりは、能力者が犯人だ」

電話の向こうの美琴の気配が少し変わる

> アラタ…。まさか春上さんを疑ってるんじゃないでしょうね？<

棘がある言い方だ

「…そこに原因があれば、な」

美琴が>な…！？<と驚いた

> そんな訳ないじゃない！！だいたい春上さんは転校してきたばかりだし…<

「彼女が住んでた一三学区には以前乱雑解放ポルターガイストが多発してたらしいじゃないか。そして彼女の転校を皮切りに、この第七学区で乱雑解放ポルターガイストが起こり始めた…」

…流石に考えすぎかと自分でも思う

>…ぐ、偶然よ、偶然…<

「…だよなあ…。どうも職業柄、疑り深くなっていけない…」

その言葉に美琴は少し安堵した様子で息を吐く

「あ、そう言えば話は変わるんだが」

ふと気になった事を思い出したのでそれを聞いてみる事にした

>ん？何、アラタ<

「俺の事が何だって？」

あえて場所とかを言わず美琴が言いかけた言葉をぶつける

途端に電話の向こうですっこけるような音が聞こえた

「…？」

ツー、ツー…

「あれ！？切れた！？」

まさかの切り返した

……………

翌日俺は一七七支部に顔を出さずそのまま第二左探偵事務所に出た

「…なるほど。その女性には少し興味が湧くね」

フィリップにこの事は話さない方が良かったかも、と反省した

「もちろん、彼女は君の友人だという事はわかってる。…だが」

「そこに可能性がある以上、追求する価値はあるぜ？アラタ」

左の旦那の言葉に頷く

「だけど、やっぱり気が引ける…」

「その女の子の疑念を払う為には必要な事だ。俺だって似たような事があつたからな…」

「じゃあ始めよう。キーワードは？」

と言つてもないので

「春上衿衣」
はるうえりい

俺は名前を言ってみた

目を閉じたフィリップが呟く

「…ビンゴだ。彼女の名前は春上衿衣、能力は精神感応^{テレパシー}。レベルは2だ」

「つまりは、今回の事件には関係ないのか…。良かった…」

俺が安堵しているとそこに追い討ちがくる

「だけど、特定の波長下においては、例外的にレベル以上の能力を発揮する場合もあるらしい」

一気に地面に叩きつけられたような感じだった

その時携帯にメールが入った

国法だ

軽くイライラしながら携帯を開きメールを確認する

内容は

「自然公園にて、大規模な乱雑解放が発生したわ！！アラタ、なるべく急いで——」

メールの内容は続いていたが全てを読む暇はなかった

「…マジかよ…！！」

俺は左の旦那と一緒に事務所を飛び出した

「翔太郎、今回は僕も行くぞ」

「わかった…、ボイルダーの後ろに乗ってくれ」

今回はフィリップも行くらしい

俺はとりあえず一刻も早く行きたいから旦那に目で合図すると旦那

はこく、と頷く

確認を取ると俺は事務所を飛び出しエクステンダーに乗って走り出した

.....

俺が自然公園に到着した時最初に目に入ったのは惨状だった

地面はひび割れ木は根っこが飛び出している

ここには湖がありその上をボートで渡る、なんて事もデートかなんかでやるらしい

しかしそのボートも破壊されていてとても動かす事は出来そうにない

「ひでえな...こりゃ」

遅れて到着した左の旦那が開口一番そんな声を漏らす

「...確かに、地震と区別はつかないね」

「ああ。...死者がいなくてもよし、とするか...」

三人で会話をしていると

「貴方達は...」

右側から声が聞こえる

そこに立っていたのはMARのジャケットを着たテレスタイーナさ

んだったからだ

「どうしてこんな所に。ここは危険よ、探偵の君や風紀委員の貴方ならまだしも、一般人は…」

どうやらフィリップを一般人と勘違いしているようだ

「あと、大丈夫だテレスティーナさん、こいつは俺の相棒のフィリップだ」

「始めまして。僕はフィリップ。翔太郎と同じ、探偵だ」

そう言われてテレスティーナさんは少し驚いた表情で

「まあ…。そうだったの？ごめんなさいね、勘違いして…」

「お気になさらず」

フィリップはやんわりと言葉を返す

すると別の方から声がした

「いいから君も来なさい！」

「大丈夫です！私、風紀委員ですから！まだ私にも出来ることがありますっ！」

視線を向けるとそこにはMAR局員を振り切って救助に回ろうとする初春の姿があったのだ

「貴女は…この間の」

テレスティーナさんも気づき初春に声をかける

「あ…。テレスティーナさん、アラタさんも…」

……………

MARの施設

そのソファに初春は座っていた

近くに翔太郎、フィリップ、アラタが立って待っている

「初春さん！」

入口の方から声がした

美琴と黒子、佐天、神那賀がやってきたのだ

「皆さん…」

初春が立ち上がり四人の元に歩み寄る

壁に寄りかかっていたアラタ達も合流する

「大丈夫？初春」

「怪我とかしてない？」

佐天と神那賀が声を漏らす

「すみませんわざわざ…。私はこの通り、ちょっと擦りむいただけです」

そう言つて右の膝を見せる

治療の後があつたがそれ以外には目立つた外傷はないようだ

「この位平気だつて、言つたんですけど…」

「良かったあ…」

「心配したんですよ？全く…」

「そうだよ、万が一初春さんに何かあつたらつて…」

佐天達が口々に呟く

不意に美琴がソファに座つてゐる人たちを見渡した

腕を折ってしまった人や点滴を受けている人

今回は被害が大きいようだ

「…あれ、ねえ。春上さんはどこにいるの？」

不意に神那賀が問いかける

それに美琴がハツとする

「彼女は先に搬送されたから、この施設のどこかにいる筈だが…」

アラタが神那賀たちに答える

「怪我はないようだが、気を失っているみたいだな」

「そつかあ…でも怪我がなくて良かったね、初——」

「初春」

佐天の言葉を黒子が遮る

「乱雑解放の直前。ボルト・ガイスト春上さんの様子に変わったところはありませんでした？」

「え？」

「ですから、この間の花火大会のような…」

初春は訳がわからないと言った様子で黒子に聞き返す

「あの、一体なんの——」

「僕たちが調べた情報だと、彼女はレベル2だけど、少し変わった特徴を持っているんだ」

黒子の代わりにフィリップが答える

初春が振り向く

「直線見てないからわからないが、もし彼女に、何らかの傾向が見られたら——」

「なんで」

初春がはつきりと呟く

「……ん？」

フィリップが喋りを止める

「なんでそんな事調べたんですか」

初春の声色が少し重いものになる

友達が疑われる事が許せなかったのだろう

だがフィリップはあくまで冷静に

「なんで、と言われても。僕には君の言っている事が理解できないな」

「春上さんは、転校してきたばかりで！不安で、私たちを頼りにして——」

「だから疑わない、と。そう言いたいのかい？君は。……もしそうなら、そんな甘い考えは捨てるんだ」

初春が目を見開く

「友達だから疑わない、なんて甘い考えじゃ事件なんて解決できない。僕はそう言ってるんだ」

フィリップが淡々と声を紡ぐ

「…貴方は、もし万が一事件現場にアラタさんや翔太郎さんがいたら、疑えるんですか!？」

「疑える。そして徹底的に調べるよ。それが探偵なんだから」

初春が俯く

「もちろん、良心が痛まない訳はないけどね」

最後にそんな言葉を残しフィリップは口を閉じる

すると背後から

「精神感応者がAIM拡散力場の干渉者になる可能性は、^{テレバス}なくはないわ」

「…テレステイナーさん」

俺は名前を呟く

「…ここはこれ以上収容できそうにないな。以降は十五学区の緊急病棟に搬送させる」

部下のような男性にそう言つと男性は「は」と答え歩き去つていった

「…あの！」

初春は何かを言おうとするがテレスティーナが先に口を開く

「ただし、それには少なくともレベル4以上の実力が必要だし、よほど希少な能力と言わざるを得ない。…レベル2にその可能性はほとんどないと思うけど、念のため、ちゃんと検査した方がいいかもしれないわね。お友達の名前は？」

その言葉に初春がハツとする

「春上衿衣さんですよ」

黒子が名前を言う

「白井さん!!」

初春が声を荒げる

やっぱり友達が疑われるのは許せないようだ

「潔白を証明する為と思え初春。…フィリップは、甘いつて言ってたけど、それがお前の良い所なんだからな」

初春の頭をポンと撫でる

初春はアラタを見てもう一度前を見る

皆テレスティーナさんの研究所に付き添って行くらしいが俺はそん

な気分ではなかった。左の旦那とフィリップと一緒に探偵事務所に戻ることにした

.....

ある程度時間を潰していると美琴から電話が入った

「お見舞い？」

>うん。テレステイナーさんの研究所に今入院しているの。あと、結果が出ただけで<

「...どうだった？」

>春上さんは干渉者じゃないって。データには特定の波長下だとレベル以上の力を発揮するってあったけど、テレステイナーさんの話に寄ると、それも特定の人物に対してだけだって<

「...そうか」

俺の心配は取り越し苦労だったようだ

フィリップと一緒に調べた情報によると彼女は受信専門らしいしな

「わかった。今行く」

>うん<

だけど、何だろうか

どうも不安が脳裏をよぎる...

.....

俺が着いた頃にはすっかり夕方になっていた

テレステイナーさんに軽く挨拶し皆と合流

春上の病室であつてゐのらうかに入る

「春上さん？」

ベッドに横たわっていた春上は初春の声を聞くと

「初春さん……？」

ゆっくりと体を起こし

「私、また……」

「大丈夫。大丈夫ですよ」

そんな微笑ましい光景をテレステイナーさんは壁に寄りかかりながら笑みを浮かべて見守っている

「何も心配しなくていいですから」

初春は春上を心配させまいとなだめる

春上は話を聞きながら首に手をやる

しかしそこに「あるもの」がない事に気づく

「あ、ペンダントな」

自然公園に行った時見た事あるようなペンダントを拾ったのだ

…美琴に誘われてなかったら彼女を泣かせる所だった…

俺はポケットからペンダントを取り出して春上に渡す

「大切なものなんだろう？」

春上はペンダントを受け取りながら言葉を返す

「うん。友達との思い出なの」

「友達って、探してるっていう…」

初春が言葉を紡ぐ

「うん。声がね、聞こえるの」

「…声が？」

美琴が聞き返す

春上はうん、と言った感じで頷く

「…そいつは、テレパス精神感应者の…」

「たまにだけど…でも、それを聞いてるとぼーとしちゃって…」

「じゃあ、あの時も…」

今まで黙っていた黒子が聞く

テレスティーナさんも顔つきが真剣になる

「中に何か入ってるの？」

神那賀がペンダントの中について尋ねた

「うん」

かちゃ、とロケットが開かれる

その中身を見て俺と美琴はたじろいだ

「（…美琴、これって…！？）」

俺は美琴と顔を見合わせる

「枝先^{えださき}絆理^{はんり}ちゃんっていうの」

ロケットの中身は

木山と戦った時に見た記憶の中の女の子だったから――

「…あのね、私も、置き去り（チャイルドエラー）なの」

その言葉に全員が息を呑んだ

.....

ここはとある別世界

名をミッドチルダという――

「…アニキー、なんか面白い事ないのかよー…」

起動六課と呼ばれる組織に身を置いている青年、野上幸太郎は呼んでいた雑誌から顔を上げて

「そうそうある訳ないだろ。暇なのは俺も一緒なんだからさ」

「けどさー…」

「アギト。わがままを言うてはいけない。今しばらくは、静かに待つんだ」

彼は幸太郎の契約イマジン、テディ

ちよつと出番に恵まれない(?) 幸太郎の相棒だ

ちなみにアギト、と呼ばれたのは小さな女の子

イメージするならティンカーベルを想像してくれるとわかりやすい

アギトは現在訳あって幸太郎と行動を共にしている

「…けど確かに、暇と言えば暇だな。イマジンも出てこないし」

「わからないぞ幸太郎。敵も準備をしている期間かもしれない。いつでも戦えるようにしていなくては…」

テディの言葉に幸太郎は頷いて雑誌を机に置くと立ち上がる

「よっし、少し体を動かすか」

「待ってたぜアニキっ！」

アギトは幸太郎の近くに背伸びする

「やっぱ気分転換にや運動だよなー！！！」

テディも幸太郎の近くに移動したその時だ

不意に目の前にオーロラが現れた

テディは幸太郎の前に立ち身構える

「幸太郎！」

幸太郎も同様に警戒は怠らない

「わかってる…！！！」

「なんだなんだ…！？」

アギトも眼光を鋭くしオーロラを睨む

オーロラから現れたのは

自分と同じような年齢の青年だった

「…誰だよ、あんた」

幸太郎は名を尋ねる

「僕の名前は皇カイト…貴方達にお願いがあって来たんです」

野上幸太郎

彼のもう一つの名は

仮面ライダーNEW電王

22 声 〱ゼロからのスタート〱（後書き）

幸太郎達はあと最終回付近にて再登場の予定です

23 超電磁砲 く たった一人の女の子 (前書き)

短いしやっぱり微妙です

23 超電磁砲 くたった一人の女の子

「絆理ちゃんと私は、同じ置き去り（チャイルドエラー）の施設にいたの。私、人見知りで友達も出来なくて…でも、絆理ちゃんとだけは仲良く出来たの。…いつもテレパシーで、お話してくれてたの…。けど…別の施設に移されて、それっきり。…なのに、この頃まで聞こえるの。絆理ちゃんの声が。助けてって。とっても苦しいって…でもどこにいるのか…どうしてそんなに苦しいのか…わからないの…」

春上はロケットの中にある写真を見ながら言葉を紡ぐ

「助けてあげたいのに、あたし…何も出来ないの…う、う…」

春上は無力な自分が悔しいのか瞳から涙が溢れてきていた

俺はただ静かに見守るだけで――

「大丈夫ですよ！」

その沈黙を破ったのは初春だった

「お友達はきつと見つかります、私が見つけて見せます！何てったって、風紀委員ジャッジメントなんですから！」

笑顔で春上に宣言する

「…初春さん…」

「そつだよ！こう見えても初春は、優秀な風紀委員なんだから！」

「佐天。こう見えても、は余計だぞ。初春は優秀なハッカーなんだから」

「アラタさん。フォローになつてません……」

佐天とアラタがそんな言葉を投げかける

初春はもう一度春上に顔を戻し

「だから、安心してください」

「……ありがとう、なの……」

美琴を春上のロケットの中にある写真を見て顔を曇らせる

その写真は枝先^{えださき}絆理^{はんり}

かつて木山が教えていた置き去り（チャイルドエラー）の女の子だ

俺はそのまま皆に別れを告げて研究所を後にした

美琴はその後黒子と共にテレスティーナに意見を聞くと说っていた

なら、俺は――

……

> 暴走能力の法則解析用誘爆実験……裏でそんなものが行われていた

とは…<

学生寮に帰ってくると携帯を開きフィリップと連絡を取っていた

「指揮を取ってた科学者は、木原っていうじいさんだったな…」

>木原…。もしかや木原幻生か<

「知ってるのか？」

流石は地球の本棚を持つ男

>ああ。一部では有名なマッドサイエンティストだ。その男なら、人体実験もやりかねないな…。今は消息不明らしいが…<

フィリップは一度言葉を切り考えをまとめる

>もし実験が事実なら、被験者の子らが、ボルト・ガイスト乱雑解放の原因かもしれないな…<

「…どういう意味だ？」

俺は言っている言葉が理解できずフィリップに聞き返した

>その子達が、暴走能力者になっているかもしれない、ということさ<

「な…！？」

俺は驚愕を隠せなかった

「だけど、あの子達は今も眠り続けてるって…！」

>意識不明のまま、能力が暴走しているとしたら？<

「…無意識の内に乱雑解放を起こしてるってのか…！？」

電話の向こうでもフィリップが頷くのはわかった

>可能性は捨て切れない。…その子達は？<

「…まだ見つかってはいないんだ」

>そうか…。なら、搜索はテレステイナーならに任せよう。…あとアラタ<

とても真面目なトーン

「…なんだ？」

>テレステイナーには気をつける。あの女性、僕は信用出来ない<

その意見には同意だ

あの女は正直信用ならない

「わかってる。…あの女…。絶対何か企んでる」

>それなら問題ないな…任せたよ、アラタ<

俺は頷く

「ああ。俺の「大切なモノ（テリトリー）」は、俺が守り抜く……!!」

………

翌日

俺は一七七支部に顔を出さずただ外を歩いていた

独自に調べた情報によると木山が教えていた被験者は十人

それぞれ特別病棟に送られた筈らしいんだが詳細が掴めない
転院を繰り返しているらしく足取りが途絶えてるらしいのだ

「……はあ……」

「こんな良い天気なのに、溜め息なんて。貴様らしくないわね？」

聞き慣れた声に顔を向ける

「……吹寄……」

「……本当に元気ないわね……。疲れた時には糖分よ、鏡祢」

いそいそとポケットに手を入れブドウ糖を取り出して俺に渡してくる

「……サンキュ、吹寄」

元気がないアラタを見て吹寄が珍しく気遣って隣に座る

「…何があつたの？」

「…そうだな。なんてんだかなー…」

俺は流石に風紀委員ではない吹寄に事情を話す訳にはいかないと考え、かと言ってはぐらかす訳にもいかない為どうしようか、と悩んでると

「何があつたか知らないけど、小さいことでクヨクヨしてるなら、貴様らしくないわよ」

先に吹寄が言葉を紡いだので俺は黙ってそれを聞く

「貴様はもつと堂々として、上条たちと馬鹿やって…誰かの為にとつても一生懸命じゃない。貴様は一度本気になると、必ずやり通す事も、私は知ってる」

「…、」

俺は正直驚いていた

意識したつもりはないんだが…

吹寄は、よく俺を見ていたなんて気にもならなかった

「だから元気だしなさい。貴様がそんなだと、私が調子狂うのよ」

それでようやく本調子を取り戻した俺は

「…吹寄」

「…な、何よ」

「…ありがとう」

真剣に、それでいてどこか清々しい表情で俺は吹寄にいった

「…そ。ならいいわ。貴方の調子が戻ったなら」

吹寄は珍しく俺に微笑んだ

……………

「木山が保釈？」

>ああ。俺が軽く話をしようと拘置所に赴いたら、木山は既に保釈されていてなく

木山と話をしようとし照井さんにその約束を取り付けてもらおうと思ひ照井さんに電話したらそんな言葉が帰ってきた

>詳しい事情はまだわかってないんだが…<

「…そうですか…」

俺は一言二言会話を交わすと電話を切った

「…糸口が消えてしまったな…。いや、まだ諦める訳にはいかない」

俺は再び歩きだす

また辿れる糸は残ってる筈だ、と

そう信じて

.....

「共鳴？」

左探偵事務所に赴くと旦那から開口一番そんな言葉を聞いた

地球の本棚で調べているフィリップに対し左の旦那もインターネット
トで調べていたらしいのだ

「ああ、同系統の能力者のAIM拡散力場同士が、共鳴するらしいんだ」

そのまま左の旦那は説明する

「まず一人の能力者が暴走能力者に干渉されて、その後同系統の能力者に次々と共鳴していく。おまけにその同系統つてのが厄介でな」

「…つまり、もし被験者の子供達が、全員暴走能力を発動させたら……」

「影響範囲は全ての学生の、78%、だ」

「78%！？」

「学園都市が壊滅しかねない乱雑解放ポルターガイストが起きちまう……」

「だ、だけど、この論文が正しいとは…」

「執筆者をよく見てみる」

左の旦那に言われ執筆者を覧をよく見る

「なっ… 木原幻生!？」

「この男についてもフィリップが調べたんだが、やっぱり消息不明らしい。地球の本棚にも載ってないんだ…。関連する研究施設も全て封鎖済み… 完璧に手詰まりだ…」

左の旦那が関連する施設の写真を見ていた時一つ見覚えがある施設があった

木山の過去で見たあの施設

俺は左の旦那にお礼を言うと探偵事務所を後にした

……………

冥土帰し（ヘブンキャンセラー）

俺が知ってる限りこの学園都市に彼以上の医者はいない

どんな怪我であろうと必ず治し患者の心のケアも忘れず確実か健康体で送り出す学園都市最高のドクター

彼が木山のやりたかったことに気づいたなら…

……

その夜

いや、正確には深夜か

俺は第三新病棟に来ていた

「…ん？」

先客が来ている事に気づく

「これは、木山の…？」

そこには木山の車があったからだ

俺は意を決して病棟に入った

……

話し声が聞こえる

盗み聞きは趣味ではないので遠くから気配を見る

その中に見覚えがある顔があったのだ

（美琴…？）

話し声は聞こえないが重い内容という事はわかる

ふと気配がする

顔を見るとそれはテレステイナーだった

「何…？」

俺は息を潜めて身を隠す

暗い中俺の息を吐く音が聞こえてくる

やはり会話は聞こえない

次第に駆動鎧パワードスーツの足音がする

運んでいるのは子供達だ…

「…そう言う事に、なったのか…」

どうやらテレステイナー達に保護されたようだな

だけど、俺には何も出来なかった…

ただ俺は静かにその場を後にする事しかできる事はなかった…

………

病棟を出ると

「アラタ…？」

美琴と遭遇した

してしまった

「美琴……」

俺は振り向いて名前を呼ぶ

「……アラタあ……」

唐突に抱きついてきた

静かに聞こえる涙の音

「……泣いてるのか？」

「私、何も、出来なかった……！！木山の子供達が運び出されてく中……！！黙って眺める事しか出来なかった……！！」

俺を抱く力が強くなる

本気で後悔しているようだ

「アラタあ……私、私……！！」

こんなに泣きじゃくる美琴は始めてだ

「美琴……」

「私、正しいこと言ったつもりだった……！！だけど、心の中じゃど

こか、納得出来なくてえ…!!」

涙で美琴の顔はくしゃくしゃに汚れてて

そこに常盤台の超電磁砲レールガンはいなく

黒子にお姉様、と慕われている御坂美琴はいなく

たった一人の女の子が俺の胸で泣いていた

俺は彼女に何が出来たろう

「う、うう…うわぁ…!!」

俺は会話の内容を知らない

かといって彼女からそれを聞き出そうとも思わない

ただ、俺は彼女を

優しく抱き締める事しか出来なかった

ああ――

――俺は、なんて無力なんだ…

そう自分を責めずにはいらなかった

24 決戦前 〱集結する仮面ライダー〱（前書き）

再びファントムさんの幸太郎たちが出演していますっ

24 決戦前 〈集結する仮面ライダー〉

「春上さん」

病室で皆と一緒に撮ったプリクラの写真を見ていたらテレステーナが自分を読んでいた

「お友達よ」

友達？

だけど初春さんたちはいないし

誰なんだろう

そう考えながらテレステーナについていく

テレステーナに連れられて病室に入る

案内されたベッドを見て

「…え！？」

眠っていたのは他でもない

枝先絆理だったのだ

「嘘…！絆理ちゃん…！？本当に絆理ちゃんだ…！！！」

春上はベッドに駆け寄り絆理を見る

「そうだ、初春さんたちに連絡しないと……!!」

その光景を見ていたテレスティーナは

ゆっくりと

その口元に不気味な笑みを作った――

……

「行方不明のその子らは、テレスティーナらに保護されたのか……」

泣き止んだ美琴から事の顛末を聞く

聞くというかは美琴から話してくれたんだが……

「……だいたいわかった。とりあえず美琴は一七七支部に戻って国法や黒子に報告してくれ」

俺がそう言つと美琴はゆっくりと頷く

「ああ、待て待て」

歩き出した美琴を俺は制止する

「どうしたの？アラタ……」

俺はヘルメットを投げ渡す

「送ってやるよ。後ろに乗りな」

.....

ガタツクエクステンダーを走らせる

俺の後ろには美琴が背中に頭を預け振り払われないよう腰をしっか
りと掴んでいる

「…、」

特に会話はない

だけどその沈黙は決して気まずいものじゃあない

ほんのりと暖かい背を心地良く感じながら俺は思考を纏める

「…、」

今回も木山が関わっていたのは間違いない

あの子達を目覚めさす為なら、学園都市が壊滅しても構わない、か…

「おばあちゃんが言っていた。例えば世界を敵に回しても——」

「守りたいものがある、か…」

俺にとっての美琴や黒子、佐天や初春、神那賀たちみたいな感じだな

…俺は彼女を責める気なんてない

同じ状況なら、多分俺もそう行動していたはずだから…

………

美琴を一七七支部に送り届け去ろうとする

「待つてアラタ、…貴方、また顔を出さない気なの？」

美琴がそう聞いてくる

「…すまない、いずれ必ず帰るから」

俺は美琴の頭を撫でると再びエクステンダーに乗り走らせた

………

「アラタ…」

去っていった方を見ながら私は名前を呟いた

「…、」

私は齒がゆい気持ちになる

「馬鹿だな…私」

結局告白もつやむやになってしまったし

次はどんなタイミングで言い出せばいいかわからない

「はぁ……」

私は溜め息を吐きながら一七七支部に入っていった

……………

時刻は昼を回る頃

俺はバーバラ「KAZAMA」に足を運んでいた

「だいぶ疲れているようだな。アラタ」

大介がコーヒーを淹れたカップを差し出してくる

「サンキュ、大介」

俺はカップを受け取り口に運ぶ

「お菓子持ってきたよー」

奥からヒロがクッキーを入れた皿を持ってくる

「ありがとう。テーブルに置いておいてくれ」

「はい」

ヒロは返事をすると言のテーブルの中央に皿を置く

「いただきます」

俺はそう言って皿に置かれたクッキーに手を伸ばす

その時携帯がぴりり、となる

「…なんだ？」

俺は携帯を取り液晶を見る

初春からだ

「もしもし？」

>うつ…、うつ！ひつく…<

聞こえてくるのは泣き声

「…初春？おい、どうした、初春！！」

だがそれでも聞こえるのは初春の泣き声ばかりだった

………

がちゃん！！と矢車ソウは電話を苛立たしながら切る

「よいしょっ…と」

矢車の隣に鉄装がダンボールに入った書類をドサッと机に置く

「ボルト・ガイスト乱雑解放関連の資料、集め終わりましたー」

「…ありがとう」

矢車はそれに笑みで返す

「…矢車さん？」

矢車の態度の変化に気づいた影山が鉄装の隣に立ち声をかける

「たった今MARRから連絡があつて、ボルト・ガイスト乱雑解放の件はもういいって
言つてきやつた」

「ええ！？こんな中途半端な状態で！？なんでですか！！」

影山に怒りも最もだ

「当然だ。MARRがなんと言おうが、我々是我々で調査する…。久
パーフェクトハーモニーしぶりに奏でてやる、完全調和をな…！！」

……………

「テレステイナ・木原…本当にそう言つたんですの…！！」

一七七支部に初春を送り話を聞く

「木山はどうなった？」

俺が聞くと初春は泣いたまま

「わが、りま、せん…！！」

「落ち着いて初春…。大丈夫だから…」

ぴりり、と電話に連絡が入る

一七七支部に来る前にフィリップに連絡を入れておいたのだ

俺は急いで携帯を取り電話に出る

「どうだ、フィリップ」

>問題なく検索は終了した。彼女のフルネームはテレスティーナ・木原・ライフライン。木原幻生の血縁で、孫だ<

「孫!？」

「なんですって…!？」

俺の言葉に黒子が驚きの声をあげる

>以前翔太郎が見せた木原幻生の論文から、当時の職員データにあ
たってみた。そこに彼女の名前はあつた<

「つまり、テレスティーナは木原幻生の研究助手もしてたってか…
!!!」

>それだけじゃない。彼の実験の第一被験者は彼女なんだ<

その言葉に度肝を抜かれる

「つまり木原幻生は、自分の孫を実験対象にしたってのか!？」

>そういう事だ…<

「私、私…!!どうしたら…!!」

泣き止まない初春に俺はとうとうキレる

ゆっくりと初春に歩み寄ると

パン、と躊躇なく初春の頬にビンタを叩き込む

「…いつまで泣いてんだ」

「あらだ、ざん…!!」

がし、と胸ぐらを掴み一気に引き寄せる

顔が近いが気にしない

「他にもてめえがやるべき事はあんだろがぁ!!あぁ!？」

怒号が一七七支部に響き渡った

国法が驚いて目を丸くする

佐天が驚愕の表情を浮かべる

黒子が苦しい表情をする

神那賀が俺を止めようと腕をつかむ

「だってのにいつまでウジウジしてんだよ!!前を見る!!てめえはいつになったら風紀委員^{ジャッジメント}の初春飾利に戻んだよお!!」

俺は胸ぐらを離し初春を座らせる

初春は意を決したように国法が調べているパソコンの方に歩いていった

「…あれ？」

神那賀がキョロキョロとする

「御坂さんは…？」

「…え？」

神那賀に言われ辺りを見回す

先ほどまでいた美琴の姿がどこにもいない…!?

「もしかして…!?!」

——あの

馬鹿…!!

………

「おい。面白エモルモットが手に入ったぞ、誰か運んどけ」

紫色の駆動鎧バワードスーツに身を包んだテレスティーナはそう命じる

この研究所に踏み込んで来た御坂美琴を返り討ちにし彼女を気絶させ実験のサンプルにしようと画策する

テレスティーナが美琴に勝てたのは「キャパシティダウン」を使用したからだ

「誰にも邪魔はさせねえ……」

テレスティーナの笑みは悪魔そのものだった

……

テレスティーナが去った後白い白衣を着た研究員と駆動鎧バワードスーツを着た一人の研究員が御坂を担ぐ

「待ちな」

研究員と駆動鎧が振り向く

そこには黒いジャンパーを着た一人の青年

肩には小さい女の子が乗っている

その隣には人間とは言い難い鬼のような人物

「幸太郎。先ほどの紫色の駆動鎧バワードスーツを着た女性と、短髪の女の子との

会話だが。どちらが悪いかは明白だな」

三人は先ほど戦っていた会話を聞いていたのだ

皇カイトに会話を聞いてればわかる、と言われ半ば無理やりにこの世界に来たのだ

「アニキ、あたしゃあのババアが一番の悪者に見えんだけどな」

「その意見には同意見だぜ…。けど今は」

幸太郎、と呼ばれた青年は腰にベルトを巻く

「変身」

パスをベルトにセタッチする

> STRIKE FORM <

体が青色のプラットフォームに変わりオーラアーマーが装着される

「デディ」

「うむ」

幸太郎に応えデディがマチェーデディに姿を変えその手に収まる

野上幸太郎は仮面ライダーNEW電王にその姿を変える

「アギト、あの女の子を引っ剥がすから。引っ剥がしたら彼女を連

れてってくれ」

小さい女の子は元気よく頷く

「任せとけ！！」

「…ち、邪魔なやつが入ったな」

>MAGMA<

白い白衣の研究員はマグマドールパントに姿を変えた

「テディ、あれもイマジンの類か？」

「わからないな。だが用心するに越した事はない」

NEW電王はマチエーテディに聞く

テディはその状態で話せるのだ

「テディ、カウントだ」

「油断はするな幸太郎。いくつだ」

マチエーテディは聞き返す

「15…いや、10でいい。あの赤いやつは」

「了解だ。…10」

カウントが始まると同時にNEW電王は走りだす

「9」

一気にマグマドーパントに接近しマチエーテディで何度も切り裂く

「ぐあ!？」

「8」

妨害をしようと駆動鎧が拳を作り殴ってくる

NEW電王はそのパンチを流れるような動きで回避し腕を切り落とし

「7」

御坂を捕まえてアギトの方に投げる

「アギトお!!」

「6」

「待つてましたあつと!!、とつと」

なんとか御坂をキャッチする

「このやろっ!!」

マグマドーパントが炎を纏い殴りかかる

NEW電王はその拳をマチエーテディで受け流し地面に激突させる

「5」

そのままマチエーディで何度か切りつけてマグマドーパントの頭を踏み台に天高く飛ぶ

「4」

マチエーディにエネルギーを貯める

「3」

空中で体制を立て直し

「2」

落下する速度を利用し一気にブツたぎる!!

「1」

「はああああ!!」

ズバン、とマグマドーパントは真っ二つに切られる

実際に真っ二つにはなっていないが

そして切ったと同時に駆動鎧にも一撃をお見舞いする

「0」

マグマドーパントは爆発し

駆動鎧はガタンと倒れる

「よし、アギト。女の子は？」

「無事だぜ、アニキ…。ちょっと、辛いけど」

なんとか服を持っている

結構辛そうだ

幸太郎は変身を解除し御坂を担いでその場を後にした

……………

御坂美琴が目を覚めたのはベッドの上だった

「お姉様!!」

「大丈夫ですか!?!御坂さん!!」

「どこか痛い所はありますか…!?!」

「見た感じ大丈夫っぽいけど…」

それぞれ心配の言葉を漏らす

「ここは…?私、一体…」

「起きたみたいだな」

聞き慣れない声とする

「…貴方、は…」

「野上幸太郎。通りすがりの暇人さ」

ちなみに流石に刺激が強い為ティとアギトにはどこか隠れてもら
つてゐる

御坂は額に手をやる

途端にテレスティーナに敗走した時の記憶が蘇ってくる

「っ…!!あの女…!!」

怒りが徐々に蘇り御坂はベッドから降りよつとする

「御坂さん!、急に動いちゃ…!!」

神那賀がそれを静止するが

「どいて、神那賀さん…!!こんな所で、呑気に寝てる場合じゃない…!!早く、春上さんたちを助けないと…!!」

「だから、それは…」

神那賀の言葉を遮って御坂が言葉を続ける

「私が勝手に研究所に忍び込んで、頭にキて…せっかく見つけた子供達をテレスティーナに…！！それで、皆を…！！全ての責任は私にあるの…！！だから、私があの女を止める…！！どいて、神那賀さん…！！」

「あ…」

神那賀を押しつけて出口に歩き出す御坂に

鏡祢アラタが立ちふさがった

「アラタ…、どいて」

「どかない。…今、お前の目には何が見えている？」

不意にアラタはそんな問を投げかける

「何って…アラタ、だけど…」

言って美琴は気づく

そして後ろを向き皆を見る

そこには美琴を心配そうに見つめている佐天や黒子、神那賀に初春

「なんで頼ってくれない」

アラタの言葉に美琴が振り向く

「なんで…頼ってくれないんだよ。どうして全部一人で抱えようとすんだよ…！！」

アラタの言葉に美琴は手を目にやり

「ごめん…私…、見えなくなってた、また、皆に迷惑かけて…」

「迷惑ではないさ」

「え…？」

予想外の言葉に美琴は戸惑いを覚えた

「だけど、離れて心配するくらいなら、一緒に苦労したいんだよ。俺たちは…それが「トモダチ」だろう？」

「そうだよ！！私たちだって居るんだから！！」

神那賀がアラタの言葉に同意する

その言葉に初春と黒子、佐天が頷く

「…うん。ありがとう、皆…」

「皆、結託したな」

幸太郎が声をあげる

「…美琴を助けてくれて、ありがとうな」

アラタが幸太郎の近くに行き感謝の言葉を述べる

「気にすんな。俺は野上幸太郎、あんたは？」

「アラタ、鏡祢アラタだ」

そう言つてアラタを手を差し出す

「ああ。よろしくな、アラタ」

「こつちこそ。よろしく頼むぜ？幸太郎」
しっかりと互いの手を握る

仮面ライダーNEW電王と仮面ライダーガタック

二人の仮面ライダーが今、出会つた

.....

風紀委員第一七七支部

> やっぱりな！！あの女、どうもきな臭いと思つていたんだ！！！！<
「悠長に構えてる時間はないんですの！！なんとかありませんの！？」

黒子が必死に矢車と交渉する

> わかつている……！！待っている、少し時間をくれ！だが、必ず行動する！それだけは信じていてくれ！！<

.....

矢車はそう言つて通信を切る

「聞いての通りだ！テレスティーナが遂に本性をさらけ出した！影山、黄泉川、鉄装！！」

「はい！」

「了解じゃんよ…！」

「はいっ…！」

矢車の号令にそれぞれ返事を返す

「必ずテレスティーナを止めるぞ…！！」

『はいっ！』

………

「アンチスキル警備員から監視衛星のデータが来ました」

初春が監視衛星のデータを見ながら簡潔に状況を説明する

「MARのトレーラーは、都市高速五号線、十八学区の第三インターチェンジを通過した所です…！」

「五号線って事は、十七学区に繋がってる道路だな…。そしてそこにはかつて木原幻生が所有していた研究所がある…！！」

俺はおにぎりを食べながら予想推測をする

「ねえ、このトレーラー追ってる車って、寄れる？」

不意に美琴がそんなことを言ってきた

「はい」

初春がカチャカチャとパソコンを操作しトレーラーを追う車に映像を寄せる

「て、木山先生！？」

その車は木山が運転する車だったのだ

「まったく、一人で行っちゃうなんて、背負いこんでじゃないわよ……！！」

「美琴。それはツツコミ待ちか」

「え？」

理解できてないならいいや……。意外に似た者同士だな、美琴と木山は

「腹が減っては！」

「戦は出来ぬ！！」

不意に国法と神那賀が喋る

『しっかり食べなさいっ！』

指差したテーブルにはいくつものおにぎり味噌汁がたくさん入った鍋があった

『はい!!』

その時ドアががちゃり、と開いてぞろぞろと団体さんが入ってくる

「カ・ガ・ミン。いつ出発するんだ？俺はいつでも、準備万端だ！
！」

この場に神代ツルギが来た事に驚く国法他だったがそれだけじゃない

「アラタ。場所はここで合ってるのか？」

風間大介

「ようやくあの女が尻尾出しやがったんだな。…協力するぜ」

左翔太郎

「急に呼ばれたから、びっくりしたよ…アラタ…」

紅刃ワタル

皆、俺の知り合いで仮面ライダーだ

「…アラタ、この人たちは？」

国法が聞いてくる

「ああ。俺が頼んだ。仲間が多い方がいいだろうしな」

俺はそう国法に返す

「全く…貴方は…」

やれやれ、といった感じで国法が溜め息を吐く

そして俺は一人の男の所に歩いていく

「幸太郎。準備はいいか？」

幸太郎はおにぎりを食べ切り

「いつでもいいぜ。なあ、テディ、アギト」

「うむ」

「おおよ!!!!」

そして俺は全員を見渡し出口の前に立つ

「よし…行くかあ!!!!」

今、子供達を助ける為の決戦が、始まる――

25 子供達を救う戦い（前書き）

…微妙な出来です…

25 子供達を救う戦い

「いくぜ、皆」

出発する直前俺はライダーたちに言う

「いつでもいいぜ。まずは俺からだ」

翔太郎はジャケットの内側から一本のメモリを取りスイッチを押す

> JOKER! <

> ああ。僕たちは、二人で一人の探偵さ<

> CYCLONE <

『変身!』

ダブルドライバーにセットしドライバーを開く

> CYCLONE JOKER! <

軽快な音楽と共に翔太郎は姿を変える

「…仮面ライダー、ダブル」

ダブルは軽くポーズを取り名を言う

「この流れだと、俺もやった方がいいな…」

大介はドレイクグリップを突き出す

するとグリップにトンボのような機械が飛んでいきセットされる

「変身」

> H E N S H I N <

> C h a n g e D r a g o n f l y <

風間大介は仮面ライダードレイクへとその姿を変える

「仮面ライダー、ドレイク」

ダブルと同じように少しポーズを取る

「ならば、俺も便乗しなければいけないな」

地上から現れるサソードゼクターをツルギはキャッチし

「変身！」

サソードヤイバーにセット

> H E N S H I N <

> C h a n g e S c o r p i o n <

「仮面ライダーサソード!!」

ノリノリなツルギはカッコよくポーズを取る

…あんなノリが続くのか

「僕も、乗っておかないとね…。キバット!!」

すると空中からバサバサとコウモリが飛来する

ワタルはキバットをキャッチし左手をキバットに噛ませる

「ガブッ!!」

ワタルの顔に痣が浮き出て腰に赤い止まり木が現れる

「変身…!!」

キバットを止まり木にセット

するとワタルの体が透明となり弾け飛ぶ

そこにはファンガイアの王、仮面ライダーキバに姿を変えたワタルがいた

「仮面ライダー、キバ」

一通りのライダーが変身を終え準備が整う

「しっ、行くか!!」

『応!!』

アラタの言葉に皆が応える

.....

木山の車がMARのトレーラーに狙われる

トレーラーが開き駆動鎧が姿を現す

「な...!？」

木山は驚きハンドルを切る

瞬間トレーラーが真つ二つに碎かれる

衝撃に木山は車を止める

「一体、何が...!？」

木山が正面に目をやる

「あつ...!？」

目の前に見知った顔がいたから

「...たく...!何が楽しいのか知らないけど」

「手の込んだ悪戯だな...おい」

「全くよ。ねえ？」

御坂美琴と鏡祢アラタ、そして神那賀零はそう愚痴る

「一体なんの真似だ！！なぜ君たちがここにいる！！」

木山が車から降り彼らに声を張り上げる

すると後ろからバイクの音が聞こえる

バイクは木山の車付近で止まる

そこには幸太郎と後ろに初春と佐天が乗っていた

「木山先生、この車は囿です！！」

「子供達は乗ってません！！」

初春と佐天の言葉に木山は驚愕し

「な…、で、」

「佐天さん早く乗って下さい！！」

「わかってるって！！」

佐天が木山の車に乗り込みその上に初春が乗る

「ちょ、君たち何を！！」

強引に乗り込んだ初春たちに木山が問う

「乗って下さい！！私がナビします！！」

「急いで！！子供達を助けるんでしよう！！」

木山はたじろぎながら二人を見る

木山はまた別の視線に気づきそこに目を向ける

「…、」

こく、と美琴は頷く

それに倣いアラタと神那賀も頷いた

「…く…！！」

木山は憎々しげに舌を打つと車に乗り込み発進させる

「…行つたか」

「お姉様、お兄様！！」

先ほど美琴が叩ききつたトレーラーからパワードスーツ駆動鎧が現れる

「…さて、あんた達の相手は——」

言いかけてバラバラと聞こえた音に口を閉じる

横に見るとヘリコプターがいたのだ

がつつり武装したヘリコプターが

「ええー…」

流石にヘリコプターは、ちょっと…

俺がそんなことを考えていると

「ガルルセイバー!!」

「ライダースラッシュー!!」

青い人影が一機のヘリコプターを斬り

紫色の閃光がもう一機のヘリコプターを斬り落とす

「カ・ガーミン!!ここは俺たちに任せろ」

「アラタくん達は、行って。こいつらの相手は僕たちがする!!」

サソードとキバガルルが俺たちの前に立つ

二人だけじゃない

ドレイクとWサイクロンジョーカーもいるのだ

「アラタ、御坂さん行って」

「ええ。ここは、私たちにお任せを!!」

黒子はカバンから鉄槍がたくさんついた巻物のようなものを取り出す

「白井黒子、参りますわ!!」

神那賀雫は右手でいつものようにメダルを弾き左手でキャッチし左側のメダル挿入口に入れハンドルレバーを回す

「変身」

カポーン!!と小気味良い音が響き渡り神那賀はバースのスーツが神那賀を包み込む

「仮面ライダーバース…行くわよ!!」

>クレーンアーム<

>ドリルアーム<

二つの武装を装着しバースは黒子と共にかけていった

「…幸太郎、俺たちも行くぜ」

「わかってるさ」

アラタがゼクターを掴むと同時に幸太郎はベルトを巻く

『変身!!』

アラタと幸太郎は同時に叫ぶ

> STRIKE FORM <

> HENSHIN <

> Change Stag Beetle <

「時間の運行を守るライダー、仮面ライダーNEW電王！」

「戦いの神、仮面ライダーガタック…！」

俺はエクステンダーをキャストオフさせてクワガタタイプのサーフボードに変形させる

「美琴、乗れ…！」

走ってきた美琴の手を掴みしっかりと抱き寄せる

「黒子お…！皆も、ちゃんと追いついて来いよお…！」

そう皆に言っただ俺はテンダーを動かす

「行くぞ、幸太郎…！」

「わかってる…！アラタ…！」

「レッツゴーだアニキ…！」

何時の間にかNEW電王の肩に乗ってたアギトが叫ぶ

NEW電王はマチエーデイを肩に乘せデンバードを走らせた

.....

「ドッガハンマー!!」

キバットの声が響くと同時キバはキバドッガへ姿を変える

「はぁ!!」

ドッガハンマーを構え駆動鎧に一撃を叩き込み破壊していく

サソードに向かっていくつも放たれる弾丸

「クロックアップ」

>clock up<

弾丸をサムライのように切り刻み駆動鎧に一気に接近する

「せい!!」

斬、と一刀の元駆動鎧二機を斬り捨てる

「またつまらぬものを斬ったか、…一度言ってみたかったのだ」
ヒュン、とヤイバーを振るう

刹那サソードの背後で爆発が起きた

ドレイクは流れるような動きで駆動鎧の攻撃を回避していく

「今の私は……」

放たれる弾丸を撃ち落としながら接近し駆動鎧に銃撃を撃ち込む

「一陣の風だ……!!」

カウボーイのようにドレイクグリップの銃口をふ、と吹く

Wサイクロンジョーカーは空中を飛翔しメモリを変える

>TRIGGER!<

>CYCLONE TRIGGER!<

「たあ!!」

トリガーマグナムを乱射し駆動鎧の動きを足止めする

「>翔太郎、決め台詞は言わないのかい?<」

Wサイクロントリガーの右目が点滅しフィリップの声がする

「今回は別にいいだろう。俺たちは…脇役さ…」

「>やれやれ。まあ、彼らならやってくれるだろうね<」

「そう言っつこった、行くぜ、フィリップ!!」

再びWサイクロントリガーは駆動鎧の群れに突っ込んでいった

白井黒子とバースは息の合った連携プレイを見せつける

黒子が敵の銃器に針を空間移動させ攻撃機構を奪った後バースのク
レインドリルアームが貫く

お互いを背を任せバースは呟く

「白井さん、大丈夫？」

「そちらこそ、疲れてはおりませんか？」

「なんの……！！お互いまだ元気ね……！！」

「当然ですの……！！」

黒子とバースはまだまだ戦える

………

「あの部隊が出発した少し後、民間を装った輸送車が二台、MAR
の基地から出てくのを警備員アンチスキルの監視衛星が捉えた」

「つまり、そっちが本命か！？」

ガタツクの言葉にデンバードに乗ったNEW電王が答える

「木山はまんまとダミーを掴まされたみたいね……！！」

ガタツクに抱かれてる美琴が呟く

木山の車に追従し分岐を左に曲がる

……

「ほお……やるねえ……」

モニターを見ながらテレスティーナは呟く

「最も……そのくらいじゃないか……」

……

「……！！美琴、しっかり捕まってる……！！幸太郎……！速度上げろ！
！」

「え……！？」

「それって、どういう……！！」

>ぶっ殺し甲斐がねえもんなあああっ！！<

地面からロボットが突き出てくる

「あれは……！！」

「ロボットお！？」

美琴とアギトが驚愕する

>おらおらぁ！！命懸けで逃げねえと…！！<

ロボットの足に車輪のようなものが展開される

ガシン、と道路に着地し車輪を走らせる

>ぺしゃんこになっちまうぞぉ！？<

苛立つようなこの声

「この声…！！」

「あのババアだ！！」

アギトが叫ぶ

「ち…！！」

「アラタ、車に近づけて！！」

不意に美琴が言ってくる

「待て、その前に…幸太郎！！」

NEW電王はガタツクの声に顔を上げる

ガタツクは半ば無理やりNEW電王の肩を掴みキャストオフしたエクステンダーに乗せる

「ああ！！デンバード！！」

「悪い、幸太郎……！！後で修理すつから……！！」

謝罪しながら今度は美琴の要求を叶える為木山の車に近づける

同乗している初春と佐天がびっくりしているが次第に窓が開けられる

「……ごめん……」

美琴はそんなことを木山に言う

「……美琴……」

「私、間違つてた……」

「……立場が違えば、私も同じことをしていたさ」

木山のそんな言葉が美琴の心を軽くする

「大丈夫だぜ御坂さん。何やったか知らないけど
NEW電王の言葉にマチエーテデイが続く

「失敗の埋め合わせは、ここで取り返そう！」

「クヨクヨすんな、ねえちゃんっ！」

アギトが美琴を励ます

「……ありがとう。アギト」

美琴はアギトの頭を撫でる

「アギト、ちゃんと隠れてろ、もしくはしっかりと掴んでろ」

「わかったぜ、アニキ」

アギトはNEW電王の肩にしっかりと――

「悪いがアギトは車内だ」

ガタツクはアギトをヒョイと掴み車に投げ入れる

「わぁ！何しやがんだ！」

車内でアギトが叫んでいるが正直怪我させる危険が高いから一番安全な車内に退避させたのだ

「っし…美琴、幸太郎。暴れるぜ？」

「任せなさい…！！」

「ああ。カウントゼロからスタートだ…！！」

挿入歌

Double - Action
(Strike form)

《未来にいる 俺が見れば、今の自分は多分 考えなし ただ無邪気、愚かに見えるかも…》

「でやあ…！」

美琴は全力で電撃をテレスティーナのロボットに放つ

しかしロボットは手を盾のようにし電撃を弾いてきた

「電撃を弾いた…！？」

>ぎやははは…！そんなもん効くと思つてんのかあ…！<

ロボットが攻撃体制を取る

「なら、こいつなら…！！」

NEW電王はマチエーディを銃のように構えロボットを射抜く

だが弾丸は弾かれるばかりで効果はない

「くそ…！！そりゃダメだよな…！！」

《Right now 手にしてるもの。それはかけがえないもの。けど人はいつだって。振り返るまで気付かない》

「だったら…！！」

美琴はポケットに手をやりコインを取り出す

レールガン
超電磁砲だ

「これで!!」

しかし放たれた超電磁砲は当たる事はなくむしろテレスティナのロボットは減速し超電磁砲を避けたのだ

>わかってんだよお!! てめえの超電磁砲の射程が、50メートルしかねえってのも含めて、てめえの能力は、まるっとバンクに曝されてんだおらあ!!<

ロボットはロケットパンチの要領で拳を飛ばしてくる

ワイヤーがあるのでロケットパンチとは違うようだが

「らあ!!」

そのパンチをエクステンダーで弾き射線をずらす

「アラタ、ナイス!!」

美琴が俺を労うが耳には入ってこない

《それぞれに結ばれた 今 感じなきや絆 ここで出逢えた事さえ
奇跡かもしれない》

ん?

エクステンダーの通信機構に通信?

足で器用に操作する

「はい！？なんですか！？」

………

「アラタ！今、MARの奴らを足止めしている！23学区へ奴らは行かせない……！」

キックホッパーが駆動鎧を蹴飛ばしながら通信をする

「すまないが、今我々が出来る最大限の事だ……！」

>どうして、アンチスキル警備員が……<

木山の声が聞こえる

通信はどうやら木山の車にも作用していたようだ

「いいから……！とつと子供たちの所に行けえ……！」

《こぼれ落ちる砂のようにこの手から 消える前に動き出そうぜ
Double - Action 「俺が」「私が」「一緒に戦う時》

「矢車さん！」

パンチホッパーが走ってくる

「影山！黄泉川にも通達！全力でこの場を死守！パワードスーツ駆動鎧を一機たりとも通すな……！」

「はい!!」

.....

>ち!! 役立たずのゴミ共が!! だったら自分でやってやんよお
お!!<

ロボットが手をガチン、と鳴らし接近する

「く、また!!!!」

「幸太郎、美琴!! しっかり捕まってる!!」

「え!?!」

「ちょ、わあ!?!」

殴りかかる拳をすんでの所で回避し次に備える

《巻き戻しは出来ないこと、知ってるなら きっと 先送りも 出
来ないと、気付かなきゃいけない》

>ち!!!! チョロチョロとお!!!! いい加減諦めろ!!<

ガチャンとロボットは手を動かし攻撃体制を取る

>てめえらがどんなに足掻こうが、ガキ共を救おうなんざ出来っこ
ねえんだよお!!<

その言葉に齒痒い気持ちになる

「それでも…!!」

車を運転する木山の呟きが聞こえる

「足掻き続けると誓ったんだ…!! 私は…!!」

《Right now 想い伝えて、どこにある?」「いつか」なんて
けど人は疑いも、しないから後悔する》

「教師が生徒を諦めるなんて出来なあい!!」

木山が吠える

あの日犯してしまった罪に対する贖いのように

「…、」

その言葉に俺と美琴は顔を見合わせる

NEW電王は静かにそれを聞いて

「よくわかんないけど、やってやろうじゃん?」

「うむ。私たちはどこまでも手伝うぞ」

マチエーテディが答える

《運命が呼んでいる 離れないと信じる 未来 急ぐより先に「今」
を守り続け》

「美琴、連れてってやろうぜ……！！木山を絶対……！！」

俺は力強く宣言し操作する体に力を込める

「つたり前じゃない……！！何が何でも、あんたを送り届ける……！！」

『俺（私）たちは……！その為にここに……いるんだから……あ……！！』

《ふたつの声 重なるとき 最高に強くなれる。ずっとずっと Double - Action 「気持ち」 「2人」 誰にも止められない》

>今更てめえに何ができる……！！とつとと死ねえ……！！<

ロケットパンチが放たれる

「アラタ……！！」

「無茶すんなよ……！！」

エクステンダーを近づける

そのパンチに美琴が受け止める形で飛びつく

>な……？<

「御坂さん……？」

「幸太郎、タイミングを合わせてくれ……！！」

ガタツクゼクターの角を閉じる

> 1 2 3 <

「…ライダーキックは初めてなんだけどな…!!」

パスをベルトにセタッチする

> full charge <

そのまま美琴に随伴する形で隣に移動する

《いつでもマイナスからスタート それをプラスに変える そんな
出会いがきつと、誰の胸にもあるはず…さ》

「ぬ、う、ああああああ、だあああ!!」

全力の放電でそのパンチを完璧に破壊した

「よし…!!」

> は!!それがどおしたあ…!!てめえの攻撃は、全部見切ってん
だからよおお!!<

「敵は美琴だけじゃあねえだろうが」

> あ!?!<

破壊され爆発した煙の中からガタツクエクステンダーが突っ込んで

くる

《こぼれ落ちる砂のように、この手から 消える前に 動き出そう
ぜ Double - Action 「俺が」「私が」2人で》

> な…なにいいい! ? <

『はあああああ!!』

ガタツクとNEW電王の合わさった、ダブルライダーキックがロボットを撃ち貫く

《ふたつの声 重なるとき、最高に強くなれる。ずっとずっと Double - Action 「気持ち」「2人」誰にも止められない》

爆音と共にロボットは爆発しそのロボットがずうん、と倒れる

その煙の中から再びエクステンダーに乗ったガタツクとNEW電王が現れる

「…へ」

「やったな」

ガタツクとNEW電王はハイタッチを交わす

一度地上に降りて木山たちの車の近くに不時着しテンダーから降りる

美琴も木山の車付近に移動していた

「御坂さん！！アラタさん！！野上さん！！」

「怪我とかありませんか！？」

初春と佐天の心配した声が届く

「大丈夫、ね？」

美琴が俺を見る

それに俺は頷いて返す

「お姉様！お兄様！」

空中からカッターウィングを装着したバースとそれに抱えられてる
黒子が降りてくる

「他の皆は？」

「大丈夫、皆無事よ」

「…すまない」

不意に車から降りていた木山がそんな言葉を漏らす

「ありがとう——」

「待て」

木山が言葉を止める

「その言葉、子供たちを助けてからで聞くぜ？」

ガタツクの言葉に最初木山は面食らったような表情をしたが

「…ああ」

力強く頷いた

25 子供達を救う戦い（後書き）

次回

完結（予定ですけど）

FINAL サヨナラ（前書き）

相変わらず無理やりです…

FINAL サヨナラ

「アラタくん達は上手く行ったでしょうか…」

一通りバワードスーツ駆動鎧を殲滅したキバ達は変身を解いて疲れを癒やしていた

「わからねーな…。だが、あいつらなら上手くやってんだろっ」

翔太郎は帽子を被り直し呟く

「カ・ガ・ミン達を信じようではないか、我が親友を」

「…そうだな。あいつなら、やってくれるさ…」

ツルギも大介もそんな言葉を漏らす

今彼らに出来るのは

待つ事だけだった

………

学園都市第二十三学区

その研究所に待機していたバワードスーツ駆動鎧を蹴散らし現在その中央管制室にて初春がセキュリティを解除している

「ああー疲れた…」

鏡祢アラタは変身を解き壁に寄りかかって愚痴を漏らす

セキュリティを解除してるのはうっかり美琴が中央管制室に敵がい
ると思い込み電撃を放ってしまったのだ

その結果セキュリティ解除が面倒になってしまった

「アニキー…疲れたー…」

「へばるなアギト、テディは大丈夫か？」

「うむ。多少疲労が残ってるが、問題ない」

幸太郎たちも結構来てるようだ

「あった！今この施設内で一カ所だけ消費電力が桁違いな場所、最
下層ブロックの…」

………

初春が調べた情報によると最下層ブロックの研究室、そこに子供た
ちと春上はいるらしい

とりあえず階段を降りてその最下層ブロックを目指す

そこで目に入ったのは

「見つけた…」

木山の教え子だ

木山はやつと出会えた事に嬉しさからかそんな言葉を漏らす

「春上さん！春上さん！」

バンバンと春上が眠っているポッドを初春が叩く

春上は目を覚ます

その事に初春は安堵し初春はここのシステムを探そうとし

「あ、ちょっと待ってて、私、あっちの方見てくるから」

「あ、佐天さん。付き合っぜ」

「お願いしますー！！」

たたた、と走り出し向こうの方へ駆けていく佐天と幸太郎たち

木山はポッドで眠る子たちを見て

「待ってる……！今助けて——」

不意に

キーン、と頭を刺すような音が響く

「う、ああ……！」

初春が頭を抑え始めた

「お、おい。大丈夫か!？」

木山が初春に駆け寄る

「まさか、この音…!!」

俺はこの音に多少聞き覚えがあつた

「こんの…!!クソガキ共が…!!」

背後からあの声

「テレスティーナ…!!」

まだ動けたのか…!!

「さっきの礼だあ!!」

バシン、と左手の長い筒のようなもので美琴と黒子を殴り飛ばした

「美琴お!!黒子お!!」

吹き飛ばされた二人に俺は叫びをあげる

「貴様ああああ!!」

木山が走り出しテレスティーナに向かっていく

……

「ぐはあ!!」

別の場所を調べていた佐天と幸太郎たちはその呻きに顔を見合わせる

「今のつて…」

「…不味い!! 幸太郎!!」

テデイが焦った様子で幸太郎と佐天に言う

「ヤバいぜ!! アニキ!!」

「ああ!! …くっそ、なんで見落としてたんだ!!」

……

「ぎやははは!! あーひやははは!! ああ、スツとしたゼエ…」

木山は吹き飛ばされ動けない

初春はキャパシティダウンで動けない

美琴や黒子も同様だ

「ナメた真似してくれやがつて…!!」

「キャパシティダウンって奴だな」

動けるのは俺一人

「前に美琴らが世話になった、能力者を苦しめるって奴」

俺は平静を装い紫色のスマートな駆動鎧パワードスーツを着たテレステーナに言う

「んだデメエ？それがわかったからってどうするってんだ」

「改良型は、デカいから移動出来ない、らしいな」

俺はちらり、と右に目をやる

そこには佐天や幸太郎たちがいる

その存在を確認し再びテレステーナに視線を戻す

「ああ。だがこの施設中に設置してある、なんなら一個一個壊して回るかああ？」

「それだけデカいなら、制御出来る場所は限られる…それが出来るのは先程まで俺らがいた、中央管制室…！！」
佐天と幸太郎たちがハツとする

「だったら…、やってみるよ。やれるもんならなあ！！」

腹部に駆動鎧の拳が入る

「ぐは…！！」

胃液が逆流し吐きそうになる

「ったく…ごちゃごちゃうるせえやろおだ…！！せつかくイイもん

見せてやるうつてのに。能力体結晶の完成品つて奴をなあ……!!」

「なんでよ……。あんただって、犠牲者じゃない……!!」

音にクラクラする頭を堪え美琴が立ち上がる

「おじいさんの、実験体になって……!!能力を、暴走させられて……!!なのに……!!」

「犠牲なんかじゃねえよ。権利を得たのさ……私から生まれた、この種を花開かせて……」

言いながらテレスティーナは右手をあげる

持っているのは小さい円筒に入れられた一つの結晶

「そ、それは、まさか……ファーストサンプル……!!」

木山のそんな声が耳に入ってくる

「レベル6を生み出す権利をなああ……!!」

「レベル6、だと……!!?」

テレスティーナの背後でアラタが問う

「そおだ……春上^{はるのうへ}はこれから、学園都市初のレベル6になる……!!このガキ共の力を使ってなあ……!!」

その発言に息を呑む

「お前…春上を…!!」

「特定波長下におけるレベルを超えた受信能力…こいつの能力は、能力体結晶と共振するのに実に都合がイイ…高位の精神感応者^{テレパス}は希少だからなあ」

「…なんで、なんでまたこの子たちなんだよ…!!どれだけこの子らを苦しめりや気が済むんだよお!!」

アラタの叫びにテレスティーナは冷めた声色で

「なあに。ちよつとこいつらの、「頭の中の現実」つてのを拝借するだけさ。要は、その脳内活動を司る神経伝達物質…とりわけ、眠れる暴走能力者のそれを採用し、ファーストサンプルと融合させる…それによって能力体結晶は抑止力を獲得…完全なモノとなるのさあ…」

テレスティーナの表情は喜々としている

「さあて後はこいつを——」

「やめる…!」

アラタの声にテレスティーナは苛立ちを隠さず「あ？」と振り向く

「んな事して、この子らが暴走したまま目覚めたら…」

「学園都市は空前の乱雑解放^{ボルターガイスト}に見舞われ壊滅する…上等じゃねえか」

「な…!？」

「神ならぬ身にて天上の意志に立つ者…」

怒りが沸々と湧き上がる

「テメエ…！！、が、！？」

左手のランスのようなもので体をあげられる

「ぐ、ああ…！！」

「アラタ…！？」

美琴の声が聞こえる

「そのための学園都市だろおがア！！レベル6さえ誕生すれば、こんな都市用済みだろおがよお！！」

ギリギリ、と首が締め上げられる

「うぐ、ああ…！！」

朦朧とする中アラタは名を心の中で呟く

幸太郎…！！

佐天…！！

………

中央管制室

「くそ……!!どれだよ!!キャパシティダウンてのは!!」

「早くしないと、アラタさんや初春たちが!!」

不意にモニターが映る

>お前ら全員がモルモットだぁ!!学園都市は実験動物の飼育場、
テメエらガキは、一人残らず家畜なんだよぉ!!<

テレスティーナの声だ

適当に動かしているからたまたまモニターに繋がったのだろう

その言葉に

「…変身」

>STRIKE FORM<

怒りは佐天にも伝わっているようだ

そうだ

何を悩んでいたのだ

制御してる場所がわからないなら

パソコンごとぶっ壊せばいい……!!

……

「…ん、なんだあ？」

唐突にスピーカーが起動し声が響きわたる

>モルモットだろうがなんだろうが！！<

佐天の声だ

>そんなのは、知った事じゃない！！<

続いて幸太郎の声

「まに、あつたのか…！！」

《私（俺）の友達に！！手を出すなあああ！！》

佐天の鉄バットとマチェーテディの一撃が管制室のパソコンを破壊する

それにより音が消える

「音が…！！」

「しま——」

ブォン、と右手に鉄槍が突き刺さりファーストサンプルを地面に落とす

黒子だ…！！

その時アラタが地面に落ちる

それを見計らって美琴が雷でテレスティーナを持ち上げて思い切り後ろに投げ飛ばす

「木山！！」

俺はファーストサンプルを持ち木山に投げ渡す

「っ……」

木山はそれを受け取り一瞬眺める

「ひやはは…、あーははは…！！もおいしい、わかったよ…。んならこの施設ごと、纏めてぶっ飛ばしてやんよお！！」

ランスが傘のように開きその先にエネルギーのような塊が蓄積され俺たちの方に飛んでくる

「変身…！！」

傷ついた体を踏ん張らせガタツクゼクターをベルトにセットする

> C h a n g e S t a g B e e t l e <

ガタツクはカリバーを手にとりそのエネルギー光球を「犯（ころ）」す

「なに…！！」

「アラタ…その力…」

ガタツクは肩を上下させながら答える

「俺の、能力……！」イーヴルアイズ「直死魔眼」……今初めて、使ったけどな……！！」

カリバーを構える

「……は！！超電磁砲に戦いの神い……！！この都市まちじゃテメエらなんざただのデータ……！あひやはは……！減らず口を叩くデータだあ……！ひやはははは……！」

なんか言ってるが気にしない

「美琴、前に言ってたよな、黒妻さんが……。居場所ってのは、自分が自分でいられる所って」

隣の美琴が頷く

「学園都市は、どうだ？」

ガタツクは美琴に問いかける

「……学園都市は、私たちが私たちでいられる、最高の居場所……私一人じゃできない事も……皆と……アラタと一緒にならやり遂げられる……！！」

美琴の体に電気が疾る

「テメエらは人間じゃねえ……！ただのサンプル……！何が戦いの神だ……！！頭イテエ事ほざきやがって……！！」

> 1 2 3 <

「アラタ…」

美琴がガタツクに電気を流す

その雷がタキオン粒子と混ざり合い右足に力が溜まっていく

「俺は、守りたい者を…！！大切な人を…！！護る為に…！！」

美琴の雷を受けながら俺は、ガタツクは一気にテレスティーナに走り出す

「ガタツクに、なつたんだああ…！！」

> R i d e r k i c k <

放たれる光球を犯しながら

ガタツクは飛び上がり

その顔面に

ライダーキックを叩き込んだ

バガン、と激しい音がして

今度こそテレスティーナは戦う力を失った

……………

幸太郎たちと佐天が戻ってくると既に戦いは終わっていた

「アラタ…!!」

幸太郎は壁に寄りかかって座っていたアラタに駆け寄る

「幸太郎…ナイスだったぜ、佐天、もな…」

「…えへ」

佐天がはにかむ

「無茶するな、お前もさ…」

俺がそんなやり取りを幸太郎としているとポッドが開く

木山は枝先が眠っていたポッドに歩きだし枝先の顔を覗き込む

枝先は、目を開いた

「…せんせー？どうして、目の下に隈があるの…？」

懐かしい声が木山の耳に入ってくる

待ち続けた

長い、間…待ち続けた

とても懐かしくて

愛しい声色…

「色々、忙しくてね…!!」

木山は堪えきれず大粒の涙を流す

「ホントだ、髪も、伸びてる…」

「でも、せんせーだ…」

「木山せんせいだ…」

「…お前達…!!」

そんな光景を眺めていた幸太郎は軽く涙を流してた

「なんだよアニキ、貰い泣きか？」

「な、バカ！そんなんじゃないって!!」

皆が安堵している中

唐突に無機質なアラートが流れた

「む!？」

テディが驚きの声を漏らす

> 自爆スイッチ、起動シマス…、爆発マデ、残り、十五分を切りました…<

その声に全員が息を呑む

「ち…!!」

アラタは立ち上がり先ほど木山が座っていたパソコンをいじり始める

「アギト!! 転移魔法は使えるか!？」

「え!？な、慣れてないけど…一ヶ所に集まってくれば、外には…」

「それしかない! 皆、中央に集まれ! 子どもたちも!」

幸太郎の指示に従い皆中央に集まる

今まで寝たきりだった木山の教え子たちは歩けないのでデディが運んだ

ただ一人アラタは集まっていない

「アラタも早く!!」

美琴の声が聞こえる

「ダメだ! あの野郎ご丁寧にあちこちに爆弾設置してやがる! 全部爆発すりゃ二十三学区が消し飛ぶほどにな!!」

「そんな…!？」

「アギト!!」

「ダメだ、発動しちゃう――」

陣が上下から重なるように移動する

重なった先には何もない虚空があった

その光景を見てアラタは覚悟を決める

(…せめて、爆発の範囲を縮めてやる…!!)

そう考えながらアラタはパソコンを操作した

………

二十三学区、その研究所入口で待機していた神那賀雫は突如として現れた皆に驚いた

「うわぁ!!ど、どこから出てきたのよ!!」

そんな声に耳を貸さず御坂はまた入ろうと入口に走る

「ちょ、ちょっと待って御坂さん!!話が…」

「離して!!まだ、まだ中に…!!」

不意に御坂の携帯がなる

御坂は携帯を取り出して液晶を見る

「アラタ…？」

通話を押して御坂は携帯を耳に当てる

>…美琴…そっちはどうだ<

「全員、無事よ…アギトのおかげで…！そんな事より、早くアラタも…！」

>…悪いけど美琴お<

一旦沈黙が流れる

>——お別れだ<

美琴の時間が止まる

それ位信じられない言葉を聞いたから

………

「幸太郎…時間切れのようだ…！！」

「え…！！」

テディに言われ体を見ると足元から自分の体が消えていく

幸太郎だけではなく、テディも、アギトも

「の、野上、さん…!？」

消えていく幸太郎を見て黒子は驚愕の声を漏らす

「くそ…!!くつそお…!!なんで…なんでえ!!」

幸太郎の叫びも虚しく無情にも幸太郎たちの体は消えていった…

……

「お別れって、どう言う事よ…?」

>なんとかパソコン弄って爆発範囲を縮めたのはいいんだが、最下層ブロックのあの研究室の爆弾、あれだけの解除装置が無くてな…<

「じゃ、じゃあガタツクになって、クロックアップを——」

>無理なんだよ。…テレスティーナに結構ボコられたから、体が耐えられないんだ…<

「…そんな…!？」

美琴は膝を付く

今から行っても間に合わない

本当に、…お別れ?

「いやよ!!私、まだアラタに言ってない事や、やりたい事だって

あるのに!!」

それに一番大事な事を伝えていない

あの花火大会の時に伝えなかったあの言葉…!!

>…奇遇、だな…俺も、あんだよ。言っていない事が、一つ、だけ…<

え?、と美琴は耳を済まして続きを待つ

>…美、琴…俺、は…お前が——<

ブツツと音が消えて無機質な音が耳に入ってくる

同時に静かな爆発音が聞こえた

…アラタが…

「う、ううわああ…!!」

美琴は携帯を抱きしめながら膝をついた

そして涙を流しながらただ一人の愛しい男性の名を叫ぶ

「アラタあああああ!!」

FINAL サヨナラ（後書き）

次回、エピソードにて本当に完結ですッ

超電磁砲編エピソード、及び禁書目録編プロローグ

上条当麻は今朝小萌先生に呼び出された

おかしい、と最初は思った、補習…はまだいくつか残っていたけど今日ではなかったはず

じゃあ何だろう、と思いとりあえずインデックスを留守番させて自分が通う高校へ足を運んだ

……………

「あれ、皆いるのかよ…」

教室に入ると既に皆いたのだ

「おお。カーミンジョン、お前も呼ばれてたのか」

その声は神代ツルギのものだ

席は窓側、後ろから三番目

二番目の机をコンコンと叩いている

どうやらそこが自分の席なのだろう

そう

神代ツルギには何度が助けてもらった事がある

三沢塾の時には本当に世話になった

故にツルギは上条の事情を知っている唯一の友人なのだ

「にゃー。カミちゃんも呼ばれたのかー」

そう言っているのは隣の席にいる土御門元春、上条やツルギの友人

「にしてもおかしいなあ、今日はなんもない思たんやけど」

土御門の前の席に座っているのは青髪ピアス

本名不明

青い髪にピアスしてるからそんなあだ名が定着していたのだ

「にゃー、カミちゃん、わかるか？」

「わかる訳ねーだろ…、にしても、ホントなんなんだろうなあ…」

上条が椅子に寄りかかっているとガラリ、と教室のドアが開く

そこからぱつと見幼児体型の教師、月詠小萌が入ってきた

やけに暗い表情で

小萌先生が教卓の前に立つ

「全員、いますか…？」

「せんせー！まだカガミンが来てませーんっ！」

青髪が手を挙手し小萌に言う

そう、ツルギの前の席にいる鏡祢アラタがまだ来ていないのだ

「…今日は、鏡祢ちゃんの事で、お話があります…」

ゆつくりと小萌が重い口を開く

「…鏡祢ちゃんは…先日…ジャッジメント風紀委員の活動中に…殉職しました…」

教室の空気が凍りついた

………

嘘

最初に吹寄の中に出てきた感情は疑心だ

「う、嘘、ですよね小萌先生…。あのバカが、そんな簡単に亡くなる訳が…」

吹寄は小萌に問うが小萌は首を横に振って

「…アンチスキル警備員から聞いた、確かな情報、です…っ…間違い、ないです…」

言いながら小萌は涙を流している

小萌は冗談でそんな事を言う人間ではない

つまり、本当に

「なんで…!!」

吹寄は顔を下に向けて溢れる涙を机に落とした

………

重い話を聞いた後上条はツルギと会話をしていた

「…なぜ…!!なぜカ・ガーミンが…!!」

ツルギは地面を拳で殴りつける

「ツルギ…」

「俺も…俺も一緒に行つていれば…!!」
そう言つてツルギは瞳から涙を流す

そんなツルギにかける言葉がなく上条は空を見る

「…どこかで生きてるよな、アラタ…!!」

上条はそう呟いた

まだどこかで生きてる

そう信じて

.....

御坂美琴は常盤台女子寮の自室、その自分のベッドで眠っていた

枕を抱き締めながら

「…、」

結局言えなかった

ちゃんと言おうって決意した筈なのに

「アラタあ…」

名前を呟く

頭に彼と過ごした短いようで長い日々が蘇る

一緒にクレープを食べたり

佐天さんのお見舞いに行ったり

木山と戦ったり

どんどん思い出が蘇ってくる

「アラタあ…!!」

もう抑える事は出来ない

美琴はとうとう込み上げる感情を爆発させ声を殺して泣いた

.....

男が目覚めるとそこには見知らぬ天井があつた

隣で橙のコートを着ている女性と白いＴシャツに青いジーンズ、腰まで届く長く赤い髪をたなびかせながら会話をしていた

「やれやれ…ホントにヤバかったんだからね！？慣れない転移魔術使つてようやく助けられたんだから…」

「感謝はしていると言つてるだろう。私は調子に乗れとは言つてないが？」

「はあ…相変わらずねこの姉貴は…。まあいいわ、久々にこの子に会えたしね…。この子、何時学園都市に戻るの？」

そう言われ橙のコートを着た女性はタバコを吹かし煙を吐きながら答える

「大覇星祭が始まる辺り、と私は考えているが？」

そう言われると長く赤い髪の女性は「んー」と考えて

「まあいいんじゃない？後は流れがなんとかしてくれるでしょうし」

「そうだな…」

「ところでさ、結局この子ってレベルいくつなの？」

不意に聞かれた疑問に橙のコートを着た女性が答える

「そんなものないさ。あいつの能力、イーヴルアイズ「直死魔眼」にレベルなんてないのさ。強いてあげるなら、レベル「零」、かな」

その答えに赤い髪の女性は眉を潜め

「それって、直死の魔眼って事？」

「ああ…！全く学園都市め、やってくれるよ、偶然に偶然が重なり奇跡的にそんな能力を具現化させた…脱帽ものだよ」

橙のコートの女性は心底愉快そうに笑う

「やれやれ…、と、いけない。これ以上は飛行機に遅れちゃうわ」

赤い髪の女性は時計を見てそんな事を呟く

「…世話になった。青子」

「…別に、今更礼なんかいらないわよ、燈子の姉貴」

軽く頬を赤らませて蒼崎青子はドアを開けて外に出た

………

「…さて、こいつが起きるまで後約数分、起きたらモノにしてもら
イーヴルアイズうぞ？「直死魔眼」を」

蒼崎燈子はベッドで寝ている「鏡祢アラタ」を見て呟く

不意に燈子はデスクに置いてあるアタッシューケースに目をやり近くに歩み寄る

燈子はタバコを口にくわえながらアタッシューケースを開く

「ゼクターが警備員に回収されてしまうのは迂闊だったが、まあしばらくはこれで問題はないだろう」

アタッシューケースの中には一つのロストドライバーとSの文字が刻まれた一本のメモリ

「…鳴海荘吉が使用していたと言われるロストドライバー…きっとアラタが使いこなしてくれるさ」

燈子は窓の外に目を向ける

雲がまばらな青空

「まだ眠るには早いぞ？ 鏡祢アラタ」

彼の物語は終わっていない

今、始まるから――

魔術と科学が交わる時

物語は動き出す――

超電磁砲編エピソード、及び禁書目録編プロローグ（後書き）

とある科学の超電磁砲　く今を戦うガタツクく

ここに完結です

…こんな終わり方で申し訳ありません…

しかしまだ鏡祢アラタの物語は終わってないのです

たった今、始まったのですから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1877q/>

とある科学の超電磁砲 ～今を戦うガタック～

2011年3月2日09時30分発行